

---

# ゼロ戦才人 外伝 第2部

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロ戦才人 外伝 第2部

### 【Nコード】

N7683F

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

ゼロ戦才人の本編では書ききれなかったサイドストーリーを扱う外伝第2部です。

## 同盟軍創設記 ケンプ大隊編 1（前書き）

本編で何回か触れた、義勇軍の弟分とも言える部隊の話を展開していきます。

## 同盟軍創設記 ケンプ大隊編 1

ハルケギニアにおいて、後の世で言う近代的な戦闘方法や兵器を持ち込んで戦い、勝利を得た最初の軍隊は『トリステイン空中義勇軍』、後の『東方義勇軍』である。

地球で言うところの中世の科学力にしか達していなかったハルケギニアにおいて、彼らの使う地球製、もしくは地球の技術を導入して造られた兵器は強力無比な物であった。

そのため、その存在が知られるようになった直後から、一部の人間は装備の譲渡を申し出ている。もっとも、当初は生産能力の規模が小さかったことと、技術漏洩を恐れた義勇軍幹部陣の意向により、義勇軍外への武器の提供はなされなかった。

また徐々に弱くなっていたものの、依然として残る平民蔑視の感情からか、多くの貴族は義勇軍から1回拒否されただけで、交渉を打ち切る例が多かった。

しかしながら、そんな中でもその高い威力に目をつけ、粘り強く武器の提供を要請した人間がいた。その人物こそ、トリステインでも名高い貴族であるラ・ヴァリエール公爵であった。

歴戦の軍人であった彼は、メイジとしては珍しく、比較的早い時期からその威力に着目し、さらに武器の提供を平賀才吉総義勇軍司令官に打診していた。もっとも、いくらトリステインでも名高い貴族だからといって、上記の理由も有るので武器の提供がなされるはずがなかった。

しかし、彼が他の貴族と一味違ったのは、決して古い考えに縛られてばかりの、頭の硬直した人間でなかったことだ。彼は冷静に義勇軍の装備や戦力、さらには戦法を評価し、その導入を求めた。

あまりに熱心であり、また当時平賀総司令の曾孫である才人とヴァリエール家3女との婚約話が進んでいたので、当然2人が会う機会も多く、2人の婚約に關しての話と共に何度も武器の提供に關する話し合いがもたれた。

そんな中で、状況に変化が出てきたのはアルビオン解放戦争が終わった後である。あらたな仮想敵国としてトリステインが国境を接する2大国、ガリアとゲルマニアが浮上してきた。

義勇軍はアルビオン方面軍を設置し、またトリステインとアルビオン国内での志願兵の募集を始めるなど、戦力の拡張を始めた。その一方で、兵器の量産体制も急速に拡充された。地球から持ち込んだ工業機械を使用し、またハルケギニアにある工業技術を底上げすることで、小銃や手榴弾、機関銃弾やロケット弾の大量生産に入った。

そしてこの時になって、増産により武器の供給量にいくらかの余裕が生まれた。余裕と言っても、実際はたいした物ではなかったが、才吉自身、大国のガリアやゲルマニアに対抗するためには、義勇軍以外の近代的な部隊の必要性を感じていたこともあり、それまで蹴り続けていたヴァリエール公爵の要請に前向きな答えを出すことにした。

アルビオン解放戦争が終わってから1カ月後、アルビオンから一

端トリステインへと戻った才吉は、秘密裏にヴァリエール公爵との会談を持った。

トリスタニアの平凡な宿屋での一室で落ち合った2人は、早速極秘の会談をスタートさせた。

「この度は戦争の功績を認められて公爵位に列せられたそうで、まずは、お祝いの言葉を申し上げます。おめでとうございます。・・・また曾孫さんと家の娘との婚約に努力していただいたこと、観閲式にお呼びいただいたことに対しても、大変感謝しております。」

「ありがとうございます。今回は我々もトリステインやアルビオンの役に立てて嬉しく思っています。また、家のまだまだ至らない曾孫に、トリステインでも名高い公爵家の娘さんを嫁として貰えるなんて、むしろこちらの方が感謝しております。」

会談は極めて穏やかなムードで始まった。もっとも、これが社交儀礼であることは2人ともがよく心得ていた。

5分ほどお互いの近況や世間話をしていたが、才吉は話を本題に移した。

「さて、世間話はこのあたりにして、話題を変えましょう。」

「はい。」

才吉の言葉に、ヴァリエール公爵も頷いた。

「今日わざわざトリスタニアのこんな辺鄙な宿屋にわざわざあなたを呼んだのは他でもない。あなたに話すべき重要な案件があるから

です。」

「承知しております。ここなら、盗聴や襲撃を受ける恐れはありませんからね・・・ああ、どうぞ、続けて下さい。」

「ええ。それで、その案件と言うのはですね、予てから要請のあった武器の提供についてです。」

「ほお、ということは、提供していただけののですか？」

喜びの表情を浮かべるヴァリエール公爵に対して、才吉は頷いた。

「はい。」

「それは大変喜ばしいことです。しかし、提供が可能になったのは、生産施設が拡大したからですか？」

さすがはヴァリエール公爵、ちゃんと理由も聞いてきた。まあ、今まで頑固に拒否してきたのに、いきなり受け入れれば誰だって気にはなるとも言える。

「それもあります。アルビオン王国解放によって、現地にも工場を建てられました。これによって生産量はアップします。ですが、理由はそれだけではありません。」

「と言うと？」

「実はですね。これは内密でお願いしたいのですが、我々はトリスティン、アルビオン両王室に働きかけて独自の情報機関を整備しています。その機関からもたらされる情報によれば、どうもガリアが

トリステインとアルビオンに戦を仕掛ける可能性があるのです。」

「なんと！？それは真ですか？」

さすがにヴァリエール公爵も予想できなかったらしく、驚きの表情を浮かべた。

「ええ。ガリア王国首都のリュティスにある王宮内に入り込んだスパイからの情報なので、かなり確度の高い物です。そしてその時期は、早くて1年後、遅くとも2〜3年の間と推測されています。それにです。我々が恐れているのが、それに便乗してゲルマニアやその他の小国が侵攻してくることです。」

その言葉に、ヴァリエール公爵は深く頷いた。

「我々義勇軍としても、戦力の拡充を急ぐ必要があります。それと同時に、我々だけでは出来ることにも限界があります。小国とはいえ、トリステインもそれなりに広い。我々には信頼が置ける強力な同盟軍が必要です。そこで、貴公の領地で我々に準じた装備の有力な部隊を編成してもらい、来る戦いに備えて貰いたいのです。」

真剣な表情で言い切った才吉に、ヴァリエール公爵も真剣な表情で返す。

「そう言う事でしたか。納得しました。私も軍人です。そしてこのトリステインを愛する者です。良くそのことを、胸に留めておきます。」

「お願いします。それと、これは絶対条件と言えますが、提供した武器の保管についてはくれぐれも気をつけてください。万が一ガリ



アや、我々とは友好関係には無いゲルマニアの貴族の手に渡つたら一大事です。」

その言葉に、ヴァリエール公爵は再び頷いた。

「それと詳しい提供量に関しては、我々が必要とする分との兼ね合いから、今後追々詰めていくことになると思います。それでよろしいでしょうか？」

「もちろんです。異議ありません。」

「わかりました。それでは、今後ともお互いトリスティンの平和のために尽力しましょう。」

才吉は立ち上がって自分の右手を差し出した。そしてヴァリエール公爵も立ち上がって自分の手を出した。

「ええ。やりましょう。」

2人は固く握手した。

同盟軍創設記 ケンプ大隊編 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

同盟軍創設記 ケンプ大隊編 2（前書き）

帰省やら何やらで書く間隔が伸びています。すいません。

## 同盟軍創設記 ケンプ大隊編 2

百戦錬磨のヴァリエール公爵と、『東方義勇軍』総司令官である平賀才吉の思惑の一致によって、ヴァリエール公爵領における近代的な武器を装備した常備軍の編成が進められることとなった。

もともと、実際の所は常設軍設立の為にクリアしなければいけない問題がいくつかあった。

まず、常識から言えば常備軍を領地内で独自編成することなどはない。中世ヨーロッパの領邦政治体制から脱していないハルケギニアにおいて、軍隊とは王室直属の王軍、そして戦時に、王宮からの要請に応じて領民を徴収して編成される諸侯軍が主な物であり、前者は常備軍であるが後者は非常備軍だ。

もちろん、それぞれの領地でも盗賊やら亜人やらの退治のために独自に編成された軍隊と呼べる物がないことはないが、それでもその規模はささやかな物である。しかも、その主たる任務は領内の治安維持であって、本格的な戦闘を目指すものではない。つまり、どちらかというところの武装警察だ。

だから、今回ヴァリエール公爵が編成しようと考えていた本格的な戦闘、外征を視野に入れた常備部隊の設置は、先ほども書いたとおり異例である。

本来だったら、王室から反乱の疑いありと疑われる可能性があった。実際、編成することを王室に申し出た時、いくつかの領主や王政府の役人からはそのような意見が出た。

しかしながら、ヴァリエール公爵は傍流とはいえ、王室の血を継いでおり、しかもこの直後には末娘のルイズが、アルビオンに嫁ぐアンリエッタ女王の指名によって代王位についている。さらに、『東方義勇軍』との強いパイプも持っているから、その権威は絶大である。だからその求めを無下に取り下げる事も出来なかった。

結局、王政府はその行動について王都へ定期的に報告すること、また有事は王政府の求めに応じて優先的に動かすことなどが取り決められた。

次に武器の保管と管理である。義勇軍から供与される武器第一陣は、予定では重機関銃2挺、T1型小銃30挺、拳銃30挺、手榴弾120個と鋼鉄製のヘルメットの予定であった。

これは数としてはそこまで多くはないが、いずれもハルケギニアに存在する技術を超えている物ばかりである。複製は難しい。しかしながら、それでもその技術の一端が外に漏れて複製されない可能性は0とは言えない。

そのため、武器の保管は厳重に行うよう才吉は、ヴァリエール公爵に求めた。もちろん、ヴァリエール公爵の方もそのことはしっかりと理解していたようで、武器の保管、管理には格別の配慮をすることを約束した。

具体的には、比較的短い間隔での定期的な保管状況の確認を行うことや、義勇軍にその報告をすることであった。

そしてもっとも重要な問題は、人材の確保と育成であった。今回ヴァリエール公爵領で編成される新部隊の規模は第一陣としてとりあえず義勇軍と同程度、すなわち戦闘部隊300名に、補給部隊6

0名を目安にした。

その規模は軍隊としてはかなり小さい。ところが、これだけの兵士を集め、養成するのは簡単ではない。ハルケギニアでは、国民、特に平民に対する教育レベルが低い。そのため平民の文盲率が非常に高い。義勇軍では、それが問題となつて兵士の育成に支障を来た。近代的な兵器には取扱説明書を見る必要のある物が多く、文字を読めるということは必須であつた。

しかしながら、あまりにも基準を厳しくすると定員に達するだけの兵隊を集める事が不可能になる可能性があるので、義勇軍ではやむなく基準を引き下げている。その代わりに、入隊後の教育と、さらにイラストを多用した説明書を使用するなど工夫して、なんとかこの問題を解決している。

そのため、今回作られる部隊も、この義勇軍の前例に倣つて兵隊の教育を行うこととなつた。なお、教官は義勇軍から数人派遣されることとなつた。

そしてもっとも切実な問題は指揮官候補であつた。兵隊なら領地内の領民や、そこいらの平傭兵で勤まる。しかし隊員をまとめ、指揮する指揮官となるとそれなりの能力が求められる。

ヴァリエール公爵は歴戦の軍人であるから、当然軍人の知り合いも多い。所が、今回の場合は、部隊の特性上ハルケギニアの常識に縛られない柔軟な思考の持ち主で、なおかつ優秀な人材が必要であつた。

こうなると、候補者は自ずと絞られてしまう。ヴァリエール公爵が知っている限りでも10人程であつた。

義勇軍の戦力が強力であることは、いまやハルケギニア中に轟いていた。しかしながら、その戦法や装備について積極的に学ぼうとするメイジの軍人というのは少なかった。やはり平民率いる軍隊に対する蔑視、さらには自分達のプライドメイジとしてというのが強かった。

だから、ヴァリエール公爵が声を掛けた王軍の軍人全員が、何らかの言い訳をつけて拒否してきた。

そんな訳で、ついには傭兵メイジから指揮官を見繕う事にした。ただし、それも最初は簡単ではないとヴァリエール公爵は考えていた。

傭兵メイジは平時になると、王軍に登用され続ける者を除けば解雇されてしまう。そうした傭兵達の多くは一般市民として何らかの仕事をするか、場合によっては盗賊などに身をやつす。

そうになると、募集する範囲が広がってしまふ。しかも、その中から能力のある者を探す事となる。ヴァリエール公爵はそう考えていた。

ところが、話を聞きつけてこの部隊の指揮官に志願する者が現れた。その多くが、王軍内で働く傭兵達（平民、メイジ問わず）であった。

彼らの場合、その経験から通常のメイジの軍人よりも非常に柔軟な発想が出来た。そして『東方義勇軍』に興味を覚えてもいた。ただ、これまでは王軍に対する兼ね合いから、義勇軍へ移籍しづらい状況が続いた。

しかし、ヴァリエール公爵領の軍隊なら移籍しても、ヴァリエール公爵の名がバックにあるのでし易かった。（ただし、この頃『東方義勇軍』の名も高まっていたので、後には義勇軍への転籍者も出た。）

結果、上記の状況になった。

そして、最終的にヴァリエール公爵が選んだのが、ワルター・ケンプであった。彼は没落貴族出身のメイジで、その後傭兵となり、各地を転戦して頭角を現し、最終的には王軍に登用されるまでに至った。この時32歳。職務は中隊司令副官であった。

しかし能力があっても、王軍内では没落貴族の傭兵である彼のポストは低く、昇進も絶望的であった。一方で、その能力から王軍から義勇軍等に転籍する事も出来なかった。

そんな時にヴァリエール公爵の話聞いて、志願したのであった。



同盟軍創設記 ケンプ大隊編 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ジョン・ドー先生がゼロ戦才人の二次小説を書いているので、良かったら皆さんもどうぞ。

次回の更新は年明けになると思われます。

それでは良いお年を。

### 同盟軍創設記 ケンプ大隊編 3

ワルター・ケンプを最初見た時のヴァリエール公爵の印象は、「こいつ本当に軍人か？」であつた。なにせ、眼鏡をかけた彼の顔は温和その物で、体つきも軍人失格とまでは行かないまでも、それほど良くは見えなかった。どっちかというと学者か技術者であるように見えた。

実際、彼の趣味は早朝や夜に散歩する事や静かに読書すること、そして時たまに1人でヴァイオリンを弾くことであり、凡そ軍人の印象とはかけ離れた物だつた。

ただそれでも、これまでの経歴や人格などを考えると、彼を置いて他に適任者はいなかったので、ヴァリエール公爵は彼を選らんだ。ただし、ヴァリエール公爵はもちろん部隊編成前に彼を呼び出し一度会つて、本当に適性であるか見極めている。

その日、王都の宿屋の一室（前回才吉と会つたようなボロではなく、ちゃんとした所）で2人は初めて出会つた。

「お初にお目にかかります、ヴァリエール公爵。ワルター・ケンプです。」

ケンプは顔に笑みを浮かべながら、頭を下げて言った。これは通常の社交礼儀といえる。

「よろしく、ケンプ君。ヴァリエールだ。」

そう言つたヴァリエール公爵の表情は怪訝な物であつた。そして

冒頭の感想を、彼に対して抱いていた。すると、それを見透かしたのか、ケンプは自嘲気味に言った。

「やっぱり、自分は軍人には見えませんか？」

その言葉に、ヴァリエール公爵はギョツとこそしなかったものの、それなりに驚いた。

「なんでそんな事言うのかね？」

「いえ、昔から何度も言われている事なので。それに、自分自身本来は軍人になりたくはありませんでしたから。自分としては歴史学者か、少なくとも文官になりたいと思っていました。しかし、家が没落してしまつた以上、自分の好きな仕事に就けるわけもないので、仕方が無く軍人の道を選びました。」

この言葉に、ヴァリエール公爵は悪い予感が的中したと思つた反面、どうしたこんな男が戦功を立ててこれたのか氣になった。

「そう言う割には、君は随分と戦功を上げているじゃないか？おかしくないかね？」

「それは、自分のせいではありません。部下たちががんばってくれたおかげですよ。自分はただ彼らに、好きに戦えと指示しただけです。」

相変わらず笑いながら言うケンプであつたが、ヴァリエール公爵は感心していた。ケンプは部下に好きなようにやらせただけと言うが、普通そんな風にやつた所で戦いには勝てない。統制を欠いて各個撃破される可能性が高い。

つまり、ケンプがこれまでに指揮してきた部隊は部下それぞれが連携を組んで、統制を持った戦いをしてきたことになる。さらにそれは、彼の部下に対する統率能力が高いこととなる。

「しかし、君の話を聞いていると、部下の統率が随分上手いように感じるんだが？」

「別に上手いって事はないと思いますよ。ただ部下の能力を見極めて、それに応じて配置を行って戦ってもらっただけです。」

全く自分のことを鼻にかけない喋り方に、ヴァリエール公爵は好感を持った。加えて、彼は簡単に言うが、部下の能力を見極め配置する、所謂適材適所も部下の統率と同じく簡単なことではない。つまり、彼は人材の活用能力に優れている事となる。

「そうかね。ところで、既にわかっているはずだが、今回私は『東方義勇軍』の協力を得て新しい部隊を作り、その隊長を君にしてみらうために今日こうして会っている。承諾、拒否を含めて君としては何か言いたい事はあるかね？」

他に人材が見つからなかったからということとは心の中に留め、ヴァリエール公爵は彼に確認をとる。

「まず、自分としては公爵様が折角引き抜いてくれるという話を拒否する理由はありません。王軍の中における自分の地位は低いので別に王軍に対する未練はありませんし。ただし、確認したいことはあります。」

「何かな？」

「まず、王軍から私の部下も同時に引き抜いて頂きたい。」

「それについては善処するとしか言えない。私は王軍の人事を握っているわけではないのでね。ただ、下級の兵士ならそれは難しくはないと思う。」

「ありがとうございます。」

ケンプは頭を下げた。

「うん。それで、他にも何かあるのかな？」

「はい。公爵は『東方義勇軍』の協力を得てと言われましたが、つまり私が率いる事になる部隊は、彼の扱うような新型兵器を扱う事になるわけですね？しかし、私はあのような兵器の使用経験がありませんですから・・・」

すると、彼の言葉を遮るように、右手を上げてヴァリエール公爵は言った。

「君の言いたいことは良くわかった。安心したまえ、『東方義勇軍』から教官役として数名の将兵を派遣してもらうよう、既に向こうとは話を取り付けている。」

「なら安心です。私も使ったことのない兵器をいきなり取り扱う勇氣はないので。あとそれから、隊員の選抜については私に一任させてもらって宜しいですか？」

彼の人材を見抜く能力は高いようなので、ヴァリエール公爵は承

諾することとした。

「ああ、構わない。そうしてくれたまえ。」

そして、ケンプはさらに何かを思い出したように言った。

「あと、それから。」

「まだ何かあるのかな？」

「ええと、これは個人的なことです。ヴァリエール公爵領には、絵の具やキャンバス、楽器を売っている所がありますかね？」

すると、ヴァリエール公爵は笑った。

「そんなことか・・・まあ、屋敷の近くにある村じゃ無理だろうが、そこそこ大きな街へ出れば手に入ると思うよ。」

「そうですか、ありがとうございます。」

「では、また連絡する。」

「はい、よろしくお願いします。」

こうして、2人は初対面を終えてわかれた。

それから1週間後、ケンプの元にヴァリエール公爵からの手紙が

届いた。それを受け取ると、彼は予定通り王軍の職を辞し、これまでに指揮してきた部下数名と共に、早速ヴァリエール公爵領へと向かった。

ただし、彼らは馬車に乗り込んだものの、行き先はヴァリエール公爵領ではなく、ミライの義勇軍基地だった。実はこれ、才助からの心遣いで、一端彼らにこれから扱う武器や、顧問として赴任する人間と会ってもらった方が今後やりやすいだろうということからの配慮だった。彼らは義勇軍基地の見学を終えたら、そのまま飛行機でヴァリエール公爵領へと向かう予定だった。

ただ本人達は知らないことだったので、驚くこととはなかった。

そして2時間後、ケンプ隊長以下のメンバーは義勇軍基地に到着し、早速装備や義勇軍の訓練風景を見学することとなった。

見学時間はそこまで長くはなかったが、ケンプ以下全員がそれら一つ一つを興味深く観察し、また兵士からの説明にも注意深く耳を傾けていた。

この報告を受けた才助は、ヴァリエール公爵がちゃんとした人間を選んでくれたことに感謝した。ただし、夜ケンプの部下らがミライの街の飲み屋で騒ぎ、憲兵が出動する騒ぎを聞いて、少しばかりその考えもぐらついたが、それは別の話だ。ちなみに、その時ケンプはミライの街にあふれる珍しい品を色々と買い込んでいたそうだ。

また、今回派遣される義勇軍の顧問の3名とも顔を会わせている。この時は特に問題は起きなかった。

そしてさらに翌日、彼らは義勇軍の航空機に乗り込んで、ヴァリ

エール公爵領に無事到着した。もちろん、義勇軍から派遣された顧問も同時である。こうして、新部隊の設立が本格的にスタートした。



同盟軍創設記 ケンプ大隊編 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 同盟軍創設記 ケンプ大隊編 4

ケンプが率いる部隊は、とりあえず500名ほどの志願兵や他所からの引き抜き兵で編成され、また義勇軍と同じく100名程の補給・後方支援部隊も同時に設置された。つまり1個大隊程度の兵力が揃えられたわけだ。このため、通称は「ケンプ大隊」となり、後にそれが正式名称となる。

このケンプ大隊に『東方義勇軍』から武器の使用法や戦術指導のために派遣されたのが、宮野中尉であった。彼はヘリコプターパイロットの山田少佐が、自衛隊時代の基礎教育過程の時に世話になった人物である。歳は37で腕も良いのであるが、独身であり、また自衛隊時代の階級は1等陸曹であった。

尉官になるには試験をパスしなければならず、また自分の実力を発揮することが難しい自衛隊に不満を感じていた彼は、山田少佐からの誘いを受けてハルケギニアへとやってきた。

『東方義勇軍』入隊後は、分隊長をしていたが、新人への教育が上手いということで、今回の任務を命じられた。

そんな彼から見て、隊長のワルター・ケンプ大佐（この階級は王軍も認めた正式の物）はどうにもよくわからない人間であった。人としてはよさそうなのであるが、その表情や姿からは軍人というイメージがどうにも浮かばない。さらに、彼が指名して王軍から引き抜いた部下は、ミライの街で騒ぎを起こすという醜態を演じている。

（本当にこんな人間たちで大丈夫なのかな？）

そんな不安は、彼と共にヴァリエール公爵領へと同行する2人の隊員も感じていたことだった。

不安一杯であつたが、命令に従うのが軍人の仕事である。3人はしぶしぶしながら、ヴァリエール公爵領へと赴いたのであつた。

さて、宮野中尉たちは早速ケンプ大佐以下の隊員たちに小銃やその他の武器の使い方を、持ってきた冊子（絵を多用して文字に不自由な人間でも読みやすくした物）を使いながら説明した。

すると、志願兵たちは慣れない状況に戸惑つたり、訝しげな表情をしていたが、ケンプ大佐や騒ぎを起こした兵隊たちは真剣に冊子を読み、説明を聞いていた。

この光景に、宮野中尉たちはギョツとしてしまった。さらに彼らを驚かせたのは、その日の午後に行った銃の発射実演だった。

宮野中尉らが、それぞれＴ１小銃を発射して見せたところ、ケンプ大佐が意見を出した。

「宮野中尉、こいつにその銃を撃たせてやってもよろしいでしょうかね？」

「え！？」

宮野は耳を疑った。午前中に一応銃の構造や使い方の説明はしている。しかし、さすがにこれまで旧式銃にしか触れたことのない者にいきなり銃を持たせるなど論外である。それをケンプは部下にや

らせようとしている。しかもその人間は、騒ぎを起こした中の１人であった。

（何を言っているんだこの人は？初心者いきなり使わせるなんて！）

宮野があらさまに嫌な顔を見ると、ケンプは笑いながら言った。

「大丈夫ですよ、騙されたと思ってやらさせて下さい。」

「しかし・・・わかりました。ただし、失敗して指を失うような事態になっても、私は責任を持てませんよ。」

「わかっています。それじゃあ、コーエン大尉。」

「了解！」

支給された軍服（ケンプ大隊の軍服は第一次大戦時のドイツ軍に似ている）をどこかだらしく着たその士官は、前へ出ると、宮野中尉からＴ１小銃を受け取った。そして見事な手さばきでボルトを動かすと弾を薬室へと送り込んだ。

宮野がまたも驚く中、彼は宮野が先ほどしたのと同じように発射の姿勢をとり、そして設置された目的目掛けて発射した。弾は５０ｍ程離れた所に設置された的の隅に命中した。

さすがに真ん中に命中することは無かったが、それでも初めて扱った銃で命中させたのは簡単なことではない。

「すごい、初めてでこれなら上出来すぎだ。」

すると、ケンプが言った。

「実は彼、非常に銃、というよりもああいいう機械系の物には強いんですよ。使い方を簡単に説明されるだけで、覚えてしまうんです。もちろん、あくまで使えるというだけで、使いこなせるというわけではないんですけどね。・・・コーエン、使ってみての感想はどうだ？」

「いいっすね、手入れは厄介みたいですけど、再装填も楽ですし。これで午前中に受けた説明どおりの性能なら、マスキット銃なんか目じゃないですぜ。」

そんな2人のやり取りを見ながら、宮野は思った。

（人を見る目があるってこの事なのか？）

その後1週間、宮野らはケンプたちに基礎訓練を徹底的に行った。銃を初めとする武器類のメンテナンスや、素早い組み立て、解体の方法等である。また士官以上には、陸上自衛隊で習う、野戦における戦法を教えた。そのどれに対しても、ケンプ大佐たちは真剣な表情で挑み、短期間で習得していった。

またその間に、宮野はケンプが非常に部下に信頼され、また彼も部下をよく纏めて動かしているのを理解した。その人間の能力を上手く掴み、それを指揮する上でしっかり生かしていた。

しかし、宮野をもっとも驚かしたのは、1ヶ月の指導も済み、習

熟の具合を見る上で行った野戦演習であった。この時はわざわざミライから呼んだ義勇軍の歩兵2個分隊と死闘を繰り広げている。

宮野は審判官という立場でその成り行きを見守った。最終的にやはり経験が物を良い、武器や装備を使いこなした義勇軍が勝利を掴んだ。しかしながら、ケンプ大隊は結成されてからたった1カ月とはとても思えないほどよく義勇軍に立ち向かい、何度か義勇軍を冷やりとさせる場面もあった。

部下の能力を見極め、上手く配置したケンプの人材活用能力もさることながら、彼自身の指揮能力や作戦立案能力も高かった。繊細なようで大膽、守りを固めるようで常に攻勢を窺うその姿勢は、これまで戦ってきた王軍のメイジとは大きく違うものだった。

宮野は当初彼に抱いたイメージを完全に払拭される思いだった。

その日の夜、宮野はケンプと2人でワインを飲みながら話をしていた。

「今日までの御指導本当にありがとうございました。宮野中尉、本当に感謝しております。」

ケンプは深々と宮野に頭を下げた。

「頭をお上げ下さい大佐。こちらこそ、実を言いますと最初はこの部隊は本当に大丈夫かと不安に思っていました。ですが、それは全くの見当違いでした。あなた方はトリステインでも最優秀に属する部隊であると思います。」

「それは買いかぶりです。我々はそこまで強くは無い。あなた方から武器や戦術を教えられたから、今のようになっただけです。」

「いいえ、それらを生かすも殺すも人間であることに変わりありません。あなた方はたった1カ月でそれを物にし、あまつさえ見事に生かした。それは今日の演習で実証されています。隊員たちの士気は高く、また彼らを指揮するあなたの手腕も見事だった。後2〜3ヶ月訓練を施せば、彼らは素晴らしい戦士になるでしょう。」

「そう言っていたけると光栄です。」

ケンプは何か思うところがあるのか、目を閉じて言った。

「それにしても、これまで会ってきたメイジの人間というのは、失礼ながら保守的で魔法に頼っている者ばかりでした。また部下の掌握に無頓着とは行かないまでも、ぞんざいな人間も多かった。しかしあなたは全く違う。本当にあなたには驚かされるばかりだ。」

すると、ケンプは自嘲気味に言った。

「そうですか。実はですね、私のこの性格は実戦の中で得られた者なのです。私が没落貴族出身で、一時傭兵をしていたのは知っていますね。」

「え！？はい。」

「実はですね・・・」

ケンプの話は長かったが、要約するところであった。彼が傭兵を

していた頃、大規模な盗賊狩りをしたことがあった。その時ケンプはメイジで元貴族出身ということで、一個小隊の指揮を任されたことがあった。ところが、若かったケンプは魔法とメイジという立場を過信し、部下にも高圧的に臨んだ。

その結果、彼の小隊は戦闘中に隊長を置いてバラバラとなってしまった。逃げ遅れたケンプは戦場の真っ只中に置いていかれた。それどころか、多人数に追撃される羽目になった。なんとか魔法で反撃をしたものの、多勢に無勢で、最終的に魔力切れとなり。そこであつという間に平民の盗賊たちに囲まれてしまった。絶体絶命であった。

その時、別の小隊が彼を助けてくれたお陰で事なきを得たが、ケンプは魔法が絶対でないこと、さらに部下の信頼を得ることがどれほど重要なことを身をもって知らされることとなった。

「その時からですよ。私がこうするようになったのは。」

「そんなことが。」

「ええ。もっともそのお陰で大分変人扱いされましたがね。やたら平民や下層の連中の肩を持つ礼儀知らず。そう何度も言われました。ですが、私はこのやり方が間違っていないと信じていますよ。」

その言葉に、宮野は頷いた。

「その通りだと私も思いますよ。」

「ありがとうございます。宮野中尉。」



「いえいえ。ケンプ大佐、今後も我々とあなた方の交流は続くでしょう。共にトリステインを守る者として、よろしく願います。私が出来ることがあれば、喜んでお手伝いします。」

「感謝します。それじゃあ、もう一回乾杯しましょう。お互いの武運を祈って。」

「ええ。」

2人はそれぞれのグラスにワインを注ぎなおした。

「乾杯!!」

この後、ケンプ大隊にはさらにトラックや装甲車と言った車両や無線機なども義勇軍から配備され、ハルケギニア戦役では「常勝部隊」をして名を馳せることとなる。

宮野中尉がケンプ大佐と顔を合わせる機会はその後中々訪れず、両者が再び顔を合わせるのは、この10ヵ月後、後にトリステイン史上最大の作戦と呼ばれる、ガリアのノルマンジー海岸上陸作戦の時であった。

同盟軍創設記 ケンプ大隊編 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 『東方義勇軍』装備名鑑 1

### T1型小銃 ライフル

旧日本陸軍の99式小銃を参考にして開発された。口径は7.7mmであるが、オリジナルと違って装弾数は5発から7発へ強化されている。また最大射程は若干落ちて3200mとされた。ただし、固定化の魔法や銃弾の改良によってオリジナル程度にすることも出来た。

ボルト・アクション式銃のため、自動小銃や機関銃ほどの高い投射率は期待できないものの、それまでハルケギニアで一般的だった火縄銃、マスケット銃より遥かに高い威力と射程を誇り、弾の装填も容易で迅速な再装填が可能になった。弾種は通常弾、訓練用のペイント弾、ゴム弾の他に対大型獣・ゴーレム用に徹甲弾も用意された。

生産はトリステイン、アルビオン、また秘密裏に同盟を結んでいたゲルマニアの一部の地域でも行われ、さらにロマノフ公国でも行われた。当初は生産能力の低さから、義勇軍内部のみでの運用とされたが、生産が軌道に乗ると義勇軍の同盟軍とも言うべきヴァリエール公爵領のケンプ大隊、トリステイン王室の銃士隊、アルビオン王室のライオン師団にも供給された。また戦後には多数が猟銃として出回っている。

### T2型騎兵銃

T1型小銃は性能的にはすばしかったが、馬を多用する銃士隊やケンプ大隊、ライオン師団では、馬上での取り回しをする上で大きいために不便とした。そこで、それに対応するためにT1型の銃身長を短くしたタイプ。射程は若干短くなったが、弾薬は共通であり、また重量が300g程軽くなったために、両部隊の兵士からは喜ばれた。義勇軍よりも他部隊で多く使われた珍しい武器となった。

### T3型短機関銃

市街地や建物内での近接戦闘などの治安維持任務用に米軍のM1トンプソン短機関銃を参考にして開発された銃。口径は11.4mmで有効射程は50mと小銃より劣ったが、拳銃と弾薬が共通であることや、狭い場所でも多数の弾をばら撒ける点から、当初の期待通り治安維持任務では重宝された。また、狭い空間での戦闘が想定される補給部隊や海上部隊、さらには置く場所の容積が限られている戦車部隊でも大量に扱われた。

この銃も生産が軌道に乗ると、銃士隊、ケンプ大隊、ライオン師団に供与された。ロマノフ公国へは技術流出の観点からしばらく見合わされたが、ハルケギニア戦役開始半年後から引渡しが始まっている。

### 43式野砲

旧日本陸軍の90式機動野砲を参考に設計された砲。口径は75mm。重量は1700kg、最大射程は13500mであった。

生産は当初冶金技術にすぐれたゲルマニアで行われたが、生産能力の限界から後にロマノフ公国でも行われている。

元の砲は優秀な性能であったために、対戦車砲として有効に使われた。しかしハルケギニアでは戦車を相手にするという事態はなく、専ら野戦砲として敵陣地、敵歩兵への攻撃に使用された。そのため、前線へ徹甲弾が支給されると、砲兵から「こんなものいらん！榴弾か徹甲榴弾を寄越せ！」と言われるようなこともあった。しかし、開戦1ヶ月後に起きたソムムの会戦では、現れた20体のガリア軍が誇る巨大ゴーレム『ヨルムンガンド』の内13体を同砲が撃破している。

なおこの砲は車両による高速牽引が可能であったために、ハルケギニアの移動速度が遅い旧式砲しか知らないガリアやゲルマニア軍の兵士たちを、威力や射程の面に加えて驚かせている。

#### 43式高射砲

地球のスウェーデンのボフォース社で開発されたm/30高射砲を参考に開発された砲。当初は対飛行艦船用、対翼竜用として任務が想定され、生産予定数は少数に留まる予定であったが、ガリア国内に現れた多数の地球製航空機の脅威に対処するために、急遽大量生産が決まった。

基地防空、艦船搭載用の高射砲として使用され、陸上ではトリステインのミライ基地、アルビオンのホープ基地に設置され、海上ではトリステイン海軍艦艇や一部の商船に搭載された。この砲も野砲と同じく、ゲルマニアの同盟領やロマノフ公国での生産が行われた。性能は最大射程16500m。最大射高10500m。弾種には通常、徹甲、徹甲榴弾、榴弾があり、またVT信管（近接信管）の使用も考慮されたが、こちらは生産の見通しが立たないため、止む無く時限信管を使用している。

#### 43式装甲車

旧日本陸軍の97式軽装甲車を参考に開発された。2人乗りという点は変わらず、機関銃と砲搭載の2タイプが存在するのも同じである。ただし、機関銃は77mmではなくより威力の高い127mm機銃が採用され、また装甲も最大20mmとオリジナルより厚くされた。砲タイプはオリジナルと同じく37mm砲を採用した。これら重防衛化と攻撃力アップのために全長で30cm、全幅で20cm、全高で10cmずつとオリジナルより一回りずつ大きくしている。また、走行能力を高めるために履帯も一回り大きい物を採用している。エンジンは100馬力のディーゼルエンジンが採用され、路上最高速で45km、航続力275kmを誇った。

ハルケギニア戦役までにロマノフでライセンス生産された40両が引き渡され、後にさらに60両が引き渡されている。これらは歩兵掃討、偵察、物資輸送任務に使われた。また、ケンプ大隊にも6

両が試験的な意味合いを込めて供与されている。

なお同車両は対空戦闘能力が低いため（砲塔が小さく高射機銃を搭載できないから）、後にアメリカの「チャーフィー」軽戦車を参考にして製造された44式戦車と、新型の装甲車に開発が移行されている。

#### 強襲揚陸艦「にぎつ丸」

元大日本帝国陸軍舟艇母艦。ハルケギニアに飛ばされていたものを義勇軍に編入した。商船改造艦であるが、航空機運用も可能であったため、義勇軍では専ら空母として使用された。性能は全長205m、飛行甲板長200m、速力22ノットで搭載機は24機。武装は88mm高射砲2門と75mm野砲2門、25mm連装機銃4基、対潜迫撃砲2門。

発見時には満洲へ輸送予定だった1式戦闘機「隼」や99式襲撃機、3式中戦車などを搭載しており、これらは初期の義勇軍における貴重な戦力となった。

同船はアルビオン解放戦争において初陣を飾り、その勝利に大きく貢献し、また終戦後は飛行艦船の航続圏外の外洋調査任務に付き、外洋諸島やアイスランドの発見という功績を残した。ハルケギニア戦役においては、緒戦におけるゲルマニア艦隊迎撃をはじめとし、海上からのガリアやゲルマニアに対する攻撃作戦を展開した。また開戦2ヶ月後のガリア逆上陸作戦では強襲揚陸艦としての能力を遺憾なく発揮し、さらに航空母艦「ブリシंगाメーン」が戦列に加わると、共同で作戦を展開した。

#### 43式1型戦闘機「零戦改」

地球の桜花飛行機で初めて生産された戦闘機。原型は零式艦上戦闘機22型であるが、エンジンは「栄」エンジンをモデルにした1500馬力の物に換装され、また風防の改良など若干の改造が加え

られた。また、機体の素材に一部カーボンなど新素材を採用したため、重量はオリジナルより軽くなったにも関わらず、強度は向上している。それに伴い、急降下性能も大幅に上昇している。

武装は主翼の12.7mm機銃4基と、主翼下に搭載した8発の対地、対艦用ロケット弾。または60kg爆弾4発を搭載可能であった。最高速度590km。航続力は最大3000km。

4ヶ月間に24機が量産されたが、その後は大量生産向きの43式2型（OS2型）戦闘機と、重戦闘機の44式1型（OS3型）戦闘機の量産に移行され、生産は打ち切りとなった。それでも、設立間もない義勇軍にとっては貴重な航空戦力として使用された。

『東方義勇軍』 装備名鑑 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。



## 同盟軍創設記 銃士隊編 1

トリスティン王国軍の銃士隊は時の女王、アンリエッタの肝いりで編成された部隊だ。それだけでも珍しいのだが、その構成メンバーも全員が平民、しかも女性というのも他とは違う大きな特徴だった。

魔法使いが支配階層を独占するハルケギニアにおいて、このような軍隊の存在は有り得なかった。どんなに平民の比率が多くても、必ず幹部クラスにはメイジを入れるのがハルケギニアの軍事常識であつた。

このような、当時のハルケギニアでは驚天動地の編成がなされたのは、当時レコン・キスタ派と判明した貴族の相次ぐ逮捕や逃亡によって、アンリエッタがメイジに対する信頼を大きく失ったからだと言われている。隊員を全員女性にしたのも、同姓で安心できるという側面が大きかったようだ。

しかしながら、この部隊の実力が伊達でないことはその後の歴史が証明している。隊長のアニエス・ミランは女性でありながら非常に高いレベルの剣士で、またメイジに対する戦い方の研究も怠らない優秀な軍人だった。

銃士隊が編成されてからしばらくの間は、主に治安維持任務（実際にはこの他に諜報任務もしていた）に就けられていたが、本格的な戦闘としては、その後トリスティンとレコン・キスタ間で起きたタルブ会戦によって初陣を飾っている。

タルブの会戦では、他の部隊がレコン・キスタの動きに楽観視し

ていた上層部のために出撃が遅れる中（結局間に合わなかった）、アンリエッタの特命によって先行出撃している。

侵攻してきたレコン・キスタ艦隊は後に『東方義勇軍』となる『トリステイン空中義勇軍』と、ルイズ・ヴァリエール嬢の『虚無』魔法によって全滅させられていたが、艦から脱出した兵士が多数残存しており、銃士隊はその残敵掃討に就き、敵司令官捕縛という金星を上げる。

この戦いによって、アニエス隊長はシュバリエの地位を授かるという栄誉を得たが、それ以上に彼女は、会戦の間に見たゼロ戦の機関銃の威力に衝撃を受けたとしている。

その後起きたアルビオン解放戦争では、銃士隊が直接出撃することとはなかったが、『トリステイン空中義勇軍』との共同作戦におけるハヴィランド宮殿襲撃の際は、アニエス他数名が強襲チームに加えられ、レコン・キスタ重臣逮捕の任務を完遂している。

アルビオン解放戦争、さらにその後発足した『東方義勇軍』との演習を通して、アニエスは義勇軍の装備への興味を大きくした。そしてそれは義勇軍の歩兵部隊司令官、梶田少佐（当時）の提言で行われた共同訓練で頂点に達した。

ヴァリエール公爵に遅れること4ヶ月、彼女も義勇軍の使用する武器の自部隊への配備を義勇軍に対して正式に要請した。もっとも、実際にはそれ以前からそれとなく義勇軍に打診していたされるが。

とにかく、このタイミングは絶妙だった。なぜなら丁度同じ頃、義勇軍ではヴァリエール公爵領で編成されたケンプ大隊にも武器の供与と、戦術指導を開始していたからであった。つまりは、義勇軍

が自分たちと同レベルの戦闘力を持つ部隊の創設に力を入れ始めた時であった。

このアニエス隊長の要請は快く受け入れられた。もともと、実際は義勇軍側の生産力が一杯一杯の状況であったともされているが、なんとか遣り繰りして可能にした。

こうして、銃士隊にも義勇軍の武器の供与が開始された。それとともに、義勇軍兵士による武器の操作方法や戦術の指導も行われた。ここで便利だったのが、銃士隊が駐屯するトリスタニアと、義勇軍の基地とは5 kmしか離れていなかったことだ。そのため、日帰りで通うことが可能なため、ケンプ大隊のように、義勇軍が顧問を派遣するということも必要無かった。

アルビオン解放戦争から8カ月程たったある日の早朝、トリスタニアを西へと出発した1番列車に、アニエス以下の銃士隊の隊員らが乗り込んでいた。目的地はミライの西に移転した新しい義勇軍歩兵基地である。

銃士隊では現在でも、義勇軍との共同訓練を週に1回程度の割合で行っている。そのため、銃士隊が早朝の列車で西へ向かう列車に乗り込むことは、珍しい光景ではなくなっていた。

ガリアやゲルマニアとの関係がきな臭くなってきた現在、銃士隊も戦力の増強が行われている。平民だけの部隊であるが、その人気は『東方義勇軍』に匹敵する程高く、志願者には事欠かない。もちろん、厳しい入隊試験が行われるので多くが落されるわけだが、その分優秀な人間が入隊することとなった。

現在の銃士隊の戦力は留守番に残してきた兵士含めて180名である。だから現在乗っているのは120名で、客車2両を銃士隊隊員が占領していることになる。

女だけなのでさぞや楽しそうな場所を想像してしまうが、その場に行けば状況が全く違うことがわかる。例えば彼女らの会話を聞いてみると。

「今日の訓練の相手って、午前中は確か友澤中尉の狙撃部隊だったよね？」

「じゃあ油断できないわね。どこから撃たれたものかわかったもんじゃないわ。」

「取り敢えず、その場合は直ぐに伏せて、慎重に匍匐前進するのが一番。」

「それから、午後は・・・」

固定式クロスシートに4人ずつ座った兵士たちは、活発に喋っているのだが、その表情は真剣で、話している内容もその多くがその日行う訓練の内容だった。

もう少し内容に面白みを交えて良いように思えるのだが、もしそれをアニエスに見つかったら絞られることが間違いないため、隊員たちは勤務中は仕事一本であつた。

こうした厳しい所は以前から変わらない物であるが、彼女らの外見は大きく変わっていた。銃士隊が義勇軍から学んでいるのは何も

武器や戦術だけではない。服装や装備にも及んでいた。

以前のような中世の騎士を思わせる服装は全廃され、義勇軍と色違いの制服を着込んでいる。銃士隊の制服の色は若草色で、義勇軍の茶色の物よりかなり明るい印象を与えている。もちろん、野戦時は義勇軍との共通の迷彩服である。

マスケット銃に代わって義勇軍から供与された小銃や騎兵銃、音響閃光弾や手榴弾を持っているその姿から、以前の銃士隊の姿を偲ぶのは難しい。唯一以前と変わらないのは、腰に下げている剣だけである。

列車が8 kmほど離れたミライ西駅に到着すると、隊員たちは駅から少し離れた義勇軍駐屯地へと移動した。

「アニエス・ミラン少佐以下、トリスティン銃士隊120名、合同訓練のためにお世話になります!!」

既にお馴染みの光景になりつつあったが、アニエスは基地の営門の兵士に敬礼した。すかさず、営門で歩哨をしていた兵士2人も答礼する。

「御苦労様です。連絡は既に受けております。お入りください。」

「先週と同じく、東の空いている兵舎を使ってくれとの事です。」

「は、失礼します!!」

アニエスら銃士隊隊員は義勇軍基地内へと入った。

「ようし、皆行くぞ!」

「「「おお!」」」

とっても張り切っている銃士隊の面々、その姿を営門の兵士たちが楽しそうに見ていた。

「やる気一杯ですね、銃士隊の皆さん。」

一等兵が銃士隊の面々を見送りながら言った。

「そりゃそうだろ。確か午前中の相手は友澤中尉の狙撃部隊だ。あの人はア二エス隊長が眼の敵にしているからな。それに確か初手合わせて聞いたぞ。」

日本人の二等兵曹が一等兵の言葉に答えた。

「けど、勝てないでしょうね。この間の歩兵部隊との模擬戦でも、狙撃部隊が良いようにかき回しましたからね。あの部隊に勝つには、戦車が大砲がいりますよ。それに、友澤中尉も彼女を目の敵にしていますから。まあ、喧嘩するほど仲が良いとも言いますが・・・けど、そうになると、午後相手をする歩兵部隊は大変なことになりますね。きつと腹いせに、ア二エス隊長血眼で戦いますよ。」

「午後銃士隊の相手する歩兵部隊は、一昨日アルビオン方面軍から来た歩兵分隊だよ。指揮官はあの葛西少佐だ。これまで治安維持任務で20回も出動して、いずれも任務を完遂した凄腕って聞いたぞ。」

「そりゃ見ものですね。」

「だろ!？」

「けど、自分としては一緒に来たティファニアさんや、銃士隊の可愛い娘を見ている方が楽しいです。あ、あの翼人の女の子も別嬪でしたね。義勇軍は数は少ないですが、可愛い娘を見るのに苦労なくて良いですね。」

「違うない。」

冗談を言い、2人は笑った。

## 同盟軍創設記 銃士隊編 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

さて、作者は大の架空戦記好き。ゼロ魔を読み始めたのも、ゼロ戦が登場するとインターネットで見たからです。

そんな作者ですが、最近はライトノベルや、ライトノベル風味の架空戦記を読んだりしています。

特に面白いのが、吉田親司先生の「女皇の帝国」。美人で聡明の内親王が、日本を占領したソ連と戦う話です。

また少し古い作品だと、中岡潤一郎先生の「スカーレット・ストーム」とか、羅門祐人先生の「すみれ特戦隊」と言った話があります。

これら作品も、ゼロ戦才人を書く上で役に立っている作品です。



## 同盟軍創設記 銃士隊編 2

銃士隊と狙撃部隊との演習は、朝衛兵たちが言っていたように、狙撃部隊の勝利で終わった。最終的なスコアは狙撃部隊が死亡判定1であったのに対して、銃士隊が戦死32、重傷25という一方的な物だった。

ただし、紙面上の数字以上の結果が出たのも事実であった。実は今回の戦闘で狙撃部隊唯一の戦死判定を受けたのは、なんと隊長の友澤中尉であった。

今回演習が行われたのは、現在義勇軍が借り上げる形で使っている王家直轄領の森の中であった。当然狙撃部隊の隊員たちは全員森の中に隠れて、進撃してくる銃士隊を待ち伏せした。

ところが、銃士隊のアニエス隊長は義勇軍との交流を通じて、多少なりとも狙撃がどういうものであるか分かっていた。そのため、銃士隊側も指揮官や士官がわからないように擬装するなど、一応の対策を行っていた。さらに念の入ったことに、アニエスはヘルメットを被り髪をして、顔に迷彩を施すなどして徹底的に誰が誰であるかをわからなくしてきた。

結果、友澤は最重要でアニエスを狙撃しようとしてついでに日頃の恨みを晴らそうとしたわけであるが、結局彼女の髪の色を被った下士官を撃つてしまい、その間に彼女は友澤がどこから撃っているか、大まかな位置を検討をして、一部の部下を率いると匍匐前進で接近した。そしてなんと、小銃と軽機関銃によるまぐれ当たりを期待しての一斉銃火を彼に浴びせた。

もつとも、アニエスはここで先頭に立つて指揮を執ったので、ついに正体がばれて友澤の銃弾を浴びることになった。さらに、残る部下たちもその後狙撃部隊より行われた狙撃で全員戦死の判定を受けた。

だがその犠牲は無駄にはならず、友澤も発射位置をさらに厳密に観測され、そこへ射撃を加えられて戦死と相成った。

その後、それぞれ次席指揮官が指揮を継続したが、指揮官を失ったためとその戦死した指揮官同士が恒例ともいえる喧嘩を始めてしまったために、結局演習はそこで中止になってしまった。

「てんめえ！あんなむちゃくちゃでデタラメな銃撃をしてくるんじゃない！弾の無駄だ！」

「なにお！狙撃がセコイ戦い方だと言ったのはお前ではないか！それに対抗するためには常識に捕らわれてはいかんことぐらい、お前にはわからないのか！」

「ふん！あんな風に下手な鉄砲数撃ちや当たるの戦法にしか頼れないとは、名剣士の名が泣いているんじゃないですか？少佐殿？」

無茶苦茶な内容になりつつあったが、彼女との喧嘩では冷静な分析も吹っ飛ばらしい友澤。もつとも、それはアニエスにも言えたことではあったが。

「そちらこそ、敵の接近に気づかないなんて。狙撃部隊の名は伊達でしかないのでは？」

実際には友澤の部下が気づいていたのだが、その前にアニエスが

遠距離で発砲したために混乱が生じてしまい、そこを付かれたのが真相であつた。

「なんだと！！このドS女！！」

「なにを！！軟弱者の癖に生意気な！！」

と、このままでは埒があかないので、友澤には副官の篠塚兵曹長が、アニエスには同じく副官のミシエル中尉が後ろから羽交い絞めにして、2人を強制的に離した。その表情は、飄々としたもので、お互い既にこの状況に、慣れっこになっているのを示していた。

周りの隊員たちも、離されてなお互いに罵詈雑言を吐き続ける2人を、苦笑しながら生暖かい視線で見ていた。もし才人がこの場にいたら、「やつぱり気が合うんじゃないかな、あの2人。」と呟いたことだろう。

とにかく、午前中の演習はこのような形で終わったが、当然友澤もアニエスもストレスを溜め込むことになった。友澤の場合は、それを午後の長距離射撃の演習で発散することとなる。ちなみに、彼の撃つ的にアニエスの名が書かれていたとか、なかったとか。

一方、アニエスのほうは、午前中の憂さ晴らしとばかりに、午後の演習もマジモード爆発で行うこととなる。

「諸君！午前中は残念な結果に終わってしまったが、午後の戦いはその汚名を返上する！！相手は義勇軍内でもとびきりの腕利き小隊らしい。だが、諸君がその実力を出し切れれば必ず勝てるはずだ！！」

ただし、心意気はマジであるが、ちゃんと冷静に物事を判断でき

るのが、彼女が名剣士と言える由縁だった。（ただし何故か友澤の前ではそれが出来ないらしい。）

現に彼女は、上記の演説が終わると、士官たちを集めて相手の戦力推察から、予想される攻撃方法までを考慮していた。

今度こそ勝つという闘志が、彼女の中にはみなぎっていた。

一方、相手をする事となった葛西豊少佐率いる小隊でも、演習前の打ち合わせが行われていた。

「へえ、友澤中尉を打ち取ったのか、中々やるじゃないか。」

「まあ、かなりでたらめな戦法らしいですけど。ただ彼女らの実力が相当高いのは、過去のレポートも証明しています。」

「相手にとって不足なしってことか・・・」

副官であるファンレイン中尉の報告を受けながら、葛西少佐はニヤリと笑った。

今回彼が率いる小隊は60名。銃士隊の半分である。使用している武器は葛西小隊が短機関銃を装備している以外にはほぼ同等である。もし近接戦闘となったら、最悪剣術で勝る銃士隊にやられてしまつかもしれない。

しかしながら、豊は少なくとも負ける気はしていなかった。

「そうなりますね。しかし、こちらは数こそ銃士隊に劣っています  
が、見えない眼がありますから。しかも、全員実戦参加者です。王  
軍との訓練も何回か行っています。下手をしなければ負けないはず  
です。」

「そうだな。よし、小隊長を全員集めてくれ、最終的な作戦内容の  
確認を行う。」

「了解です。」

それから2時間後、銃士隊VS葛西小隊の演習が始まった。今回  
の演習では、銃士隊が守る陣地を、葛西小隊が攻めるという設定に  
なっていた。銃士隊陣地に建てられた旗を取った場合は葛西小隊の  
勝ち。守りきった場合は銃士隊の勝ちである。

通常同レベルの戦闘力を持つ部隊同士で戦う場合、攻める側は守  
る側の3倍の兵士が必要とされている。しかし、今回は攻める側が  
守る側の半分の兵力しかない。それにも関わらず、豊は勝つ気満々  
であったし、アニエスも特に文句は言わなかった。

「半分の兵力で攻勢に出るということは、義勇軍の考え方からみて  
それなりの勝算があるということだろう。何か秘密兵器でも使って  
くるかもしれない。全員心して掛かれ。」

今回の演習では、お互いの事前情報はほとんど交換されていない。  
つまり、実戦の突発的な戦闘を想定したものであった。だからアニ  
エスとしても、詳しい葛西小隊の情報はなく、全て推測や伝聞情報  
に頼るしかなかった。

一方葛西小隊の方も状況は同じであったが、義勇軍内部にある分、

彼らのほうが得られる情報の量が多かった。

近代戦において、情報収集能力の差は大きい。もともと、アニエスもそれについてはしっかり弁えていたから、演習が始まると直ぐに斥候を出したり、一部の部隊を前進させたりして敵接近を素早く探知できるようにした。銃士隊には無線機が既に供与されていたため、それも可能だった。

だが10分後、アニエスの下に思いがけない報告が入った。

「全滅だと!？」

ミシエル大尉の報告に、アニエスが眉を潜めた。

「はい、隊長。敵発見のために前進した斥候隊は敵の襲撃を受けて、1名を除いて全員戦死の判定を受けました。」

斥候隊のメンバーは比較的練度の高い者で編成したはずだ。そう易々とやられるはずが無かった。

「どういうことだ?・・・すまないが、その生き残りを連れてきてくれ。」

アニエスの命令を受けて、直ぐにミシエルがその生き残りを連れてきた。

「御苦労、マーリン1等兵。すまないが、襲われた時の状況を話してくれ。」

「はい、隊長。私たち4人は、森の中を警戒しながら進んでいまし

た。全員がそれぞれ前後と左右を確認しながら、体を低くして歩きました。そしたら銃声がして、いきなり前を進んでいたキャサリン少尉が銃撃を受けました。私たちは急いで銃を構えてあたりを窺いましたが、敵を発見できず、逆に私を除く全員がやられました。」

「そうか・・・わかった。それで、敵の姿は見たか？」

すると、マーリンは首を横に振った。

「残念ながら・・・けど、何かが飛んでいくような音は聞こえました。鳥よりも大きな感じがしました。」

「何だと。わかった。もう行ってよい。お前は第3小隊に臨時で組み込む。」

「了解！」

マーリン1等兵は、敬礼して戻っていった。

**同盟軍創設記 銃士隊編 2（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。



### 同盟軍創設記 銃士隊編 3

銃士隊の斥候部隊が演習開始早々全滅するという事態に、銃士隊内では恐怖とまではないかないまでも、少しばかり動揺が起きていた。しかし、歴戦の隊長であるアニエスはすぐにそれを諫めた。それと同時に、相手の正体を部下と共に考えた。

「それにしても、一体敵はどんな奴だ？ キャサリンはそれなりに腕の立つ奴だぞ。あいつが反撃もままならないまま、部隊が全滅するなど考えられん。」

あごの下に手を当て、アニエスは考え込む。

「それに、マーリン一等兵の証言も気になりますよね。敵の姿が見えなかったと言っていました。確かに戦闘服は森の中では見えにくい服ですけど、銃声がした方をみて見つけられないなんてありえません。とくに、斥候隊員は眼の良いメンバーで構成していたはずですから。」

「義勇軍では一部の兵士にメイジがいますから、何らかの魔法を使ったのではないのでしょうか？」

1人の分隊長が言う。だが、その声はどこか自信なさげだった。当然である。そんな魔法あるはずが無い。これまでメイジと日々戦うことを研究してきたアニエスにしてみても、そんな魔法もマジックアイテムの存在も聞いたことが無い。

「うーん・・・これまで義勇軍とした演習でもメイジと戦ったことは何度もあったが、こんなことは無かったぞ。一体連中はどんなマ

ジックを使っただんだ？」

アニエスたちはただただ、首を捻るだけだった。

さて、アニエスたちが斥候隊を全滅させた敵の正体を考えあぐねている頃、義勇軍葛西小隊の陣地の指揮官用天幕の前に、1人の兵士が降り立った。彼女、翼人の少女はそのまま天幕の中に入ると、豊に向かって報告した。

「葛西少佐、ケイト兵長ただいま戻りました。偵察ならびに敵偵察部隊への攻撃任務に成功。命令どおり、1人を除いて全滅させました。それから、こちらがカメラです。」

戻ってきた翼人の兵士、ケイト兵長が持たされていたデジタルカメラを豊に渡した。

「ああ、任務御苦勞様。帰ったばかりの所すまないが、敵のおおよその配置を地図に描き込んでくれないか？」

「はい。」

豊に言われて彼女は近くにあったペンを取ると、地図に今さき自分が見てきた敵陣地の位置を、大まかにではあるが描きこんだ。

「こんな感じです。」

彼女が書き込みを終えた地図を、豊は一瞥した。

「ようし、ありがとう。攻勢に移るまで、今しばらくは時間があるから、分隊に戻って少し休んでいる。」

「はい。では。」

彼女は最後にピシッと敬礼すると、天幕から出て行った。

「銃士隊の連中は驚いたでしょうね、見えない敵から撃たれたんですから。」

ファンレインが顔に笑みを浮かべながら言う。かつては敵味方となつて戦い、見えない敵『ファントムメナス』と恐れられた少女。それが今や豊たちの仲間になつて戦っていた。彼女の強さを身を持って知っているからこそ、ファンレインは笑うことが出来た。

「ああ、しかし実際に襲われた側からしてみれば恐ろしいことこの上ないだろうな。まあ、名剣士として名高いアニエス隊長がこれくらいで怖がるとは思えないが、動揺を与えることぐらいは出来ただろう。そのために、わざわざ1人逃がすように指示したんだからな。」

「正体が分からないほど恐ろしい・・・隊長も中々やりますね。」

分隊長の1人が言った。

「なあに、心理戦じゃこんなの初歩中の初歩だよ。・・・さ、話は終わりだ。彼女が危険を冒して撮ってきてくれた写真を見るとしよう。」

豊はケイトから渡されたデジタルカメラを操作し、撮影された写

真をディスプレイに投影した。さすがに野戦指揮所の設備では印刷するという余裕はまだなく、カメラについている小さなディスプレイを覗き込むしかない。

だが、それで充分だった。ケイトが写してきた写真には、銃士隊の陣地がしっかりと記録されていた。陣地の配置、兵の数、厳密とまではいかないまでも、かなり高い角度の情報である。

「ようし、これで大分楽に戦いを進められるぞ。」

豊は早速、カメラからわかる情報を、先ほどケイトが書き込んだ地図に書き込んでいく。ちなみに、彼女が撮った写真は今回の場合あらかじめ一定の方向から等間隔で撮るよう指示していたので、どの写真がどこで撮られたのかはだいたいわかる。

「・・・これで終わりだ。敵の兵力分布は大体こんなところだな。」

豊がさらに情報を書き加えた地図を、周りにいたファンレインや分隊長たちが覗き込んだ。

「さすがに歴戦の銃士隊だけありますね。これを見る限りでは、防御に穴が見られません。」

分隊長の1人が指摘した。確かに銃士隊の配置とそこに置かれた戦力は均等であり、さらに一箇所が襲われても、すぐに他から支援が受けやすいようになっていた。

もつとも、そんなことはあらかじめ豊たちによって予想されていることだった。今回の演習では戦場における突発的な攻防戦の発生を前提にしており、あらかじめ両軍に渡されている情報は少ない。

しかしながら、銃士隊の名は義勇軍内ではそれなりに轟いているから、別に情報の提供を受けなくても、伝聞情報だけでそれなりに相手のことを把握できた。

銃士隊にも同じことが言えるのであったが、彼女らにとって悪いことに、葛西豊のことは知っていたが、彼の指揮下に特殊な先住魔法を操れる翼人の少女がいるという情報はまだ耳に入っていなかった。

「これなら当初の作戦でいけるかもしれませんね。」

ファンレインが言う当初の作戦とは、迫撃砲による催眠弾を短時間で集中的に撃ち込み、敵の防衛線に穴を開けて、一気に突破を行行するというものだった。

アカデミー

魔法研究所と科学研究所の合同で作られた人道的兵器とも呼ばれる催眠弾は治安維持などにも大きな効果を発揮していた。無臭、無煙であるために撃ち込まれたのに気づくものにも苦勞する、撃ち込まれる側に見ればかなり厄介な兵器だった。

欠点があるとすれば、調査に時間と予算（通常弾の4倍）がかかり、供給されている部隊が少ないことである。しかし、これまで治安維持戦闘に活躍してきた葛西小隊には配備されていた。

もっとも、アニエスもこの存在は知っているはずだから、早々と気づいて対抗策を繰り出してくる可能性が高い。

「いや、あのアニエス隊長なら催眠弾を使うことに気づくかもしれない。こっちには短機関銃もあるが、如何せん有効射程が短いからな・・・火力はほぼ同等か。ここは1つ、ケイト兵長にもう一働き

してもらおう。彼女を呼び出してくれ。」

「了解です隊長。」

「ああ、あとそれから・・・」

30分後、幹部クラスの会議で決められたことが全部隊に通達された。特に異議も出なかったために、作戦はそのまま実行に移された。

予定通り、銃士隊の防衛線の一箇所に、催眠弾が投擲された。ちなみに、今回は演習であるのだが、催眠弾は殺傷兵器ではないので実弾が使われた。無論、費用的にはバカにならないが。

そんな感じで銃士隊の陣地には多数の催涙弾が降り注ぎ、銃士隊隊員はそれが演習用の模擬弾と誤認してしまった。そして、気づいたときには後の祭りです。30名近い隊員がぶっ倒れることとなった。

そしてその防御に出来た穴に、葛西小隊は殺到した。

しかしながら、ことはそう簡単ではなかった。既にその時点でア二エスはガス対策を終えさせ、さらに兵を短時間で纏め上げて、効果的な防御戦へと移行させていた。豊の予想通り、歴戦の銃士隊の名は伊達ではなかった。

戦いは膠着状態に入ったかに見えた。

一方その頃、銃士隊と葛西小隊が銃撃戦を繰り返している様子を

見下ろしながら飛んでいく翼人と1人の少年兵の姿があった。

「下はすごいことになってるな。」

「うん、隊長の予測どおりだよ。」

「けど、これで敵のめは向こうに向けられているわけだから、私たちの仕事はやりやくなった。さ、とっとと仕事終わらせて帰ろ。」

「だね。」

2人は目標である。銃士隊のフラグがある陣地へ向けて降下していった。

**同盟軍創設記 銃士隊編 3（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。



同盟軍創設記 銃士隊編 4（前書き）

なんとか更新できました。ご迷惑をお掛けしています。

## 同盟軍創設記 銃士隊編 4

自軍陣地を守ろうと必死に防戦する銃士隊と、それを攻め落とそうとする義勇軍葛西小隊の戦いを尻目に、翼人の少女であるケイト兵長と少年兵のトレバー兵長は葛西から命じられた特殊作戦を実行中だった。それは葛西小隊主力が敵の注意を引き付けているうちに、敵陣地へ潜入、旗を持ち帰るという物だった。

自軍主力を丸々囷に使うというこの作戦は、元いた世界で政府軍にゲリラ戦を仕掛けていた豊ならではの作戦だった。また、彼の小隊に翼人でなおかつ姿を消せるケイトという人材がいたことも幸運であつた。

ちなみに、ケイトだけではなくわざわざトレバーが付いていくかといえば、これは旗付近に罠があることを警戒したためと、小柄な彼ならケイトが乗せて飛ぶことも可能だったからだ。

ケイトはかつて豊たちを散々手間取らせた先住魔法、すなわち彼女が亡き母親から受け継いだ姿を消す魔法で銃士隊の防衛線を気づかれることなくすり抜けた。この魔法はケイトのみならず、彼女が身につけている物の姿も消していた。だから彼女の背中に乗っているトレバーの姿も周囲からは見えなかった。

2人は悠々と銃士隊の旗の側まで侵入することができた。

「目標確認！」

旗がある場所の手前の木に降り立つと、トレバーが双眼鏡で銃士隊陣地に掲げられている旗を確認した。

「これならあつさり行けそうだな。」

トレバー同様双眼鏡を手にしたケイトが、余裕の表情で言った。既に勝った気でいるようだ。しかしながら、トレバーはどこか釈然としない表情をしていた。

「うーん・・・なんか変な気がするんだけどな・・・」

「変な気って？」

ケイトが怪訝な表情をして言った。

「いや、上手く言葉に出せないんだけど。なんかこう、心の中に何かが引っ掛かるような気がして。」

「心配しすぎだよ。見たところ周りに敵はいないみたいだし。とつとと旗をもらって帰ろう。演習が早く終われば、ミライの街で遊ぶ時間も増えるし。」

笑顔で楽天的な意見を言うケイト。だが、トレバーの言い知れぬ不安は拭われなかった。そしてそれは、数分後に現実の物となる。

「とにかく行こう！」

「わかったよ。」

ケイトに押される形で、トレバーはケイトと共に木を降りて、旗の方へと向かった。

2人はゆつくりと旗に近付いていったが、先ほどと同じようにその周りに人の気配はなかった。

「やっぱり誰もいないみたい。」

「けど気をつけて、もしかしたらどこかに潜んでいるかも。」

楽天的に言うケイトに対して、トレバーは緊張を解かずに言った。そのためケイトはあざ笑うかのように言う。

「トレバー、あんた本当に臆病だね。」

「慎重って言うてほしいね。とにかくケイト、何が起きるかわからないから取り敢えず注意だけはした方がよいよ。隊長だっていつも警戒を怠るなって言っているじゃないか。」

「はいはい。わかりました。」

トレバーの言葉に対し、どこかいい加減に答えるケイト。

先に入隊し部隊に実戦配備されたトレバーは、これまで何度も戦場においては常に警戒を解かないよう上官に、特に豊に教えられてきた。ケイトの方は配属から日が浅いので、未だそれを徹底し切れていないようだった。

それでも注意を受けたせいか、ケイトは腰のホルスターから拳銃を出して、いつでも撃てるように構えた。今回はトレバーとともに空を飛んできたために、重量を減らさねばならず、2人が持っている武器は拳銃と音響閃光弾だけだった。この状況でもしも敵と出会ったら、一大事である。これもまた、トレバーを慎重にさせている

理由の一つだった。

だがそんな彼にお構いなく、ケイトは旗へと近づいた。彼女の後ろを同じように拳銃を構えたトレバーが援護する。だが、結局何も起こらずケイトは旗のポール部分に手を伸ばした。

「それじゃあ、いただき！」

彼女がそう言っただけでポールを地面から抜こうとしたとき、トレバーはそれに気づいた。そして拳銃を構えると、ケイトに向かって叫んだ。

「ケイト危ない！！下がって！！」

普通の人間なら一瞬隙を見せてしまったかもしれない。しかし長年森の中で1人戦ってきたケイトは、反射的にポールに伸ばした手を引っ込め、一歩下がった。その瞬間彼女がいた場所を剣が一閃した。

「な！！！」

「く！！！」

トレバーは拳銃を撃とうとしたが、不幸にも射線がケイトと重なってしまい撃てなかった。その間に、突如現れたそれは剣の切っ先をケイトの喉元へと向けていた。現れたのは、なんと体中に木や葉っぱをつけて擬装した人間だった。

「2人とも動くな！！！」

その人物は迫力ある声で2人に言った。片手の剣でケイトの身動きを封じ、もう片方の手で拳銃を握り、その狙いをトレバーに向けていた。そうした動きは素早く行われ、その人物が相当腕のたつ、歴戦の人間であることを窺わせた。

トレバーは直感的にその人物が誰であるか見抜いた。

「アニエス銃士隊長長！」

「ほう、中々鋭いじゃないか。」

擬装の一部を外して現れたのは紛れもなくアニエスだった。

「まさか擬装して待ち伏せているなんて・・・」

嫌な予感が当たってしまったこと、さらにはケイトの喉元に剣（演習用の木刀）を突きつけられ身動きを封じられてしまい、トレバーの顔は苦虫を潰したようなものとなった。

「あのバカ（友澤中尉のこと）から学んだことも少しは役に立ったな。しかしこちらにも驚いたぞ、まさか翼人を隊員に加えているなんてな。しかも不思議な魔法を使っているようだ。あれが先住魔法という奴か。さては、キャサリンたちの斥候をやったのもお前だな。」

その言葉に、ケイトは齒噛みしたい思いだった。

「けど、どうして俺たちが来るって分かったんです？」

トレバーが尋ねた。すると、彼女は笑いながら言った。

「単純なことだ。義勇軍は勝利するために様々な戦法を取る。特に今回の相手である葛西少佐の隊はこれまでにいくつかの勲功を立てていると聞いていた。そんな彼に率いられた部隊が戦力の劣勢という状況で、いくら新型の催涙弾を使っているとはいえ、中央突端しようとするなんて単純すぎだろ。むしろあり得ない。どこかに伏兵がいる。そう考えたほうが普通だろ。」

「つまりこちらの裏を掻いたわけだ。」

「ああ、だが私としては本当に上手くそうなるか不安だったかな。だから私一人だけが待ち伏せしたわけだが、幸運にも今回は当たったようだ。……さ、お喋りは終わりだ。銃を下ろして降伏しろ。」

アニエスは2人に降伏を勧告した。しかし。

「生憎とそういうわけにはいきませんね。こっちとしては少しでも粘る必要があるのです。」

トレバーが表情を一転させて言った。当然、それはアニエスに警戒心を抱かせた。

「何!?!…まあ良い。だったらお前たちを早々と始末するまでだ。今回は演習だから命はとらない。ありがたいと思うんだな。」

「ええ、感謝しますよ。すぐに僕たちを斬らなかったことに。」

そう言うと、トレバーはケイトに目配せをした。その途端、彼女は後ろに下がろうとした。もちろん、普通ならここでアニエスが木

刀を動かして彼女の死亡判定となるわけだが、今回はそうはならなかった。

突然何の前触れもなく、銃声がした。その途端アニエスの木刀に凄まじい衝撃が走り、演習用のインクが飛び散った。

「何だと！？しまった！！」

アニエスは伏せようとしたが、既に手遅れだった。1秒後には、銃声と共に彼女の体にも2発の演習弾が着弾した。こうなると完全な死亡判定である。

その間に、ケイトはさっさと旗がついたポールを地面から引っこ抜いた。

「やった！！」

満面の笑みを浮かべたケイトを見て、射殺されたアニエスは歯噛みした。

「2つ目の伏兵がいたのか・・・」

彼女の言葉を裏付けるように、間もなく草むらの中から今回の戦闘の勝敗をジャッジする審判官の士官を連れた豊が現れた。その肩には、狙撃用スコープ付のT1小銃が担がれていた。

「ふう、間に合って良かった。敵に見つからないように迂回するのは中々苦労したが、その介あったな。ケイト、トレバー、任務ご苦労。」



彼は笑顔で2人に敬礼した。もちろんされた2人も満面の笑みを浮かべて答礼した。そして彼は真っ赤な染料に染まったまま座り込むアニエスを一瞥すると、後ろにいた審判官である才人に向かって言った。

「平賀中佐、見ての通りだ。敵本陣は陥落、アニエス隊長は戦死だ。演習終了の信号を撃つてくれ!!」

「了解!!」

豊に言われて、才人は持っていた信号拳銃を空へ向けて発射し、演習終了を全部隊に報せた。

**同盟軍創設記 銃士隊編 4（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

## 同盟軍創設記 銃士隊編 5

演習終了の信号弾が打ち上げられた瞬間、葛西小隊の兵士たちは満面の笑みを顔に浮かべた。一方、銃士隊の兵士たちは文字通り呆然とするか啞然とするしかなかった。この時点において、前線の戦いは徐々に数に勝る銃士隊が葛西小隊を押しつつあった。それなのに、いきなり銃士隊の陣地で信号弾が上げられたということは、彼女らの敗北を意味していた。

「やった！」「勝った！」とはしゃぐ葛西小隊の隊員たちに対して、銃士隊の隊員たちには言い様のない脱力感が襲いかかり、彼女らはガクツと肩を落すしかなかった。

その後、両軍は演習場となっていた森を出て集合する。その間に今回の演習に随伴した審判官たちが戦果の集計を行う。そして集計が完了すると、持ち込んだハンドマイクを使って結果を発表した。その役目は審判官の最上級者である平賀才人中佐が務めた。

「それでは今日の演習の結果を発表します。銃士隊は戦死判定12、負傷判定26、戦闘不能32で陣地陥落。葛西少佐の小隊は戦死判定9、負傷判定12で作戦目的を達成しました。よって総合的には葛西小隊の勝利となります。」

この言葉に、銃士隊の面々は再び肩を落とし、葛西小隊の隊員たちは得意げな表情をした。もっとも、現実はそのような単純なことではない。

才人に続く形で、補足事項を同じく審判官を務めた狙撃部隊の篠塚兵曹長が言う。実は今回審判官を務めた4人の内、才人を除くメ

ンバーは全員狙撃部隊の人間だった。理由は極簡単で、同じ演習場で演習をしていたからだ。なお、隊長の友澤中尉が外されているのは、「彼はア二エス銃士隊隊長と個人的なもつれがある。」からであつた。

それは兎も角として、篠塚の言葉はかなり厳しい内容だった。

「今回の戦いは最終的に葛西小隊の勝利となりましたが、葛西小隊の損害も部隊のおよそ3分の1に及んでいます。これは壊滅一步手前を意味しています。ですから手放して勝利を喜べるものでないことを肝に命じて置いて下さい。」

まるで勝利に冷や水を浴びせるような言葉であるが、実際の戦いで3分の1の戦力が消耗することは許されないことであつた。もちろん、今回は相手が銃士隊という手強い相手であり、地形や戦力の関係もある。しかしながら戦力が限られ、兵士1人1人が宝石並みに貴重であるのが今の義勇軍なのだ。

「戦果を挙げることも重要だが、損害を如何に少なくするか指揮官は最大限の配慮を講じるべし。」義勇軍の教本でもそう記されていた。

もつとも、隊長の豊自身は結果を聞いた時点で今回は敗北だとちやんと認識していた。彼の予測では、銃士隊との戦闘はあくまで旗を奪う本命から敵の注意を引き付ける陽動であつたので、弾薬や装備こそかなり消耗するが、被害がそれほど出ない戦闘を考えていた。

実際陽動部隊を率いていたファンレイン中尉は、多量の弾薬を消費しつつも、距離を取って戦闘を行い、自軍の被害が小さくなるように行動していた。

しかし現実はその高くない練度と戦意で葛西小隊に大きな打撃を与えていた。やはり同程度の武器を持つ者に対してはあまりにも被害予測が甘かったと言わざるを得ない。

「なおより詳しい戦闘経過の把握を行うため、各分隊長は本日の戦闘に関するレポートを簡単にまとめて提出して下さい。」

その言葉に、分隊長たちは嫌な顔をした。軍人にとって書類仕事は厄介ごとなのだ。特にこれまで傭兵として戦ってきた人間はそうであった。

その後他今回の演習の簡単な経過や数点の補足事項が伝えられた。そしてそれが終わると篠塚は恒例の事項を両部隊に伝達した。

「それでは両部隊とも、一端兵舎に戻ってお休みください。交流会は1800（ヒトハチマルマル）からとなります。」

「皆聞いた通りだ。これより兵舎に移動して休養と着替えを行う。銃士隊起立！」

ペイント弾の染料だらけになりながら、未だ力強い声でアニエスは隊員らに向けて言った。また豊も自分の隊員たちに指示を出す。

「我々も兵舎へ移動する。交流会までは自由時間とするが、各自身だしなみはちゃんと整えてくるように。それでは起立！」

両部隊の隊員たちは、隊長の言葉を受けて立ち上がり、兵舎へ向かって移動を始めた。

交流会とは、その名の通り義勇軍と共同で演習や任務に就いた別部隊との隊員同士の交流を行い、意見交換等を行う場だ。また今回は夕食会も兼ねている。食事を伴う場合は大概立ち食のバイキング形式で行われる。

今回参加するのは銃士隊と葛西小隊、そして午前中の演習に参加した狙撃部隊だ。審判官を手伝った才人は夕方から王室への連絡將校の任務を受けて出掛けたために、ここにはいない。

簡単な休憩をとり、戦闘服から通常服（第二種軍装）に着替えた隊員たちは料理を載せる皿片手に、談笑する。話す内容はたわいも無い物も多いが、今日の演習について話し合う者もいる。

「銃士隊はよく訓練されているし、戦意も高かった。正直戦う前は女ばかりの部隊なんてたいしたことないと思っていたけど、さすがにトリストインで一目置かれているだけあるよ。女だからってバカにしちゃいけないな・・・銃士隊とは戦場では会いたくないよ。」

傭兵出身者の義勇軍兵士が、他の隊員や銃士隊の隊員数名と集まってそんなことを言う。戦場で会いたくないとは、それだけ相手の力が脅威たりえる物という意味だ。

彼のセリフに、やはり義勇軍の若い兵士が賛同する。

「その通りですよ。しかも、ア二エス隊長はこちらの作戦を呼んで後方で待ち伏せしていたそうじゃないですか。あの人は本当にすごいですよ。まさか葛西隊長の作戦を読むなんて。それに次席指揮官

の指揮も見事でしたし。」

一方、賞賛された銃士隊の隊員も意見を口にした。

「けど最終的に負けちゃったしね、それに催眠弾を撃つてくるとは思わなかったし。」

「本当。実弾の演習弾かと思ったわ。それに葛西少佐はアニエス隊長を出し抜いたんでしょう。今までアニエス隊長が裏を掻かれることなんてなかったから、そっちの隊長だってすごいわよ。」

と義勇軍を賞賛する。

「だけど、こっちも戦力3分の1がやられちゃったからな。後退戦や持久戦の訓練をもっとしなくちゃいけないな。」

「うちも、早いところ義勇軍の兵器についてもっと習熟しないと。」

両者今後のことにも頭を働かせていた。こうした考えに至ることも、交流会の目的の一つだった。ちなみに、下級の将兵がこんなこと言っても意味があるかと思われがちだが、『東方義勇軍』では部下からの意見具申を重視するようにしていたので、良いことであれば採用される可能性大だった。

そんな感じで部下たちが交流をする中で、隊長達もそれぞれ意見交換をしていた。

「・・・やっぱりそうになると擬装が重要ですね。今回もアニエさんは十分な擬装を施していましたしね。遠目からはわかりませんでした。」

「まあ、このアホ（友澤）の言うことも少しは役に立ったということだろう。」

「アホで悪かったな。けど、豊は人を見る目があるよな。ケイト上等兵には俺も最初はビックリしたよ。腕も良いし、是非とも我が狙撃部隊に引き抜きたいぐらいだ。」

「残念ですが、それだけは出来ませんよ。」

友澤のセリフに、豊は笑いながら答えた。ちなみに、彼は自分より階級は低い、高い腕と部下の統率力を持つ彼に一目置き、敬語で喋っていた。

「まあ、ケイトにも時間があつたら是非とも狙撃術を伝授して欲しいですね。ただ今は、戦争がいつ起きるかわかりませんけど。」

「だな。だが近いのは確かだ。トリスティン家の司令部も大分慌しくなっているからな。」

友澤の言葉に、アニエスが頷いた。

「やはりそうか。私も代王殿下からそれとなくその話を聞いている。国境線での小競り合いも続いているみたいだし。」

3人は表情を真剣にして言った。さらにアニエスは付け加えた。



「それにだ。どうも王軍には楽観的な空気が漂っている。」

「どう言う事です？」

豊が首を傾げる。

「どうやらレコン・キスタとの戦いで勝ったことで、余計な自信が付いたようだ。それどころか、ガリアと戦争になっても良い名を挙げた場だと勘違いしているバカが多い。全く、あの戦いで勝てたのは義勇軍のおかげだということを端から無視している。しかも戦争を単なるゲームか何かと思い込んでいる。ガリアに飛行機が現れたという情報にも関心をあまり示していない！」

アニエスが憤りを顔にした。普段は仲が悪い友澤もその言葉に頷く。

「俺も聞いた。プライドが高いのは構わんが、敵を過小評価するのは最悪だ。それに演習で何度負けても上層は根本的な敗因の研究を怠っているらしいな。あそこまで来るともう意地だな。」

「結局6000年かけて構築された差別や意識を壊すことなんて簡単じゃないってことですよ。けど、そうなると王軍が戦う結果は見えていますね。」

豊の言葉に、アニエスが深く頷く。

「ああ、だからこそその時は我々の出番となるだろうな。」

「アニエスの言うとおりだ。近代的な火器を操るうちらが出て行けば、万単位の敵軍とも渡り合える。もつとも、兵がちゃんと戦えな

きや話にならないがな。」

そう言って、友澤は持っていたラムネを一気に飲み干した。

「そう言う訳で、アニエスお前ちゃんと銃使えるようになれよ。大分よくなったけど、まだ操作する時、荒い時がある。」

「ふん。お前こそ、今日みたいに簡単にやられるんじゃないぞ。」

「へいへい。」

「まあまあ、2人とも・・・」

少しばかり嫌悪になり始めた空気を感じて、豊がとりなす。

銃士隊、義勇軍による合同演習は両部隊に良い影響を与えているようだった。しかしながら、残された時間はわずかだった。3人は指揮官として、この3ヶ月後にその手腕を試されることとなる。

**同盟軍創設記 銃士隊編 5（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

## 『東方義勇軍』装備名鑑 2

OS 2型 43式2型艦上戦闘機「バッファロー」

全長8.2m 全幅11m 自重2100kg

速度550km 航続力1700km

武装12.7mm機銃4基

爆装主翼下にロケット弾4発又は60kg爆弾×4。胴体下に250kg爆弾1発。

発動機ライトR1820-40改 空冷1600馬力

桜花飛行機で生産を行った43式1型戦闘機零戦改は性能的に優秀であったが、基にしたゼロ戦は元々大量生産を視野に入れた戦闘機ではなく、生産スペースを上げるのが難しかった。義勇軍では対ガリア・ゲルマニア戦争に備えて機体を大量に揃える必要があり、低予算で大量生産可能な戦闘機が必要であった。そこで義勇軍と提携している桜花飛行機では、新型機の開発に着手した。ただし、開発期間を抑えるために実在機をモデルにすることとなった。

この機体のモデルとなったのはアメリカ製のF2A「バッファロー」艦上戦闘機である。これは新型機が艦上戦闘機として必要とされているための選定であった。なおその後作られたF6Fでも、F4Fでもないのは、いずれも車輪の降着装置が複雑のためにハルケギニアでの運用時に支障を来たすことを指摘されたからであった。

この機体は2カ月後にロールアウトした44式1型戦闘機に比べて性能的には遥かに劣ったが、ガリア国内に現れた枢軸軍機には充分に対抗できる性能を有し、さらにモデル機同様操縦のし易い機体であった。そのため改良を繰り返しながら実に1000機近い機体が生産された。

なおこの機体は初めての外国供与機となり、最初の機体はロマノフ王国派遣部隊に2機が供与されている。同機体はセルゲイ・ヒロ

セ中尉の操縦によつて、トリスタニア防空戦において撃墜を確認している。また開戦直後トリステイン海軍所属機は、空母「ブリシנגアメーン」より発進し、海上より迂回してトリステイン侵攻を図つたゲルマニア艦隊迎撃を行い、大打撃を与えている。

OY1型 43式輸送機 「ダグラス」

全長19'5m 全幅22m 自重11500kg

速力400km 航続力2600km

武装12.7mm機銃1基

貨物5t又は人員28名輸送可能

発動機R-1830-92改 空冷1450馬力2基

地球からの物資輸送は、当初ビジネス機やセスナ機が用いられていた。しかしこれらの機体はいずれも輸送能力が小さく、さらに運べる物の大きさも制限せざるを得なかった。そのため、より大型の荷物と大量の人員を一気に運ぶために桜花飛行機に発注されたのがこの機体で、元となつたのは傑作輸送機として知られているDC3型輸送機の軍用機版C47「スカイトレイン」。

この機体の場合は実機の図面そのままに造られたが、戦闘機と同じく一部に新素材を使い軽量化を図ると共に、エンジンも強化されたものが搭載された。そのため性能も幾分上がっている。地球へハルケギニア間の輸送に主に用いられていたが、その後はハルケギニア内でも輸送任務に活用されている。そのため竜等の幻獣の襲撃に備えて上部に銃座が備えられた。なお生産に関しては第一ロットの8機がロールアウトした後は戦闘機や爆撃機の生産が優先されたために、しばらく中止された。しかしその後ガリアへの逆侵攻や聖地調査などで用いられたためにさらに生産が行われた。また、ハルケギニア戦役後も旅客機として生産が続けられた。

この機体が果たした役割は地味ながらも大きく、地球から運び込める物資の量が一気に10倍近く増加している。また前述したとおり、これまで輸送不能だった大型の物資も輸送可能となっている。また聖地への偵察任務では、観測機器や調査チームを現地へ運び聖地の謎の一端を明かしている。加えてエルフ国の首都ネフティスへ初めて飛行したのも同機となった。

#### OR1型練習機 「赤とんぼ」

全長8.1m	全幅1.1m	自重1650kg
速力300km	航続力1200km	
武装12.7mm機銃2基	爆装ロケット弾6発、又は爆弾300kg	
発動機「天風」改	空冷500馬力	

練習機が不足していた義勇軍航空隊の現状を改善するために、桜花飛行機に発注された機体。日本海軍の93式中間練習機そのままに開発されたが、他の機体と同じくエンジンと機体に改修を受けているので、性能が大きく向上している。

練習任務のみならず、空母に搭載されての通商護衛任務や治安維持任務の支援等にも用いられた。なお練習任務に使用されるときはエンジンにリミッターを働かせて馬力を制限した。

戦歴はこれと言って華々しいものはないが、多くのパイロットを育て上げた功績は大きい。

#### 巡洋艦「おおよど」

全長189m	排水量8500t	速力33ノット
武装15.2cm3連装砲3基9門		

5インチ連装両用砲4基8門  
40mm連装機関砲6基12門  
20mm単装機関砲10基  
ヘッジホッグ2基  
水上機2機

平行世界の日本から転移してきた巡洋艦。元日本海軍の軽巡洋艦「大淀」であり、海上自衛隊に引き継がれた艦。そのため武装や電子機器はアメリカ式の物となっている。なお武装が強化されているため、その代償として帝国海軍時代より速力が落ちている。しかしながら、現在のところは水上艦艇としてはハルケギニアで最強と言える。

転移直後にはパニックを起こした乗員が反乱を起こすという事態に見舞われたが、これは短時間で鎮圧された。義勇軍への編入後は第一打撃戦隊旗艦となり、初期は外洋諸島の調査、ロマノフ公国との国交樹立後はトリステインから外洋諸島、またはロマノフ公国へ向かう船団護衛任務に就いた。

ハルケギニア戦役が始まると「おおよど」は義勇軍水上部隊、トリステイン海軍、アルビオン海軍をまとめた連合艦隊旗艦となり、開戦直後のゲルマニア艦隊迎撃、海岸線を侵攻してきたガリア軍への艦砲射撃、さらにはガリアへの反攻作戦となったノルマンディー上陸作戦と大活躍した。

駆逐艦「ゆきかぜ」

全長119m      排水量2100t      速力33ノット  
武装5インチ連装砲3基6門  
40mm連装機銃4基8門  
20mm単装機銃8基

61cm4連装魚雷発射管1基4門

ヘッジホッグ2基

爆雷60個

「おおよど」と同じく平行世界の日本から転移してきた艦。元日本海軍の「陽炎」型駆逐艦でその後海上自衛隊に引き継がれた。武装・電子機器等は全てアメリカ式に交換されている。やはり武装強化によって速力が落ちているが、全般的な戦闘能力は高い。

転移後は『東方義勇軍』海上部隊の第一水雷戦隊旗艦となり、「おおよど」と同じく船団護衛任務や海洋調査任務に充当された。

ハルケギニア戦役開戦後は「おおよど」等とともに連合艦隊の1艦として機動艦隊護衛任務、対地攻撃支援任務、通商路護衛任務に就いた。中でも同艦にとって最大の見せ場となったのが、開戦4か月後に行われたサン・マロン軍港奇襲作戦である。同港に停泊中の両用艦隊残存艦艇を反王室軍となった東花壇騎士団と共同で攻撃後、亡命ガリア王国政府のイザベラ、シャルロット両姫を上陸させ、仮政府樹立に一役買った。

なお、その後技術力が向上したトリステインやゲルマニア等で建造された駆逐艦の多くが本艦を参考にして建造された。

駆逐艦「さかき」

全長100m 排水量1300t

速力28ノット

武装5インチ連装砲1基2門

5インチ単装砲1基1門

40mm連装機銃3基6門

20mm単装機銃6基6門

ヘッジホッグ2基

爆雷50個



同型艦「かえで」

平行世界の日本から転移してきた艦。元は日本海軍の未成「松」型駆逐艦が海上自衛隊に引き継がれた艦。武装・電子機器はアメリカ式。

転移後は水上部隊の第一水雷戦隊所属となり、船団護衛や海洋観測任務に充当された。

ハルケギニア戦役間戦後は「ゆきかぜ」等と連合艦隊を組んで行動を共にした。なお、「さかき」と「かえで」の2隻は練習艦としても用いられ、熟練した乗員の指導の下で、トリステインやアルビオンの海軍軍人を育てるのに大きく貢献した。

#### 44式1型対地ロケット砲

陸上部隊の新装備で、航空機搭載用ロケット弾を小型化して転用したもの。旧ソ連軍の「カチューシャ」ロケット砲をヒントにして造られた。野砲よりも簡易な構造であるが命中率は低く、有効射程も5000mと劣っていた。ジープ搭載型、トラック搭載型、艦艇搭載型が造られた。

実戦投入はハルケギニア戦役開戦1ヵ月後のソムの戦いから。

地球から輸入している迫撃砲や無反動砲が弾切れを起こした後の代替用兵器として期待されたが、それらの生産がハルケギニアでも可能となったため、結局短期間で生産はストップしている。

『東方義勇軍』 装備名鑑 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

人物の方もまとめようと思っておりますが、どんな風にまとめれば良いのかわからず、そちらは四苦八苦しています。

## キャラクター名鑑 1（前書き）

今回の作品は外伝を執筆していただいているジョン・ドー先生より頂きましたキャラ表を加筆・訂正したものです。  
ジョン・ドー先生には本当に感謝しています。

## キャラクター名鑑 1

「ゼロ戦才人」登場人物一覧（設定は第4部掲載時点のものを基本に、順次修正）

### レギュラー陣

平賀才人

本編の主人公。18歳。

義勇軍中佐、航空隊戦闘機パイロット兼トリステイン方面軍王室連絡将校、トリステイン王国男爵

義勇軍大佐、トリステイン王国大公

虚無の使い魔『ガンダールヴ』の使い手。

ルイズに使い魔として召還された後、彼女と共に幾多の戦闘をくり抜ける。また、彼を追ってハルケギニアに転移した才吉や才助らと共に『東方義勇軍』（トリステイン空中義勇軍）を結成する。原作と違いかなりのミリタリー系オタ。陸海空共に詳しい。

ルイズとは非公式ながら結婚する。そのため公にはされていないが、形式的には王室の一員。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

本編メインヒロイン 17歳。

元トリステイン魔法学院学生。トリステイン代王（摂政）『虚無』の担い手にして才人の主人。通称『ゼロのルイズ』 トリステイン王国女王

使い魔召還の儀式中に才人を召還する。才人と共に何回かの戦闘をくり抜けるが、アルビオン解放戦争終結後にアンエリッタに指名されてトリステインの代王に就任する。

才人とは一部反対もあったが非公式ながら結婚する。原作に比べて遥かにツンデレ色が薄くデレ色が強い。義勇軍を支える1人。

デルフリンガー

才人の使うインテリジェンスソード。吸魔の能力を持つ。

原作に比べて遥かに活躍の場が少なく、グチ気味。

シエスタ

義勇軍特務1等兵曹。トリステイン方面軍戦闘機部隊所属。18歳。元トリステイン魔法学校付きのメイド、後『魅惑の妖精亭』ミライ支店の店長。義勇軍ではその美しさから『南の女神』と慕われる。

憧れだった才人がルイズと婚約したショックで一時期大いに荒れていたのだが、喧嘩に巻き込まれそうなところを菅野に助けてもらう。その後彼の誘いで義勇軍に出入りし始め、曾祖父譲りのパイロットとしての頭角を見せる。菅野とは最終的に電撃結婚する。

アンリエッタ・ド・トリステイン

トリステイン王国女王 アルビオン王国王妃 18歳。

アルビオン解放戦争後にトリステインからアルビオン王室へと嫁いでウェールズ国王と結婚。彼と共に内戦で混乱した国内の復興と改革を実行している。彼女の場合政治家としての実権は既がないが、

レコン・キスタを倒したトリステイン女王であったこともあり、影響力はある模様。

ウェールズ・テューダ

アルビオン王国皇太子 アルビオン王国国王兼首相。

アルビオン解放戦争によってアルビオン王室を復興、国王に就任。才吉たちとの交流で得た知識を元にアルビオン国内の改革を実施。立憲君主制による内閣制度の導入、学校教育制度の導入、新型兵器で武装したライオン師団の創設等を行う。本来なら王として政治には積極的に関わらない筈であったが、貴族の粛清による政治家不足のため首相も兼務することとなった。義勇軍を支援する1人。

ティファニア・ウエストウッド

義勇軍軍属。看護士。義勇軍では『北の女神』と慕われる。才人曰く「バストレポリーション」の持ち主。

アルビオンのウエストウッド村で孤児達をまとめていたのだが、才吉の計らいで孤児らと共に彼の屋敷に移り住み、付近の子供らも集めて読み書きを教えるようになる。

姉と慕うマチルダに勧められて行った使い魔召還の儀式で葛西豊を召還してしまうが、彼とは使い魔契約を結ばなかった。その後何回か豊の任務や演習に同伴している。

タバサ

トリステイン魔法学院学生。ルイズのクラスメイト。16歳。  
本名シャルロット・エレーヌ・オルレアン。

ガリア王女イザベラ配下の北花壇騎士団の元騎士。ガリアとは袂を分かち義勇軍の手引きのもと母親を連れ地球に避難していた。日本語を短期間で覚え、日本での生活を楽しんでいたようだがガリアの脅威が目前となった状況でついにハルケギニアへ帰還する。ラ・ロシエール会議において義勇軍の諜報機関である『トウ機関』からある情報を聞かされる。

イルククウ（シフィールド）

タバサの使い魔。伝説の古代種の風韻龍。

韻竜だが先住魔法で人間化することも可能。タバサと共に地球に避難した。しかしながら電波の多い環境になじめず短期間でハルケギニアに戻り、魔法学院近くの森の中にある巣でタバサの帰りを待っていた。

ギーシュ・ド・グラモン

トリステイン魔法学院学生。ルイズのクラスメイト。18歳。才人とは決闘を機に友情を深める。

アルビオン解放戦争ではド・ヴィヌイ・ユ独立大隊の第2中隊（別名ごろつき部隊）を指揮して戦功を建て、数少ない受勲者となる。その後魔法学院の志願者を集めた水霊騎士隊を結成、同部隊の隊長となる。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー

トリスティン魔法学校学生。ルイズのクラスメイトでゲルマニアからの留学生。19歳。

ルイズの先祖代々からの仇敵。しかしながら義勇軍の仲介で和解した。義勇軍がゲルマニアにおける武器製造の切欠を作ることとなった。

モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ  
トリスティン魔法学院学生。ルイズのクラスメイト。17歳。

才人らと地球に行った際は『水』のメイジらしく薬を大量に買い込んだ。

マリコルヌ・ド・グランドブレ

トリスティン魔法学院学生。ルイズのクラスメイト。18歳。

地球を訪れた際に二次元に目覚める。その後トリスティン魔法学院を震源地にして、地球のアニメの歌と踊りが流行ったのであるが、震源は彼らしい。

ジャン・コルベール

トリスティン魔法学院教師。後にトリスティン王国科学研究所所長。科学知識に大いに興味を持っていたのがきっかけで才人達に協力し、後にトリスティン王国科学研究所所長となる。

ロマノフ公国への使節団派遣に際しては全権大使に任命されると共に伯爵に叙せられる。ただし過去に起こした罪への罪悪から、貴族年金等は受け取っていない。



オスマン

トリステイン魔法学校校長。

トリステインの高名なメイジであるが、義勇軍には協力的で魔法研究などで協力している。

マチルダ・オブ・サウスゴータ

義勇軍軍属。24歳。

取り潰しになったサウスゴータの太守の娘。お家断絶後は『土くれのフーケ』を名乗る盗賊となる。

トリステイン魔法学院の宝『破壊の杖』の強奪に失敗し逮捕されるが、才吉の手により釈放。以後トリステインの工場にてガソリン練金作業員を勤める。その後義勇軍で魔法技術の指導、転入者への座学講師などを勤める事務員になる。

アルビオン戦役中に山田からプロポーズされ、紆余曲折の末結婚。その後サウスゴータ市長を務めつつ3人の子を育てる。

なお、『土くれのフーケ』は正体不明の義賊として小説に題材になるなど、後の世でも人気らしい。

#### 義勇軍関係者

平賀才吉

才人の曾祖父。86歳。

大将。東方義勇軍総司令官兼アルビオン方面軍司令官。アルビオン

の公爵。

元大日本帝国海軍厚木航空隊所属のパイロット（中尉）。元海上自衛隊海将補。

『東方義勇軍』（トリステイン空中義勇軍）の創設者。

1945年8月15日に空戦の最中、僚友の佐々木武雄と共にハルケギニアに転移したが、彼だけが地球に帰還する。

才人を追いかけて才助らと共にハルケギニアに転移。その後才助、才人らと義勇軍を結成する。自称「ちよつとばかりフロンティア・スピリットを持ったただの爺<sup>おやじ</sup>」。

地球では相当なコネがあるらしく、様々な物資や人員を手に入れているが、そのせいで隊員から色々と噂されている。

## 航空部隊

平賀才助

才人の父。42歳

中将。義勇軍トリステイン方面軍総司令官。トリステインの伯爵。元航空自衛隊一佐。戦闘機パイロット。

アルビオン戦役ではアニエスらと共にハヴィランド宮殿を襲撃。シフィールドと交戦するが痛み分けに終わる。後にその功績をたたえられ伯爵位を賜る。

祖父の才吉と共に物資や人材の調達で色々と暗躍しているらしい。

## 菅野直

中佐。トリステイン方面軍戦闘機隊指揮官。25歳。

元大日本帝国海軍大尉。帝国海軍第343航空隊、301飛行隊新

撰組隊長。

戦闘中に愛機（紫電改）を破損し帰還中に発生した日食によりアルビオンに転移。ティファニアの治療で一命を取り留める。

完治後は義勇軍の航空部隊に参加し、偶然助けたのがきっかけでシエスタと交際をはじめ、後に電撃結婚する。

清水誠一

大佐。義勇軍アルビオン方面軍所属。30歳。

元陸上自衛隊西部方面軍第一ヘリコプター隊所属の一尉。UH60Jの操縦士。

輸送任務中に才吉らと共に日食によってハルケギニアに転移。その後ハルケギニアに残留。

タルブ戦時はゼロ戦パイロットとして参加。アルビオン解放戦争時は強襲部隊の一員としてハヴィランド宮殿を攻撃する。その後は発見された戦闘ヘリ「うみどり」修理のために地球へ一時帰還中。

山田明雄

中佐。義勇軍アルビオン方面軍所属。25歳。

元陸上自衛隊西部方面軍第一ヘリコプター隊所属の三尉。UH60Jの副操縦士。

輸送任務中に才吉らと共に日食によってハルケギニアに転移。アルビオン解放戦争時は強襲部隊の一員としてハヴィランド宮殿を攻撃する。その後はアルビオン方面軍の副司令官に就任したが、主にレシプロ・ヘリ共通パイロットとして活躍中。

後にハルケギニア王国連合空軍大佐となりヘリコプター・飛龍連合部隊の司令官を勤める。また、マチルダとは長い交際を経て結婚

する。

## キャラクター名鑑 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## キャラクター名鑑 2

### 原作キャラ

ラ・ヴァリエール公爵

トリステイン王国公爵 退役軍人 50代

ルイズの父親であり元軍人。厳しい人物とされているが、確かな戦略眼を持っている。トリステインの貴族の中では珍しく、義勇軍の実力を的確に評価している。またその装備の提供を早くから求め、最終的に自領地内でケンプ大隊を創設した。

カリヌ・デジレ

公爵夫人 退役軍人 元マンティコア隊隊長 『烈風カリン』 50代

ルイズの母親で、元軍人。『風』魔法の使い手で幾多もの伝説をもつ人物。現在もマンティコア隊の演習に同行したりする。しかしながら義勇軍との演習で1個分隊を全滅させた所を逆襲され、部隊全滅という初めての大敗北をする。その時は夫の公爵が驚くほど落ち込んだ。

エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール

ヴァリエール家長女 アカデミー 魔法研究所研究所員 28歳

ルイズの上の姉。義勇軍の後ろ盾で出来た科学研究所のために魔法研究所の予算が減らされたため、義勇軍には良い印象を抱いていなかった。その後才人に助けられたことで見直した。

カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォン  
ティーン

ヴァリエール家次女 25歳

病弱のため屋敷から出られなかったが、ルイズの結婚式には参加した。

アニエス・シュバリエ・ド・ミラン

トリスティン王国シュバリエ 王軍銃士隊隊長 王軍少佐 24歳

平民の女性のみで編成された銃士隊の若き隊長。剣の達人だが銃に関しては粗い面がある。義勇軍から武器を含む最新装備の供与を受け、訓練や共同での演習を繰り返している。真面目で厳しい人物だが、狙撃部隊の友澤中尉とは会ったばかりにお決まりの喧嘩をするため、部下たちに失笑される一面もある。

ルネ・フォンク

トリスティン王国王軍竜騎士隊小隊長 王軍中尉

下級貴族出身 18歳

王軍のエリート部隊の1つである竜騎士隊の小隊長。義勇軍との演習で連敗しながら抜本的な改革を推し進める上層部に失望し、仲間数名と共に独自に義勇軍と接触して研究会を開く。

## オリジナルキャラ

### エドワード・グルー

特務中佐。トリステイン方面軍練習機部隊司令官。50代前後。

元アメリカ海軍パイロット（大尉）。航空部隊エアグループ9の隊長。

1946年にバミューダを飛行中に部隊ごとトリステインの転移。以後エッセン村に住み着く。発見した才人に「アベンチャー」雷撃機を譲った後もエッセン村に住んでいたが、教官不足に悩む義勇軍からの要請に応じ交換条件付きで義勇軍へ入る。

### 神林学

少佐。トリステイン方面軍攻撃機部隊司令官。ドントレスのパイロット。

元帝国陸軍パイロット。ドイツ大使館付き武官として帰還中に呂501ごとトリステインに転移する。大の急降下爆撃信者。同時代出身の菅野と仲が良い。

### グエン・ファン

大尉。（3章時点）

元メルクワット王国空軍中尉。トリステイン方面軍戦闘機部隊所属  
才人らから見て平行世界の東南アジアにある小国の空軍パイロット



ト。フランス軍との戦闘中に愛機（疾風）ごとトリステインに転移。観閲式では菅野と模擬演習を繰り広げる。

カルロ

兵長。トリステイン方面軍戦闘機部隊所属。 17歳

才人の小隊の2番機担当。現段階では数少ない平民からの志願兵であるが、素質があったため、シエスタと同時期に正規パイロットになる。魔法学院上空の模擬戦においては空中装甲騎士団を才人と共に翻弄し、その腕を見せた。また才人の結婚式に招かれた数少ない人物。

柿崎信仁

少佐。アルビオン方面軍戦闘機部隊及び爆撃機部隊司令官。

名前だけの登場。経歴その他不明。

若井弘樹

少尉。36歳（3章時点）

アルビオン基地所属。

「にぎつ丸」と共に転移した元帝国陸軍の99式襲撃機パイロット。才人と共に転移してきたドーン・トレスのテストを行う。

白井譲治

大尉。ミライ基地整備班所属。（3章時点）

元「にぎつ丸」に乗船していた陸軍航空隊の整備兵。

マリー・スカルフキー

三等兵曹。アルビオン方面軍航空部隊所属。（3章時点）

転移してきた元ポーランド空軍パイロットを父に、没落貴族の末娘を母にもつ。そのため『土』系統の魔法を操れる。アルビオン戦役ではシェフィールドに強制されレコン・キスタ側につき、PZL 11に乗って才人達の乗るソードフィッシュと空中戦を行う。投降後、義勇軍に入隊してパイロットとして正規の教育を受ける。

天沢大輔

大尉。50代前後。

才助に世話になった元空自戦闘機パイロット。退役後義勇軍の輸送機部隊に入る。タバサの母親救出作戦を終えた才人達を地球へ輸送する。後のハルケギニア戦役の際には聖地搜索作戦にて物資、人員輸送を担当。

梶田幸一

中佐。トリステイン方面軍歩兵部隊司令官。40代前後。

元陸自一尉、普通科出身者。山田の知り合いでスカウトされ義勇軍入りする。歩兵部隊の編成を勤めるが訓練が間に合わずアルビオン戦役には未参加。以後、狙撃部隊の設立や銃士隊との合同訓練を主催するなど精力的に活動する。

長田道雄

中佐。トリスティン方面軍戦車部隊司令官。トリスティンのシュバリエ。

元帝国陸軍少尉、元戦車部隊隊員。

「にぎつ丸」に満州へ移動を兼ねて乗り込んでいたただ1人の戦車部隊関係者。アルビオン戦役には速成で教育した兵と共に車両部隊司令官として従軍。唯一の戦車戦を体験する。その後功績をたたえられシュバリエの称号を賜る。

大野太一

中佐。トリスティン方面軍砲兵部隊司令官  
元「にぎつ丸」乗り組みの砲兵。

義勇軍においてゲルマニア、ロマノフにおける大砲生産と配備によって砲兵部隊編成が可能となったため抜擢された。実地演習を重んじ、非常に教え方が上手い。そのため、部隊は短期間で戦闘可能なレベルまで練度を向上させている。

葛西豊

中佐。アルビオン方面軍歩兵分隊長。19歳。

ティファニアによって召還された平行世界の日本の抵抗組織「自由日本戦線」の闘士。ゲリラ戦等の少数の兵力を生かした戦法に精通し、義勇軍入隊後は治安維持活動で大いに活躍を見せる。召還主であるティファニアとは「友人以上恋人未満」な関係と評されるが、

一部からは既にカップルとされている。

友澤文夫（ジョン・ドー先生作の外伝の主人公）

中尉。トリステイン方面軍狙撃部隊（銃火器運用評価班）隊長。26歳

元陸自二曹。狙撃教程を経てレンジャー教練終了直前に傷害事件を起こし自衛隊を辞職。元上官である梶田の誘いで義勇軍ヘスカウトされる。自衛隊時代も屈指の腕前を持つ狙撃手であったが、一方で銃士隊のアニエス隊長を無駄におちよくるなど破天荒な部分が多い。凄まじく下戸。こうしたことから、（時々アニエスも一緒に）周りから呆れられることも多い。

ニコラ

中尉。義勇軍歩兵部隊所属。40代前後。

アルビオン戦役ではド・ヴィヌイ・ユ独立大隊第2中隊の隊長付軍曹として隊長であるギーシュをサポートする。傭兵としてはかなりの古強者で優秀。義勇軍入隊後も活躍し、順調に昇進する。最終階級は少将。

宮野信義

中尉。トリステイン方面軍歩兵部隊分隊長。37歳。

元陸自一等兵曹。

山田少佐が自衛隊時代の基礎教育過程の時に世話になった人物。ケンプ大隊の技術指導顧問を勤める。

ファンレイン

少尉。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の副官。40代前後。

水メイジの元傭兵。副官としては有能で、遙かに年下の豊に文句1つ言わず付き従い、隊をまとめる的確な助言をしている。

ワレン

兵曹長。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。

ビギン村での治安維持任務に派遣される。

エドワルド

一等兵曹。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。  
元傭兵。ビギン村における治安維持任務に派遣される。

セルジュ

二等兵曹。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。  
ビギン村における治安維持任務に派遣される。

ワトソン

二等兵曹。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。

ビギン村における治安維持任務に派遣される。

クラーク

三等兵曹。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。

ビギン村における治安維持任務に派遣される。

ウィルソン

兵長。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。

ビギン村における治安維持任務に派遣される。

ケイト

兵長。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。15歳

翼人と人間のハーフ。母親譲りの先住魔法の使い手。母親の復讐のためにとアルビオンのビギン村周辺で村人を襲っていたのだが葛西によって捕獲される。その後葛西に誘われて義勇軍に入隊し、葛西の指揮する歩兵分隊配置となる。銃の腕がピカイチで、魔法によって姿を消せるため、演習の際は常に相手を翻弄させている。

ヘイズ

一等兵。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。

志願兵。ビギン村での治安維持任務に派遣される。

トレバー

兵長。アルビオン方面軍歩兵部隊所属。葛西の部下。15歳

平民からの志願兵。極平凡な新兵であったが、経験を積ませるためにビギン村での治安維持任務派遣部隊に組み込まれる。豊と共にケイトを捕まえる。その後は彼女と組んで戦うことがある。

## キャラクター名鑑 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



アルビオン王室軍とレコン・キスタの戦いは、最終的にトリステインを味方につけた王室軍がたったの3日でレコン・キスタ首脳陣を逮捕し、アルビオン大陸を解放したことによる大逆転で終わった。結果アルビオン王室は新国王ウェールズを迎えて復興した。

だが、アルビオンという国全体を見ればただ王室の復興を喜んでいられる状態ではなかった。かつて同国の自慢であった空中艦隊はタルプの戦いとロサイス軍港への空襲でその8割が失われ、残る2割も大なり小なりの損傷を負っていた。幸いと言えたのは陸戦がほとんど起きなかったために、陸上戦力は大部分が無傷で残されていたことだろう。彼らの多くは復員すると新生アルビオンの国土再建に働くこととなる。

軍事以外の面でもそれなりの被害を被っていた。レコン・キスタ側につき積極的に働いた貴族の多くが肅清（逮捕・追放や爵位剥奪）になったことで、それまでの支配層が軒並み一掃されてしまった。これによってアルビオンを納める貴族の多くが、王室側についた者もしくは王室側につきはしなかったがレコン・キスタに積極的に協力しなかった者、そして平民層からの昇格者となった。

つまり支配層の大交代が起きたわけで、これによって内政面での混乱を来した。しかしながら、こちらも幸いなことにウェールズ国王が国の復興を重視し内政面での課題解決を優先したこと、さらに新たに支配層となった貴族らが積極的に協力したことで混乱は短期間で収まった。

アルビオンにおける変化はそれだけに留まらず、ハルケギニア各

国の中で魁となる政策が次々と打ち出された。立憲君主制導入による王権の制限、平民の地位向上、教育制度の改革等が挙げられる。

内政面での改革と共に軍事面での改革も当然行われた。まず同国の誇った空中艦隊は大幅な縮小が行われ、新規建造はストップし、また修理された艦艇の一部も戦時賠償としてトリステイン王国空軍に引き渡されている。その代わりとして、修理された各艦には『東方義勇軍』提供のロケット弾、新式大砲、機関銃等が搭載され戦闘力だけ見れば大幅に引きあがった。

また外洋諸島の発見によってアルビオン王国が初めての地上領地を得た結果、新たに海軍も新設されている。こちらにも『東方義勇軍』が支援している。

ちなみに全く関係ない話であるが、外洋諸島の中で最も大きい島でアルビオンとトリステインが共同統治したアイスランド島は、3年後にエルフとの融和がなった際に、アルビオン王家から分派される形で正式にアイスランド王国として独立している。

一方、陸軍にも改革が行われた。こちらにも大幅な戦力縮小を行いつつも、装備の革新による全体的な戦力向上が図られた。

アルビオン王立陸軍中將のホーキンスがロンディニウムのハウイランド宮殿に王命によって呼ばれたのは解放戦争が終わってからすぐのことであった。

内戦中、彼は反乱軍であるレコン・キスタの主力軍を率いて戦った。しかしながら、新たに空軍艦隊総司令官に就任したボーウッド

提督と同じく、レコン・キスタに絶対の忠誠を誓ったわけではなく、上級司令部の寝返りに付き合っただけと判断された。逆に指揮官として終戦時の混乱を収め、粛々と王室軍へ投降したことが評価された。そのため、責任を問われることもなく、軍上層部が一掃される中で再び王軍将官として返り咲いた。

ただし王軍中將となったものの、具体的な役職についての辞令は未だなく、もしかしたらこのまま軍縮の煽りを食って予備役に編入されるのではないかと考えていた。現に彼と同様に王軍に戻りはしたが、予備役編入を通達された人間が何人が存在した。

そんな時期の国王自らによる召喚だけに、彼は驚きつつも直ぐに宮殿へと向かった。

「王命によって参った陸軍のホーキンスだ。殿下、あ、いや陛下に取り次いで欲しい。」

宮殿で彼に対応した侍従はどうみても30に行くか行かないかの若い人物だった。恐らく前任者が内戦で死亡したために、急遽王室派の貴族から抜擢されたのだろう。

「ホーキンス將軍ですね。少々お待ちください。」

侍従は直ぐにウェールズ国王の執務室へと入った。そして数分ほどして出てきた。

「どうぞ、お入りください。」

ホーキンスは執務室へと通された。

「失礼いたします。」

「やあ將軍、わざわざ呼び出して済まなかったね。」

気軽に声を掛けてきた青年に向かって、ホーキンスは恭しく頭を下げた。ウェールズ・テューダ。若干24歳の国王である彼が、今のホーキンスが忠誠を誓う人間であった。

「いえ、どうせ今は暇ですから。」

「そうかね。こっちは国内の復興やら制度の改正やら色々やることが多くて、てんてこ舞だよ。よかつたら少し手伝ってくれないかな？」

「生憎と私は生粋の軍人なので、政治については足を引っ張るだけだと思います。」

ウェールズの冗談に、ホーキンスは笑みを浮かべながら返した。

「ハハハ・・・それもそうだね。まあ冗談はこれくらいにしよう。さてホーキンス將軍、今日君を呼んだのは他でもない。君に新たな部隊を率いて欲しいんだ。」

その言葉に、ホーキンスはキョトンとした。

「新たな部隊ですか？」

「意外そうだね。」

「はい、てつきり私は今日予備役に編入されるものとばかり思っていたので。」

すると、ウェールズはまたも笑って言った。

「そこらの平凡な軍人ならともかく、今のアルビオンに君のような優秀な軍人を予備役に編入させるだけの余裕なんてないよ。レコン・キスタ軍にいた時の君の際立った采配と終戦時の部下の掌握は、僕から見ても素晴らしいの一言に尽きる。だからこそ、今日こうして呼んだんだよ。」

ウェールズの言葉は誇張のない率直な物だった。実際ホーキンスの指揮は見事だった。後の歴史家や軍事史研究家の多くは、レコン・キスタの一時的な勝利は無能な上層部を持ちながらも、ホーキンスやボーウッドのような優秀な将官に恵まれたためと結論付けている。

「お褒めの言葉ありがとうございます。しかし、本当に私で宜しいのですか？一時的にせよ、敵についた男ですよ？」

「君はやっぱり中々の人間だね。そのことについては問題ない。僕も報告を読んで確認したが、あの時の君の行動は軍人としてやるべきことをやっただけに過ぎない。咎める理由なんてどこにもないよ。むしろ、降格人事と言われるんじゃないかと考えていたが、杞憂だったみたいだね。それに、レコン・キスタについた君だからこそ今回の人事を決めたんだ。」

「と言うと？」

「君は、『トリステイン空中義勇軍』を知っているね？」

「もちろんです。今のアルビオンに彼らの名を知らぬ者はおりませんまい。」

義勇軍の名前はアルビオンでも轟いていた。むしろ、トリステインより彼らの方が散々にやられた分だけ影響は大きいと言える。彼らはアルビオン自慢の空中艦隊を完膚なきまでに撃滅し、さらにたった3日でレコン・キスタ政府を瓦解に追い込んだのだ。

ホーキンス自身も身をもって彼らと戦ったわけではなかったが、伝聞情報や実際にロサイス軍港で残骸となった艦艇を見て、彼らの実力を思い知らされていた。

「その義勇軍、現在は名を改めて『東方義勇軍』となったんだが、その総司令官である平賀才吉氏に私はアルビオン公爵としての地位と、シティ・オブ・サウスゴータ周辺を領地として与えた。彼らは今回の戦争で積極的に我が国のために働いてくれたからね。」

「ほう。それで？」

「うむ、その彼らは他にも色々和我々へ協力してくれるそうだ。その中には武器の供与と、戦術の指導も入っている。」

武器の供与と聞いて、ホーキンスは驚いた。

「武器の供与ですと！？一体どのような！？」

「現在のところは機関銃に小銃や手榴弾等をはじめとする歩兵用兵器に限られる予定だ。彼らの使う飛行機や戦車といった類の兵器は彼ら自身使う分しかないそうだからね。それでも、それらは我々

が使っている物より遥かに高性能だ。それを装備した新しい部隊を是非とも君に指揮して欲しい。頼まれてくれないだろうか？」

義勇軍の中で、歩兵部隊は今回の戦争には出て来れなかった。しかしながら、飛行機や戦車といったハルケギニアの概念の外を行くような兵器を使っている彼らの武器なら、きっと素晴らしいに違いない。ホーキンスはそう考えた。

「わかりました。国王陛下自らのお願いとあつては断るわけには行きますまい。喜んで、その新部隊の指揮を執らせていただきます。」

「その返事を聞けて安心したよ。それじゃあよろしく頼むよ。正式な辞令はすぐに出ると思うから。」

こうして、アルビオンの軍事史にその名を残すライオン師団の歴史がスタートしたのであった。

同盟軍創設記 ライオン師団編 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



## 同盟軍創設記　ライオン師団編　2

王宮へ出向いてから数日後、ホーキンス將軍の元に正式な辞令が届いた。それは新設の陸軍部隊『ライオン師団』司令官に任ずるというものであった。

外の世界との交流が極めて限られてきたハルケギニアにおいて、ライオンというのはあまり馴染みのない動物である。それこそ、使い魔召喚で稀に召喚されるかされないかの存在だ。ホーキンスはそんな動物の名をどうして部隊名につけたのか首を傾げたが、ウェーブルズ国王の意志が反映されているそうなので、取り敢えず疑問１つ口にせず命令に従った。

ただし、部隊名こそ付いているが装備はまだ供与されておらず、さらにどのような人選をすれば良いのか分からない状況なので、取り敢えずホーキンスは副官としてやってきたライトラー大尉を連れて義勇軍基地が新設されたシティ・オブ・サウスゴータへと向かった。

この時期、解放戦争が終わってからまだ１ヶ月も経っていなかったが、アルビオン大陸での戦闘は実質３日間で終わり、また戦場になった地域も極限られていたため、普通の戦争で出るような大量の難民を出さずに済んだし、インフラの荒廃もほとんどなかった。だから領主の交代など政治面での混乱こそ起きたが、人々の日常生活に与えた影響は大したものではなかった。むしろ、トリステインとの交易が再開されたことで、一部で不足していた物資の不足が緩和されたぐらいだ。

ホーキンスたちは馬車で首都のロンディニウムからサウス・ゴー

タへと向かったが、車窓に見える街やそこに住む人々の姿は明るく、生き生きとしていた。

戦争に負けた側の軍にいたホーキンスとしては複雑な感情を持たざるを得ない光景であつたが、それもまた戦争というものだった。

長い道のりを進み、ようやくシティ・オブ・サウスゴータに到着したホーキンスは、ある建物の前に長蛇の列が出来ているのを目にした。普通だったら気にも留めず通り過ぎているところだったが、その列を整理している人間を見て彼は馬車を止めさせた。

「どうしました將軍？」

いきなり馬車を止めたホーキンスの行動に、ライトラーが怪訝な表情をして訪ねた。

「あの行列だよ。」

「あの行列がどうかしましたか？」

「よく見たまえ、列を整理している人間を。」

「はい！？・・・ああ。」

ライトラーはようやく気がついた。その列を整理している人間は純白の制服を着ていた。それはアルビオンではまだ珍しい『東方義勇軍』の第1種軍装だった。

「どうやら兵の募集をしているらしいな。」

「ええ。しかし行列が出来るほどは、一体どうしてでしょうね？」

ハルケギニアにおいては軍隊の募集は戦時に近い時期に行われる物だ。このような戦争が終わって直ぐにやるものではない。しかも例えしたとしても長蛇の列が出来るということはほとんどない。

「わからん。」

ホーキンスも首を傾げた。と、そこでホーキンスは義勇軍の兵士が何やらビラの様な物を配っているのに気がついた。

「ライトラー、すまないがああ兵士が配っている紙を一枚貰ってきてくれ。」

「了解です。」

ライトラーはホーキンスの命令を受けて、すぐに馬車を降りてその義勇軍兵士のそばへ行き、配っていたビラ一枚を貰って戻ってきた。

「こちらです將軍。」

「ありがとう。・・・ほお、これは随分と上質な紙を使っているな。それに印刷も綺麗だ。」

ホーキンスは神を直に触ってみて、その質の良さに驚かされた。また、その印刷も彼がこれまで見てきた物よりも鮮やかでハッキリしていた。

「確かに。これだけの物を惜しみもせず配っているということだけ

でも、『東方義勇軍』が並々ならぬ軍隊であることがわかります。」

ライトラーは随分と義勇軍のことを誉めた。ちなみに、彼らが見たビラは地球から持ち込まれた中古のコピー機と、格安値のコピー用紙を使って作られた物であった。

ホーキンスは紙や印刷の質にも驚かされたが、そのビラを読んで内容を確認するとさらに驚いた。

「ライトラー、これを見てくれ。『東方義勇軍』の新兵募集の内容だが、君はここに記されている待遇をどう思う？」

ホーキンスはビラをライトラーに見せる。

「はい？ちよつと見せて下さい・・・なんと、衣食住完全保証で最下級の兵士の月当たりの基本給が10エキューですと！？しかも平民・メイジ問わず平等待遇で功績によつては兵から士官への昇進も可能！？そんなバカな！！」

そこに記されている内容は、ハルケギニアの軍事常識から言ったら想像の埒外だった。最下級の兵士1人辺りの給料が平民1世帯辺りの月収とほぼ同じで、しかもメイジと平民を平等に扱うなど有り得ない。また平民出身の士官もいないことはないが、本当に極稀である。このようにチラシの謳い文句にするようなことではない。

「これが本当だったら人だかりが出来て当然だよ。最下級の兵士でさえこれなんだから、下士官・士官の給料はとてつもなく良いことになるぞ。しかもメイジと平等待遇で出世も可能とこれば、軍隊という危険な職場であることを差っ引いても平民には夢のような職場だ。」

「しかし、そんなこと可能なのでしょうか？メイジには魔法を使えるという平民にはない大きな強みがあります。平等待遇などとても信じられませんね。」

信じられないという表情をするライトラーに、ホーキンスは冷静に言った。

「ライトラー、彼らは噂によれば魔法を使っていない高性能な武器でアルビオン解放戦争を勝ちに導いたというぞ。おそらくそれらは魔法を使える・使えないを関係なくしてしまう兵器なんだろう。とにかく、これで義勇軍を訪ねる楽しみが増えたよ。」

さすがは優秀な将官だけあって、ホーキンスは見事に真実を見抜いていた。

それから数時間後、ようやくホーキンスとライトラーを乗せた馬車は郊外にある義勇軍基地へと到着した。この時点において、アルビオン方面軍のホープ基地は建設と部隊の進駐が始まったばかりであった。それでも、既に航空機や歩兵の一部はトリステインから転進して来ていた。

2人が着いた時も、丁度1機の「隼」戦闘機が訓練のために離陸していく所であった。

「あれが我が艦隊を撃滅したという鉄の竜ですか？」

ライトラーが空を仰ぎながら感嘆の声を上げた。

「そうみたいだな。彼らはあれを飛行機と呼んでいるそうだが、今

はあれをゆつくりと見物している時ではない。とにかく、彼らの司令官に会つとしよう。」

しかしながら、ホーキンスの意気込みは空売りとなる。2人は基地正門で歩哨をしていた兵士から、才吉が総司令部を兼ねた自分の屋敷に戻っていることを知らされた。

そのため2人は、再び馬車に乗り込んで移動する羽目に陥った。もつとも、携帯電話やインターネット等リアルタイムで情報を得られる手段が本当に極一部を除いて存在しないハルケギニアにおいては、このような出来事は日常茶飯事だ。

そして2人は気を取り直して、才吉の屋敷へとやって来た。

義勇軍のビラに書かれた待遇や給料に驚かされた2人であったが、自分の屋敷の半分を軍隊の司令部としていること、さらに残りの半分を孤児たちに開放していると聞いてさらに度肝を抜かれる想いとなった。

最初は2人とも冗談と思っていたが、屋敷の中を義勇軍の制服に身を包んだ人間と、明らかに孤児と思われる子供たちが動き回っている様子を直接見せられては信じざるを得なかった。

義勇軍もすごかったが、それを束ねる平賀才吉という男にも2人の常識の枠外にあるようだった。

2人は案内役の兵士に連れられて、ある部屋の前へとやってきた。その扉にはハルケギニア語と、彼らが知らない2種類の言語（日本語と英語で）が書かれたネームプレートがつけられていた。いずれも総司令官室を表す文字だ。

案内役の兵士がその扉をノックした。

「総司令、アルビオン王国軍ライオン師団司令官のホーキンス中将、ならびに副官のライトラー大尉をお連れしました。」

「入れ！」

中から男の声が返ってくると、兵士は扉を開けて2人に入るよう促した。

「どうぞ、お入りください。」

そして2人が部屋に入ると、その兵士は扉を閉めて出て行った。2人の目の前には応接用のソファがあり、その向こう側に大きな執務机があった。そこには老人が1人座っていた。

彼は2人が入ると立ち上がり、敬礼した。

「ようこそ、『東方義勇軍』アルビオン方面軍総司令部へ。義勇軍総司令官の平賀才吉中将です。」

同盟軍創設記 ライオン師団編 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



ホーキンス中将与ライトラー大尉は、目の前で立ち上がった老人に少しばかり驚いた。確かに顔や手等に深く皺が刻み込まれており、如何にも歳を食っているという感じがするのであるが、足腰はしっかりとしておりその動きからはとても報告されたような80代には見えなかった。さらに、その目に宿る強い意志も2人には感じられた。

「義勇軍の総司令官がこんな爺おやでさぞや驚かれるでしょ？」

まるで見透かされたように言われたため、ホーキンスは慌てて言い繕った。

「あ！？いえ、決してそんなことは。失礼しました。王立陸軍ライオン師団師団長となり、この度貴部隊の視察を命じられましたホーキンス中將です。」

「同じく、副官のライトラー大尉です。」

2人が敬礼すると、才吉の方も見事な敬礼をした。

「遠路はるばる御苦労様でした。」

才吉はホーキンスに向かって手を差し出し、握手をする。続いてライトラーとも。

「取り敢えずお座りください。直ぐに係りの者が何か飲み物を持ってくるでしょうから。」

3人はソファーへと腰掛けた。

「それにしても、総司令官室なのに随分と質素なんですね。」

部屋を見回したホーキンスがそんなことを言った。才吉のいる司令官室は来客用のソファーこそあるものの、その他は普通ならあるはずの絵画やらシャンデリアと言った調度品らしいものは一切見当たらない。才吉の使っている執務机や椅子も質素なものだ。

「ここは私室ではないので。戦いに必要な物はいりません。以前はそうした調度品もあったのですが、私がこの屋敷を貰い受けた際に全て売却しました。そんな物を私が後生大事にして持っているより、子供の教育に使ったほうが有益です。」

「子供の教育ですか？そう言えば、先ほども屋敷の中で小さな子供たちが走り回っている光景を見ましたが、孤児を引き取っているというのは本当なのですか？」

「ええ。あなた方からすれば無駄な行為と思われるかもしれませんが、子供は国の未来を担う者です。それは平民であろうがメイジであろうが同じでしょう。その子供たちに十分な学力を付けさせるのは、必須であると私は考えています。」

その言葉に、ホーキンスとライトラーは再び見合わせた。平民とメイジを区別なく扱うという思考に、2人は自分たちとこの人物は全く異なる思考を持っていると率直に感じたからだ。

「まあ、それについては今話すべきことではないでしょう。」

その時、扉がノックされた。

「失礼します。お茶をお持ちしました。」

若い女性の声だった。

「入ってくれ。」

才吉の返事を受け、扉を開けて入ってきたのはメイドだった。ただし、かなり若い。13〜14歳くらいの少女だった。彼女はかなりたどたどしい手つきでカップが乗った盆を机の上に置くと、一礼して出て行った。

「随分若いメイドでしたね。」

ライトラーが素直に感想を漏らした。

「若いですが、中々有能ですよ。実は彼女も引き取った孤児の1人なんです。ただ読み書きも出来て小さな子供と遊ぶ柄でもないし本人が言ったので、今は屋敷の仕事を手伝ってくれているんです。さ、冷めないうちにどうぞ。」

「ああ、それでは遠慮なく。うん!？」

ホーキンスはカップの中を満たしている液体を見て顔をしかめた。それはどう見ても、普段彼が飲みなれている紅茶の類ではなかった。どす黒く、どこか不気味な液体だった。

「これはコーヒーという、煎った豆から作った飲み物です。お好みでミルクか砂糖を入れますが、ブラックでもそれなりに行けますよ。」

「はあ、それではいただきます。」

ホーキンスは恐る恐るそれを口にしてみた。そして彼が真つ先に思い浮かべた感想は、おそらく最初に飲んだ人間なら誰もが思うであろう、苦いであつた。もっとも、その苦味もそれなりに味わいのある苦味とも感じていた。

「これはまた、なんとも変わった味ですね。」

「まあ、飲みなればおいしいものですよ。ああ、ライトラー大尉、苦いなら砂糖かミルクを入れたらどうか？」

才吉の言葉に、ホーキンスがライトラーに顔を向けると、彼は苦しそうな表情をしていた。どうやらブラックの苦さに耐えられなかったらしい。

そして彼は慌てて盆の上に載っていたミルクと砂糖を入れ始めた。そんな彼をみて、ホーキンスは苦笑してしまう。

同様に苦笑いしていた才吉が話題を本題へと移す。

「では、本題に移りましょう。あなた方の視察ですが、今日はもう遅いので明日の朝からでいかがでしょうか？宿についてはこの屋敷の客間を提供しますので、そこをお使いください。」

「ありがとうございます。」

「長旅でお疲れでしょう、今日はゆっくりお休みください。」

「そうさせていただきます。本当に感謝します。」

この日の会談はこれにて終了した。

翌朝、朝食を採ると2人は才吉に連れられて義勇軍の基地へと向かった。ここでライトラーは昨日見た飛行機に対して、大いに興味を持っていたようだが生憎と彼らが視察するべきは供与される兵器を使っている陸上部隊だ。そのため、ライトラーはどこか残念そうな表情を浮かべていた。もともと、才吉から時間があれば航空部隊も見せますよと言われて機嫌を直したが。

2人がまず見せられたのは、歩兵の小銃訓練だった。銃自体はハルケギニアにも存在しているので別段驚くようなことはしなかったが、しかしながら実際に撃っているところを見て、2人は仰天してしまった。

この世界にある銃は火縄銃と、マスケット銃が主流で、それらは射程も短く威力も乏しい。また、再装填に時間が掛かるのでメイジの魔法には全く及ばないという認識が多勢を占めていた。

しかしながら、義勇軍が使用しているT1型小銃はそれらとは全く次元の異なる銃だった。まず有効射程は火縄銃やマスケット銃、さらには魔法をもアウトレンジ可能な400mで、威力も試しに用意された『固定化』と『硬化』の魔法を掛けられた甲冑を楽々に撃ちぬいた。

さらに2人を感銘させたのが、銃の再装填には1回レバーを引く

のみであるという簡便さであつた。7発を打ち切つたら弾を入れなおす必要があるが、それでも火縄銃やマスケット銃の再装填の手に比べれば遥かに上を行つていた。

「いやあ、これは素晴らしい。なるほど、我々の魔法技術があなた方の武器に勝てなかつたのも頷けます。あんな高性能な銃見たこともない。」

ライトラーが素直に喜ぶ。また、ホーキンスも同様にT1小銃の高性能を誉める。

「すごい、これは銃の世界、いや戦争に革命を起こせますぞ。」

「お褒めの言葉恐縮です。しかしながら、当然欠点もあります。」

「欠点ですか？」

「そうです。まずこの銃は高性能である分生産が容易ではありません。最近是我々が持ち込んだ機械のお陰で生産ペースが上がりましたが、それでも有り余るほどに製造できるわけではないのです。また値段も当然高価となります。ですからあなた方への供与も、少しずつになる可能性があります。」

その言葉に、ホーキンスは頷いた。

「なるほど。しかし1000〜2000という大量の数がなくても100程度あるだけでもそれなりに変わります。それに兵に慣れさせるという点から見て、小数が供与されるだけでも助かります。」

「さすがはウェールズ陛下が推薦しただけのお人だ。目の付け所が違う。」

才吉は満足そうに頷いた。

「いえいえ。」

「それからもう一つ欠点を上げるとするなら、この銃は定期的なメンテナンスが必要です。部品点数も多いですから、兵たちは配られたマニュアルを見ながら整備する必要があります。ですから、まあ読めなくても出来なくはないでしょうが、文字はある程度読めることが望ましいのです。」

「なるほど。つまりはそれなりの能力が求められるわけですか・・・まさか、あなたが平民の教育を重視されるのは!？」

すると、慌てて才吉は言い返した。

「誤解しないでください!別に兵士を養成するためにそんなことを言っているわけではありません。銃の扱いを抜きにしても、文字を読めることは色々と役に立ちます。だからです。」

才吉が真面目に怒ったので、ホーキンスは別の意味で驚いてしまった。

「あ、すいません。今のは忘れて下さい。」

不用意な一言で義勇軍と王軍の軋轢を生んでは不味い。先ほど強力な兵器を見せられた後では尚更である。今後は言動に注意しようと思うホーキンスだった。

一方才吉の方もムキになって言い返したことに、若干罪悪を感じていた。

「あ、いや。こちらこそ熱くなっていました。さ、それでは次に行きましょう。今度は重機関銃の発射テストをするので。」

どこか釈然としない空気を残しつつ、3人は移動した。



同盟軍創設記 ライオン師団編 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

小銃に続いて、ホーキンス一行は12.7mm機銃の発射を見せられた。そして当然ここでも驚いた。まず彼らの発想からすれば自動的に弾が連続で発射されるなど有り得ない。しかもその弾の威力が半端ではないから余計驚くこととなる。

「なんという威力だ！これがあれば最早怖いもの無しだ！」

先ほどまでの暗い空気は吹き飛び、ホーキンスとライトラーは先ほどと同じくその高性能な武器に目を奪われていた。

「この銃は我々が使っている飛行機にも搭載されている物です。5ヶ月前のタルブにおける戦闘でも、多数の竜騎士を撃墜しておりまして、人間なら当たれば瞬時にバラバラになってしまうほどの威力があります。また厚さにもよりますが、建物の壁や艦船にだって打撃を与えることが可能です。」

「なんと。確かにこのような銃が使われては、さしもの竜騎士と言えど手も足も出ないでしょうな。それにしても恐ろしい。」

「もはやメイジであろうとなかろうと、これだけの威力を銃が持っているならばとても無視できなくなるでしょうね。本当に冗談抜きにして、戦争に革命を起こせますよ。」

ホーキンスもライトラーもただ感嘆の声を上げるしかなかった。

「その通りでしょうね。しかしながら、私が前いたトリステインの貴族は多くが威力を認めながら、メイジの優位を崩すという考えに

までは行き着きませんでしたよ。所詮平民の作った物に過ぎないという考えから抜け出せないよう。その点お2人は物分りがよろしいですね。」

才吉のセリフにホーキンスは苦笑した。

「まあ、あの国の貴族はプライドだけは高いですから。それに、我が国は身を持ってあなた方と戦って負けている。勝った側にいるよりも、負けた側にいる方がショックを受けるんでしょうね。伝統に拘るなどと言いますが、新しい物にも目を向けなければ、戦争では勝ち残れません。」

ホーキンスの言葉に、才吉は満足そうに頷いた。

「まことにその通りでしょうね。さて、そろそろお昼です。残りの武器の視察については午後にして、お昼にでもしませんか？」

「それではそうしましょう。」

昼食を摂るために、3人は一旦士官食堂へと移動した。もともと士官食堂と言ってもこの時期はまだ義勇軍の規模自体が小さかったので、食べるものはほとんど変わらなかった。

ホーキンスとライトラーに用意されたのも特別に用意された物ではなく、普通の食事だった。もともと、この点においては軍人である2人は何も言わなかった。

しかし、出された食事を見て2人はまたも仰天してしまった。パ

ンとサラダ、これは良い。こんな物はハルケギニアの人間なら良く食べる物だ。ところが、メインであるカレーが問題であった。

別に色が嫌だとか、中に入っている具に問題があるとかそういう事ではなく、2人が驚いたのはカレーが大量のスパイスを使っている料理であるということだった。

実はこの世界において胡椒をはじめとする香辛料は、地球ではあった大航海時代が存在しなかったことによって、時折『東方』から流れてくるぐらいでしか見ることが出来ない存在だった。同様に地球で言う南米産の植物等もハルケギニアにおいては存在しない、もしくは存在しても極端に貴重という例が多々あった。

そんな物は軍の上級階級者であるホーキンスであっても1年に1度見るか見ないかだ。ふんだんに使える存在があるとすれば、恐らく王室の宮廷料理ぐらいだ。

そのため、ハルケギニア人である2人は大いに驚いたわけだ。もっとも、才吉はすでにトリストインでそのような光景は何度も見ているので驚きはしない。

ちなみに、こうした香辛料は量が少なくても高額で取引されることから、後に産地との貿易が始まるまで『東方義勇軍』の貴重な資金源の一つとなる。地球ではありふれた物で安くて手に入れられる物であるから、義勇軍関係者にとってはそれこそ笑いが止まらないほど儲けられる商品だった。

「どうです？おいしいですか？」

「.....」

才吉が気軽にそんなことを聞くが、2人は有り得ない料理の出現に言葉を失っていた。

才吉からすればカレーなど一般的に良く食べられる庶民の料理でしかなく、スタンダードな味などもはや飽きてしまった代物である。だからハルケギニア人には有り得ない料理であるということを頭ではわかっていても、やっぱり地球の感覚が強く出てしまうのである。特に私的領域に近いこのような場では。

ちなみに、ライスではなくパンが出たのは米の生産が始まったばかりであったからだ。米が本格的に出回るのには、半年ほど待たなければならなかった。

昼食が終わるとホーキンスとライトラーの2人は、今度は迫撃砲や無反動砲の発射を見せられた。もちろんこれにも2人は大いに驚いたわけであるが、ここに来てライトラーがあることに気づいた。

「そういえば、義勇軍の将兵は兵から士官に至るまで、皆同じ服を着ていますね。」

この時期義勇軍で正式採用され、用いられていた制服は第1種と第3種の2種類である。第2種の方はデザインこそ決まっていたがまだ出回っておらず、逆に歩兵部隊が既に編成に入っていたため、迷彩服で戦闘服たる第3種軍装の方が先に出回っていた。

だから訓練中の兵士は第3種軍装を、またその他の課業に就いている兵士たちは第1種軍装を着込んでいた。それらは兵や士官と言

った階級によるデザインの差が全くなく、唯一階級章の違いのみが識別ポイントであった。

しかし制服のデザインを統一させるという概念はハルケギニアでは魔法学院等極一部を除いてなかった。軍隊でも統一した服を使っていないが、それは階級や部隊によって差が出る。傭兵に至ってはそれぞれがバラバラの服を着ているし、その服も戦場で自分の功績が引き立つように、目立つ服が多かった。

また統一した服を調達するのも難しいと言える面がある。何せ大量生産という概念が導入されたばかりでは、服も手工業で作られているのだ。量産等出来ないし、価格も上がる。

「そうです。将官から兵士に至るまで服を揃えておけば敵からは見分けがつかないでしょう？そうすれば指揮官など指揮系統が潰される心配も減じるというわけです。また、服の生産に掛かるコストも下げられるというのも大きいですがね。」

するとホーキンスが笑った。

「確かに、同じ服ばかりで良ければ服屋も作るのが楽になるでしょうな。それに戦場で目立たなくするというのも領けます。魔法や剣で1対1で戦うならそれでも良いでしょうが、あなた方が使うような長射程の兵器では目立たないほうが都合でしょうに。そうすると、我が師団も制服の統一をする必要がありますな。」

「それが良いでしょうね。なんならデザインや生産は我々が行いましょうか？」

才吉の申し出に対して、ホーキンスは即答を避けた。

「それについては、この場では直ぐに決められません。また細かく詰めていくことでしょうね。」

この『ライオン師団』の制服については、後の協議によってデザインこそ才吉が見せた軍服の本を見てホーキンスが決定したが、生産は義勇軍請負で地球の衣料メーカーで一括発注されている。また『ライオン師団』の制服は第二次大戦期のアメリカ陸軍の物を参考にしたものとなる。

その後ホーキンスとライトラーは、補給部隊の視察や車両の簡単な見学（車両についてはこの時点で供与の予定無し。）さらに無線機やヘルメットと言った間接的に重要な物を見せられ説明を受けた。これらについても2人はしきりに感心し、その重要性を理解していた。

3日後、協議の末最終的な協定が才吉とホーキンスの間で結ばれた。その内容は以下の通り。

- 1 『東方義勇軍』はアルビオン王国軍に対して武器を供与す。供与開始は本協定締結後1カ月後に開始する。
- 2 『東方義勇軍』はアルビオン王国軍に対して戦術・武器使用に關しての指導をする。開始時期は本協定締結後1カ月後に開始する。またその指導は指定期間（半年間）の半分を義勇軍基地、残り半분을王室軍基地で行うものとする。
- 3 アルビオン王国軍は上記2項目に対する対価を支払う。
- 4 部隊の規範・制服は『東方義勇軍』の協力の下に制定する。
- 5 指導する兵員の人数は歩兵・補給部隊併せて180名とする。

この内4、5はホーキンスの持つ裁量内ではないとして、一旦王

都のウェールズにお伺いを立てた後に決定されている。なお、人数が180名とうと少々少ないように見えるが、この時点においては武器の値段が高いこと、また義勇軍側が受け入れられる人数に制限があったことから決定されている。

協定締結の後、ホーキンスはしばらくの間シティ・オブ・サウスゴータに留まって才吉らと軍の規範や制服等に関しての協議をした。そしてそれが終わるとロンドンディニウムへ戻って部隊の編成へと着手した。



同盟軍創設記 ライオン師団編 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに香辛料の話はジョン・ドー先生の外伝を元に行っています。というかもはや模倣に近い状態となっています。ありがとうございます。そしてすみませんジョン・ドー先生。

ライオン師団の人選は扱う武器の特性から銃を使ったことがある者や、手先が器用な者、また文字を読める者といったことを条件にして集められた。もともと、内戦が終わって大幅な兵力削減を行っている中で、こうした人材を選び出すことは困難ではないが、簡単なことでもなかった。

上記した条件のいずれもが、人材としては優秀な者であることを指すからだ。そのため、各部隊から抽出しようにも、各々の部隊司令官たちが渋ったのである。もちろん国王自ら挺入れている事象であるから、ホーキンス將軍もそれを盾にして強権を発動させることだって出来なくはなかった。

しかしながらようやく国王として国を建て直し始めたばかりのウエルズにとって、そのような余計な恨みを買うかもしれない行為は避けたいところであつたし、ホーキンスも理解していた。

そのためホーキンスは各地の部隊を回って兵の抽出を説得すると共に、新たな新兵獲得（平民からの志願者や傭兵の取り込み）を行った。ちなみにライオン師団でも義勇軍と同じ平民とメイジの待遇は平等という隊規則が定められた。

その結果1ヵ月後には予定していた180名が一応集まり、訓練が出来るようになった。早速ホーキンスはそのことをシテイ・オブ・サウスゴータの才吉へ伝え、受け入れ許可を願った。

そして数日後には才吉から許可を示す返事が来た。さらには隊員たちに着せる新しい制服（上下と靴）を送ってきた。

ホーキンスは才吉の配慮に感謝しながら、早速新しい制服に着替えると隊員たちを集めて演説を行った。

「これより我々はシティ・オブ・サウスゴータの『東方義勇軍』基地へと移動する。移動後は3ヶ月間、彼らの指導の下新型兵器や新戦術について学ぶ予定だ。諸君らも知つてのとおり、義勇軍は先の解放戦争において大いに活躍している。そしてその武器は強力であり、戦術もこれまでにない物ばかりだ。それらを学べるというのは、一重に我々が国王陛下直々に作られた名誉ある部隊だからである。諸君らはその名誉ある部隊の一員という自覚を持って行動して欲しい。堅苦しい内容ではあるが、よろしく頼むぞ。」

「全員、司令官閣下に向かって敬礼！」

副官であるライトラーは声を張り上げる。隊員たちは一斉にホーキンスに向かって敬礼した。無論ホーキンスも答礼した。

その後ロンディニウムを出発した部隊は馬車と徒歩でシティ・オブ・サウスゴータへ出発した。街道を進んでいく彼らは武装こそ旧来の物であったが、その斬新な制服は市民の興味を誘うのに充分であった。

後にライオン師団が拡張することになる際、その志願者が当初に比べて急増することとなるのだが、その原因にはこの時の行軍があったとも言われている。

約2日間の行軍の後、ライオン師団の兵士たちは義勇軍基地へと入場した。彼らは1日の休みの後、さつそく持ってきた旧式の装備を置き、代わりに義勇軍から提供されたT1型ライフルや重機関銃、

拳銃、手榴弾、音響閃光弾といった新型武器を供与されて、義勇軍の教官の下訓練を始めている。

さすがにホーキンスたちが苦勞して集めた人間だけあつて、ライオン師団の兵士たちは最初こそ慣れない手つきであつたが、数日後には銃の整備方法をマスターし単独で撃てるようになった。

また重機関銃などについても、最初はその威力にただただ驚いて感心しているだけであつたが、義勇軍から派遣された教官から注意点や欠点を聞き、使いこなせるよう努力した。

ここで役にたったのはやはり、師団の兵士たちがそれなりの知識を持つていることで、義勇軍の新兵のように字を教える所から始めるといような苦勞もなく、また各種武器の仕組みを説明されれば理解出来た。

そんな中で、他の兵士らに混じつてホーキンスも小銃や拳銃の扱い方を学んでいた。本来魔法を使える貴族である彼が銃を学ぶ等、アルビオン（ハルケギニア）では異例中の異例である。

しかしながら、彼はそうした兵器の有効性をしっかりと認識していたし、また自分自身使えなければ意味がないこともしっかりとわかつていた。

ちなみに余談であるが、『東方義勇軍』によつて新型（長射程・連射可）の銃がハルケギニアにもたらされたため、貴族は魔法で戦い魔法で死ぬことが名誉であるという常識が、戦争を通したこともあり短期間で消えてしまう。逆に銃を扱えることがメイジ・平民問わずの一種のステータスになる。

特に多大な影響を与えたのが、貴族の子息で作られたトリステイン王国の『水霊騎士隊』で、隊長のギーシュ大佐は軍人の家系であるだけに強力かつ見栄えの良い銃を好んだ。またライオン師団やケンプ大隊、少数派であるが義勇軍に所属していた貴族も少なからず影響を与えたことも見逃せない。

#### 閑話休題。

ホーキンスは挨拶にもあったとおり、戦術の勉強も重視した。その姿勢は貪欲であり、アルビオン方面軍の人間たちも舌を巻くほどであった。言い換えれば、それだけ彼が義勇軍から受けたショックが大きかったことを物語っている。

これに対して才吉も、地球からとりよせた軍事に関する書物の翻訳を渡したり、時には地球製の映画や歴史番組を見せたりして積極手に応えている。

そうした戦闘に関する事柄に加えて、重視されたのが補給部隊の教育であった。義勇軍が行うような近代的な戦闘では、とにかく弾薬や燃料を大量に消費する。そのため補給の確保は重要であった。また十分な弾薬や食料があるということは、前線の兵士たちを安心させる。これは実際の歴史が証明している。

まさかどこその帝国軍のように、「物資の不足は精神力で補え！」等と言っていたら勝てる物も勝てなくなってしまう。

一応ハルケギニアにも輜重隊はあり、補給の概念があるにはある。しかしながら、その規模は桁違いであるから、義勇軍でもその事をみっちりと教え込んだ。

また義勇軍では炊事を補給隊に一任しており、前線の近くに炊具を持って進出し、戦闘部隊用に温かい料理を出すことを基本としている。だから補給部隊担当となった兵士たちは料理等に関してもみっちり教え込まれた。

勿論これは本家の義勇軍でもそうであるし、ラ・ヴァリエール公爵領で編成されたケンプ大隊でもそうであった。

加えてハルケギニア戦役が始まった後になるが、義勇軍で使用するトラックやジープが充足し、ケンプ大隊やライオン師団にも供与されるようになると、それまで馬車を使っていた彼らは再びみっちりと運転講習を義勇軍兵士から受けることとなる。

またホーキンスは訓練が進むと積極的に義勇軍の歩兵隊と共同訓練を実施した。少しでも実戦に近い状態を兵たちに体験してもらうためであった。時には政府（この時点では既に内閣が発足していた）に要請して、トリステインへ渡り義勇軍トリステイン方面軍や銃士隊と戦うこともした。またその他のアルビオン王国軍との訓練もしている。

このような努力が実を結び、訓練期間が終了する頃にはケンプ大隊は義勇軍に勝るとも劣らない精強な部隊に仕上がっていた。

もともとホーキンスの仕事がそれで終わったわけではなかった。彼にはさらなる部隊の拡張や、今後も義勇軍との密接な関係を維持しつつ様々な新機軸を導入する必要があった。

部隊をロンディニウムに引き上げる前日の夜、ホーキンスは才吉と2人だけの時間を持った。

「平賀將軍、あなた方の協力のおかげで我がライオン師団の体裁はとりあえず整いました。自分としては義勇軍には及びませんが、このアルビオンで指折りの軍隊に仕上げたと考えています。」

「それについては、私にも異論はありません。ライオン師団の将兵は非常に短時間で我々の装備を自分の物とし、驚異的な成長を見せてくれました。最初はこちらも指導教官が足りなかったので、内心冷や冷やしていたのですが。それも彼らが努力し、弛まぬ向上心を持っていたおかげで助かりました。」

「お褒めの言葉ありがとうございます。ところで、一応部隊の編成は整いましたがいずれ私はこの部隊を名前どおりの師団にまで成長させるつもりです。あなた方が持っている新式の大砲や、自動車もいずれは導入したいと考えております。つきましては、今後も密接な関係を我々は結び続ける必要があります。」

その言葉に、才吉も頷いた。

「無論です。同じアルビオンを守るものとしてそれは当然と言えることでしょう。さすがに無限大とは言えませんが、出来る限りで今後とも我々はあなた方の支援をさせてもらうつもりです。」

「よろしく願います。」

2人は再び握手を行い、両部隊の絆を確認した。

この後ライオン師団はハルケギニア戦役までに歩兵420名、補給兵80名の500名まで拡大され、迫撃砲や無反動砲と言った兵器も供与されることとなる。

そして開戦2カ月後、彼らは艦隊を除くハルケギニア戦役唯一のアルビオン外征部隊として出兵することとなる。



同盟軍創設記 ライオン師団編 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

### キャラクター名鑑 3

#### 義勇軍軍人

篠塚敦（ジョン・ドー先生の外伝のキャラクター）

兵曹長。トリステイン方面軍狙撃部隊所属。友澤の副官。29歳。

元帝国陸軍兵長で「にぎつ丸」乗組員。

真面目な軍人タイプ。隊長（友澤）に振り回されがち。そのため同じく隊長に振り回されている銃士隊のミシェル副隊長と共に溜息を吐くこともしばしばある。

ストリート（ジョン・ドー先生の外伝のキャラクター）

一等兵曹。トリステイン方面軍狙撃部隊所属。27歳。

10年近い経験を持つ元傭兵。アルビオン大陸で義勇軍の活躍を聞きつけ入隊。篠塚とは対照的で規律などにはいい加減。しかし銃の腕は非常に良い。

マイラベル（ジョン・ドー先生の外伝のキャラクター）

二等兵曹。トリステイン方面軍狙撃部隊所属。19歳。

元トリステイン王国軍銃士隊所属。

剣については下手だが銃の取り扱いには銃士隊随一の腕前を持っていたため、銃士隊から転属してきた。狙撃部隊では数少ない女性兵で、普段はおっとりした性格。先祖が地球からの転移者。

バスキア（ジョン・ドー先生の外伝のキャラクター）

一等兵。トリスティン方面軍狙撃部隊所属。20歳。

『土』メイジとしてガソリン練金作業に携わっていたが義勇軍に残り戦闘部隊へ転属。絵画が趣味。

マックス（マックスウェル）（ジョン・ドー先生の外伝のキャラクター）

一等兵。トリスティン方面軍狙撃部隊所属。18歳。

アルビオンの没落貴族の次男坊。『風』メイジ。レコン・キスタ侵攻時に父を亡くすがトリスティンに兄と共にトリスティン亡命し、兄はアルビオン解放軍へ、彼自身は義勇軍に入隊する。なお義勇軍に在る間は貴族としての名は捨てている。鷹を『使い魔』としている。

ハッチャー（ジョン・ドー先生の外伝のキャラクター）

二等兵。トリスティン方面軍狙撃部隊所属。15歳（自称）

平民からの志願兵。狙撃部隊でもっとも若い、獵師である父直伝の狙撃と潜伏術に関しては天賦の才能を持つ。普段は無口で必要以外のことは喋らない。

大久保久作（ジョン・ドー先生の外伝のキャラクター。本編での登場も多数）

特務少佐。トリスティン方面軍兵器保管庫・資料室責任者。新型銃開発班長。戦務参謀。61歳。

元「にぎつ」丸乗組員。転移後オーク鬼との戦闘中に負傷し杖なしでは歩けなくなるが、才能を買われ後方担当に回る。

旧日本軍では四式自動小銃の制作計画に関わっていたほどの銃火器取り扱いのスペシャリスト。そのため後に新型銃開発班長となり、

さらに人手不足のため戦務参謀も任される。また自動小銃導入推進論者。

性格はかなり厳しい。

熊崎卓也

少佐。アルビオン方面軍歩兵部隊司令官。  
名前のみの登場。

久保田純

大尉。アルビオン方面軍砲兵部隊司令官。  
名前のみの登場。

樋口喜一郎

大尉。アルビオン方面軍戦車部隊司令官。  
名前のみの登場。

山下俊介

中尉。トリステイン方面軍歩兵部隊第一分隊隊長。  
ニコラ中尉とともに治安維持任務に出動した。名前のみの登場。

ローレンス

少尉。トリステイン方面軍歩兵部隊第三分隊隊長。  
ニコラ中尉とともに治安維持任務に出動した。名前のみの登場。

内田智幸

少尉。トリスティン方面軍歩兵部隊第五分隊隊長。

ニコラ中尉とともに治安維持任務に出動した。名前のみの登場。

ケインズ（第2部時点）

義勇軍兵士。

アルビオン戦役で急遽募集された戦車部隊所属兵。2号車担当

コリン（第2部時点）

義勇軍兵士。15歳

アルビオン戦役で急遽募集された戦車隊所属兵。長田が乗車する3式中戦車の装填手をつとめる

マルシエ（第3部時点）

兵長。

観閲式の際にガリア王ジョゼフを案内した兵士。

水上部隊

小林武

中将。水上部隊司令官。55歳

元海上自衛隊朝鮮派遣艦隊司令、海将補。

平行世界の日本から転移した自衛隊艦隊司令官。転移して間もないためハルケギニアの環境にとまどいがちである。トリスティン・ロマノフ・外洋諸島間の船団護衛任務に従事。ハルケギニア戦役で

は、トリステイン・アルビオン・ロマノフ海軍などの艦艇を併せた連合艦隊司令官。

安田仁

大佐。第一航空戦隊司令官。シュバリエ。強襲揚陸艦「にぎつ丸」船長。50歳

アルビオン戦役では海上部隊司令官として「にぎつ丸」にて指揮をとる。以後は、外洋調査やロマニア公国使節団輸送などの任務に就く。民間出身者。

乗田貞敏

中佐。第一潜水戦隊司令官。

元大日本帝国海軍大尉。「呂501」艦長。

トリステイン転移後は辺境のアントン島にて隠遁生活を送るが、才人に説得され部下と共に義勇軍へ協力。アルビオン戦役時は潜水艦隊指揮官となり指揮を執る。その後ガリアへの工作員回収任務等に就く。

中井平治（4部時点）

中尉。第一打撃戦隊巡洋艦「おおよど」乗組員。  
才人の案内役を務める

有紀守

中尉。第一航空戦隊所属。

「にぎつ丸」飛行隊長で隼のパイロット。

板東

大尉。第一航空戦隊所属。

「にぎつ丸」航海長

大島

帝国陸軍大尉、「にぎつ丸」輸送指揮官。

大連への輸送任務中にトリスティンに転移する。その後辺境で部下と共に隠遁生活を送るが、才人に説得され義勇軍へ協力する。アルビオン戦役時にはにぎつ丸から戦闘指揮を執る。

中西圭太

帝国陸軍伍長。「にぎつ丸」乗組員（第2部時点）  
オーク鬼に襲われていた才人とルイズを助ける。

郡山

帝国陸軍兵長。「にぎつ丸」乗組員（第2部時点）  
中西と共に才人とルイズを助ける。

佐伯

海上自衛隊一佐。

巡洋艦「おおよど」艦長。（第3部時点）  
「にぎつ丸」での会議に参加した。

内海

海上自衛隊二佐。

「おおよど」航海幕僚。（第3部時点）

「にぎつ丸」での会議に参加した。

清水

海上自衛隊二佐。（第3部時点）

「おおよど」通信幕僚。

「にぎつ丸」での会議に参加した。

その他関係者

ミシエル

王軍大尉。銃士隊副隊長

アニエスを支える銃士隊副隊長であるが、友澤とアニエスの喧嘩の際は狙撃部隊の篠塚とともに後ろから羽交い絞めにして引き離すのが恒例となっており、篠塚とともに溜息を吐く場面がある。

キャサリン

王軍少尉

義勇軍との演習時に斥候隊隊長を務めるが、ケイト兵長による待ち伏せ攻撃により戦死判定を受けた。アニエスが言うには有能らしい。

マーリン

王軍一等兵

キャサリンと共に斥候隊を務め、唯一被弾せずに戻りアニエスに



状況を報告した。ただし被弾しなかったのは、敵部隊の恐怖を増させるために生存者を残すという葛西の謀略であった。

平賀瑞枝

才人の母。 39歳

トリステイン転移後は魔法学院での厨房の手伝い、続いてトリスタニア、後にミライにて料理店を経営。日本の食材を使った料理で人気を得る。直接の出番がほとんどない。

平賀才蔵

才人の祖父。 元大学教授。 63歳

地球にて義勇軍の支援にあたる。ウェールズとアンリエッタが訪問した際は東京を案内した。

平賀礼子

才人の祖母。 62歳

夫の才蔵と共に地球にて義勇軍の支援にあたる。

平賀智江

才人の姉。 20歳

アメリカに留学中だったが一時帰国。日本へ戻ってきた才人たちの案内を買って出る。

横山

引退した医師。 60代

地球にてタバサの母親の治療を行う。才蔵のすすめでトリステインに赴き、医療講習を行った経歴を持つ。その後はミライ病院の院長。

横山ストーク

横山医師の息子。日系ハーフ。18歳

アメリカの大学を飛び級で卒業し、医師資格を取得。父と共にタバサの母親の治療を行う。またタバサの地球における生活をサポートした。

その後はミライ病院の医師。

亀山仙太郎

義勇軍技術少将。62歳

元大学教授で広島在住。才蔵の知り合い。物理学で平行世界などの研究を行っていたが、ハルケギニアの移転現象を究明するため招かれる。魔法と転移現象の関係を指摘し、『聖地』の研究を提案する。

交渉などが非常に上手いため、ロマノフ公国使節団に参加するなど精力的活動を行う。

太田譲

桜花飛行機社長。56歳

才蔵の紹介で義勇軍に関わり航空機製造を引き受けることになる。北海道の工場のみならず、ラ・ロシェールやアルピオンにもノックダウン生産や新規生産可能な工場を建設している。ハルケギニア戦役後は多数の航空機を生産し、ハルケギニアの工業を躍進させた功労を認められてハルケギニア王国連合政府からダイヤモンド工業勲

章を授与される。

佐々木圭介

義勇軍技術少佐。 30歳

桜花飛行機からの出向者。腕は優秀だが病弱の為桜花飛行機に入社。義勇軍との契約後は航空機開発の中核を担う。OS2、OS3型戦闘機の主任設計士。

中島栄子

桜花飛行機のエンジニア。 28歳

43式2型艦上戦闘機「バッファロー」の製造計画に携わる。

佐々木武雄

シエスタの曾祖父。故人、享年92歳。

元大日本帝国海軍中尉。第302航空隊（厚木航空隊）所属の少尉。才吉の戦友。

1945年8月15日の空戦の最中に才吉と共にトリスティンへ転移。日蝕が終わったことで日本へ帰還できずにタルブ村にて生涯を過ごす。

キャラクター名鑑 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## タバサの地球生活録 上（前書き）

読者の方からの意見を受けて、タバサが地球にいた時の話を書きました。ただし、今後の展開を考えていくのに時間が掛かりそうなので、更新間隔が長くなると思います。よろしくお願いします。

## タバサの地球生活録 上

ハルケギニア戦役が起こる数ヶ月前、タバサことシャルロット・エレーヌ・オルレアンはハルケギニアから見て異世界である地球において、心を取り戻すことに成功した母親とともにいた。彼女は長い間家から出なかったために体力が衰えていた母親のリハビリを手伝いつつ、ガリア（正確にはジョゼフ王）の影に脅えずに済む生活を送ることが可能となった。

彼女は異世界に脱出することで、久方ぶりに心からの安寧の時を得たのである。その一方で、皮肉にも平和であれば逆に時間を持て余してしまう。異世界人であるから学校に行くわけでもないし、生活費も地球での保護を任された横山医師ら（義勇軍）が工面してくれているらしいから働く必要もない。

そうかと言って母親にずっと付き添っているわけにもいかない。未だ体調が万全ではないし、第一たえそうでなくともタバサ自身もはや小さな子供ではないのだ。

もちろん、タバサの本心は母親にもっと甘えたいことであつたかもしれないが、彼女はその感情を覆い隠すことにした。いつまでも母親に甘えるような感情を持つてはいけないと、彼女自身考えたからだ。

またタバサの母も異世界人であるからこの世界の文化などに大いに興味があるらしく、寝ながらではあるが執事のベルスランと共に横山医師から色々話を聞いていた。また横山医師の方もハルケギニアのことを色々と聞いていた。そのような大人が会話している場にはどうしても出にくかった。

そういうわけで、タバサは自分自身で何かすることを見つけないとを決めた。

そんな決断をして彼女が空いた時間にしたのは、やはりと言おうか趣味の読書である。もつとも、ここは日本であるから本も日本語か、少なくともハルケギニア語ではない言語で書かれている。そのため彼女は文字を習うことから始める必要があった。

日本語というのは世界にもあまり類がない漢字と仮名2種類の計3種類の文字を使った言語である。そのため外国人には覚えにくいとされる。仮名は覚えられても、漢字はダメという場合もある。

彼女に求められて先生役となった横山医師の息子であるストークも、そのことを指摘したわけであるが、彼女は素っ気無く「構わない。がんばる。」と言っただけだった。

とにかくそう言う訳で、ストークはタバサにまず平仮名と片仮名を教え、続いて簡単な漢字を教えてみた。ところが、ここで彼女はその類稀な能力を発揮した。なんとわずか数時間でそれらを全てマスターしてしまったのである。

これにはストークも、ただただ唖然とするしかなかった。しかもそれをタバサが全く誇らないのにも感心した。そしてそれと同時に、こんなに優秀なら嫉妬の1つや2つも買うんだろうなとも思った。

そしてその日の内に、タバサはストークから練習用にと渡された子供用の童話の全てを読みきってしまった。さらに翌日以降も凄まじいスピードで文字（漢字）を覚えていき、わずか数日で普通の日本人と同レベルの所まで上達した。

そのため今度はタバサが暇な時に、母親に対して日本語を教えるという珍現象まで発生することとなった。

タバサの凄い所はそれだけではなく、なんと2週間もしないうちに病院内におかれていた本の多くに目を通してしまっていた。その中には医学書も多くあり、これによって彼女は医学に対する知識がある程度身に付け、後にミライ病院で看護師として働くこととなるのだが、それについてはここでは関係がないので割愛する。

とにかく、読む本がなくなってしまった。そうになると、タバサとしては再び暇になってしまう。そこで、彼女は再び自分の世話役になっているストークを頼った。

「え！？本が欲しいんですか？」

父親の手伝いを終え、休んでいたストークにタバサは声を掛けた。その返答が今の言葉で、タバサはそれに対して小さく頷いた。ちなみにストークのほうがタバサよりも年上であるが、一応彼女が姫様ということでストークは敬語を使っている。

「ええと、どんな本が欲しいんですか？」

「何でも良い。ただ直ぐに読んじやうから出来るだけ沢山欲しい。」

その言葉に、ストークは最初図書館に連れて行くことを考えた。図書館になら様々なジャンルの本が沢山あるし、それにインターネッットだって出来る。



しかし、すぐに彼は問題があることに気づいた。図書館を使用するには利用者カードを作る必要がある。当然名前を書かなければいけないし、住所も書かなければいけない。

それらを書くこと自体はタバサが既に日本語を書けることから大丈夫だろう。しかし、タバサは異世界人である。少なくとも外見からみて外国人と思われる。そんな人間が図書館という公共の機関の書類にサインすることは危険かもしれない。警察とか出入国管理局が嗅ぎ付けてくるかもしれない。

図書館で読むだけなら別にその必要もないだろうが、そうするとタバサのことであるから朝から晩まで図書館にいる気だろう。それでは保護者であるストークの行動が大幅に制限されてしまう。

やっぱり家に持ち帰れる方が何かと都合が良い。そうになると、本屋に連れて行くのがもちろんである。しかし、タバサのことである。沢山の本を買い込むであろうから、予算がすごいことになるだろう。義勇軍からそれなりの額を渡されているとはいえ、出来るだけ出費は抑えておきたい。

そこでストークはある場所を思い浮かべた。

「それなら散策ついでに、ブック フでも行きますか。」

「ブック オフ？」

初めて聞く単語に、タバサが首を傾げた。

「ブック フって言うのは、古本屋のことです。人が買って読まな

くなつた本を安く買い取つて、中古品として安く売る店です。まあとにかく、行ってみましょう。」

「わかつた。」

この世界のことについては何も知らなかつたので、タバサはとにかくストークの言うことに従うことにした。

この時は地球時間で2月の中旬であり、寒い時期であつたから2人はコートやマフラー、帽子等の防寒具等の身支度を整えて街へと出掛けた。

実はこの時がタバサにとって、地球に来てから初めてのお出かけであつた。病院に入つて以来母親の治療や読書に専念していたため、外へ出る必要等なかつたからだ。

ちなみに、本来この場には彼女の『使い魔』である韻龍のイルククウことシルフィードが居るはずなのだが、その姿は何故かなくなつた。それも当然、彼女は既にハルケギニアへ帰つていたからだ。

実はこちらの世界に来てから直ぐに体調を崩した。しかもそれは重度の頭痛であつた。龍を診たことも触つたこともない横山が診てみたが、当然その原因をつかめるはずが無かつた。ただし、一応可能性として環境の激変を挙げ（電波が飛び交い、空気もハルケギニアよりは汚濁している）たため、彼女は泣く泣く最終便の飛行機でハルケギニアに戻つた。

その際横山とストークは彼女から、「お姉さまと、お姉さまのお

母様のことよろしくお願いなのね。」と元気こそなかったが、真剣な表情で頼まれている。

実際横山とストークは彼女らを賓客として丁重に扱っていた。2人の素性については才蔵らから伝聞情報で聞いていただけであったが、実際に彼女らと対面してみてもその雰囲気などから2人が王族であることを読み取っていたからだ。

そんなわけで、ストークは彼女の身に危険が及ばないよう注意しつつ、街を案内することとなった。何せ自動車やら何やらハルケギニアにはない（正確には普及していない）危険物がそこかしこにあるのだ。

「ねえ、あの建物は何？」

通りを歩いていると、タバサが道路の向かい側にある1つの建物を指差した。

「あれはコンビニといって、夜遅くまでやっているお店です。」

「店？・・・一体何を売っているの？」

「お弁当とか、お菓子とか、生活用品とか、まあ色々です。」

「ふーん。」

そしてタバサはその店へ歩いていこうとした。それに対してストークは仰天すると、慌てて彼女を引き止めた。

「わあ！！タバサさんストOPP！！」

いきなり後ろから腕を掴まれ引つ張られたのだから、タバサもビツクリである。

「何？」

「何って・・・そんないきなり車道の方へ歩いていたら危ないからですよ。今は車が通っていませんけど、もし万が一轢かれたら最悪死んでしまうんですよ。間にあつて良かった。」

車道はタバサが渡ろうとした時こそ車がいなかったが、その直後には信号が変わったのか連続で何台も走ってきたから間一髪である。

「とにかく、この世界にはあなたの世界に無いものが沢山あるんです。ですから僕から離れようとしなくてください。」

ストークが真剣かつ深刻な表情で言ったので、タバサは彼の言葉に従った。

「わかった。」

「よろしくお願いしますね。向こう側へ渡るには少し先に信号機があるので、そこで渡ります。さ、行きますよ。」

そう言って、ストークはタバサの手を取った。

「!？」

その瞬間、タバサの顔がそれまでにない驚きの物となったが、ストークがそれに気づくことはなかった。

## タバサの地球生活録 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに作者は古い小説を探すのに、ブック フを回ったりします。フリーキップを使って名古屋にいたときは地下鉄沿線、東京の場合はＪＲ沿線の店を虱潰しに探します。

## タバサの地球生活録 中

街に出てからと言うもの、ストークは緊張の連続だった。何せタバサは見る物聞く物全てに興味を持ったのだ。知らないのだから当然である。

まあそれはそれで好奇心旺盛と言うことで良いのであるが、逆に言えば本来危ないものに対する免疫が全くないことにもなる。さらに地球で暮らす上での一般常識も欠けている。と言えない。だからさつきも車道に出ようとした。

さらにその後入ったコンビニでは無闇やたらに商品を手にとって触ろうとする物だから再びストークを慌てさせた。タバサからしてみれば、ほとんど全ての商品がハルケギニアではまだ珍しいビニールや紙などで包まれていることや、それ自体の綺麗な印刷などに興味を抱いての行動であった。

また入り口の自動ドアやレジ、大型の冷蔵庫やATMの機械などはもはやタバサの想像の域を越している物ばかりだった。さらにルイズたちも感じたことだが、それらが魔法を一切使っていないということも、改めて彼女を驚かせた。

一応病院内にいた時もそれなりに家電製品に触れたり、本を読んだりして色々と覚えたはずなのだが、さすがに身につけた知識だけでは不十分であった。百聞は一見に如かずの典型である。

ただし、ストークとしては助かったのが、タバサが非常に賢い少女であるということだった。だから一度注意されれば即それを体で覚えることが出来た。さすがに実際に目の前で起きれば、本で読む

よりも身につくというものだ。

またタバサの場合はそれだけではなく、冷静に対象物を観察し、その能力を批評するだけの力もあった。

「もっと色々勉強しないと。」

コンビニを出たところで、タバサが唐突にそんなことを呟いた。

「何・・・ですって？」

寒いからと買ったアンマンを頬張りながら、ストークが訊ねる。  
ちなみにタバサも歩きながら、買ってもらった辛口のカレーマンをパクついていた。

「もっと色々勉強したい・・・この国にはハルケギニアにはないすごい物が一杯ある。この食べ物だってそう。」

そう言うと、タバサは最後の一口を口にした。それを見たストークは、食後の飲み物として買っておいした紅茶の缶の口を開き、彼女に渡した。

「どうぞ・・・まああなたのいた世界とは軽く見積もっても数百年の科学技術の差がありますから。けど、カレーマンがそんなにすごいものでしょうか？」

缶を受け取ったタバサはすぐに言い返す。

「ありがとう・・・違う。すごいのは食べ物自体じゃなくて、この食べ物温かい状態で食べられたこと。火も魔法も使わずそんなこ

とが出来るのに驚いた。」

タバサはカレーマンを温めていた保温器に興味を示したらしい。

「この飲み物だってそう。軽いけどとても丈夫な入れ物に入れられている。1つだけなら魔法で同じような物を作れるかもしれないけど、あの店には同じものがたくさんあった。」

スチール缶の入った紅茶を飲みながら、タバサはそんな事を言う。確かに魔法の技術（例えば『硬化』）を上手く使えば、1つぐらい同じような物が出来るかもしれない。しかしながら、現代地球の科学技術は万単位での量産が可能だった。

「なるほど。僕みたいに子供の頃から身近に存在している人間には、そんなこと考えもつきませんね。その缶にしたって、工場で1日に何万個っていうペースで作られていますし、今食べたアンマンやカレーマンだって機械で作られていると思いますよ。それを僕たちは至極当然のことと考えています。」

タバサは普段から表情を露にすることが極端に過ぎない。今回も表情には何も出していないが、内心ではその言葉に思うところがたくさんあった。

「私の国ではそんなこと夢のまた夢。6000年間全く変わらずやってきたから。」

タバサはハルケギニアの社会体制を思い出してそんなことを言った。

「それは僕も聞きました。魔法のおかげでしょ？魔法を使える貴族



が、使えない平民を支配する体制。確かにそれでは地球の用に革命も起きませんし、政治体制の劇的な変革だって望むべくもないでしょうね。技術の進歩も魔法を崇拜する分遅れざるをえない。」

ストークの言に、タバサが小さく頷いた。

「魔法は神から与えられた奇跡の技。そう教わってきた。そして私たちはその力を過信してきた。けど、あなたたちは魔法無しで私たちより遥か先のことをしている。本当にすごい。」

しかし、それに対してストークは苦笑いした。

「確かにそうかもしれませんけど、僕たちの世界だって万能じゃありませんよ。色々厄介な問題を内包しています。環境破壊、格差、戦争。問題を数え上げたらそれこそキリがない。この国が今とても豊かで平和なことだって、この星全体から見れば結構珍しいことなんですよ。」

地球で暮らすストークからしてみれば、この世界は色々欠点だらけだった。もちろん彼自身ハルケギニアよりは良いと考えているが、それでもタバサが誉めすぎだと考えたのだ。

「それならそれで色々知りたい。この世界の良いところと悪いところを。それを学んでガリアやハルケギニアのために生かしたい。」

その言葉に、ストークは改めて目の前にいる少女の聡明さを思い知ったのだった。

コンビニを出てから数分後、2人はお目当ての店である日本最大の古本チェーンであるブック　フに到着した。

そして店に入るなりタバサは驚いた。店の中にズラーとそれこそまるで図書館のように本棚が並び、その全てに本がギッシリと詰められていた。

義勇軍の挺入れのおかげで最近になってようやく、工場における大量生産方式が芽生えてきたハルケギニアにおいても、本屋というのは個人商店のこじんまりとした物しかない。なにせ印刷機が中世レベルの活版機しかないのでは、造れる本の量や質もタ力が知れている。そんな状況で現代のような大規模な本屋を想像しろという方が無理がある。

だからタバサとしては中古本屋と言われても、個人がやっている小さな店しか頭に思い浮かべられなかった。ところが実際に彼女が見た店は大きく、しかも商品の量も半端ではなかった。

珍しくタバサはその驚きを表情に出した。

「タバサさん。大丈夫ですか？」

ほとんど感情を表さないことをここ数日の付き合いで学んでいたストークは、少しばかり心配になって声を掛けた。

「あ・・・大丈夫。ちょっと驚いただけ。」

「そうですか。それじゃあどんな本を見ます。漫画？小説？新書？それとも実用書なんかもありますけど・・・あ、あなたにそんなこと聞いても知っているはずありませんよね。それじゃあまず漫画の

「コーナーに行きますか。」

ちなみにタバサは病院にいたとき、少しばかり漫画を読んでいる。ただし、それらには特に興味がなかった。内容がお気に召さなかったらしい。とりあえず、漫画というハルケギニアにはない分野の本がどのような物であるかを知っただけだった。

とりあえず、タバサにはこの店のことが特にわからないので、ストークの案内に従った。そしてそこで彼女はまたも驚愕の現実を目の当たりにする。

タバサの地球生活録 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## タバサの地球生活録 下

しかしタバサが見た日本の漫画は綺麗で上手に書かれた絵が描かれており、その印刷の精度も非常に高い。もつともそれ自体は既にわかっていたことだが、タバサを驚かせたのはそれらの量である。

同じシリーズの物が何本も置かれているのも然ることながら、漫画自 タバサはまたも驚いてしまった。何に驚いたのかと言えば、連れてこられた漫画コーナーの大きさである。実に店の半分近い面積がその漫画で埋められているのだ。

タバサは漫画というものがどういう物であるかは、病院にあった物を見ているので知っている。しかし、今タバサが見ている中古書店の漫画コーナーの漫画の量は彼女の想像がな物だった。

ハルケギニアには漫画というものはない。良いところ絵本である。しかもそれさえも、前述したとおり印刷の技術が低いことから、質的には低い。

また漫画自体の種類がやたら多い。しかも内容も多種多様である。恋愛物もあれば、アクションやSF、ファンタジー等ジャンルを数えたらキリがない。

「立ち読みは構いませんが、何時間もあると目立ちますから、なるべく手早く読んで下さいね。僕は近くにいますので。」

タバサが漫画を手にとって熱心に読み始めたので、ストークが注意した。

「わかった。」

タバサの返事を受けて、ストークは彼女から離れた。もつとも、離れると言っても目の届く範囲である。これは彼女がトラブルに巻き込まれないよう保護するという目的と同時に、彼女がおかしな物に手を触れないよう監視する意味もある。

なにせこの世界のことをほとんど知らない彼女である。知らないままに、子供が近付いちゃいけないようなコーナーに近付かれたら大変である。それに彼女が王族であることも大きい。義勇軍、ストークとしてはお姫様を汚したと受け取られるような事態は絶対に避けなければならない。

そんなことを知ってか知らずか、タバサは様々な漫画を手にとつて読んでいく。

ちなみに、タバサは店に入ってから驚くにしても表情には全く出していない。内心で驚いていたただけだ。もつともよく見れば眉が少しばかり動くことがわかったかもしれないが、生憎とこの頃のストークはそれが出来なかった。

だから少し離れた場所で見えていたストークからは、タバサが済ました顔で漫画を読んでいるようにしか見えなかった。ただ見えている限りタバサが怪しげなコーナーに近付くことはなく、専ら少年や少女、行っても青年コーナーの漫画を行き来して読んでいるだけだった。

そのためストークも安心してたのだが、数時間後そろそろ陽も大きく傾いて来た頃、タバサの方から彼の元へとやって来た。

「ああ、タバサさん。そろそろ呼びに行こうと思っていましたんですよ。

何か気に入った本でもありましたか？」

するとタバサは小さく頷いた。

「あつた。だから買つて欲しい。」

「わかりました。それじゃあ欲しい本を持ってきてください。レジに持っていくので。」

「わかった。」

そう言つてタバサは欲しい本を棚から出し始めた。最初ストークは多くても数冊で済むと考えていた。ところが、すぐにそれが間違いであるのに気づいた。何故ならタバサは凄まじい勢いで本を集め始めたからだ。あつという間に腕一杯となる。

「ちょ、ちょっとタバサさん！一体何冊買う気ですか！？」

さすがにマズイと思ったストークは、彼女に駆け寄つた。すると彼女は、素っ気無く言つた。

「30冊。」

「30冊！？」

まさかそんな大人買いするとは想定外であつた。1冊平均300円としても、合計で9000円になる。一応金はそれなりに持つてきているし、万が一の時はクレジット・カードを使えばよい。しかし、ストークも本当にビツクリである。

「本当に、そんなに買うんですか？」

念のため確認の質問を試みる。それに対してタバサは小さく頷いた。

「わかりました。けど、それだけたくさの本だと持っただけじゃ間に合いません。カゴを持ってきて上げますから、それに入れてください。」

「わかった。」

ストークは店の入り口に置かれていたカゴを持ってきて、タバサはその中に買い込む本を入れた。もちろん、30冊もあるからあつという間に一杯になった。

ストークはタバサが入れた本を見た。

（あれ？）

ストークはそれらの内容を見て首を傾げた。

「どうかした？」

「え！？いや、ちょっと考え事を。これで全部ですか？」

その問いに、タバサはやはり小さく頷いた。

「わかりました。じゃあ僕は清算を済ませてくるので、ちょっと待っていて下さい。」



ストークはタバサに待っているように言つと、本で一杯になったカゴをレジへと持って行き、清算を済ませる。30冊という大量買い込みとなったが、店員は別に変な表情をすることもなく、それらを袋に詰めた。

ストークは金を払い、持っていた店のカードにポイントを付けてもらつと、本でズッシリと重くなった袋を持ってタバサの元へと戻る。

「お待たせしました。それじゃあ行きましようか。」

2人は店を出たがやはり漫画とはいえ30冊は結構重く、外から見ても重そうに見える。すると、タバサは重い袋を持った彼を見かねたのか、ある提案をする。

「持つ、手伝う？」

ストークとしては、その言葉は非常にありがたいものであつたが、しかし相手が相手であるから断る。

「大丈夫です。1人で持てますから。」

「わかった。・・・それにしても、こういう所は不便。ハルケギニアにいれば『レビテーション』が使えるのに。」

タバサはこの世界で感じるただ1つの欠点を口にした。地球では魔法はほとんど使えない。タバサもこの世界に来た直後、魔法を使おうとしたが使えなかった。一応使えないことはないのだが、威力はハルケギニアにいた時の10分の1も出ないし、さらに体力も大きく消耗する。

「確かに、そういう点では魔法の方が便利かもしれませんね。まあ何事も一長一短ですから。」

「一長一短？」

「つまり、利点もあれば欠点もあるということです。万能等という物はないという諺です。」

「そう。非常に良い言葉。前にも言ったけど、ハルケギニアじゃ魔法は神が与えた奇跡の力として絶対視している。」

タバサ自身は決してそのようなことは無いのであるが、ハルケギニア全体では未だその考えは強い。ようやく科学技術が導入されたトリステインやアルビオンで転換が見られつつあるが、その他の国では全くと言ってよい。

「魔法といえば・・・タバサさんが買った漫画、なんか魔法とか魔法使いが関係する話ばかりでしたよね？どうしてですか？」

先ほどストークが気づいた点はこれだった。タバサは、魔法や魔法使いが登場するジャンルの本を多く買っていた。最近はラノベで漫画化されたシリーズでそういう物がある。もちろんそれら以外にもなくは無かったが、圧倒的にそちらの方が大きな割合を占めていた。

「この世界には魔法は無いけど、魔法を書いている本は沢山ある。その中には私たちが使っているのに似ている物もあれば、全く異なる物もある。だから面白い。出来れば使えるのか試してみたい。」

「なるほど。そう言う事ですか。」

これは後のこととなるが、この時タバサが仕入れた漫画や、後に仕入れた小説（主にラノベ）を元にハルケギニアでは新しい魔法が開発されることとなる。その多くが攻撃に使う物ではなく、『固定化』のように日常生活に活用できる物であったため、非常に重宝された。

「けど、これだけの本を簡単に買えるなんて本当に驚き。」

「僕はあなたがいきなりこんなに買い込んだほうが驚きです。」

その言葉はストークにとって冗談のつもりだったが、タバサは皮肉と受け取ったらしい。

「迷惑をかけたのなら誤る。」

タバサの思わぬ発言に、ストークは驚く。

「え！？いや、そんなつもりで言ったんじゃない、気にしないでください。」

「そう。」

タバサに不快な思いをさせなかったことに、ストークは安堵したが。数日後彼はこれが間違えではなかったかと思うようになる。なぜなら、タバサは1〜2日もすれば買った本を読んでしまい、再び古本屋に行くことをせがんだからだ。

おかげでストークは、予想外の出費と荷物持ちの悲哀を味遭うこととなった。もっとも、タバサはその後、様々な本に目を通したた

めに膨大な知識をハルケギニアに持ち帰ることとなる。そのおかげで、タバサは魔法や科学などあらゆる面に精通した敏腕女王として杖を振るう。

その時になってストークの苦勞は報われることとなる。

タバサの地球生活録 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 帰らざる友 上

昭和20年8月14日 神奈川県海軍厚木飛行場

真夏の青い空に1本の飛行機雲が伸びている。関東近郊の偵察任務を帯びたB29の偵察機型であるF13が高高度を飛行している証拠だ。

「畜生、悠然と飛んでやがる。」

「日本の空はお前たちの物じゃないんだぞ!!」

「今に見てろ、叩き落してやる!!」

何人かの若いパイロットが飛行機雲を忌々しげに見ながら、吐き捨てるように言った。彼らにはそれ以外に出来ることがないからだ。

そんな彼らを少し離れた場所から見つめる2人の士官パイロットの姿があった。

「平賀中尉、若い連中がまたあんなこと言ってますよ。」

佐々木武雄帝国海軍少尉が、隣を歩く平賀中尉と書かれた名札を付けた士官パイロットに言う。

「ほっとけ佐々木。今のあいづらに何を言っただって無駄さ。まあ、いきり立つのも無理ないがな。連中ここの所全く出撃出来なかった

からな。」

佐々木の言葉にそう言って答えた平賀才吉帝国海軍中尉はポケットからタバコを取り出し、マッチで火をつけた。

既に昭和16年12月の開戦から3年8ヶ月経つこの戦争も、この年の2月に硫黄島、4月に沖縄へアメリカ軍と上陸するといよいよ日本を巡る状況は悪くなった。連日のように空には連合軍の飛行機が飛来し、東京を始め小規模な都市まで無差別爆撃を行っていた。

日本の周りの海上も敵の艦船だらけで、マリアナから飛んでくるB29とともに洋上の機動部隊から飛び立つ艦載機が我が物顔で日本上空を蹂躪していた。

既に日本側にはそれに対抗する手段はなかった。戦闘機は飛べる機体も、それを飛ばすパイロットや燃料が不足し、飛んだとしても敵の餌食になる可能性の方が高かった。

洋上の艦隊へ起死回生の攻撃法として編み出された特攻も、米軍が対策を完全に講じ、さらに特攻兵器とそれを操る人間の質が劣悪になった今ではほとんど効果を挙げられなかった。

そして6月以降はさらに状況は悪化し、軍上層部の決定によって、軍全体に本土決戦に備えての戦力温存策が採られた。すなわち敵への積極的な迎撃を控え、戦闘機隊は重要な場所への爆撃や攻撃が行われない限り迎撃は行わず、空中退避するよう命令が出ていた。

そのため、精強を誇った厚木基地の302戦闘飛行隊も迎撃はほとんど許されず、敵機が来ても地上の壕に飛行機を隠してジッと待っているか、敵機が来ない空中や基地へ退避するしかなかった。パ

イロツトにストレスが溜まって当然である。

「上は本土決戦に備えての戦力温存とか綺麗事言っていましたけど、本当は南方航路をアメリカ軍に締め上げられて、燃料が手に入らないから飛ばしたくても飛ばせられない。飛行機の生産がストップしたから、今ある機体を失ってはならない。それが本音でしょうね。」

「だな・・・しかし、国民を守ることさえ出来ないとは。本当に情けない。この戦争、もう終わりが見えてるな。」

日本の負けを嘆くことは本来ご法度であるが、もはやそれを決して有り得ないとは誰もいえなくなっていた。例えば口に出さなくても、心の奥底ではこの戦争はもはや負けであることを誰もが悟っていた。

口にした平賀の隣を歩く佐々木もそうだった。

「6日に広島、9日に長崎に新型爆弾（原子爆弾）が落されて、ソ連も参戦しました。もう日本は終わりですよ。通信科の連中が言っていました、例のポツダム宣言を政府は受託したとか。」

佐々木の言うポツダム宣言とは、日本に対して無条件降伏を要求した宣言だ。7月28日に出されたが、日本政府はこれを当初は静観、その後黙殺した。結果6日に広島、9日に長崎の悲劇となった。そしてソ連も中立条約を一方的に破って国境を渡り、満州・樺太・千島へと侵攻を開始していた。

「聞いたよ。小園司令が横鎮（横須賀鎮守府）に確認を取っているらしいが、おそらく事実だろうな。もし社会主義のソ連に占領されるようなことになれば、国体（天皇制）は絶対に潰される。それだったらアメリカに手を上げたほうがまだマシだろう。」



彼の言うとおり、この時点において既に政府はポツダム宣言受託の意思を固めており、玉音放送の製作や軍部に対する対策などで大童になっていた。もっとも、一介の軍人である彼には預かり知らぬことであつたが。

「けど嫌なものです。今日まで死に物狂いで戦つて来ました。それなのに上の都合で勝手に降伏では、やり切れません。それに、これじゃあ死んだ人間に顔向けできませんよ。」

「俺だつてそうさ。宮野中尉、西澤中尉、関大尉・・・皆死んだつていうのに、今さら俺たちの預かり知らぬうちに降伏されちゃな。」

今や数少ないベテランパイロットの平賀は、前線で出会い、そして蒼穹の彼方に散つていったパイロットの顔を思い出した。

「中尉はラバウル、マリアナ、フィリピンと転戦してきましたからね。中尉のように30機以上のベテランも今ではもうほとんど残っていません。」

すると、平賀は苦笑した。

「ベテランはお前もだろ佐々木。第一俺たちは海兵（海軍兵学校）の同期じゃないか。本来なら敬語で話す必要はないんだぞ。」

「しかし、平賀中尉が上官であるのは間違いありません。自分は盲腸になったせいで教官配置が長かったですから。だから中尉より昇進も遅いし、撃墜数だつて10機です。」

例え同じ歳でも、軍隊内では階級が絶対とされる。だから佐々木

は同級生である平賀に敬語を使っていた。

「おや、それは俺に対する皮肉か？」

「まさか。」

そして2人はお互いを見合って笑った。

もつとも、そんな和やかな時間は直ぐに終わった。まもなく、基地中に出撃を報せるサイレンが鳴り響いたからだ。

「行くぞ佐々木！！」

「はい！！」

2人は会話を打ち切って、すぐに滑走路脇に止められている愛機へ向かって走り始めた。その間にも、スピーカーや伝令の兵士が情報を伝えてくる。

「全機直ちに出撃せよ！！敵艦載機多数京浜工業地帯を爆撃中！！」

6日と9日に新型爆弾が投下され、さらにソ連も参戦したことから国民の士気が落ちることを怖れた軍上層部は、数日前になって積極迎撃を許可した。

だから空中退避ではなく、出撃と相成った。ここ厚木基地に所属している戦闘302空は横須賀基地航空隊や松山に本拠地を置いていた戦闘343空とならんで、数少ない有力なパイロットと戦力を残している航空隊だった。

最新鋭機の「紫電改」こそないが、零戦や「雷電」と言った機体が未だ纏まった数で健在であつた。平賀と佐々木が乗り込むのはその内の零戦だつた。

「回せ！回せ！」

愛機に走りよるパイロットたちが、腕を回して整備兵に命じる。命じられた整備兵たちは急いでエンジンの下にある始動用スターター（エナジーシャ）を回す。

平賀と佐々木の2人はパイロットに潜り込むと、ベルトを付けてスターターが充分に回つたことと整備兵の安全を確認してエンジンを掛ける。

「コンタックー！」

接続を表すコンタクトがなまつた日本海軍独特の掛け声と共にエンジンのスタートボタンを押した。

最初数回不整音を鳴らした後、1100馬力の「栄」21型エンジンは順調に動き始めた。この時期徴用された女学生や中学生が飛行機を造っているため、カタログデータ通りの性能を引き出せる機体は2割程度とされていた。

しかし、フィリピンから帰還した去年の12月から乗り込んでいるこの機体は当たりだつた。機体・エンジン共に故障は少なくちゃんと定められた性能も出ていた。もちろん、相棒の佐々木の機体も同様にちゃんと性能を出る機体を選んでいた。

「よしー！」

計器盤を見て異常がないことを確認すると、平賀は両手を振って車輪止めを外させる。それと共に、軽く各舵の動作を点検する。

そちらの異常もないことを確認すると、同じ小隊を組み、なおかつ隣に駐機している佐々木の機体を見た。操縦席から佐々木が手を出し、親指を立てているのが見えた。向こうも異常無しである。

佐々木は平賀24歳と同一年で同期であるが、卒業直後に盲腸と診断され入院。そのため実戦配置が遅く、後方部隊と教官時代が長かったため実戦経験は平賀より少ない。それでも、昨年のマリアナ沖海戦でF6F1機を撃墜して奇跡的に生還。その後台湾航空戦、本土防空戦を戦って併せて10機を撃墜している。

そんな2人は2月の戦闘から相棒を組んでいる。お互いベスト・パートナーと自負しており、機体の機種には日本では珍しいパーソナル・マークを描きこんでいる。平賀が虎、佐々木が辰だ。

2人の小隊はそのまま竜虎小隊と呼ばれ、小園司令や仲間たちからの信頼も厚かった。

「行くぞ！」

仲間の零戦や「雷電」が飛び立つのに続いて、2人も離陸に入る。誘導路から滑走路に入ると、スロットルを全開にして走り始める。

整備兵や地上要員の帽振れに見送られて、2人は真夏の高空に飛び上がった。

帰らざる友 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 帰らざる友 中

厚木基地を飛び立った302空戦闘機隊の戦闘機は、京浜工業地帯上空で米艦載機と交戦に入った。F6F戦闘機に零戦が食い付き、黒煙を吐かせたかと思えば、その零戦の後ろに別の敵機が食い付き、銃弾を浴びせかける。

日米両軍の戦闘機が相手を撃墜、もしくは相手に撃墜される激しい空中戦を繰り広げている。平賀中尉と佐々木少尉の零戦ももちろんその中で戦う。

制式採用以来既に5年近く経過する零戦であるが、格闘性能は改良で落ちたとはいえ米軍機よりも高い水準を保っており、パイロットがベテランなら米海軍の主力戦闘機であるF6F「ヘルキャット」と互角に戦える。

現に平賀も佐々木もその腕でこれまで撃墜数を重ね生き残ってきたし、片手が義手である同僚の森岡大尉等はP51戦闘機を零戦で落とす「零戦未だ健在」を米軍に見せ付けた。

また米軍内でも、「ベテランの操るゼロ（零戦）とオスカー（陸軍の「隼」）には気をつける！」とパイロットたちは囁いていた。

そして空戦に入ると早速平賀は1機のF6Fの後ろに付けていた。

「ようし・・・撃て!!」

照準の目盛りを敵機より一つ分前に置いて攻撃を開始する。零戦の積んでいる20mm機銃は改良されているとはいえ、初速が遅い

きらいが未だにあり、命中弾を出すためには意外とこれが有効なのだ。

主武装の20mm機銃弾と副武装で機首と主翼に装備された13mm機銃から銃弾が発射され、敵機に吸い込まれていく。

米軍戦闘機は頑丈なことでも有名であるが、飛行機である以上墜ちないはずが無い。平賀の銃撃を受けたF6Fも多数の銃弾を燃料タンクに喰らったからか、間もなく黒煙と炎を引きながら墜ちていった。

「1機撃墜確実。」

この時、米軍機の場合は自動消火装置を働かせて墜落を免れることが多いが、平賀は敵機が海上に墜落したのを確認した。

さらに、間もなく後ろから爆発音がしてきた。

「佐々木の奴もやったな。」

平賀は後ろを振り返りながら呟いた。

米軍戦闘機は通常2機で1チームを作り、敵戦闘機を撃墜する口ツテ戦法、もしくはサッチ・ウィーブ戦法を多用している。これによって多くの日本木が撃墜されているが、今回も平賀の後ろに1機が回り込んでいたらしい。しかし、それは平賀と相棒を組む佐々木が撃墜した。

去年から日本でも欧米空軍に続いて2機で1個小隊を組む編成に切り替え、米軍戦闘機に対抗を図っていた。既に遅すぎた感もある

が、機体同様ベテランがやれば充分効果を挙げられる。

「中尉、御無事ですか？」

無線で佐々木が平賀に問いかけてきた。これまでは雑音ばかりで役に立たない無線機であったが、最近になってようやく改修されてまともに話せるようになった。

「ああ、被弾無しだ。だが新手だ。3時方向、「シコルスキー」が2機だ。行くぞ佐々木！」

「了解。」

2人は前方に現れた新手に立ち向かうべく、愛機を旋回させた。

戦闘終了後の厚木基地。戦闘を生き残り、機関銃の発射煙で機体を幾分か汚した戦闘機が五月雨式に帰還してくる。平賀と佐々木の零戦もその中であつた。

「中尉、やりましたね。」

先に着陸し、機体から下りた佐々木が平賀の機体に駆け寄ってきた。

「ああ、お前と併せて「グラマン」3機に「シコルスキー」2機。計5機撃墜確実だ。もっとも、俺たちの戦果を確認した人間がいればの話だけだな。」



「大丈夫ですよ。今なら認められますって。」

佐々木が苦笑いしながら言った。以前なら日本海軍の撃墜戦果はかなり厳格で、単独での申告は認められない傾向にあった。しかし現在は戦局が極限まで不利ということもあり、この基準がかなり甘くなっていた。2人はベテランであるから認められる可能性が高い。

「それもそれで困ったものだな。それに・・・」

平賀は空を見上げた。2人に続いてさらに帰還してくる戦闘機の姿を見つめる。

「やはり何機か戻ってきていない。」

平賀にとって、仲間が殉職することほど嫌なことはない。戦争で犠牲者が出るのは当たり前であるが、それでもこれまで多くの人間の死を見てきた分、嫌な気分も増すというものだ。

「とにかく、指揮所に行って戦果の報告をしましょう。それに未帰還の人も降下しているかもしれませんし。」

「そうだな。」

2人は戦闘指揮所へと向かって歩き始めた。

最終的にこの日の撃墜戦果は計29機と報告され、さらに17機が未確認（撃破）とされた。しかしながら、こちらの未帰還も10機近く出ており、この内7名はパラシュート降下や不時着が確認されていなかった。

戦果も大きかったが、味方の被害も大きかった。それに貴重な燃料もさらに減ってしまった。

パイロットたちは久しぶりの戦果に喜びつつ、味方の状況を憂いざるを得なかった。さらに彼らを呆然とさせる情報が舞い込んできた。朝パイロットたちの間で囁かれていた日本のポツダム宣言受託は真実であるというものだった。

今日まで、ついさっきも死ぬ気で戦ってきたというのに、日本は負けるというのだから落胆するなという方がおかしかった。

「畜生!!」

「バカ野郎!!」

「俺たちは何のために戦ってきたんだ!!」

降伏を知ったパイロットたちの一部は兵舎に戻ると、自棄酒を煽り始めた。それを横目に、平賀と佐々木の2人はサイダーを飲みながら缶詰をつついていた。

「戦争はまだ終わっちゃいない。玉音放送は明日の正午だそうだからな。それまでは戦争中だ。敵機動部隊は未だに伊豆沖を遊弋しているそうだ。だからいつ出撃命令が来るかわからん。軍人である以上、最後まで戦わなきゃな。」

「そうだな。」

配置にあるわけではないので、2人とも上官と部下という関係から同期の桜へと戻っていた。

「それにしても、戦争が終わるって言われても実感が湧かん。」

平賀が呟くように言う。

「そりゃ、生きるか死ぬかしか考えてこなかったから・・・平賀、お前は戦争が終わったらどうする気だ？確か降伏条件の中には軍隊の解散があつたはずだ。ということは俺たちも失業だぞ。」

「そうだな・・・俺には家族もいるし、もうすぐ子供も生まれるから。とにかくどこかで働くさ。けど軍隊の解散って言っても、国の防衛は独立を守る上で絶対に必要な物だ。特に背中にアカのソ連が迫っている今はな。だから、俺はいつかまた日本を守るために働きたいと思っている。まあ、それもこれも明日を生き残つての話だが・・・佐々木、お前はどんなんだ？」

「俺か？俺はそうだな、まあ田舎にでも帰って畑を耕すさ。いちおう軍隊にいる内にそれなりに稼いだから、田んぼでも買つてのんびり耕すよ。けど、贅沢を言えば嫁さん貰って幸せな家族を作りたい。」

佐々木がしみじみと言う。

「そう言えばお前のところは母1人、子1人だったな。」

「そのお袋も、去年病気で死んだ。だから今の俺は天涯孤独の身だ。」

「そうか・・・大丈夫、お前なら幸せな家族を築けるさ。まあ、多少忠誠心がありすぎるのが玉に傷かもしれんがな。」

すると、佐々木が表情を厳しくした。

「お前、陛下を侮辱するのか？」

「違うわ。ただお前の場合は人より熱心だと言いたかったただけだ。俺は別に皇室があることに何の不満も無い。むしろ、国をまとめる上で陛下の存在は良いものと思っている。」

「何か、どこか釈然としないが、まあ良しさ。」

そうして夜は更けていった。

翌日早朝、平賀と佐々木は他の数人と共に飛行長の前に集まっていた。

「諸君！敵機動部隊より発進した艦載機軍が接近中との報告だ。既に正午の玉音放送のことは知っていると思うが、戦争は未だ終わっていない。最後の瞬間まで我々は戦う。帝国海軍航空隊が健在であることを、アメリカ人どもに知らしめてやれ！全機出撃せよ！！」

その言葉に送られ、平賀と佐々木は最後になるかも知れない出撃準備に入った。

「佐々木。これが最後になるかもしれん。だからバカなことで死ぬなよ。」

「わかっている。こんな所で死んでたまるかって。中尉もお気をつ

けて。」

「了解！」

2人はお互いに敬礼すると、愛機に乗り込んだ。時に昭和20年8月15日、午前6時のことだった。

帰らざる友 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 帰らざる友 下

厚木基地を飛び立った平賀と佐々木の元に、通信が入った。

「日の丸１１、日の丸１１、敵グラマン１０機程度が木更津方面を地上掃射中。これを迎撃されたし。」

日の丸１１は総隊長の呼び出し符号のことである。直ぐにその総隊長から無線通信が入る。

「日の丸１１了解。全機聞いたな、これより我々は木更津上空に向かう。敵機に注意しつつ全機戦闘準備！！」

恐らくこれが最後の戦いになる。平賀はそう心の中で強く思いつつ、機関銃に弾を送り込み、照準機の電源を入れるなどの戦闘準備を済ませる。

ちらりと隣を飛ぶ佐々木少尉の機体を見る。すると、向こうも気づいたらしく親指を立てて笑顔を送ってきた。釣られて平賀も笑顔を返した。

木更津は厚木から見ると東京湾を横断した先である。海軍航空隊基地もあるが、おそらく敵機はそちらを攻撃に来たのだろう。平賀ら厚木戦闘機隊は、どこから現れるかわからない米戦闘機に警戒しつつ、木更津へ急行した。

上空、左右、下方、全方位に目をやるが中々敵機の影は発見できない。そうこうしている内に部隊は東京湾を横断し終え、木更津上空に到達した。そして仲間の１人が叫んだ。

「発見、1時方向上方!!」

その方向を見ると、確かに「グラマン」戦闘機が前上方に10機ほどいた。しかも、こちらには全く気づいていないのか、燃料タンクをぶら下げたまま直線飛行をしている。

「全機増槽投棄!!下方から奇襲する。」

隊長機からの支持を受けて、平賀は増槽の投棄レバーを引いてスロットルを全開にした。

「いいぞ、敵機は全く気づいていない。理想的な射撃位置だ。」

後下方からの攻撃は、多くの戦闘機パイロットが用いる戦法だ。敵機からは一番見えにくい位置であり、それだけ距離を詰めて必殺の一撃をお見舞いできる。

平賀は1機の「グラマン」を照準の真ん中に捉えた。

「撃て!!」

狙いが定まり、距離も十分に近付いたところで彼は発射レバーを引いた。曳光弾が空中を裂いて飛んで行き、敵の主翼や胴体下部に突き刺さるのが見て取れた。当然その「グラマン」は間もなく炎と黒煙を吐き出し墜ちていった。

その他の数機にも味方の零戦が取り付き、攻撃を開始した。その時になってようやく敵機は敵襲に気づいたらしく、一斉に増槽を投下して急加速した。



「全機へ、敵機も気づいたぞ。以後小隊単位で自由戦闘に入れ！！」

「了解！！」佐々木、しっかり援護してくれ！！」

他の仲間とともに隊長に返信した後、平賀は相棒の佐々木にそう告げた。

「了解、平賀中尉！！」

2人は「グラマン」戦闘機とのドッグファイトに入った。奇襲攻撃の混乱から脱した敵機は一旦上昇して零戦隊の上を取ると、急降下して襲い掛かってきた。

その一撃を零戦隊側が避けると、後は組んでほぐれての乱戦となった。平賀と佐々木の小隊も、敵の2機小隊と空中戦を行った。

相手もベテランらしく、中々隙を見せない。

「こいつら中々やるぞ！佐々木、油断するな！」

「わかってる！そっちも気をつける！！」

急上昇、急旋回、横滑り、時にはインメルマンターン等、2人はありとあらゆる動作を行って敵機の攻撃を避けると共に、敵機の隙を窺った。だが、敵も同様に様々な動作を行って2人が後方について射撃するのを許さなかった。

いつの間にか2人と2機の「グラマン」は仲間たちから大きく離れ、空には4機だけとなっていた。そして敵機は唐突に戦闘を切り

上げて遁走を図った。

「何だ！？燃料切れか？」

気になつて平賀は自分の機体の燃料計を見た。すると、確かにタンクの半分以上を使い切っていた。空中戦に入ると通常の3〜4倍と燃料を消費する。空中戦に夢中になつていたせいで、2人とも燃料の減少に気づいていなかった。

「そう見たいだな。追いかけたい所だが、深追いは禁物だ。佐々木、戦闘中止だ。引き上げるぞ！」

「了解！それにしても敵さん中々良い腕でしたね。」

「ああ、最後にあれほどの好敵手と戦えた。最早悔い無しだ。さ、厚木へ帰るぞ。大島が遠くに見えている。大分遠くまで来ちまったな。」

水平線上にボンヤリと見える大島の影を左手に見つつ、2人は巡航高度へ上昇しつつ厚木基地への帰路へとつこうとした。

その時になつて、空が少しばかり暗くなった。

「何だ？」

「日食みたいですよ。」

佐々木が指摘する。確かに平賀が少しばかりそちらに目を向けると、確かに太陽が少しずつ欠けていくのが見えた。

「気象班は今日日食が起こるなんて言っていなかったがな・・・」

平賀は戦闘が終わって緊張の緩みから、ついついそちらに機首を向けた。日食なんてほとんど見たことがなかったし、ましてや空中から見る等とは思っても寄らぬことであつた。

しかし、太陽へと機首を向けてから間もなく、異変が起きた。突然機体の周りが光に包まれた。

「な！何だ！？」

光に包まれたのはほんの一瞬であつた。しかし、まもなく彼の目の前に現れたのは驚愕の光景だつた。

「こ、これはどういうことだ！？」

彼が下に目をやると、そこには海上ではなく一面の草原と森が広がっていた。しかも、どうみても見慣れた日本のそれとは違つていた。

「平賀、無事か？」

狼狽する平賀の耳に、佐々木の声が入る。後ろを見ると、佐々木の零戦が付いて来ていた。

「ああ、それよりもこれは一体どういうことだ？」

「わからない。いきなりお前が太陽の中に消えたから追つてきたんだが・・・一体ここはどこだ？確かに俺たちは海の上を飛んでいたはずだぞ！？」

佐々木の声にも焦りが混じっていた。彼にも全く状況が把握できないらしい。

「太陽・・・まさか!？」

平賀はすぐにこの異常事態の原因が太陽であると気づいた。

「佐々木!もう一度太陽に入るんだ!よくわからんが、これは恐らくあの太陽が原因だ!急げ!」

平賀はフルスロットルで、操縦桿を未だ日食で黒いままの太陽の方向へと倒した。

「いかん!」

少しずつ太陽に光が戻り始めているのが見えた。

「間に合え!」

平賀の強い願いは神に受け入れられた。なんとか彼の零戦は太陽の中に飛び込むことが出来、先ほどと同じように一瞬光に包まれたかと思ったら、次の瞬間には海上を飛んでいた。そして間もなく、日食は終わったのか辺りが明るくなった。

「間に合った。良かった・・・それにしても今のは何だったんだろうな、佐々木?」

彼は自分の後方にいるはずの相棒に話しかけた。だが、いつまで経っても返答は来ない。不思議に思って振り返ると、そこには彼の

零戦の姿はなく、ただ青い空が広がっているだけだった。

「ま、まさか……」

平賀の脳裏に最悪の考えが浮かんできた。

「佐々木！佐々木少尉、応答しろ！！」

機体を旋回させて、無線で必死に佐々木を呼び出そうとした。しかしながら、ついに佐々木少尉からの返信がもたらされることはなかった。

「佐々木……すまない。」

燃料が帰還ギリギリの量まで減ったところで、平賀は帰還を決断せざるを得なかった。友人をどこともわからぬ場所に置いてきぼりにした悔しさとともに。

彼が燃料切れ寸前の零戦を厚木基地の滑走路に滑り込ませたのは、1時間後ことであつた。そしてその30分後、日本全国に昭和天皇の玉音放送が流され、大日本帝国は降伏、日本は長く辛い戦争に敗れたのであつた。

その時から、平賀才吉の新たな戦いが始まったのであつた。後悔と葛藤という名の戦いと。

「元帥、平賀元帥。」

近くにいた兵士に声を掛けられ、才吉は目を覚ました。

「あ……いかん、眠ってたか。随分昔の夢を見たな。」

「元帥、式典が間もなく始まるというに居眠りは困ります。」

兵士は目の前の爺に半ば呆れていた。

「別に92歳になった退役老人のことなんか気にする人間等いなだろうに。」

才吉は自嘲気味にそう笑った。

「しかしながら、元帥は王国連合政府軍の前線である『東方義勇軍』の創始者でありますから。さ、始まりますよ。シャンとして下さい。」

「わかった。わかった。」

苦笑いする兵士にいい加減に返しつつ、才吉は帽子を被りなおして立ち上がった。

今日は年に1回のハルケギニア王国連合政府創立記念日である。連合政府首都には主席のラ・ヴァリエール公爵や軍務大臣の平賀才助退役大將ら政府要人を始め、さらにトリステインのルイズ女王とその夫で大公となった才人に3人の子供たち、アルビオンのウェールズ国王とアンリエッタ王妃と息子のチャールズ王子をはじめ3人の子供たち。ガリアのシャルロット女王に首相のイザベラ元姫、ゲルマニアのツェルプストー女帝、アイスランドのティファニア女王、

そしてロマリアや各小国の王や代表者も出席している。

まさにハルケギニアの頭が揃う大イベントだ。そしてこの式典の最中には連合政府軍のパレードが行われる。梶田大将率いる機械化歩兵部隊や長田中将率いる戦車部隊の行進は圧巻であるが、一番人気は航空隊によるものだ。

綺麗なV字編隊を組んだ5機の色鮮やかなエンテ型戦闘機が飛んでくると、市民たちの視線が一斉に空に向けられた。

「展示飛行を行うのは、連合政府軍展示飛行隊第一小隊。編隊長はシエスタ・菅野大尉です。」

会場内のスピーカーから案内放送がなされると、一斉に市民たちから歓声が上がった。ハルケギニア初の女性エースパイロットであり、現在は2児の母親でありながら未だ空を飛んでいる彼女のファンは多い。

5機のMS1型「サンカ」戦闘機は一斉にスモークを引きつつ散開し、空に連合政府の旗に使用されている5角の星、そして連合加盟国の紋章を描き上げていく。その腕は確かなものだ。

「さすがはあいつの血を濃く受け継いでいるだけあるな。」

異国の地に置いてかれ、天寿を全うした親友。その親友は世界こそ違えど、自らの望みを果たしていた。彼がこの世に残し、そして受け継がれている者に対して、才吉は見事な敬礼で応えた。

## 帰らざる友 下（後書き）

御意見・御感想をお待ちしています。

最後に出て来たシエスタの機体の元ネタは多くの人にはわかると思います。何せ映画に出てきた機体ですから。



## 東方義勇軍総解説 戦力編2

ハルケギニア戦役開戦時

軍総司令官・・・平賀才吉大将

トリステイン方面軍（トリスタニア郊外ミライ基地並びにミライ西基地）

軍司令官・・・平賀才助中将

陸上部隊

歩兵部隊・・・1個中隊600名。附属補給隊120名。（小銃、音響閃光弾、短機関銃、手榴弾、重機関銃、迫撃砲、無反動砲、車両、バイクを装備）

部隊司令官梶田幸一中佐

砲兵部隊・・・1個中隊100名、附属補給隊80名。（ゲルマニア・ロマノフ公国製75mm野砲、牽引車両装備） 75mm砲16門 105mm砲8門

部隊司令官大野太一中佐

高射砲部隊・・・1個小隊80名、附属補給隊40名（ロマノフ製高射砲・高射機関砲装備）

75mm高射砲12門 40mm連装機関砲20基

戦車部隊・・・3式中戦車3両。43式装甲車12両。

部隊司令官・・・長田道雄中佐

狙撃部隊・・・1個小隊20名。

部隊司令官友澤文夫中尉

鉄道警備隊・・・1個小隊20名

部隊司令官ケイリー少尉

保安隊・・・1個小隊20名

部隊司令官エドワルド少尉

リーダー部隊

部隊司令官大神一大佐

## 航空部隊

戦闘機部隊・・・43式1型（OS1型）零式艦上戦闘機改12機。  
43式2型（OS2型）「バッファロー」艦上戦闘機16機。44  
式1型（OS3型）「超零戦」戦闘機10機

部隊司令官・・・菅野直中佐

攻撃機部隊・・・99式襲撃機3機。SBD「ドントレス」（O  
B1型）艦爆12機。「アベンジャー」雷撃機3機。

部隊司令官・・・神林学中佐

練習機部隊・・・93式（OR1型）中間練習機16機。

部隊司令官・・・エドワード・グラー特務中佐

空輸部隊・・・43式（OY1）型「ダグラス」輸送機12機

部隊司令官・・・天沢大輔特務少佐

回転翼機部隊・・・偏向翼攻撃機「うみどり」、UH1H「イロコ  
イ」1機その他2機

部隊司令官清水誠一中佐

アルビオン方面軍（アルビオン大陸 シティ・オブ・サウスゴータ  
郊外ホープ基地）

軍司令官・・・平賀大将兼務

## 陸上部隊

歩兵部隊・・・1個中隊540名。附属補給隊120名。（装備は

トリステイン方面軍と共通)

部隊司令官・・・熊崎卓也中佐。

砲兵部隊・・・1個小隊80名。 附属補給隊40名。(装備はトリステイン方面軍と共通)

部隊司令官・・・久保田純少佐。 75mm野砲12門

戦車部隊・・・43式装甲車18両

部隊司令官・・・樋口喜一郎少佐。

保安隊・・・1個小隊20名

## 航空部隊

戦闘機部隊・・・1式戦闘機「隼」6機。 43式1型(OS1型)

零式艦上戦闘機改12機。 43式2型(OS2型)「バツファロー」艦上戦闘機20機

部隊司令官・・・柿崎信仁中佐

爆撃機部隊・・・99式襲撃機6機。 SBD「ドントレス」(OB1型)12機

部隊司令官・・・若林弘樹少佐

練習機部隊・・・43式1型(OR1型)「赤とんぼ」中間練習機12機

部隊司令官・・・ジル・ベンジャミン特務中尉

回転翼機部隊・・・UH60Jヘリコプター1機

部隊司令官山田明雄中佐

## 水上部隊

部隊司令官小林武中将

第一打撃戦隊(外洋諸島ハシラ島基地所属)・・・巡洋艦「おおよど」

第一水雷戦隊(外洋諸島ハシラ島基地所属)・・・駆逐艦「ゆきか

ぜ」「かえで」「さかき」

第一航空戦隊（トリステイン王国ラ・ロシエール基地所属）・・・  
強襲揚陸艦「にぎつ丸」

第一潜水戦隊（アントン島基地所属）・・・潜水艦「呂501」「  
シエルクーフ」

第一輸送艦隊（トリステイン王国ラ・ロシエール基地所属）・・・  
油槽船「櫻丸」、輸送船「栄光丸」、「トランスシルバニア」

第一哨戒艇隊・・・300t級哨戒艇4隻

トリステイン海軍より運用委託・・・空母「ブリシングアメイン」駆  
逐艦「双月」「新月」

上記編成表はハルケギニア戦役開戦時の義勇軍各部隊の定数を表  
したものだ。半年前に比べて海上部隊を除く全ての部隊が質量共に大  
幅な増強がなされている。

この大幅な戦力増強は、もちろんガリア・ゲルマニアとの戦争に  
備えたものであり、現実にはガリア軍とゲルマニア軍に大打撃を与え  
ることに成功している。

ただし、これに伴って飛躍的に燃料と弾薬の消費量も増加してい  
る。義勇軍の燃料と弾薬はトリステイン・アルビオン・ゲルマニア・  
ロマノフで分散生産しているが、これが義勇軍にとっても大きなア  
キレス腱ともなった。

ハルケギニア戦役開始3日後には航空隊が燃料と弾薬の枯渇に陥  
り、大きくその活動を制限されている。

また開戦2週間目にはトリステインとアルビオンの生産工場に対

してテロ事件が発生している。幸い致命的な打撃は発生しなかったものの、テロを受けた3つの工場は2日間の操業停止と、警備していた兵士1名が戦死、2名が重傷、1名が軽傷となった。近代兵器を使い物資を大量に必要とする義勇軍の脆弱な部分を浮き彫りにしている。

新編成の鉄道警備隊と保安隊はいずれも第一線部隊配属不適格者から構成された部隊で、鉄道警備隊は列車に乗車しての列車・乗客保護を担う。保安隊はそれまで各部隊がローテーションで行っていたミライにおける警察任務を専任とした部隊。

両部隊とも戦時において、兵員抽出がままならないことに備えての処置から緊急編成された。部隊司令官はいずれも元傭兵経験者で、たった1個小隊ながら全体の指揮を執る初めてのハルケギニア人となった。

もう1つのレーダー部隊については電子機器を扱う関係から、ハルケギニア出身兵士が1人もいない逆の意味で稀有な部隊となった。同部隊にハルケギニア人兵士が正式配属されるのは1年後のことである。

航空部隊に関しては、新たに艦載飛行隊が組織されている。ただし編成上は基地航空隊に含まれ、機動艦隊が出撃する時だけ空母離着艦可能なパイロットによって暫定編成される手法が採られた。

なおアルビオン方面軍に在籍する部隊は留守と新兵教育の部隊を残して全てが、ハルケギニア戦役直前から開戦直後に掛けてトリスティンへ移動している。

また各部隊司令官については、その後指揮下に置く同盟軍司令官

とのバランスを取って、その多くが戦時特例で1〜2階級特進とされた。その内陸上部隊総司令官となった梶田中佐については、異例の3階級特進で少将となった。

水上部隊に関しては、新たに潜水艦「シエルクーフ」が加わっているが、義勇軍に拿捕された際に損傷したのでこの時点ではロマノフで修理中である。

輸送部隊に加わった「トランスシルバニア」号は、徴用した石炭炊きでトリスティン商船所属（義勇軍関係企業）の3000t級商船である。

#### 同盟軍編成表（開戦3週間後時点）

トリスティン王室銃士隊・・・歩兵180名（装備は義勇軍歩兵部隊と共通。ただしバイク・ジープ・トラックが少数配備されたものの機械化は達成されていない。）

部隊司令官アニエス・ミラン少佐

アルビオン王室ライオン師団・・・歩兵360名 砲兵60名 輜重隊100名（装備については義勇軍と共通。ただし機械化は銃士隊と同程度で未達成。）

部隊司令官ホーキンス中将（ただし総指揮権は義勇軍に委譲）

ロマノフ公国遠征部隊・・・歩兵360、砲兵120、輜重隊120（装備については、一部は義勇軍と共通だが、ほとんどは自国製）  
部隊司令官バイコフ少将

航空隊・・・戦闘機2機、練習機6機  
部隊司令官セルゲイ・ヒロセ少佐

義勇軍の同盟軍としてハルケギニア戦役に参加した部隊については、上記した3部隊が開戦直後から戦いに参加した。この他に少し遅れてラ・ヴァリエール領のケンプ大隊、さらにガリア亡命王室軍とゲルマニア革新軍が戦争開始半年後から戦闘に参加している。

銃士隊とライオン師団は装備が義勇軍とほぼ全て共通であったため、さらに共同演習を繰り返していたため、義勇軍の1部隊という感さえした。

しかしながらロマノフ公国軍は、部隊装備の多くが自国製（例えば小銃の半分は同国のスオミ6,5mm小銃）であり、用いる戦術も大きく違ったため開戦1ヶ月目のソナム会戦までの短期間の間に訓練を繰り返して、応急対策を行っている。

**東方義勇軍総解説 戦力編2（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。



## 小悪魔と春風の来訪 1

事件の発端とも言える出来事が起きたのはミライ西へ延長された路線が開通してから2週間ほど経ったころであつた。その日、新線区間を旅客貨物の混合列車が東のミライへ向けて走っていた。

「こら、エミール圧力を無駄にするな！！圧力計の針に注意しろ！！」

列車の先頭で客車や貨車を引つ張る蒸気機関車の機関室で機関長の小森が新米機関士のエミールに向けて怒鳴つた。

「は、はい！！」

「焦るな、慎重に行け。SLの運転っていうのはコツが必要なんだ。それが掴めるまではとにかく基礎を覚えることに専念しろ！！」

そう言つと、彼はエミールの肩を叩いた。そして今度はボイラーに石炭をくべているもう1人の機関士に声をかける。

「ジル、御苦労だがしっかり釜に石炭をくべ続けろ！火力を下げないように注意しろ！！」

「了解！！」

シャベルを持ったジルは笑顔で答えた。その顔を見て、小森は満足そうに頷いた。

小森は元国鉄の機関士。歳は今運転している運転手の倍以上の6

9歳。国鉄時代に蒸気機関車の運転を習った最後の世代であるが、民営化時に転職を余儀なくされ、その後は職を転々としていた。

20年近くそんな生活を続けていたが、2ヶ月前に才吉からスカウトされてハルケギニアにやってきた。そしてこの鉄道の機関士となった。ただし、彼自身は体力的に運転は無理なので、新人の育成が今の主な仕事であった。

彼が先ほどから声をかけているのも、トリスティン内で採用した19歳と18歳の平民だ。

彼らは当然これまで機械になんか触れたこともない。しかしながら、彼らは学ぶ姿勢と気持ちが強く、日々その能力を向上させていった。小森は新しい時代を作っていく若者の姿に満足していた。

そんな満足感を覚えながら、彼は運転室の側扉から前方を見た。線路は鬱蒼と木が生い茂る森の脇を直線に走っていた。見通しは良い。

すると、彼の視線に線路脇に倒れている人影のようなものが目に入った。

「ブレーキ！！一杯に掛ける！！」

咄嗟に小森はそう叫んだ。

いきなりの指示に驚いたものの、エミールはブレーキレバーを一杯引いた。

ガキイン！！

いきなり掛けられた急ブレーキによって、車輪からは赤い火花が飛び散った。そして列車はガクンと速度を落とし、乗っていた人間は前につんのめることとなった。

現在この鉄道の最高速度は運転手の完熟度が低いことと駅間が短距離であることから40kmに制限されている。だから、この時も列車は35km程度のスピードで走っていた。そのおかげで、さすがに短距離とまではいかないが、比較的短い距離で停止することが出来た。

「一体どうしたんですか、機関長？いきなり急ブレーキを掛けさせるなんて！？」

列車が停止すると、石炭をくべていたジルが咄嗟に捕まった運転室の支柱から手を離して機関長の小森に尋ねた。

「線路脇に人が倒れているのが見えた。だから、止めたんだ。」

その言葉に、ジルは訝しげな表情をした。小森が見間違えたのではないかと疑っているらしい。そしてもう1人の機関士の発言も、疑いを含んだものだった。

「人ですか？俺には見えませんでしたけど。見間違いじゃありませんか？」

運転席に座るエミールが体を後ろに向けてそう言う。しかしながら、小森は見間違いじゃないと確信していた。

「いや、確かに見えた。ありや間違いなく人だ。お前ら俺が年寄り

だからって疑ってるようだがな、こつ見えても、ワシの目は今でも良いんだぞ。」

事実彼の視力はなんと2、0だ。

しかしながら、2人の若い機関士たちは顔を見合わせていた。どうやら半信半疑のようだった。機関室でそんなやりとりが行われる中、車体の横から声が掛けられた。

「一体どうしたんですか？なんでこんな所で止まったんです？」

小森は直ぐに声のした方に行く。するとそこには、T1型小銃を担ぎ、義勇軍独特の茶色の制服を着込んだ兵隊が数名立っていた。

「ああ、警備のニコラ中尉。いや、前方の軌道近くに人が倒れているように見えたのでな。気になったから止めさせた。」

小森が見下ろす形で声を掛けた相手は、今回列車警護任務で乗り込んだ『東方義勇軍』歩兵部隊所属のニコラだった。

現在この鉄道を走行する列車には貨客問わず『東方義勇軍』から派遣された警備の兵士が4、6人乗り込んでいる。これは幻獣や盗賊に襲われることを警戒してのことだ。そしてその役目は、歩兵や砲兵など白兵戦闘訓練を積んだ部隊の兵士が交代で担当する。なお稀にはあるが、航空部隊や海上部隊の兵士がその任務に就くことがあった。

「その場所がどのあたりかわかりますか？」

列車の運行責任は小森が執っているが、軌道上の異常を調べる任

務の責任者は警備隊隊長のニコラにある。そのため、彼は直ぐに調査を行うことにした。

「急ブレーキを掛けたとはいえ、結構走ったからな。多分すぐ近くだと思う。ただし、列車の前方にはっていない。」

小森が列車の前方を指差すが、ちょうど車体下部から出る蒸気のせいで、前の方が見えなくなっていた。そこで、ニコラは直接調べに行くことにした。

「わかりました。おい、ウーノ！オゼット！前方の軌道とその付近の調査をするぞ。他の者は列車の周囲を警戒しろ！盗賊の罠かもしれない、油断するな！」

部隊の半分に当たる2人の兵士を自分に随伴させ、残り3名を列車の警備役として彼は残った。最新式の小銃を持った3名の兵士がいれば、自分たちが一時的に列車を離れても大丈夫と考えたのだ。

5人の兵士たちは、直ぐに言われた通りにした。

「了解！！」

彼の5人の部下は素早く動く。また、万が一に備えて小森たち機関士はいつでも列車が動き出せるようにしておく。

ニコラは小銃を構えながら、2人の部下を従えて慎重に機関車の前方へ向かって歩いていった。もちろん、常に後方へも意識を払っている。万が一盗賊の罠か何かであるなら、直ぐに列車の方に戻ら

ねばならない。

しかしながら、あたりはシーンと静まり返っていた。彼らの耳に聞こえてくるのは彼ら自身が発する足音と、時折機関車が吐き出す蒸気の音だけであった。

彼らが視界を塞いでいた蒸気の壁を抜けると、そこにはただ何の異常もない、森の脇を走るレールだけが見えた。しかし、すぐにあたりを見回したニコラの目に線路脇に人のような物体が倒れているが見えた。

「あれか！？行くぞ！！」

彼はその人影に向かって走った。直ぐに2名の部下も続いた。

倒れていたのは確かに人だった。しかも、なんと女性だった。

「女の子！？」

ニコラたちは首をかしげながらも、あたりの様子を伺いつつその倒れている娘に接近した。しかし、あたりに人が隠れている気配は全くない。

「どうやら罨じゃなさそうだな。」

ニコラは少女に近づくと、屈みこんで首筋を触った。

「脈はあるな。おいウーノ！列車に戻って担架を持ってこさせろ！確か客車に備えられていたはずだ。急げ！！オゼット、周囲に異常がないか確認しろ！！」

2人の兵士に指示を出すと、彼はその倒れている少女をじっと見た。歳は見たところだいたい17、8というところ。ハルケギニアでは大分増えたがそれでも未だ珍しい黒髪。そしてその格好も、ハルケギニアでは見慣れない物（後にブレザーと判明）だった。ただし、見覚えが無いわけではない。

現在彼が駐屯しているミライの街には、日本という国から来たという人間が住んでいる。彼らが着ている服と、同じような雰囲気、その少女の服からは感じられた。

少女の周りには、カバンなど持ち物らしきものはない。格好ととも、にずいぶんと不自然である。

（一体どこの人間だ？ミライに住んでいる日本人の中に、こんな格好した娘いたっけな？）

ニコラが首を捻っていると、周囲の搜索をしていたオゼット一等兵が戻ってきた。

「中尉、付近を一通り見ましたが、人が隠れているとか、幻獣が付近にいる気配もありあませんでした。特に異常なしです。」

「そうか、ご苦労。」

そして、そのすぐ後に、今度は列車に担架を取りに戻ったウーノ二等兵が走って戻ってきた。

「中尉、言われたとおり担架を持ってきました。」

彼は両腕で抱えていた折り畳み式の担架を地面に置いた。

「ようし。じゃあ、この娘を担架に乗せろ。乗せたらそのまま列車に収容して出発する。」

「え！？連れて行くんですか？」

オゼットが尋ねた。

「当たり前だろ、こんな所に寝かしたままほっとくわけにもいかないだろ。とりあえずミライまで行って、そこで降ろして病院に送る。わかつたら早く言われたとおりにしろ！！」

「了解！！」

ニコラに命令され、2人の兵士は少女を担架に乗せ、その上にやはり列車から持ってきた薄いモーフ掛ける。

兵士が少女を乗せた担架を列車に収容する間に、ニコラは小森らに報告を行う。

「軌道近くに倒れていたのは小森機関長の仰るとおり、確かに人でした。ケガなどはしていませんでしたが、念のため列車に収容してミライまで運ぼうと思います。なお、前方軌道上、ならびに列車周辺に異常は見られません。ですから、このまま出発してください。」

「わかった。1分後に出発する。君は客車に戻ってくれ。その少女はミライに着いたら駅員に引き渡そう。」

「はい。それじゃあよろしくお願いします。」



小森に向かって敬礼すると、ニコラは機関室から降りて、客車へと戻った。

それからきっかり1分後、機関車の汽笛が鳴り、謎の少女を収容した列車は20分遅れでその場を出発した。

小悪魔と春風の来訪 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 小悪魔と春風の来訪 2

トリスティン鉄道の運行技術などは、基本的に異世界地球の日本から供与されたものであるが、さすがに運転技術が難しい蒸気機関車を使っているため、秒刻みのダイヤまでは導入していなかった。だいたい、世界的に見て秒刻みで列車を動かす国などない。外国人に言わせれば、日本の正確すぎる鉄道のダイヤはクレージーなのだ。

それでも、さすがに列車の到着が20分も遅ればかなりの遅延である。ミライ駅では駅長や駅員がようやく到着した列車の姿を見て安堵するとともに、当然遅延の理由を尋ねようとする。彼らは機関車の機関室に駆け寄ろうとした。

だが、その前に客車の扉から駆け下りた列車警備隊隊長のニコラ中尉が、集まっていた駅員たちへ向けて言い放った。

「途中で病人を收容した。直ぐに病院へ連れて行って欲しい。」

もちろん、これだけでは駅員たちも事情が良く理解できないから、ニコラはより詳しい事情を駅員たちに説明した。そしてそこで、駅長以下の人間たちは列車が遅れた理由を理解し、さらに收容した病人を病院へ送るための手配をする。

ニコラたち警備隊は少女のことを気にしたもの、終点のトリスティア到着まで乗るのが彼らの任務であるから、少女を駅員に引き渡すと、そのまま列車に再び乗り込んで出発した。

その後、駅員たちに身柄を渡された少女は、そのまま彼女によってミライ市内の病院に運び込まれることとなった。

そして医師が診た結果、多少の疲労は認められるものの、特に外傷や病気の徴候らしいものは見られず、しばらく休めば目を覚ますから大丈夫だろうということになった。

そんな騒ぎから数時間後、ミライの駅にトリスタニアを出発した下り列車（トリスタニア方面は上り）が到着した。

この時期ミライの街の発達は著しく、外から観光目的でやってくる人間も増えていた。特に娯楽目的で造られた映画館には入館料が安価なことに加えて動く映像を見られる新鮮さから、連日トリスタニアからもたくさんの客が訪れていた。

その他にも、義勇軍に志願するために地方からやってくる若者とか、義勇軍兵士やミライの街の住人への商売を当て込んで各地からやってくる商売人、行商人も多数いた。

そのため、その列車からも多数の乗客が降りたわけだが、その中にルイズと才人の姿があった。

義勇軍兵士である才人はともかく、彼の妻になったとはいえ現在トリステイン代王の座にある彼女が何故ここにいるのかといえば、それはお忍びでの国内における国民生活の状況を視察するためであった。もつとも、実際のところそれは名ばかりで、本当は堅苦しい王宮から出るためと夫である才人に会うための口実であった。

またマザリーニ枢機卿が聞いたら、胃が痛くなりそうな話であった。もつとも、ルイズの場合、根は真面目な努力家であるから、仕

事はきちんと終わらせている。彼女はそこまで無責任な女ではなかったわけだ。

だから、マザリーニをはじめ大臣たちも、「仕事をちゃんとやってくれれば。」と大目に見る。彼女が夫と会える機会が少ないというのも、その心理を後押しする形となっていた。

一方、彼女の夫である才人は、もはや口で言っても彼女がやめないことぐらいしかりとわかっていたし、それに彼自身彼女と自由に会える時間があるのは悪いことではないので、彼女から連絡を受けると苦笑いこそするものの、黙認していた。

さて、そんな彼女であるが、最近はずがに外に出る時は姿勢好を変えている。別にこれは王宮からの追っ手対策とかではなく、ガリアやゲルマニアからの暗殺者を警戒してのことだ。

ちなみにどんな感じで変装したかという点、その特徴とも言えるピンクのブロンドを魔法薬で染めていたし、服も才人に用意してもらった義勇軍の大尉階級が付いた第2種軍装を着ていた。

「それじゃあ才人、どこに行く？」

列車から降り、駅を出たところで才人の腕に自分の腕を絡ませながら、ルイズが聞いてきた。その顔は満面の笑顔である。

「そうだな・・・映画館はすごく混んでいるだろうし・・・買い物でもするか？」

「じゃあ、そうしましょう?。」

2人はミライの街にある商店街の方へ向かって歩き始めた。トリスタニアに比べればまだまだ規模は小さいが、ミライの街にも商店の数が増えてきた。この内、いくつかの店では地球から持ち込まれた物品が売られていて、珍重されていた。特に衣服は強く、着心地も良く、洗濯もしやすいということで人気商品だった。

これに目をつけて、才吉や才助、さらにミライの街の役人（当然地球出身者）たちは地球から服飾工場や、その従業員を丸々誘致する作戦を展開している。

まあとにかく、この日の午前中一杯、才人とルイズは夫婦水入らずで久しぶりにショッピングを楽しんだわけだが、その楽しい時間は唐突に打ち切られることとなった。

お昼過ぎ、2人はミライの街のすぐ傍にある義勇軍基地にいた。なんでここに移動したかといえば、これは義勇軍の食堂ならただになるという才人の貧乏人染みた提案によるものだった。

午前中の買い物で金を使った彼にはそうするしかなかったのだ。  
（彼は様々な所で自腹を切っていた。）

もつとも、ルイズとしても彼に金を使わせたことは良くわかっていたし、さらにミライの街にあるレストランや食堂はどこも一杯で使えないのだから仕方がなかった。それに基地内なら安全面で街より良い。

そういうわけで、トリステインの代王様が軍隊の士官用とはいえ、食堂で食事を摂るというなんとも奇妙なこととなった。

まあ幸いだったの、食事が不味いということはなく、むしろ美味

しかったこと。それに加えて、ハルケギニアでは滅多にお目にかかれないような類の食事が食べられたことだろう。

義勇軍の調理兵は、ほとんどが現地採用の志願兵だが、その教育にはハルケギニア出身の料理人もいれば、地球出身者もいたため、自然と出せる料理のレパートリーも自然と増えた。それに加えて土気の観点から、幹部たちの方針で上手い料理を出すよう指示がなされていたこともプラスに働いていた。

そんなわけで、珍しい地球の料理を食べられて、なおかつ味も良かったのでルイズも最初は御機嫌斜めであったが、食事が終わるころには上機嫌になっていた。

食事が終わると、2人は食後のお茶を飲みながらお喋りを楽しんでいた。そんな中、突然1人の兵士が才人の下へとやってきた。

「失礼します。平賀中佐、基地司令がお呼びです。」

「父さんが？今すぐに？」

才人が怪訝な表情をする。自分が呼び出される理由が全く見つからなかったからだ。

「はい、至急だそうです。内容は直接話すそうです。」

「わかった。」

兵士は任務を終えると、来たときと同様さつさと出て行った。

「才人のお父様、一体何のようかしら？」

「さあ、わかんない。けど、至急っていうのが気になるな。とにかく、行かないと。ルイズも一緒に来てくれ、ここに1人残していくわけにいかないから。」

「わかったわ。」

2人は机の上に置いておいた帽子を被ると、食堂を出て基地司令官室へと向かった。

トリステイン王国の首都であるトリスタニア中心部から西へ8 km 程行った所にある小規模な街がミライである。この街を中心にして東に2 km、西へ8 km、さらに南北に5 kmのほぼ長方形に近い形の土地が平賀伯爵領、すなわち才人の父親である平賀才助伯爵の領地となっている。

『東方義勇軍』トリステイン方面軍総司令官でもある彼が管理するこの土地はもとも王家直轄地であったものを、アルビオン解放戦争後、その戦功を認められて彼が伯爵に任命された時領地として下賜されたものだ。その内半分近くは義勇軍用の土地とされたが、残りは普通に住民が住める土地とした。

彼の場合現代日本人であるから、ハルケギニアで幅を利かしている封建政治体制が住民に与える影響というものを良くわかっていた。そのため基本的に彼が領地で行っていた政策は他の領地で顕著に見られた搾取ではなく、住民の暮らしに重点を置いたものだった。

他の領地に比べて遥かに低い税率、基本的にメイジ・平民関わら



ず平等を謳った領地法の発布がその筆頭に挙げられる。

こうした住民重視の政策と、義勇軍の規模拡大による基地周辺における市場の誕生が平賀伯爵領の住民を急速に増大させ、さらにそうした人々が集中して移住したのは義勇軍基地周辺（一応領地法によって安全のために、民間の施設は基地と一定の距離を保つことが決められている）だった。そうして出来上がったのがミライの街である。

ちなみに、才人の曾祖父である才吉が所有する領土であり、『東方義勇軍』アルビオン方面軍が駐屯するシティ・オブ・サウスゴータでも同様の現象が見られた。

この時点において、まだ街として設定されてから半年ちよつとしか経っていないにもかかわらず、ミライの街の人口は定住人口だけでも2000人を超えていた。そのため、ミライの街は出来た時から建設ラッシュであった。

もつとも、ただがむしやらに街を拡大されては後々大問題を引き起こしかねないので、特に戦時や、テロ発生時に際して迅速に住民が避難でき、なおかつ義勇軍が展開や移動を出来るようにするひつようがあった。そこで、街が形成され始めた直後に才助は幾つかの方針を決定していた。

それは車両の進入や路面電車などの建設を見越して大通り、ならびに裏通りを含めて道路の幅の規格を設定しその規格に合わせて建設することや、伝染病対策として下水道の整備。また街の地理を複雑化させないために一定の区画に区切る等である。

もちろんこうした開発計画は才助だけが決めたものではなく、地

球からスカウトしてきた元建設業者だとか、市役所の職員と言ったエキスパートたちの助言を受けながら完成されたものだ。さすがに伯爵位持ちの才助と言えど、専門外のことを1人で進めるには限度がある。任せすぎも問題だが、やはり餅は餅屋に任せるべきなのだ。

とにかく、そう言う訳でミライの街は初期の頃を除いて非常に整理された綺麗な街となっていた。造られたばかりの頃は人々から広すぎるとまで言われた大通りは、その分幅に余裕があるために人や馬車が安心して安全に通行できた。

そんな大通りを、時折クラクションを鳴らしながら、義勇軍のマークをつけたサイドカーが走り抜けていった。運転しているのは若い将校で、本来機関銃が取り付けられる位置にある側者に取り込んでいるのは茶色のブロンド髪的女性将校だった。

「ねえ才人、その才人のことを知っている女の子に心当たりはあるの？」

走行中、側車に乗った少女・ルイズが少しばかり不機嫌な声で運転している将校・才人に向けて言った。

「うーん・・・ないことはないけど、そうだとってもそんなお前が気にするような相手じゃないよ。だいたい俺には地球に彼女なんかいなかったし。それに俺が愛した女はお前だけなんだから。変な心配するなよ。」

そう言つと、才人はぎこちないウィンクを彼女にした。

「う・・・そ、そう。それなら良いわ。」

ルイズが才人の言葉に少しばかり顔を赤くしながら答えた。

さて、2人がどうしてサイドカーに乗ってミライの街中を走っているかという、それにはちゃんと理由があった。

昼食を義勇軍基地の食堂で終えた2人であったが、そこで突然才助の呼び出しを受けた。別に呼び出される理由などないはずであったが、とりあえず2人とも才助の元へと向かった。そしてそこで聞かされたのが、今日の朝鉄道の線路近くで収容された少女についてだった。

その少女は列車に乗り込んでいた義勇軍の警備隊に収容され、そこからミライ駅の駅員を介して、ミライ病院へと運び込まれた。

ミライ病院は、ミライの街の端にある病院だ。ミライでは、駅を除いて重要施設は街の端に設置されていた。万が一災害やテロが街の中心部で起きても、被害が集中しないようにとの配慮からだ。

現在病院に勤めているのはたった2人の医師と、数人の看護士だけだ。そのため病床数も10以下という、病院というより診療所だった。それでも、ハルケギニアでは初めて科学的な医療を施す施設であった。

その病院から少女が目覚め、それとともに彼女が自分は日本人であると言ったと報告してきた。最初彼女はここが異世界だと説明されて混乱していたが、医師が平賀の名を口にした時、才人の名前を出したという。

そこで才助は才人を呼び出したのだそうだ。最初は夕方彼が戻ってくるまで待つつもりだったが、折よく彼がルイズとともに基地に

来たという報告が入ったので、そこで足止めしたのである。

才人もルイズも、折角のデートを中止することは嫌であった。しかしながら、日本人がいきなり現れたとあつては放つてはおけない。しかも才人の名前を口にしたというのは大いに気になることであつた。さらに言えば、地球に帰った時に友人から言われたもう一人の行方不明者のことが彼の頭をよぎつた。

だから2人は、才助の命令を受け入れ、サイドカーを借りると街外れにある病院へと向かった。ちなみに、本来王位についているルイズは行く必要などない。現に才助はそのまま警備をつけてトリスタニアへ送ることを提案したのだが、彼女の強い希望によって、才人は彼女を連れて行くことになった。

ルイズには、才人の名前を知っている女というのがどうにも気になつたらしい。だからこそお目付けの意味を込めて付いてきたのだ。

結婚した今多少目移りはしても、才人の場合根は一筋だからルイズを裏切るような真似をするはずがないのだが、どうにもルイズは自分の目で見ないと気がすまなかつたらしい。

そんなわけで、ルイズは基地を出てから才人に色々詮索しているわけだった。

才人は、そんな彼女を宥めていた。ちなみに彼の言葉とか仕草は、両親その他の人々が教え込んだらしいのだが、詳細は不明である。

基地から病院まではおよそ2 km。2人を乗せたサイドカーは、10分で病院に到着した。

小悪魔と春風の来訪 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

### 小悪魔と春風の来訪 3

ミライの街外れにあるミライ病院に到着した才人とルイズの2人は、サイドカーを降りると早速病院内へと入った。病院は2階建ての建物で、完成してから日が経っていない真新しい建物だ。もつとも、これはミライの街にある建物の多くに言えることであるが。

ミライの街は街自体が出来てから1年も経っていない若い街である。だから真新しい建物ばかりだし、現在も各所で建物の建設が続いていた。

地球で言えばヨーロッパに地理が似ているハルケギニアの場合、火竜山脈に近いガリアや、いくつかの火山をその半島内にもつロマリアを除けば、地震は滅多に起きない。（作者の独自設定）だから、建物を建てる時は現代日本のように神経質なほど頑丈に建物を建てる必要はない。だから、短期間で建物が建てる事が出来る。これは急速な人口増で建物を増やす必要があるミライの街にプラスに働いていた。

加えて、才吉らはそれだけで需要に追いつかないと考えて地球からプレハブ工法や小型のブルドーザーやクレーンなどを導入して建物の急速建設を進めた。大型のクレーン車やブルドーザー、ショベルカーなどの重機がないために、さすがに高層ビルを建設することは出来ないが、今必要とされている2〜3階建て程度の建物ならハルケギニアの技術でも可能だった。

こうして、ミライの街では短期間の内に建物数を飛躍的に増やしていった。

そんな感じで最近建てられたばかりの病院の建物であるが、前にも記述したとおりまだ医者数が充分にそろっていないために、実質的には診療所と言えるほどこじんまりとしていた。

才人たちが建物の中に入ってすぐにある受付のベルを鳴らすと、看護師が応対に出てきた、

「はい、何の御用でしょうか・・・ああ、才人。それに、なんでルイズまでいるの？」

その小柄な女性看護師は、才人とルイズのよく知っている人物だった。そしてその声を聞いて、ルイズは驚いた。

「え！？まさか、その声・・・タバサなの！？」

ルイズは目を丸くして聞いた。確かに、そこにいたのはタバサとシャルロット・エレヌ・オルレアンだった。

ただし、ルイズが驚いたのは彼女が今ここにいることではなかった。

3ヶ月前、ガリアの追っ手を振り切るためと、毒のために精神異常をきたしていた母親の治療のために彼女は地球（日本）へと向かった。

その後、正常な精神状態に戻った母親のリハビリを手伝いながら、

彼女は地球で生活していた。彼女たちの身元引受人となったのは、才蔵の友人でありタバサの母親の治療とリハビリを担当した医師の横山であった。また、タバサを生活面でいろいろサポートしたのはその息子で、アメリカ人とのダブルであるストークであった。

横山らが定期的に送ってきた地球からの報告によれば、タバサの母親の治療は順調に進み、さらに日本での生活も慣れないながらもとかこなしていたという。特にタバサは大量の本が溢れている現代日本をいたく気に入ったらしい。日本語を短期間でマスターすると、ブツ オフなどで大量の本を買い込んで、暇な時には読みふけていたそうだった。

そんな至福の時を過ごしていた彼女であったが、日本での生活基盤がない上に、ハルケギニアがきな臭い状況となったために、一旦戻ることにした。

そして先日の新月を利用して帰ってきた彼女たちであったが、さすがに魔法学院やオルレアン公邸に戻るのは危険であるため、変装してミライの街で働いていた。

ルイズはここまでは才人から報告を受けていたために知っていた。彼女が驚いたのはタバサが以前とはあまりにも違う姿をしていたからだ。それほど、彼女の変装は上手かった。一目見ただけでは、「本当にタバサ？」と思えるくらいに印象が変わっていた。

特徴的な青い髪は魔法薬か染料で茶髪に染め、その髪自体以前より大分伸びている。彼女のトレードマークとも言うべき眼鏡も外していた。また服装も当然病院で働くから白衣なのであるが、これもそれまで学院の制服を着ているところばかり目になっていた者には新鮮な印象を与えていた。さらに、顔に薄く化粧を施していることも



見逃せない。

本当に彼女は上手く化けていた。実際、ガリアの密偵が彼女の存在に気づけなかった程だ。

「そう。」

ルイズの問いに、タバサはただ一言そう言った。

「いやあ、俺も最初会ったときはあんまりにも違うもんだから驚いちゃったよ。タバサは変装が上手いよな。」

才人も感心しながら言う。だが、今話すべきはそんなことではない。そのことを、タバサはピシヤリと指摘してきた。

「今はそのことは関係ない。それより、2人とも用があつて来たんでしょ？」

「ああ、そうだった。ええと、今日の朝運び込まれた女の子がいたよね？」

才人の問いに、タバサはコクンと頷いた。

「父さんからその娘が俺の名前を言ったから会って来いって言われて来たんだけど、どこにいるかな？」

すると、タバサは一瞬ルイズの方を見て、笑った。

「ちょ、ちょっとなんで私の顔を見て笑うのよ!？」

「別に、ルイズは相変わらずと思っただけ……付いてきて、案内する。」

どうやらタバサは、どうしてここにルイズがいるのか見抜いたようだ。

「こら！答えなさいよ！！」

自分の質問に答えようとしないうタバサに声を荒げながら言うが、病院の中では迷惑である。だから、才人が宿める。

「ルイズ、ここは病院の中、静かにしろよ。タバサに言いたいことがあるなら後で好きなだけ外でもすれば良いじゃないか。」

「う……わ、わかったわ。」

そして受付の中からタバサが出てきた。

「さあ、こつち。」

タバサに案内され、2人はその娘がいるという病室へと向かった。

病院の中は閑散としていた。現在この病院を使う人間はまだまだ限られている。地球からの移民者はそうでないが、ハルケギニア人からしてみれば治療は水魔法と言う概念が強いらしい。そのせいで患者は少ない。

もつとも、現在医師も看護師も限られた数しか存在しないから、今はむしろ助かっていた。いずれ医師が増えたりした時に備えて病床はいつでも拡張できるようにされてはいるが、あまり進んでいる

とは言い難かった。

とにかく、そんなシーンとした病院内の奥の部屋に2人は通された。

タバサがその部屋の扉をノックした。

「先生、才人たちが来ました。」

「通して下さい。」

中からした横山医師の声に従って、タバサは扉を開けて中に入った、続いて才人とルイズの2人も部屋の中へと入った。

部屋は入院患者用に用意された個室の一つで、中にはベッドが一つと小さな机が一つあった。そして、ベッドにはその少女が上半身を上げた状態で横になり、ベッドの脇では診療用の椅子に横山が両手に筆記具を持って座っていた。

「先生、こんにちは。」

才人が帽子を取って挨拶をする。それに対して、横山も挨拶を返そうとした。

「ああ、こんにちは「平賀君」!!」

横山の言葉は、少女の声によって遮られた。

「「「「「!?!?!」」」」」

他の4人は、驚いてその少女の顔を見た。黒い髪と黒い目のその少女に、才人だけは見覚えがあった。

「もしかして・・・高風さん？高風春奈さん？」

才人が恐る恐る聞くと、その少女は笑顔で答えた。

「そう。嬉しい！本当に会えるなんて！！」

その少女、高風春奈はそう言って喜んだが、才人の表情は逆に渋いものになっていた。

（また厄介なことに・・・）

彼のこの予感、その後の中することとなる。

「ちょ、ちよつと才人！一体どういことなのよ！？その娘は一体誰なのよ！？」

見知らぬ少女が才人の名前を嬉しそうに言ったことで、ルイズの表情は不機嫌な物になる。バイクに乗っていた時、才人はルイズに特に彼女なんかいなかったと言ったが、やっぱりルイズはそれで納得しなかったようだ。

「え！？あ、えつとこの娘は・・・」

才人は春名についての説明をしようとしたが、それをとうの春名が遮った。

「あの平賀君、一体ここはどこなの！？なんでそんな格好してるの？それにその女の子は誰？」

「え！？ちょ、ちよつと待って！」

説明の途中でいきなりそう言われたものだから、才人は狼狽してしまふ。

さらに、説明を途中で止められたルイズが表情を厳しくした。

「こら才人！！ちゃんと質問に答えなさいよ！！」

「いや、そんなこと言われてもだな。」

「ねえ、平賀君。私の話も聞いてよ。」

「ああ！もう！2人ともとりあえずいつぺんに話さないでくれ！！」

2人同時に話されて、才人にとってはいい迷惑である。彼には聖徳太子のように、複数の人間の話を一回で聞き取れるような器用なことは出来ないからだ。

しかしながら、才人の言葉にも関わらず2人の少女は自分の方を優先しようとするので全く埒があかない。そのままいけば修羅場になるところであつたが、才人にとって幸運なことに、今回はそばに冷静な人間がいてくれた。しかも2人も。

「君たち、とりあえず落ち着きなさい。平賀君も困っているじゃないか！」

見かねた横井医師がルイズと春名の2人に向かって言った。

さらに、才人たちの後ろにいたタバサも、いつもどおり冷静な口調で言う。

「2人とも黙って。このままじゃ話が先に進まない。」

横井とタバサの言葉で、ようやく2人とも一端黙った。才人はなんとか修羅場一歩手前で助かったのである。

そして才人は仕切りなおして、まずルイズに春名のことを説明する。

「彼女は高風春名さん。俺が通っていた高校の同級生で、クラスの学級委員長をやった人だよ。この間地球に帰った時、友達から行方不明になっているとは聞いたけど、まさか本当にハルケギニアに来ていたなんて。俺もビックリしているよ。」

なんとなく才人としては、予感があったが恐ろしいことにその予感的中してしまった。そしてこれは間違いなく厄介なことであった。

「そういうことだったの。けど、なんで才人の同級生がハルケギニアにいるのよ？」

ルイズが首を傾げる。

「それはこれから調べることだよ。とりあえず彼女の話の聞かないと。」

才人は顔をルイズのほうから、春名の方へと向ける。

「ええと、それじゃあ高風さん・・・」

才人は彼女のことを苗字で呼んだが、すぐに春名が言った。

「春名でいいよ、平賀君。」

「じゃあ春名、とりあえず今の状況に説明するね。まず、ここは・・・」

才人はそこからかなり長い説明をすることとなった。ここが異世界ハルケギニアであること。目の前にいるルイズによって『使い魔』として召喚されたこと。そしてその後やってきた人や、この世界で出会った人と一緒に義勇軍を結成してトリステインのために働いていることなど・・・

全部説明するのに、10分ほど掛かった。

「・・・というわけだけど、わかった？」

説明をし終えた所で、才人は確認をとる。普通なら有り得ないことばかりだから、彼女がなんらかの反論をするのかと才人は考えていた。しかし、彼女はしつもんはしたが、その内容は才人の予想していたものとは違った。

「ええと、それじゃあ平賀君が突然いなくなったのは、異世界に呼び出されたからだっただけの？」

「え！？うん、そういうことだけ。」

「そうだったんだ・・・」

そう言って彼女は少しばかり嬉しそうな表情をした。

予想外の反応に才人は少々驚いたが、話を先に進めることにした。

「それで、春名は一体どうやってこの世界に来たの？」

「どうやってって言われても、ある日街の中を歩いていたら、突然目の前に光る鏡みたいな物が現れて、その中に入ったら何時の間にか見知らぬ場所に出ていて。」

春名が少々困った表情で言った。彼女にもよくわからない所が多いのだろう。しかし、才人とルイズには大いに心当たりがあった。

「それって？」

才人がルイズの方を見る。

「『サモン・サーヴァント』？」

『サモン・サーヴァント』、つまり彼女が使い魔として呼び出されたのではと2人が考えたのは至極当然のことだった。才人自身は鏡に入ったわけではないが、光に包まれることは知っている。

才人は彼女に質問している。

「それじゃあ、春名は誰かの使い魔ってことか？」

しかし、彼女は首を横に振った。



「それが・・・そこから先の記憶がボンヤリとしか思い出せないの・・・覚えているのは暗い部屋に閉じ込められていたことと、森の中を走ったことだけ。」

その言葉に、才人とルイズは再び顔を見合わせてしまう。

あまりにも状況が不自然だった。彼女が現れたこともそうだが、記憶がないということ、さらに断片的に彼女が言う記憶もかなり怪しげなものであった。

「本当にそれだけしか覚えてないの？」

才人が確認を取ると、彼女は頷いた。

「横井先生、ということでしょうか？」

才人は専門家に意見を伺った。

「考えられるとすれば、なんらかのショックで記憶喪失になっているか、もしくはこの世界特有の理由、魔法が何かに関係しているかもしれない。ただ可能性としては魔法の確立が高いと思うね。実は午前中、ストークと一緒に催眠術を試してみたけどだめだった。」

「あ、そうだったんですか？あれ、けどストークさんいたんですか？」

ストークは横井医師の息子であり、歳は才人と大して変わらない。だが、それで既に大学は卒業しているというから恐れ入る。アメリカにいた頃、飛び級で合格したという。しかも、多くの分野に精通しているので、才人も一目置いている人だった。

「あいつは午後から西の駐屯地の看護兵に医療指導をしに行っていて、今はいないんだ。」

横井がそう言い、才人は納得した。

「あ、そういうことでしたか。それにしても、魔法による記憶喪失となると、怪しいな。」

才人の言葉にルイズも頷いた。

「そうね、メイジが関わっているのは確実だし、それにその娘の言う暗い部屋に閉じ込められていたというのも気になるわ。」

「どうも嫌な予感がするな。」

「同感。悪いことが起きなきゃいいけど。」

2人は表情を真剣な物にした。

一方、そんな2人の表情に驚きつつも、春名が才人に質問した。

「そう言えば平賀君。」

「うん？何？」

「平賀君が手につけている指輪って、まさかとは思っけど、結婚指輪？」

春名はどうやら、才人が左手の薬指につけていた銀の指輪が気になったらしい。

「ああ、そうだけど。それが何か？」

「え！？」

彼女が驚愕の表情をする。さらに、追い討ちをかける形でルイズが言った。

「ちなみに、妻は私よ。」

ルイズは才人から貰った指輪をこれ見よがしに見せた。その結果。

「そんな、平賀君が結婚・・・」

春名は気絶した。

「ちょ！ええ！！」

「な、なんで気絶するのよ！？」

「大丈夫かね！？」

タバサを除く3人が、ぶっ倒れた彼女に駆け寄った。

小悪魔と春風の来訪 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 小悪魔と春風の来訪 4

才人とルイズがいきなり気絶した春名を見て絶叫してから数時間後、夕日で空が赤くなり始めた頃、ミライの街にとある集団がやって来ていた。

その集団は数台の馬車に分乗してやって来たが、街の入り口で検問中だった警察任務の義勇軍兵士に止められた。

「止まれ！！」

臨時憲兵隊の隊長であったサイヤ少尉が片手にT3短機関銃を抱え、馬車の前に立つてもう片方の手を上げると、集団は止まった。

「はい、なんでしょうか？」

いきなり止められてので、先頭の馬車に乗っていた女性が顔を出して言った。

「あんたたちは、見たところ・・・旅芸人の一座か？」

サイヤは馬車に乗っている人間や、乗せられている荷物を見て尋ねた。

「そうです。我々は旅芸人、正確には劇団です。私は座長のウエザリーです。」

その女性、ウエザリーはそう言って馬車から降りた。ハルケギニアにおいて、旅芸人という存在は決して珍しいものではない。街や

村を回って公演をする。ただし、誘拐や犯罪を行っているのではないかという実しやかな噂も流れているが。

「劇団ってことは、この街には公演で来たんですか？」

サイヤは態度を穏やかにして聞いた。

「ええ、そうです。私たちはトリステインの国内を回りながら公演をしています。用がないなら、もう行ってもよろしいでしょうか？」

すると、サイヤは首を振った。

「すみません、一応簡単に荷物を調べてよろしいですか？」

「はあ？どうして？」

ウエザリーが怪訝な表情を浮かべた。

「どうしてと言われても、我々も良くわからないんですよ。2時間ほど前にうちの司令、この領地の領主なんですが、その人から街の外からミライへ入る車両や人に簡単な検査をするよう命令がありましてね。それを受け付けられない方には、強制退去していただいております。」

サイヤも少しばかり首を傾げながら言った。

これは一体どういうことかと言うと、実は数時間前春名がいきなり気絶したことに驚き、さらにルイズから問い詰められる（幸いこれはタバサと横山医師のおかげで助かった）というアクシデントに見舞われたものの、彼は春名と、彼女から聞いた話を電話で父親の

才助に報告した。

才助は彼女が助けられた位置と、さらに証言の内容から彼女を拉致したという人物がこの近くにいた可能性があり、もしかしたらミライの街へ侵入する可能性もあると判断して、急いで義勇軍の一部を緊急動員して不審者搜索と、検問の設置を命じたのだった。

加えて、サイヤは理由を知らないと言ったがこれは嘘で、実際は簡単な説明を受けている。嘘をついたのは、それについては口外無用と申し渡されたからだ。

ちなみに、義勇軍が憲兵となって警察任務に出動するようになったのにはちゃんと訳がある。

当初領主となった才吉と才助は、独立した警察組織を作ろうと画策した。しかし、そもそも警察組織という物自体が未発達のハルケギニアにおける警察作りは人々の理解不足も相まって難航し、さらに相手がメイジの場合は、地球の警官の武装程度では役に立たない可能性まで出てきた。おまけに指導役の人間のスカウトも、珍しく上手くいかなかった。これが解決するにはもう少し時間が必要であった。

結局、仕方が無いので治安維持任務に加えて領地内における警察任務までを義勇軍が行うこととなった。この任務も列車警護任務と一緒に交代制で、陸上部隊の小隊30名がローテーションを組んで3日単位で任務に就く。また陸上部隊が全て出払った場合は海上や航空部隊の人間が従事することもあった。

警察任務に就く時も、基本的に義勇軍兵士の服装と武装は変わらない。ただ一点だけ違うのは、腕に英語でMP、ハルケギニア語で

憲兵と書かれた腕章を巻いていることだけであつた。才助の出した領地条例ではこの腕章を巻いている間だけは警察権を行使できるところになつていた。

「この領地の領主様の命令ですか・・・ならば仕方ありませんねわかりました。気は進みませんがお受けしましょう。」

ウエザリーは渋々ながら認めた。

「ご協力感謝します。おい、皆馬車の荷を調べろ!!」

サイヤは部下に命じて芸人一座が乗ってきた馬車を調べさせる。また自分自身は無線を使ってこの事を上級司令部に連絡した。しかし、馬車からはこれと言って特に怪しい物が出てくることは無かつた。

無線連絡を終えたサイヤは、兵士たちが荷を調べる様子を見ながら、ウエザリーと話をする。

「ところで、この街で公演なさると言いましたね？」

「ええ。」

「だったら、一度役所に行ってください。この街では、なんらかの商売をする者は役所に行つて書類申請をする必要がありますので。忘れると無許可営業で逮捕されますから。」

「わかりました。」

最初はそんな感じで話をし始めたのだが、サイヤはあることに気



づくと、ウエザリーに尋ねた。

「ところで、ウエザリーさんはメイジですか？」

そう聞かれて、ウエザリーは別に驚きはしなかったものの、怪訝な表情をした。

「ええ、そうですが。どうして？」

「いや、なんとなく。そんな気がしたので聞いてみただけです。しかし、そうなると貴族ですか？」

すると、ウエザリーは表情を少し暗くした。

「昔はそうでした。けど、今は違います。ちょっと訳あって一族全員爵位を剥奪されたので。」

その言葉に、サイヤは気の毒そうな表情を浮かべた。

「そうだったんですか。失礼しました。・・・最近多いですからね、貴族位の剥奪・・・時代は変わったな、メイジの貴族は減る一方で平民の貴族は増える一方だ。実はこの街の領主も、平民出身なんですよ。それがレコン・キスタとの戦いで戦功を挙げて、前女王陛下のアンリエッタ様から直々に伯爵位をいただいたんですよ。」

「ほう、そうですか。」

意外なことに、ウエザリーの返事は素っ気無い物だった。

その後、2人はたいわいもないことを2、3話し合った。そして

ようやく部下の1人が報告にやってきた。

「隊長、荷物の点検終わりました。特に不審物は出てきませんでした。」

「御苦労。それじゃあウエザリーさん、どうぞ行ってください。御協力感謝いたします。」

サイヤは彼女に向かって敬礼した。

「それでは。」

ウエザリーは頭を一回下げると、馬車に乗り込んだ。旅芸人の一団は何事もなかったかのように、ミライの街へと入っていった。

その姿をサイヤたちは見送ったが、一団が行ってしまったところで、部下の1人が彼に近づいて言った。

「サイヤ少尉。」

「なんだ？マーチン一等兵？」

「どうも気になるんですが。」

「何が？」

マーチンは何か腑に落ちないような表情をしていた。

「劇団員の態度がですよ。協力的ではあったんですが、何人かが自信に満ちたような表情をしていたんです。まるで、何も見つかるは

ずがないだろって言いたいような。荷物を調べられた割には、ちょっと変な気がしたんですよ。」

「うーん・・・お前もそう感じたか。実はちょっと俺も気になることがある。」

「何がですか？」

「座長のウエザリーだよ。いくら爵位剥奪されたからって、メイジが劇団の座長なんかやるもんかな？見たところ獣人の血が混じっているようだったし、どうも気になるな。」

「どうしますか？」

「よし、一回司令部に連絡を入れておこう。それにだ、よく考えたら全国各地を回る劇団ならスパイ活動にも有効だ。やっぱり怪しい。」

彼はそう結論付けると、司令部に連絡をいれるべく、無線機のほうへと歩いていった。

いきなりぶつ倒れて気絶した春名であったが、2時間ほどしてからなんとか目を覚ましてくれた。その間才人は、直接襲われることはなかったが、ルイズの世にも恐ろしい視線を浴び続けることとなった。

「それじゃあ、春名だったわね。どうして私と才人のことを聞いて

気絶したのか説明してもらおうじゃない。あ、そう言えば名前を言  
ってなかったわね。私の名前はルイよ、よろしく。」

顔に笑顔を浮かべながらも、まるで何かを取り調べるかのように  
聞くルイズ。最近は大分直ったとはいえ、彼女の嫉妬深さは未だ健  
在である。

ちなみに、ルイと彼女は名乗ったが、これは別に間違いではなく、  
彼女が外に出る時、顔見知りの人間以外に便宜的に使っている偽名  
である。

「よろしく、ルイさん。」

「ええ。それで話を元に戻すけど、どうしてさっきいきなり気絶し  
たのか、理由を教えてください？」

先ほどと同じように質問するルイズ。一方、聞かれた方の春名は  
優れない表情をして、少しばかり俯き加減で答えた。

「ええと・・・そ、それは・・・その・・・ええと・・・あの・・・  
その・・・ええと・・・何と言うか・・・」

どうも言いたくなさそうである。しかしながら、そのはつきりし  
ない歯切れの悪い答えは余計ルイズを苛立たせたのであった。

「はつきり答えなさいよ!!」

さすがに見かねた才人がルイズに声を掛けた。

「ちよっと落ち着けよ!!病院の中だぞ!!」

「む・・・」

昔だったらさらに怒り続けていたところだが、さすがに王位に付き、さらに結婚しただけはあり、冷静に状況を判断したルイズは不満気な表情をしたが、一端は黙った。成長していない所もあるが、大分成長しているところも彼女にはあるのだ。

黙ったルイズに代わって、今度は才人が春名に聞いた。

「春名、そんなに言い難いことなのか？」

すると、彼女は小さく頷いた。

「うん、特に平賀君の前では。」

この言葉はルイズの神経に少しばかり触った。

「才人には言えないですって。」

そしてキツと彼女は鋭い視線で才人を睨んだ。

「ちょ、ちょっと待てよ！何で俺の方を一々睨むんだよ。だから俺と春名はただの同級生だって言ってるだろ！それ以外何にもないよ！」

だがそんな言葉で疑念を解くほどルイズは甘くない。

「どうだか。考えてみればあんたって意外ともてるからね。どこでこんなことがあったかわかったもんじゃないわ。シエスタっていう

前科もあるし。」

ルイズはシエスタの事例を引き合いに出した。ちなみに、このシリーズじゃあまりそういうシーンはなかったが、彼女の才人に対する見方や行動は、才人とルイズが婚約し、彼女が菅野と出会った時まで原作とほぼ変わらなかった。

一方、そんなことを引き合いに出された才人はうんざりした表情で言い返した。

「本当にお前って、その手のことについては疑り深い奴だな。それじゃあ、春名から本当のことを聞けよ。俺は部屋から一端出るから春名、それならこいつに話してやれるか？」

才人の問いに、春名は再び小さく頷いた。

「ようし、なら決まりだな。じゃあルイ、春名からしっかり話を聞いとけよ。」

「・・・」

こうして、才人は一端病室から出た。

「全く、本当にああいう所だけは変わらないな。」

才人は病室から出ると、ルイズに対する文句をブツブツ呟いた。もっとも、言葉とは裏腹に、そういうところも彼が彼女を愛する一因であるとは、本人すら気づいていなかった。

とにかく、彼は部屋から出ると彼女に対する文句を1人誰にも聞かれることもなく小さな声で呟いていた。

そんな所へ、タバサがやってきた。

「あれ？どうしてここにいるの？」

「ああ、タバサ。実はさ……」

才人はここまでの経過を簡潔に話した。

「……そういうわけでさ、俺は外に出て2人で話が出来るようにしたんだけど、春名のやつなんで俺には言えないんだろ？それにルイズの奴もあんなに俺を疑いやがって。」

最後はルイズへの文句になっていたが、タバサはその部分はスルーして、いつもどおりの口調で言った。

「今までの状況と、春名の行動から考えて、導き出せる答えは1つ。」

「え！？なんだよその答えって。」

才人はせかすように聞いた。ところが、タバサから返ってきたのは意外な言葉だった。

「わかったけど、あなたには言えない。」

「え！？なんで？」

「答えはあなた自身が春名から聞くべき。」

この言葉に、才人は口をあんぐりと開けてしまった。それが出来ないからタバサに聞いたのに。これでは本末転倒である。

「ちょっと待てよ。春名が言いたがらないのにどうやって聞けば良いんだよ!？」

そんな彼の問いにタバサは明確には答えず、ただ一言こう言った。

「彼女の気持ち次第。」

そして彼女はスタスタと歩いていつてしまった。そしてその場には、再び才人1人だけとなった。そして彼はうめくように言った。

「訳分からねえ!!」

才人は女心という物にはとことん無知であった。ルイズに関しては親や友人の助けがあったから良かったが、やはり1人ではどうにも出来ないらしい。

そんな感じで彼が頭を抱えた時、病室の扉が開いてルイズが出てきた。

「才人？」

「ああ、ルイズ。話は終わったのか？」

「終わったわよ。」



すると、彼女は才人の肩に両手を下ろし、溜息を吐きながら言った。

「あんたって、とことん罪な人間ね。」

「な！？どういう意味だそれ！？」

「どういう意味もこういう意味もないわよ。言ったそのままよ。春名が気絶しちゃったのもわかるし、彼女が才人の前で言いくそにした理由もよくわかったわ。本当、あの娘には同情しちゃうわよ。」

両手を広げてそんなことを言うルイズ。もちろん、才人にはその言葉の意味が全くわからない。

「とにかく、あの娘が気絶したのも、言いくそにした理由はわかったわ。ただし、これは才人があの娘から直に聞くべき問題よ。・・・そういうわけで、あとはあんたとあの娘の問題よ。言っとくけど、私はあんたが裏切らないって信じてるからね。」

強い口調でルイズは言ったが、才人にはやはり全くわけがわからなかった。

彼がこの答えを知るには、いましばらく時間が必要だった。

「まあ、この話については一端終わりにして、それよりもあの娘が今後どうするか考えてあげなきゃいけないから、才人とりあえず部屋の中に戻りなさい。」

「あ、ああ。」

ルイズに言われて、才人は病室に入ろうとした。結局、才人はこの問題について考えることを止めた。これ以上考え続けても頭がこんがらがらただったからだ。彼は頭のスイッチを切り替えて、再び病室の中へとはいった。

小悪魔と春風の来訪 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 小悪魔と春風の来訪 5

『東方義勇軍』の歩兵部隊と砲兵部隊はミライの西に作られた新駐屯地に移動したが、司令部とその警備部隊（歩兵部隊や補給部隊から抽出）は相変わらずミライ基地にいる。だから、今回ミライ市街地の治安維持任務の出動命令を下した才助もここにいた。

もつとも今回の出動、確証が特にあるわけではなく、もしかしたら杞憂に終わるかもしれない可能性が高かった。しかしながら、それならそれで実戦に即した訓練と考えれば別に無駄なことではない。それに出動した兵たちにとっても手当てが出るから悪い話ではない。

一応航空部隊も即時臨戦態勢に入り、各機市街戦支援任務装備（小型爆弾や対建造物用ロケット弾）を装着しているが、実際に出撃するか不透明なので、隊員達の間には流れる空気は穏やかなものだった。

そんな感じであるから、基地の作戦室内の空気も張り詰めたという感じには程遠く、むしろどこか楽観するようなものさえあった。

ところが、そんな空気を一変させる報告が入ってきた。

ミライ基地の作戦室は作戦の内容によって使う部屋が分けられている。例えば、遠方での海戦や航空戦を含めた複合的な大規模作戦を指揮する場合は、長距離通信可能な無線機や電信機、さらに戦況を即時に表すことが出来る大型のボードを置いた作戦室を使用する。

一方、航空戦単独や局地的な戦闘、治安維持任務などの場合は規模に合わせた、より小規模な作戦室が用意されている。

今回使用しているのは後者の小規模作戦室で、小型の作戦ボードにはミライ市周辺の地図と、配置した各部隊を表す駒が置かれていた。また無線機担当の兵士も1人だけである。

そんな作戦室の無線機に通信が入った。

「レッドリバー2、レッドリバー2、こちらレッドリバー4、応答願います!!」

レッドリバー4とは発信者に与えられたコードネーム、レッドリバー2は今回司令部に振られたコードネームだ。レッドリバーは訓練などでよく使われるが、後ろの番号がどの部隊に振られるかは毎回その時その時で変わる。

無線担当の一等兵は直ぐに返信する。

「こちらレッドリバー2、感度良好。通信を続けられたし。」

「レッドリバー4了解。平賀司令を出してください。報告があります。」

「レッドリバー4、しばらく待て。・・・平賀司令!!」

一等兵は直ぐに作戦室内で部下と打ち合わせをしていた才助を呼んだ。

「何だ!?!」

「街の西口警備担当の部隊、レッドリバー4から入電。報告がある

そうです。」

「わかった。」

才助は直ぐに無線機のそばへと移動した。

「レッドリバー4、こちら司令の平賀だ。」

才助がマイクを取り、通信を始める。

「レッドリバー4分隊長のサイヤ少尉です。実はちよつと報告がありました。」

サイヤは先ほど臨検した旅芸人の劇団の件についての報告を始めた。

「一体何だ！？……旅芸人の劇団？それがどうした？……なるほど、確かにちよつと怪しいな。わかった。こちらで一応手を打っておく。お前たちはそこで任務を継続してくれ！報告ご苦労だった。他に何かあるか？」

「いいえ、ありません。」

「了解！オーバー！」

通信を終えると、才助はマイクを一等兵に返し、新たな命令を下す。

「通信兵、すまないがすぐに街の中心部にいる部隊を呼び出してくれ。」

「了解。レッドリバー1、レッドリバー1、こちらレッドリバー2、応答願います。」

一等兵が呼び出しを行っている間に、才助は作戦ボードを担当する兵士に命令を出す。

「すぐに仮想敵の駒を置け！街の中央にだ！」

命令を受けた兵士は、直ぐに言われたとおりに盤上に仮想敵を表す黒い駒を置く。それが終わると、ちょうどよく無線のほうが繋がった。

「レッドリバー1が出ました。通信できます。」

才助は再びマイクを手に取り、街の中心部で警備行動をとっている筈の部隊と通信を開始した。

「レッドリバー1、平賀だ。」

「こちらレッドリバー1、分隊長の内田中尉です。どうされました？」

「内田中尉、まもなく役所に旅芸人の劇団一行を乗せた馬車が行くはずだ。その一行を君の部隊で監視しろ！！君たちの代わりの部隊はちゃんと送るから、今言った任務を優先してくれ。」

「了解しました。しかし、なんで旅芸人の一座を見張るんですか？」

内田の不思議そうな声が伝わってくる。

「西口警備担当の部隊から、その一行に不審な点があることが報告されている。まだ確証があるわけじゃないが、万が一ということもありえる。だから監視を命令した。それじゃ不満かな？」

「いいえ、わかりました。すぐに実行します！」

「頼むぞ。オーバー！」

彼は通信を終えると、先ほどと同じようにマイクを一等兵に渡した、そして今度は直ぐに部屋から出て行こうとした。

「司令、どちらへ行かれるのですか？」

補佐役の大久保特務大尉が言った。

「ちょっと司令官室へ行つて王宮に電話してくる。その間は君が指揮を執れ、何かあったら直ぐに私のところへ連絡しろ！」

「了解しました。大久保大尉、指揮を執ります。」

「よろしく頼む。」

2人は互いに敬礼した。そして才助は作戦室から退室した。

司令官室へと移動した才助は、机の上に置かれた電話機を取る。当初は限られた場所にしか通じなかった電話も、最近では科学技術



研究所の協力もあつて電話線が延び、さらに手動ではあるが交換装置を整備しつつあるので、随分と使い勝手が良くなった。

才助は交換台を呼び出すと、直ぐに王宮へ繋げるよう指示した。現在王宮にある電話はルイズの部屋と、マザリーニ枢機卿の部屋にそれぞれ1基ずつ設置されている。通常何かあればルイズの部屋へ掛けるが、今彼女は王宮にいないから代わりにマザリーニの部屋の方へとかけた。

数分ほど待つて、回線が繋がり、しばらく呼び出し音が続いた後でマザリーニがようやく出た。

「はい、マザリーニですが？」

「枢機卿ですね？義勇軍の平賀です。」

「ああ、才助殿。どうされましたか？先ほどの電話では、義勇軍が出勤したが特に心配要らないと言ったばかりじゃないですか？」

実は一応ルイズがミライの街にいたので、才助は一回既に電話を彼に掛けていた。

「ええ、先ほどはそうだったんですが、ちょっと気になることがあります。」

「気になることですか？」

「はい。実は・・・」

才助は先ほどサイヤから受け取った話の内容をマザリーニ伝えた。

「・・・というわけでして、そこをお願いがあつて電話したのです。」

「何でしょうか？」

「その劇団の団長と名乗った女性、ウェザリーという人間について調べてもらえないでしょうか？王室なら、貴族位を剥奪されたメイジの記録などがあるんじゃないかと思つて。」

「なるほど、そういうことでしたか。わかりました。直ぐに書庫の者に命じて調べさせましょう。ただ時間は掛かると思います。」

生憎とさすがに『東方義勇軍』と繋がりが深い王室といえど、記録管理にパソコンが導入されているわけではない。全て紙の資料である。その中から該当する記録を見つけ出すのは簡単ではない。もちろん、才助はそれくらいのことは理解していた。

「わかつています。よろしく願ひします。」

「わかりました。ところで、殿下は大丈夫ですか？」

「才人がついているはずですから、大丈夫だとは思ひます。それに何かあつたらすぐに連絡が来るはずで。あとこの後直ぐにこちらから呼び出して、基地で保護しようと考えています。今日中に帰れるかは微妙になりますが、彼女の身の安全を最優先しますので。ご迷惑をお掛けします。」

「いえいえ、殿下の身に何が起きてからでは遅いですから。どうかよろしく願ひします。それでは、後ほど。」

「ありがとうございます。こちらこそよろしく願います。」

通話を終わると、才助は受話器を置いた。そして、直ぐに再び上げた。

「交換台、すぐにミライ市病院、そこにいるはずの平賀才人を呼び出してくれ!!」

「春名はやっぱ地球に戻りたいよね？」

病室に戻った才人は、今後の春名の処遇をどうするか彼女自身に問うていた。

「もちろんよ。お父さんやお母さんのいる地球に早く戻りたいわ。」

春名は当然と言わんばかりに頷いた。

「それじゃあ、次の新月の便で戻れば良いね。春名は運が良いね、新月を介して行けるのは、あの地球だけだから。」

「へえ、そうなんだ。」

「けど才人、次の新月は3週間後よ。それまではどうするのよ？」

ルイズが指摘してきた。この世界での新月は月一回（ただし新月の前後数日間も利用できる。）だけだ。前回の新月は2週間前であつたから、次の新月まではまだ2〜3週間ある。

「うーん・・・取り敢えず、それについては・・・」

その時病室の扉が開き、タバサが入ってきた。

「才人、あなたのお父さんから電話が入ってる。」

「父さんから？何だろう？・・・わかった。ごめんルイ、春名、ちよつと待ってて。」

「うん。」

「わかった。」

才人は一端部屋から出ると、タバサに案内されて電話のある部屋へと向かった。

この病院の電話は院長室に引かれていた。才人は院長室へと入る。

「ああ、才人君。お父さんから電話だよ。」

中にいた横山院長が受話器を差し出してきた。

「ありがとうございます。」

才人は受話器を受け取り、通話を始めた。

「もしもし、才人だけど。」

「才人か？今のところ何も起きてないか？保護した娘さんは大丈夫か？」

才助はいきなり質問を始めた。

「うん、大丈夫だけど。どうかしたの？」

「実はだ。さっきのお前の電話を受けてな、念のためと思って街の入り口で不審車両がないか検問を試みたんだ。」

才人は父親の言葉に仰天してしまった。あんな曖昧な情報で軍を動かし、検問を張るなんてどうかしていると思ったのだ。

「父さん、あんな不正確な情報で義勇軍を動かしたの？」

才人は呆れながら言った。だが、才助はそれを気にするようなことはせず、そのまま会話を続けた。

「万が一ってこともあるからな。それに空振りでも、良い訓練になる。まあ、それはさておき、実はその検問中に気になる情報が入った。」

「気になる情報！？」

「ああ、実はだ・・・」

才助は先ほど街の西口の憲兵から届いた情報を才人にも話した。

「なるほど・・・確かに怪しいと言えば怪しいね。」

「ああ。だから今すぐルイズさんを連れて基地へ戻れ。出来るならその娘さんも連れて来い。無理ならこっちから車かサイドカーを回す。」

「それについては大丈夫だよ。なんとか3人なら乗れるから。」

今回才人が乗ってきたのはサイドカーだ。ただしバイク自体は大型であるから、後ろに乗せる形で2人乗りが出来る。あとの1人は側車に乗せれば良い。

「ようしわかった。それからお前、今なんか武器持ってるか？」

「拳銃と音響閃光弾は持つてる。それから後、バイクにデルフがある。」

「なら大丈夫そうだな。それじゃあくれぐれも気をつけてな。事故なんか起こすんじゃないぞ！！敵に襲われて負けるより恥ずかしいことだからな。」

「わかってる！！」

才人は通話を終わると、受話器を電話に戻した。

「才助司令官が電話してくるなんて、何かあったのかね？」

後ろから横山が声を掛ける。もちろん、電話の内容をそのまま彼に言うわけにはいかない。一応軍事機密である。今回の場合、直接の関わりがない民間人の彼に言うべきことではない。

「いいえ、特になんでもありません。ところで、春名は身の安全を考えて基地へ収容したんですけど、大丈夫ですか？」

すると横山は気軽に言った。

「ああ、特に体に異常はなさそうだから、大丈夫だと思うよ。」

「それじゃあ、今から基地へ連れて行きたいんですけどいいですか？春名からは他にも色々聞きたいこともありますから。」

「わかった。だがもし、なんらかの異常があつたら直ぐに報せてくれ。」

「はい。それじゃあ、失礼します。」

才人は院長室を出て、2人がいる病室へと向かった。

病室へ戻った才人は、すぐに才助に言われたとおりに行動する。

「ルイズ、春名。悪いけど、今すぐ基地へ移動するから、外に出られるようにしておいてくれ。」

「何かあつたの？」

「うん。ちょっと詳しくは話せないけど、とにかく基地へ行く。俺はバイクのエンジンを掛けておくから、2人は準備を整えて外へ来てくれ。」

才人は2人の返事も聞かないまま、部屋の外へと出て、玄関の前に止めておいたサイドカーの元へと行った。

バイクに乗ると、才人はエンジンを掛けた。そしてエンジンが掛かると、そのまま暖機運転を行う。その間に、側車に置いてきぼりにしたデルフを取り出し、背中に担ぐ。

「デルフ、起きてるか？」

ここの所めつきり出番が少なくなったデルフ。そのため、時々へそを曲げて声を掛けても返事をしないことがある。

今回はそこまで機嫌は悪くなかったらしく、返事をくれた。

「なんだい相棒？」

「もしかしたら出番が来るかもしれないから。それだけ言うておく。」

すると、デルフは飛び上がるような声で喜んだ。

「何！？本当か！！」

「ああ。ただし絶対じゃないし、それに街の中走るからその時まではお喋りするなよ。」

「へいへい。」

デルフのどこか気の抜けた返事を聞きながら、才人は持っている他の武器の確認も一応しておく。腰のホルスターに入ったコルト拳



銃と予備の弾倉、懐に入っている2個の音響閃光弾。それらに異常がないか見ておく。

「よし、異常なし。」

ちょうどそこへ、ルイズと春名がやってきた。

「お待たせ才人。」

「うわあ、すごい！平賀君こんな大きなバイクの運転できるんだ！  
！」

サイドカーを見て春名が驚きの声を上げた。

「まあね。さ、春名は側車に乗って。ルイズは悪いけど、俺の後ろに乗ってくれ。」

そう言った途端、春名は少しばかり暗い表情をし、ルイズは哀れむような目で彼女を見た。

「うん？どうかしたのか？」

「ううん、なんでもないよ平賀君。ええと、側車っていうのはそっち側についている部分で良いよね？」

「ああ。ルイズも早く乗れよ。」

「うん。・・・本当に鈍感な奴。」

ルイズの呟きはエンジン音にかき消され、才人の耳には届かなか

った。ルイズは才人の後ろに跨り、彼の肩を持った。

「しっかり掴まっているよ。それじゃあ、出発。」

才人はバイク用のゴーグルを掛け、サイドカーをスタートさせた。

小悪魔と春風の来訪 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 小悪魔と春風の来訪 6

病院を出てか30分後、才人らの姿は『東方義勇軍』トリステイン方面軍司令官室にあった。待ち構えていた才助は異世界からの闖入者である春名を温かく歓迎した。

「ようこそ高風春名さん、ハルケギニアへ。私は『東方義勇軍』トリステイン方面軍司令官をしている平賀才助中将です。」

当然のごとく、その名前に春名は反応した。

「平賀？じゃあ！？」

「ええ、私はそこにいる平賀才人中佐の父親です。」

春名は一体何がどうなっているのか、わからないという表情をした。

「才人からはまだ簡単な説明しか受けていないでしょう。ですから、具体的な説明をしましょう。とりあえず、そこにお座りください。」

義勇軍の司令官室は狭い。それでも、来客の訪問に備えて何とか4人が座れるくらいの椅子は用意されていた。もしよっぽど重要な人間相手ならば、貴賓室を使う。

今回は春名という存在の特殊性から、ここで話し合う。才助は3人を座らせると従兵に命じて何か飲み物を持ってくるように言った。

「それではまず、どうして才人の父親である私がいるのか。そして

どうしてこの世界で義勇軍を編成して戦っているのかご説明しましょう。」

才助は日食を使って家族でこちらに召喚された才人を追ってきたこと。その後起きた『レコン・キスタ』との戦争でトリスティンを守る決意を固め義勇軍を編成したこと。さらにその義勇軍には大勢のこちらに飛ばされてきた人間や、発見した地球とのルートを使ってスカウトしてきた人間が働いているのを説明した。

その間に若い、恐らく才人より少し年下ぐらいの従兵が緑茶の注がれたコップと茶菓子を持ってやってきた。義勇軍では日本人将校が多いため、お茶は緑茶の出る回数が多い。ただし、茶菓子はさすがに和菓子ではなくクッキーだった。

「・・・それで、現在のところは次に起きる可能性が高い戦争に備えて軍備を拡張しているところです。あなたから見たら、野蛮かもしれません。がこちらでは残念ながら未だ話し合いだけで物事を押し通せないのです。まあ、批判するしないは個人の勝手ですから。」

才助は最後にそんなことを言って笑った。

「はあ・・・まあ、私にはまだ何とも言えません。」

才人は少しばかりその気持ちが判った。平成の日本で育って来た彼女にとって、戦争や軍隊等は縁のないものだ。仮に知っていてもそれはTVや映画、新聞の中の話でやはり距離がある。

ましてやここは異世界だ。それだけでも理解するのに苦労するはずなのに、さらに軍隊や戦争と言われてもすぐにはピンと来ないだろう。

「そうですか。ところで、あなたは地球へ帰ることを望んでいるで良いですね？」

「はい。」

春名は強い意志を込めて言った。

「わかりました。2週間後の新月の夜に地球へ飛ぶ飛行機が出ます。それに乗ると良いでしょう。ただし。」

「ただし？何ですか？」

「ここで見たこと聞いたことは一切他言無用でお願いします。一応こちらの世界のことは秘密になっていますので。」

義勇軍のことは地球では秘密である。隊員にもそのことは徹底されていた。今回のように迷い込んだ人間を地球へ送り返すというパターンは初めてであるが、それで義勇軍やハルケギニアのことが世間一般にばれたら、それこそ目も当てられない事態になりかねない。

非情なようだが、もし彼女がNoとでも答えたら、才助は彼女の帰還を拒否するようなことさえ考えていた。

だが、幸いにも彼女が出した答えはYesだった。

「わかりました。このことは絶対に、誰にも話しません。」

その答えに、才助は満足げな表情を浮かべた。

「それは良かった。出発の際にはまた誓約書にサインしてもらうことになるでしょう。それでは次に、出発までについてです。先ほども言ったとおり、出発可能な新月の日まで2週間ほどありますのでもちろん、あなたの安全については我々が保障することとなります。ですが、2週間何もしないというのはさすがにつらいでしょう。」

「そうですね・・・けど、私今まで働いたことなんてありませんし。」

すると才人が言う。

「別に無理に働いて欲しいってわけじゃないよ。」

「けど平賀君、何もしないなんて悪いし。それに平賀君のお父さんの言うとおり、つらいと思うし。」

「働くにしても、あなたぐらいの人でも出来ることはありますよ。事務や会計、書記の仕事の中には日本語で文書を取り扱っている場所もあります。義勇軍だけではなく、ミライの街にも日本人はたくさんいますから、そこでの仕事だって見つけようと思えば見つけられます。」

「はあ・・・」

彼女は非常に困ったような顔をした。

「まあ、それについてもすぐにパツと決められる物ではないでしょう。もう夕方ですし、今日はこれくらいにしておきましょう。寝床と着替えについては限られたものしか用意できませんが、用意させていますので、ゆっくりお休みください。従兵！」

才助はもう一度先ほどの従兵を呼び出した。

「先ほど用意させた部屋に彼女を案内して差し上げる。それから服もだ。」

「わかりました。さあ、こちらへどうぞ。」

彼は春名を促した。

「それじゃあ、俺たちも。」

才人とルイズも彼女に付いて行こうとしたが、それを才助が遮った。

「ああ、才人とルイズさんには話がある。ちょっと残ってくれないかな。」

「「え!?!」」

「あの。」

春名の方は知っている人間と離されることが不安らしい。

「御安心を、我が軍の兵士を信じてやってください。才人たちも話が終わったら直ぐに向かいますから。」

「わ、わかりました。」

「それじゃあ春名、また後で。」



従兵に案内され、彼女は部屋から出て行った。

「彼女は不安でしようがないんだろうな。未知の異世界に飛ばされれば当然だが。」

彼女を見送った才助がそんなことを口にする。

「それで父さん、俺たちに話したいことって何だよ。」

「ああ、実はだな。」

才助は先ほどミライ警備中の部隊から入った報告と、マザリーニ枢機卿に電話したことを話した。

「確かにそれはちょっと怪しいな。けど、決定的な証拠はないんだろう?」

「その通りだ。こちらとしても万が一であればと願っているよ。ただし、何を言ってもここはファンタジーな魔法が存在する世界だ。何が起きても不思議じゃない。」

そこへルイズが口を挟む。

「けど、仮にその劇団が怪しいにしても、春名と結びつけるのは飛躍しすぎじゃありませんか?もちろん、彼女の記憶がない部分とかは私にも気になりますけど。」

「その通りですルイズさん。しかし、記憶がない部分については我々の身近にその手の魔法を使える人間もいますし。」

その言葉に、才人とルイズの表情が強張る。

「テファ……」

「『虚無』……」

2人は顔を見合わせた。

「それ以外にも先住という魔法もある。さらに恐ろしいのは、そうした魔法を使う連中がガリアやゲルマニアと繋がっていることだ。シェフィールドという女の例もある。まあ、本当にあくまで最悪の事態だけだね。」

実際の所、事態はその最悪一步手前であることが間もなく判明することとなる。才助がそう言った直後、司令用机の上に置かれた王宮直通回線の電話が鳴った。すかさず才助が取った。

「もしもし？……マザリー二枢機卿からか、繋いでくれ。変わりました平賀です。……なんと！……そうですね。その魔法について防ぐ手立ては……それだと時間が掛かりますね。ですが他に方法がないなら念のためお願いします。代王殿下は……わかりました。」

才助は受話器を置いた。そして2人に方に振り返って言った。

その日の夜。人々が寝静まり、夜の静けさに包まれたミライの街を忍者のように動く小さな影があった。その影は何か箱のようなも

のを抱えていた。

「戻った。」

「御苦労ハッチャー2等兵。で、どうだった？」

「あつた。これ。」

ハッチャーと呼ばれた2等兵は持っていた箱を自分の分隊の指揮官であるローレンス少尉に手渡した。

ローレンスは早速その中身を確認する。箱の蓋を開けると、その中身は驚くべき物であつた。

「こいつは・・・黒色火薬だ。」

彼は手で掬つた粉を見て瞬時に判断した。

「てことは、総司令官の感が当たつたつてことですか？」

部下の1人が声を掛ける。

「ああ。普通の演劇集団なら剣程度を持つならわかるが、こんな纏まつた量の火薬を持つなんて有り得ん。テロを行うか、はたまた密輸か。どっちにしろ危険だな。おいハッチャー、これ一個だけだったか？」

すると彼は首を横に振つた。

「馬車1台に2個。皆下に括り付けられていた。」

「わかった。ハッチ、御苦労だった。休んでいて良いぞ。」

愛称で呼ばれたハッチャーは小さく頷くと、彼らのもとから離れていった。

「全く若いのに中々優秀ですね。」

下士官の1人がそんなことを言った。

「ああ、あいつを今度新設される部隊への転属を認めたのは失敗だったかもしれない。だが後の祭りだな。とにかく、今は連中のことを本部に伝えよう。」

「了解。」

2人は今部下によって得られた情報を義勇軍本部に伝えるべく、動き始めた。

小悪魔と春風の来訪 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 小悪魔と春風の来訪 7

少しばかり時系列は戻って夕方、才人とルイズ、さらに洗濯のために義勇軍の軍属用制服に着替えた春名を含めた3人は義勇軍基地の食堂（食べ物全将兵共通）で食事を摂っていた。春名はそこで出された日本食を見て少しばかり安心したようであった。そしてその味に舌鼓しつつ、3人は会話を弾ませた。

もつとも既にハルケギニア暮らしが長い才人と違って、春名にはその知識がほとんどなかった。そのためルイズと才人、さらには集まってきた同年代の義勇軍将兵がハルケギニアの様々なことを春名に伝え、逆に春名が言う地球のことでハルケギニアでは全くわからないことを、判りやすい言葉や例えを出して一同に説明した。

夕食は一気に楽しく、賑やかなものとなった。

「楽しい。こんなに楽しい夕食は久しぶりだな。」

春名が食事の終わり際そんなことを言った。

「そうなの？」

才人が首を傾げて言う。

「うん。私の家結構賤に厳しいから、食事の間はほとんど喋らなくて。だからこんなに沢山のひと話しながら食事するのは、中学校の修学旅行以来かな。」

春名はそう言って満面の笑みを浮かべる。才人はそんな彼女を見

ながら、すこしばかり複雑そうな表情をした。

「どうかしたの？」

「いいや、なんでもないよ。」

不思議そうな表情を浮かべる春名に対して、才人はそう言って疑問をはぐらかした。

「そう言えば才人。」

ルイズが声を掛けてきた。

「何だ？ルイ。」

義勇軍基地内部とはいえ、才人は彼女をもちろん偽名で呼んだ。

「春名が泊まる部屋って私の部屋の隣よね？」

「そうだよ。だからルイ、もし春名が困っているようだったら助けてやってくれ。」

「わかっているわ。」

ルイズは素直に承諾する。

「お願いしますね、ルイさん。」

「ええ。さ、食べ終わったから食器を片付けましょう。才人、この後何する？」

その言葉に、才人は少しばかり困ってしまった。春名が一緒にいるために、無闇に街へ出ることは出来ない。かと言って義勇軍の基地内で出来ることは限られてくる。ビデオやDVDも持ち込まれているのだが、大変人気であるため見ようと思ったら慰労会で見えるか、書類で申請して待たなければならない。

「そうだな・・・春名もいることだし何かで遊ぶか。と言っても、3人じゃ中途半端だな。チエスとかは2人でするもんだし。トランプするのに3人じゃちよつと味気ないもんな。カルロでも誘うか。」

「誰それ？」

春名が初めて聞く名前に首を傾げた。

「俺の部下。というか一緒に飛行小隊を組んでいるパイロット。ようし、あいつを呼ぼう。そうすれば4人になるから、トランプも面白くなるし。」

というわけで、才人はちょうど非番であったカルロ兵長を呼び出して、自室で皆と一緒にトランプをして遊ぶこととなった。ただの紙のゲームであるトランプではあるが、意外とこれははまると時間を過ぎるのを忘れてしまう。

大富豪、婆抜き、七並べ、神経衰弱、ダウトなどを4人は思いっきり楽しんだ。

そして時刻は消灯の時刻となった。一応軍隊なので、消灯時刻は決められている。そのため4人はそれぞれの部屋で休むこととなった。



「それじゃあお休みなさい。」

「才人、春名、お休み。」

「ルイズも春名もお休み。」

「今日は楽しかったです。お休みなさい。」

才人とカルロは男のため、2人とは部屋が離れている。そのためルイズと春名を部屋まで送ると、自分たちの部屋へと戻って行った。

夜、24時間体制の部署であるレーダー室や司令部とは違い、将兵が休む宿舎は静寂に包まれていた。その闇の中動く影が1つあった。その影はある部屋の前に来ると、鍵を細い針金のような物でこじ開けて、静かに中へと入った。

部屋の中では、ベッドで眠っている人間の姿があった。部屋の中に進入した影は、その人物に近付いていく。両手には細い紐のような物が手にされていた。

ゆっくりと、眠っている人間を起こさないよう静かに近付いた。そして一端止まり、紐の様な物を、首筋と思われるところへ向けようとした。

その瞬間影の口元が動く。もちろん、相手に気づかれぬよう声は出していない。だがもし読唇術が出来るものだったら、こう言った

のがわかるだろう。「死ね。」

影が紐の様な物を一気に眠っている人物の首筋に押し付けようとした時、その影にとって予想外の事態が起きた。

ガチャ！という金属的な音がしたのだ。

そして影はその音源を見て驚愕するしかなかった。眠っていると  
思った人物の腕が布団から出ていた。そしてその手には自動拳銃が  
握られ、真っ直ぐ影のほうへと向けられていた。

さらに追い討ちを掛けるように、影に向かってベッドの中から声  
が掛けられた。

「こんな時間に何の用でしょうか？」

その声に、影は驚きのあまりついに声をだしてしまった。

「だ、誰だお前！？」

それまで掛け布団のせいですっかりと姿が見えなかった人物が、  
起き上がって影の前にその姿を晒した。義勇軍の二等兵曹服に身を  
包んだ、黒髪の若い女性だった。

「な！？あの女はどうした！？」

「ルイさん・いいえ、ミス・ヴァリエールは既に王宮へと戻られ  
ましたよ。高風春名さん。私は航空隊所属のシエスタ・菅野二等特  
務兵曹です。さあ、手を上げて下さい。逃げようとしても無駄です  
よ。」

起き上がった少女、シエスタは入ってきた影、春名に向かってそう言った。そして間髪おかず部屋の扉が開かれ、電灯が点けられた。

春名が振り返ると、そこには才人を始めとして数人の義勇軍兵士がコルト拳銃を構えて立っていた。

「春名、やっぱりお前……さ、逃げ場はない。大人しく投降してくれ。」

才人は春名に降伏を要求した。だが、春名は信じられない行動に出た。

「!」

持っていた紐状の物を才人たちの方へ投げつけ、才人らを怯ませた。そしてその隙に、なんと突進して体当たりを掛けてきた。

「『うわ!』」

才人は拳銃を持っていたので『ガンダールヴ』の力をもって持ちこたえたが、他の兵士は勢いがついて後ろへと倒れてしまった。

「ふふふ。」

春名はまんまとしてやったと思ったようだが、そうは問屋が卸さなかった。

「残念ですがそこまでだ。」

義勇軍の一等兵曹がT3短機関銃を片手に待ち構えていた。

「何!？」

春名は再び罨に掛けられていた。扉の外、そこにも義勇軍の兵士が10名ほど集まって嚴重な網を張っていたのだ。兵士たちは拳銃や短機関銃で武装しており、もはや逃げ場はない。

さらに後ろからもベッドから起き上がったシエスタと、銃を構えなおした才人が彼女の背中にピツタリと照準を合わせていた。

「春名、あきらめるんだ!」

「才人……」

春名が才人の方に意識を向けた一瞬を、一等兵曹は見逃さなかった。

「確保!!」

その言葉とともに、一斉に数人の兵士が彼女に襲い掛かった。そして床に押し倒すと、両手を締め上げる。もちろん、彼女は大いに抵抗した。

「放せ!!放せ!!」

仕方がなく、1人の兵士が手刀を後頭部に加えて気絶させる。

「ようし、連れて行け。」

一等兵曹の命令により、春名は連行されていった。その姿を、才人は複雑な表情で見つめるしかなかった。

5分後、司令部の作戦室に才人が直接報告のため出向いていた。

「そうか、やっぱり彼女は操られていたか。」

「操られていたというより、本当に別人みたいだったよ。」

才人は先ほどの話を才助にし終えると、溜息を吐いた。

「人に別人格を埋め込む魔法・・・恐ろしいものだ。今回は早期に調べ上げてくれた枢機卿に感謝だな。それと、こちらの作戦案を受けて演技をしてくれたルイズさんもだ。」

夕方才助の元に掛かってきた電話の内容は、驚くべきものだった。才助が睨んだとおり、報告のあった劇団の座長であるウエザリーに関しては王宮に記録が残されていた。

彼女の一族では、禁忌とされている人の心を操る魔法を使っていたと言う。結果一族は御取り潰しになり、その魔法を操った彼女の両親は死刑となった。さらに、王宮はその領内の村を強制的に立ち退かせるという徹底的な策を行った。ただし、ウエザリーのみはまだ子供だったことから追放のみで済まされていた。

この報告を受けて、才助はウエザリーがミライに現れたタイミングと春名が発見されたこと、さらに彼女の記憶がないことが繋がっ

ているのではと思った。もちろん、かなり飛躍した話であり、才人やルイズ、さらにはその話をした数人の幹部も半信半疑だった。

しかしながら、一方で全く可能性がないということもなかった。そこで、夜間劇団について隠密調査を行うと共に、ルイズという存在を囿にして、鎌を掛けてみることにした。

もしウェザリーに操られているのなら、代王であるルイズの存在にも気づき襲う可能性が示唆されたからだ。

そして作戦は実行に移された、既に王宮へ帰ったルイズを基地内にいるよう見せかけて、彼女が行動を起こさないか見張った。結果大当たりとなった。

「春名さんについては、我々ではどうにもならん。それから、先ほど偵察班が劇団の馬車から多量の火薬を発見した。連中が何かを企んでいることは確かだ。既に劇団員を確保するよう命令は出した。だから後はミライの街の部隊に任せよう。」

言い終えると、才助は大テーブルに広げられたミライの街の地図を見た。街の東にある宿の1つに敵を現す駒が置かれ、それを囲むように展開した義勇軍部隊の駒が置かれていた。

小悪魔と春風の来訪 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 小悪魔と春風の来訪 8

ミライの街の東側にある一軒の宿場。そこがウエザリーを座長とする劇団が宿泊している場所であった。既に馬車から多量の火薬を発見した義勇軍は、劇団員を捕縛するべくその周囲に歩兵部隊を展開させていた。

屋内に突入する班はT3短機関銃を、宿場の周りを取り囲む兵士たちはT1ライフルに実包を装填して、いつでも作戦可能な状態へなっていた。

「ニコラ中尉、全部隊展開完了です。」

下士官の1人が、今回突入班を率いるニコラ中尉へと伝えてきた。

「わかった。各部隊へ、臨戦態勢のまま待機しろ。本部から規定の信号が入り次第作戦開始だ。事前通達の通り、相手は通常とは違う魔法を使用する。残念だが我々には効果的な予防手段がない。対メイズ戦術を採りつつ細心の注意を払うように。」

ニコラが無線機越しに全部隊へ命令を伝えた。

「了解!!」

隠密作戦のため大きな声は出せない。各隊からは小声での返答が為される。

「あとは待つだけだな。」



ニコラは夜光塗料が塗られた腕時計を見る。既に真夜中だ。ハルケギニア内ではハイテクを誇るミライの街も大分静かになっている。特にこの地域は宿場が密集しているからだ。

ニコラを含む全隊員は、街を包む静寂とは裏腹に、作戦開始前の緊張感に包まれていた。既に何度も実戦を経験しているニコラも、勝手が違う市街戦の経験は薄い。しかも今回の作戦では敵を極力生け捕りにすることが求められていた。

「皆殺しにするより何倍も難しいぜ。」

ふとそんなことを呟いたが、彼はそのような方針を採らない義勇軍が好きであった。

永遠とも思える沈黙が続くかと思えてしまうほど、夜の街は静かであり、義勇軍兵士たちもその静けさに溶け込んでその時を待った。

そして唐突にニコラの無線機に交信が入る。

「レッドリバー3よりレッドリバー4へ。弓引け、弓引け。」

レッドリバー3は義勇軍本部、4はニコラの呼び出し符号。そして弓引けは今回の作戦で与えられた暗号だ。意味は基地内の安全確保（春名の捕縛に成功）、作戦を実行せよとなる。

ちなみに基地内の安全が確保されなかったものの作戦実施の場合は弓構え。撤退の場合は弓下げという信号が発せられる予定であった。

「全部隊へ、聞いたとおりだ。弓引け、作戦開始せよ!!!」

「了解！」」

二コラの命令の元、彼を含む義勇軍兵士たちが一斉に宿場へと侵入した。

宿場の主人や従業員といった人間は既に非難させてある。もちろん、今回の作戦でなんらかの被害が出た場合は、補償が出されることとなっている。こういう気配りがあるからこそ、義勇軍の人気は衰えていないのだ。

今日や宿場に泊まっている客は、好都合なことに例の劇団だけらしい。その部屋についても主人から聞きだしてあったので把握済みだった。

義勇軍兵士たちは次々と団員達が泊まっている部屋へと突入した。荒々しい音とともに鍵の掛かった扉を蹴破り、部屋の灯りを点ける。その光量が足りなければ装備品の懐中電灯を使う。

それらによって照らし出された団員に向けて隊員の上位者が、T3短機関銃を構えながら叫ぶように言った。

「『東方義勇軍』だ！！お前たちを拘束する！！抵抗せず両手を頭の上に上げる！！」

団員側にとっては池田屋事件のごとく、まさに突然の予期しない奇襲攻撃であった。ほとんどの人間は眠っていたところを襲われた

ため、なんら抵抗することも出来ずに、それこそ呆然としたまま、突入してきた兵士たちに捕まった。

劇団員の中にいたメイジの内、数人は義勇軍兵士たちの足音で目覚め、杖を構えて反撃を試みはした。しかしながら、やはり奇襲されたことと寝込みを襲われたのが致命的であつた。魔法を発動させられた人間もいるにはいたが、多くは詠唱を完成させる前に兵士が来てしまい降伏するか、杖を撃たれて粉々にされるかした。

魔法を使えた人間も、屋内の狭い部屋の中での使用だったため自分を巻き込む恐れから威力を高めることが出来ず、義勇軍側の兵士に出た損害は軽傷数名で済んだ。そして義勇軍側のお返しは強烈で、対メイジ戦法に則つて、狭い部屋の中で音響閃光弾を多数爆発させて相手を沈黙させた。やられた方、しばらく目と耳が使い物にならなくなり、頭を抱えて床にうずくまることを余儀なくされた。

宿場の制圧は15分もしないうちに完了した。義勇軍側が発砲することはあつたものの、狙いが威嚇目的とかメイジの杖に絞られたため、隊員と団員双方が被った被害はそれぞれ軽傷者数名ずつだった。これは許容範囲内どころか、むしろ予想より小さい被害で済んだと言えた。

しかしながら、作戦は完全成功とは行かなかった。なぜなら肝心の座長であるウェザリーの捕縛に失敗したからだ。

「うおりゃあ!!」

隊長のニコラが部下数人を連れて、ウェザリーが泊まっている筈の部屋に突入した。ところが、彼らを待ち受けていたのはもぬけの殻となつた部屋と、開け放たれた窓だった。

「しまった！逃げられた！」

ニコラたちは窓に駆け寄り下を見たが（この時彼らは3階にいた。）そこにウエザリーの姿がある筈が無かった。『フライ』で逃げた可能性が高い。

「してやられたぞ。レッドリバー4より全部隊へ、座長のウエザリーが逃走した！繰り返し。座長のウエザリーが逃走した。市街地警備の兵は厳重なる注意を要す！」

だが、彼のその言葉が発せられた直後に、少しはなれた場所からT1ライフルの発射音が響き渡った。

「まさか！」

ニコラは才助から言われた注意事項を思い出した。ウエザリーは人を操る魔法を使っている可能性大だと。もしかしてそれによる同士討ちが起きたのではないかと。

ニコラの予想は最悪の意味で当たっていた。彼が聞いたT1ライフルの発射音は、ウエザリー追跡に入った兵士に対して、別の兵士が発砲した音であった。

「あいつら、味方に向かって撃ってきたぞ！？」

撃たれた兵士の1人が吐き捨てるように言った。幸いケガこそな

かったが、一步間違えば射殺されていたのだから心中穏やかではない。

そんな彼に、同じ分隊の兵士が宥めるように言う。

「ターゲットの魔法にやられたんだろっさ。あいつらの所為じゃない。だがこのままじゃ本当に当たらんとも限らん。こうなったら戦闘不能に追い込むしかないな。音響閃光弾をありったけ投げてやれ!!」

「おうよ!」

2人は手持ちの音響閃光弾全てのピンを引き抜き、自分たちを撃ってきた兵士たちに向かって投げつけた。

「喰らえ!!」

「目覚ませ!!」

数秒後、ミライの路地の一角で凄まじい音響と閃光が発生した。

「どうします隊長? 幸い被害はありませんが、こつも簡単に操られるんでは下手に近づけませんよ?」

ウェザリーに操られたと思われる兵士による同士討ちは、すぐに二コラの元へともたらされた。

「だな。下手に追跡したところで魔法を使われたら厄介だ。こちらが向こうの詠唱より早く攻撃できれば良いが、何分生け捕りだからな。音響閃光弾も使いすぎると相手に読まれる。」

「追跡が危険となると、相手に逃げられちゃいますよ。」

その副官の言葉に、ニコラは笑った。

「あのなお前、ミライの入り口は全て我が軍によって封鎖されているんだ。それに、いくらメイジだからって1人で街から大きく外れた場所には出まい。」

この時期、街道には未だ街灯等という物は無い。だから真っ暗だ。そんな所を一人歩きすれば、どんな幻獣が襲ってくるかわかったものではない。

ウエザリーがどの程度の魔力を持っているか知らないが、3人の人間を操った上で3階の窓から着地した分の魔力はそれなりに消耗を強いているはずだ。そんな状況では幻獣に対して不安と言えよう。

「じゃあどうしますか？」

「追ってだめなら待つだけだ。待ち伏せ戦法に切り替えよう。比較的銃の腕が良い兵士を集めて、スコープ付のT1を持たせて、奴さんの杖を撃つように言え。それがだめなら、とにかく動けないように足に撃ち込むよう命令しろ。とにかく殺すな！」

このニコラの命令は早速伝達され、各部隊の中から小銃の腕が良い兵士が選抜され、見晴らしの良い場所から、相手を狙撃する作戦が実行に移された。彼らは路地を見渡せる建物の屋根や屋上、階段

の踊り場の窓と言った場所に布陣すると、そこでウエザリーを待ち伏せした。

そしてこの作戦において金星を上げたのが、銃士隊からの移籍したとい一風変わった経歴を持つマイラベル2等兵曹だった。

彼女は路地を逃げてくるウエザリーを発見すると、気づかれないよう距離50mまで相手を引き寄せて撃った。結果ウエザリーの杖は粉々に打ち砕かれ、彼女はその後やってきた義勇軍兵士に捕縛された。

「何！？捕まえた？間違いないか？・・・そうか。よくやった。マイラベル兵曹には後で感状が出るよう掛け合っておこう。」

捕縛成功の報せを聞いて、ニコラもほっと安堵の息を吐いた。そして各部隊への通信を入れる。

「全部隊に告げる。目標の捕縛に成功した。繰り返す目標の捕縛に成功した。よって作戦は終了だ。各部隊は各々の後処理を行いつつ、以後本部の指示を待て。」

ニコラからその通信がされた時、ミライの街に昇ったばかりの朝日の光が差し込んできた。

小悪魔と春風の来訪 8（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



## 小悪魔と春風の来訪 9

ウエザリーを座長とする劇団員捕縛作戦は、義勇軍と劇団側に数名の負傷者をだしたものの、幸いなことに死者を出すことなく成功裏に終わった。捕まった劇団員は義勇軍基地に連行されて取調べを受けた。そして義勇軍にとって必要な情報を吐かせると、トリステインの衛士隊に引き渡した。

もつとも下っ端の劇団員が持っている情報などたかが知れており、その罪状も火薬の不法所持だから、良い所罰金だろう。そのため自然に取調べで最も追求を受けるのは座長のウエザリーとなった。

彼女の場合は火薬の不法所持のみならず、人の心を操り、別人格を埋め込むという禁忌の魔法を使ったのだから重罪である。

当初は殺人事件の容疑者よろしく黙秘するのではないかと心配されたが、予想外なことに彼女は観念したのか動機や火薬の不法所持理由や、春名との関係まで吐いた。

彼女の取調べは、才助司令官が直接行うという異例の形式で進められた。

「それじゃあまず、馬車の下に火薬を大量に隠匿していたことから、別に銃を持っていたわけでもないし、劇の演出で使うには明らかに過剰だ。報告によれば、充分に建物を吹き飛ばすだけの量があったそう。一体何に使おうとしていたんだ？あなた方は明日にはトリ

スタニアに向かい、そこで長期公演をする予定だったそうじゃないか？」

才助が揺さぶりも含めて問うと、ウエザリーは嘲笑を浮かべて言い返した。

「あなたたちは既に察していると思うけど、火薬はテロのために用意したものよ。王都で派手に爆発させるつもりだったわ。」

「それじゃあやっぱり、王家への仇討ちを計画していたということか？」

ウエザリーの前歴を知っているだけに、才助たちとしては容易にその答えへと行き着いた。

「よく調べた見たいじゃない。その通りよ。母が獣人であり、私が獣人とのハーフであっただけで我が一族から爵位を奪い、両親を殺しただけでは飽き足らず、領地内にいた何の罪も無い村人たちまで追放した憎い王家をね。」

ウエザリーの表情が憎しみで染められた。それに対して才助はひたすら冷静に聞いていた。

「高風春名という少女を御存知かな？昨日鉄道線路近くで保護され、昨日代王殿下の暗殺未遂事件を引き起こした。その時の彼女はまるで別の人間のようなだったらしい。タイミングがタイミングだけに、あなた方との関係を疑っているんだが、どうかな？」

その問いに、ウエザリーはまたも素直に答えた。

「もっと慎重にやるべきだったかしらね。ええ、知っているわ。彼女は3ヶ月前に私たちが保護したの。そしてたまたま、ハルケギニアについて全く知らないじゃない。そして訳がわからないことを言うばかり。けどそれならそれで好都合だったわ。何も知らない人間で、しかも少女ならテロの犯人としておあつらえ向きじゃない。」

「なるほど。そして彼女の記憶を操作し、テロ犯としての人格を埋め込んだと。」

「ええ。それが我が一族に伝わる秘術よ。そうやって私は春名に秋名という人格を植え付けたわ。」

ここで才助は一端立ち上がり、部屋の扉を開けた。

「入りなさい。」

彼に促されて入ってきたのは、春名としての意識を取り戻した春名と監視役の才人とカル口兵長であった。

「彼女で間違いありませんね。」

「ええ。」

ウェザリーは否定することなく言う。

「高風さん、彼女と会った覚えはありますか？」

すると春名は首を横に振った。

「ふむ。記憶を本当に上手いこと操作したようですね。しかし、真

実を知らないがために罪に罪を重ねる結果となりましたね。」

「それはどういう意味かしら？」

ウエザリーが首を傾げる。

「そのままです。ウエザリーさん、あなたは大きな誤解をしている。あなたは王家から迫害を受けた理由を、あなたのお母さんとあなたの自身の血統を挙げられた。しかし真実はそうではないんですよ。あなた方一族を粛清し、なおかつ領地その物を解体したのは、あなたがお使いになった魔法が原因なのです。」

「なんですって？ そんな！？・・・我が一族の魔法が原因だなんて・・・う、嘘よ！！」

「嘘じゃありませんよ。マザリー二枢機卿に調べて貰った所、公式記録としてそう残されていました。あなたの一族が使った魔法は人心を操り、人を人とも思わない魔法と言えます。要するに禁忌の魔法です。そんな魔法を使う人間たちを、国内において野放しにしておけるでしょうか？ だから厳しい処罰に臨んだんです。領地の解体にしても、再び出るかもしれない芽を摘んでおきたかったからです。」

ウエザリーの表情が見る見る暗くなり、彼女はうな垂れてしまった。そんな彼女を気にしないかのように、才助は続ける。

「あなたはその事を知らなかった。確かにハルケギニアにおいて亜人は嫌われている存在です。ですが、だからと言って粛清の対象になるようなことは、めったにありません。あなたは子供の頃だったからそれを知らなかったんでしょう。しかし、あなたが生かされた

ことこそその証です。獣人の血が混じっていることで肅清されたのなら、あなたもとうの昔に殺されていたはずですから。」

「・・・そうね。確かに禁忌の魔法よね。人を操るなんて。」

ウェザリーは悲しそうな表情でそう呟くように言った。

「必要なことは聞いたので、あなたの身柄はトリスタニアの衛士隊に引き渡すこととなります。・・・あ、危なかった。最後に1つ。彼女に掛けられた魔法を解くことは出来ますか。昨晚から彼女は、自分の中に植え付けられたもう1つの人格に脅えているので。」

「ええ、杖さえ用意していただければ。彼女には本当に迷惑を掛けましたから。」

「わかりました。」

その後、王室に頼んで彼女用に新しい杖を用意してもらい、派遣されてきた衛士が監視する下で、春名に掛けられていた魔法が解かれた。魔法を解いたウェザリーはそのまま杖を没収されると、トリスタニアへと連行されていった。

「そう。事件は解決したのね。御苦労様。平賀司令官にもそう伝えておいて。」

夕方、連絡士官として王宮にやってきた才人に、現トリステイン代王であるルイズは労いの言葉をかけた。

「俺は特に何かしたわけじゃないけど。それよりも、ルイズの方こそ協力ありがとう。ルイズと枢機卿がいなかったら、こんなに早く解決なんか出来なかったはずだから。」

2人は代王と連絡士官という立場ではない、普段どおりの関係で話し合っていた。何せ今この部屋にいるのは彼らと1人だけのだ。

ルイズは才人との会話を一端やめて、そのもう1人の来訪者に言葉をかける。

「春名、今回は随分と迷惑をかけちゃったわね。ハルケギニアに住む人間を代表して詫びるわ。」

そう言われた春名の方は王宮に着く直前から凄まじいほど緊張しているのが才人にもわかった。まあ、いきなり王宮へ連れて行かれて、しかも昨日遠慮せず付き合った人間が王であると聞かされれば、誰だって困惑するだろう。

「いえ・・・あの・・・こちらこそ、助けてもらいありがとうございます。けど、まさかルイズさん、いいえルイズさんが女王様なんですね。」

「本物じゃないわ、あくまで一時的になっているだけ。」

ルイズは気軽にそんなこと言うが、ルイズが今来ている服は女王用のドレス（ただしルイズは動きにくいと、後にこれを儀礼時以外は廃止した）であるし、頭には王冠を被っているから女王としての貫禄充分である。

「それで、結局あなたはどつするの？」

「ええと、取り敢えず2週間後に帰るまで平賀君のお父さんが紹介してくれた会社で仕事を手伝うことにしました。」

「そう。色々慣れないこともあるでしょうけど、がんばってね。」

ルイズは彼女にも労いの言葉をかけた。それに対して、春名も笑顔で答えた。

「はい。ありがとうございます。」

春名が地球へ帰る日まで働くこととなったのは、トリスティン貿易のミライ支店だった。この会社は地球とハルケギニア間の貿易を行うダミー会社であったが、現在はロマンノフとの取引や、それを各国へ捌く商売等を手広く行っていた。

春名はハルケギニア語がわからないので、紹介された仕事は日本語で文書を扱う部門だった。そこは主に地球から来る物品や、地球へ輸出する物品の管理、その利益の計算等を行う場所で、義勇軍にとっても重要な場所だった。

もちろんそんな重要な場所であるし、あくまで臨時雇いであるから、当初春名には雑用しか与えられなかったらしい。しかし、数日もするとその部長が彼女の実務能力の高さに気づいた。

また彼女自身その仕事や、ミライに住む同世代の人間との交流を

大いに楽しんだらしい。特に才人を含む義勇軍基地で出会った人間は、彼女に親しく接した。

そんなこんなで、2週間という時間はあっと言う間に過ぎた。



小悪魔と春風の来訪 9（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

軍旗や軍歌に関する意見もお待ちしています。

## 小悪魔と春風の来訪 10

新月となり、ようやく地球との連絡が可能となったその日、春名はようやく地球に帰る。ミライから飛び立つ輸送機に乗って埼玉にある、現在はトリスティン貿易が買収した飛行場へと飛び、そこからは予め連絡してある才人の姉である智恵が、春名を家まで送る手はずになっている。

「それじゃあ春名、気をつけて。」

「ありがとう平賀君。」

新月のためにいつもより少しばかり暗い夜であるが、飛行場を煌々と照らしているライトは全くそんなことを感じさせない。そして2人の姿もその中に浮かび上がらせていた。

ちなみに、既に近くに止められている地球行きの飛行機はエンジンを回しているので、2人はいつもより少しばかり大きな声で会話している。

「春名、何度も言うようだけどここで見たこと聞いたことは・・・」

「わかってる。絶対に誰にも言わない。もちろんパパやママにも。言い訳を今から考えなきゃいけないな。」

数ヶ月も行方不明になったことを、ハルケギニアのことを抜きにして一体どう説明する気なのか気になるところであるが、才人は彼女に任せることにした。不安がないと言ったら嘘であるが、真面目な彼女であるからきつと約束は守ってくれる。そう信じていた。

「それにしても、たった2週間だけど楽しかった。新しい友達も出来たし。地球に帰りたいと思うけど、この世界にいるのも悪くないなっと思うわ。」

春名のその言葉に、才人は笑顔で答える。

「ありがとう。ルイズにもその言葉伝えておくよ。きっと喜ぶよ。それに、もしまた来たいなら連絡してよ。すぐに答えられるかわからないけど、手紙なら姉さんを経由して渡してもらえば良いし、メールなら届くから。」

地球とハルケギニアの連絡手段で使われるのは手紙と、メールが主だ。手紙の場合はトリスティン貿易の最寄支店に出して、そこから新月の時に一括配送される。メールの場合は、地球からこちらへ直接持ち込んだ（転移させた）パソコンへなら、現在も理由は不明だがちゃんと届く。

「本当？嬉しい。だったらまた来るね。そうすると、がんばってこっちの文字を覚えなくちゃ行けないな。」

「そうだね。」

そこへ、輸送機のパイロットがやって来た。

「間もなく出発しますので、お乗りください。」

「わかりました。それじゃあ平賀君、行くね。」

「ああ。春名も元気だな。」

挨拶を交わして、春名は飛行機に乗るためタラップのほうへと行こうとした。しかし、何故か途中で立ち止まり、何を思ったか再び才人の所までやってきた。

「春名？」

才人は彼女を見て困惑してしまった。その表情が明らかに赤いのだ。

「ひ、平賀君・・・その、ずっと言いたかったんだけど、恥ずかしくて中々言えなくて。だけど、もう今言わないと永久に言えない気がするから。だから、言っちゃうね・・・私、平賀君の事が好きだったの。」

「え!？」

「高校で一緒にいた時から好きだった。けど、平賀君が突然行方不明になっちゃったから告白する機会がなくて。だからこの世界でまた会えてすごく嬉しかった。」

彼女の言葉に、才人は彼女と会った初日のことをようやく理解することが出来た。片思いしていた相手とこんな所で再会できたのというのに、いきなり既に結婚しているなんて言われれば、誰だってショックを受けるだろう。

「そうだったんだ・・・けど、春名。その気持ちは嬉しいけど、俺は・・・」

「わかってる。ルイズさんと話してわかったの。あの人は本当に平賀君のことが好きで、そして平賀君も彼女のことを大切に想っているって。」

「春名……」

「だから。悔いはないから。……そう言うわけで平賀君、ルイズさんのことしっかり守ってあげてね。」

「わかった。絶対に約束する。」

才人は強い意志を込めて答えた。それに対して、春名も満足そうに笑顔を浮かべた。

「それじゃあ、さよなら。元気でね。」

「ああ、春名も元気でな。またハルケギニアに来いよ、いつでも歓迎するよ！」

輸送機に乗り込む春名に向かって才人は手を振り、彼女も返す形で才人へ手を振った。

彼女が乗り込んだところで輸送機の扉が閉められ、タラップが外される。それと共に、輸送機はエンジンの回転数を上げて、タキシングへと入った。

滑走路へ入って一旦停止した後、滑走を始めて夜空へと舞い上がった。

「春名、元気でな!!! また会おう!!!」

才人は帽子を振り回して、彼女の帰還を見送った。それからしばらくして、新月に飛び込んだのか、輸送機の姿も爆音も消えた。

## 6年後

1年間に渡って続き、膨大な犠牲者を出したハルケギニア戦役が終わってから4年半が経過したこの時期、ハルケギニアは急速な近代化の真っ只中にあつた。地球からもたらされた技術や、同盟国となつているロマノフ公国の支援によりそれまでの中世ヨーロッパスタイルの生活様式や街の様子は様変わりしていた。

さすがに現代地球ほどまでは行かないまでも、民生レベルで見れば大正末期から昭和初頭のレベルまで発達していた。

科学技術の発達は、ハルケギニア戦役でのメイジの権威が下がるのと合わせて、相対的に平民の地位を向上させることとなった。一方で6000年に渡る敵対関係であつたエルフとの交流開始は、魔法という力に新たな使用方法や概念を与えて、科学技術と共にハルケギニアの発展を支えている。

政治体制も大きく変わった。各王室の同意の下、ガリアのジュネーブに首都を置くハルケギニア王国連合が設立され、それと同時に各王室の政治的権力大きく制限し、議会が設立されている。領邦制

度はほぼ廃止。貴族制度も残されてはいるがその特権は大きく制限された。

こうした政治制度の移行には、地球からもたらされた様々な政治関係の書物が大きな影響を与えた。ハルケギニア語に翻訳されたそれらは、この世界になかった政治学や思想学という概念をもたらすと共に、政治家や王室の人々の新しい国づくりを促進させる原動力となった。

エルフと始祖ブリミルに起きた悲劇が解明され、聖地がエルフ・ハルケギニア両政府の共同管理地となり、さらには魔法の科学的な解明も進められている現在でも地球との新月を介した交易は、以前と同じく細々と続いている。

魔法というエネルギーの放出が次元転移に大きな影響を及ぼしているとは判った現在でも、逆にそれを解明して、自由に次元を行きかう所までには行っていない。そのため異世界との交流は、召喚によって一方的に呼び寄せられる件を除いては、才人らがいた地球以外とは行き来出来ない。（例外あり。）

地球との間に行われる交易は、現在でもトリステイン貿易が一手に引き受けており、地球とハルケギニアを繋ぐ重要なパイプとなっていた。

そのトリステイン貿易の時空貿易班にこの度目出度く就職したある女性が、『東方義勇軍』を母体とするハルケギニア連合王国軍、トリステイン方面軍ラ・ロシエール基地を訪れていた。

「平賀准将。准将に面会を求めている女性がいらっやいますか？」

内線電話でそう告げられたトリステイン王国大公にして、現在は空母艦載飛行隊の隊長を務めている才人は、読んでいた書類から目を離れた。

「ああ、来たか。通してくれ。」

「はい。」

間もなく彼の部屋へと通されたのは、黒髪が鮮やかな若い女性だった。

「久しぶり平賀君。」

「久しぶり春名。今月からこっちで仕事だったよね？」

「そう。だから今日は挨拶に。電話でも良かったとは思ってたんだけど、やっぱり顔を見せたほうが良いかなと思って。けど、邪魔だった？」

先月大学を卒業し、トリステイン貿易に就職した春名はそう言って笑った。

「そんなことないよ。トリステイン貿易は俺たち地球出身者にとって重要な会社だから。特に時空班はね。その将来を嘱望されているエリート社員を無碍に扱うことなんて出来ないよ。それに王宮にいる時はよっぽどのことがなきゃ会えないから。」

「ありがとう。」

「まあ、今日来たのはそれだけじゃないと思うけど。」



才人が春名を冷やかした。

「えーと、その・・・」

途端に返答が詰まった彼女を見て、才人が笑った。

「もう、からかわないでよ！」

「ごめん。ごめん。カル口中尉は確か今日の午後は非番のはずだから、面会くらいは出来ると思うよ。もっとも、春名もそれくらいは知っていると思うけど。なんなら、俺の権限で飛行機を使わせても良いよ。」

「ありがとう。けど、さすがにそこまでしてもらっちゃ悪いわ。」

「ハハハ・・・まあとにかく、久しぶりに会えたんだから、2人きりの時間をじっくり楽しむと良いよ。」

「そうする。それじゃあ。」

「ああ。」

春名が部屋から出るのを見届けると、才人は部屋の外に広がる飛行場を見ながら呟いた。

「けど、まさかなこんなことになるなんてな。」

春名の交際相手は、先ほども会話に出た通りかつて才人と小隊を組んだカル口中尉である。交際を申し込んだのは、最初に彼女に会

った時に一目ぼれしたカルロの方からと聞いているが、本当にそのまま交際にまで至るとは才人も予想外だった。

さすがに戦役中は会えなかったが、その後春名が時折こちらに來たり、またカルロが桜花飛行機に出向した際に仲を深めていた。結婚するかは、まだ才人も知らない。春名の両親への説明等、問題山積みである。

「けど、あの2人なら大丈夫かな。」

しかしながら、才人としては友人たちの恋路が成就することを願っていた。

小悪魔と春風の来訪 10（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

『トウ機関』と人材 1（前書き）

久しぶりの更新です。

## 『トウ機関』と人材 1

平賀才吉率いる『東方義勇軍』は、人材に関してはかなり貪欲な組織である。何せ発足した当初から、様々な面で人材の不足に苦勞していたからだ。

そのため、才吉は地球・ハルケギニア双方で人材の発掘と登用を進めた。義勇軍が戦う上で必要な軍関係者のみならず、トリステインとアルビオンを今後発展させる上で必要な民生関係者など多岐に渡る人材が集められた。

そうした中には、才吉の血縁者も多数いた。例えば彼の息子の才蔵は孫の智江とともに地球での人材のスカウトや、物資の調達を行うダミー企業の経営を行っている。またその他の親戚の中にも、間接的や直接的に協力する人間がいた。まさに「立てる者は親でも何でも使え。」を実践していた。

ただし彼の孫である才助、そして曾孫であり彼をトリステインに呼び込む要因となった才人を除けば軍務に服した者がいないため、平賀一族と言うと軍役に身を投じたこの3人を指すことが多かった。それでも、彼ら以外の平賀一族も地味ではあるが相当な貢献を行っている。

またこうした血縁者以外で目立つのが、犯罪者の登用である。これは犯罪を犯して監獄に入れられた者でも、義勇軍にとって有益な才能をもつ者を司法取引として引き抜いたものである。特に有名（あくまで義勇軍内部での話だが）なのが、『土くれのフーケ』から軍属として転身したマチルダ嬢である。

ただし彼女の様に軍属または正規部隊の兵士として配属される人間は少数派で、犯罪者出身者の多くが配属されたのが義勇軍の情報機関である『トウ機関』である。

『トウ機関』は敵地への侵入、破壊工作や情報攪乱なども行う機関であつたからこうした人材が結構役に立った。例えばある詐欺師出身の兵士は、潜入後の人心掌握や偽情報の流布などに活躍した。また偽ハンコウ造りで捕まっていたある彫り物師は、ガリアの重要人物が使っているハンコウを巧妙に偽造し、偽書類製作に一役買った。

『トウ機関』では仕事柄他国の情報機関（つまりは同業者）と衝突することも多かった。特にロマリアの密偵団とガリアの工作員は強力な敵だった。そのため潜入工作を担当する兵士の場合一端機関へ入ると、短期間ではあるがみっちり訓練を受けている。

創設されたばかりの頃の現地潜入工作員の多くは、トリスティンやアルビオンの各軍から供出された兵士が多かった。しかしその後は上記のような犯罪者出身者も混じるようになった。

彼らの多くは現地に派遣されると、秘かに持ち込んだ無線機などを駆使して情報をいくつかの中継基地を介すなどして、トリスティンの本部へと送った。

その『トウ機関』であるが、義勇軍がガリア王都のリユティスを始めとする各地に対して行った宣撫作戦である「回天」作戦でも航空部隊の誘導用電波を出したり、また航空機が進出できない地域へビラやラジオを撒いたりした。

この作戦は最終的にジヨゼフ王に裏を掻かれてしまい、失敗に近い結果となった。しかしながら、その反面ガリア国内のオルレアン

派や反王派の人間をトリステイン（厳密に言えば義勇軍）に亡命させるなどの効果ももたらした。

「回天」作戦が行われた数日後の早朝、ガリア王国王都リュティス中心部の一軒家の前にガリア王室の衛士達が集まっていた。

ただし少しばかり様子が変であった。全員重武装なのだ。メイジと思しき隊長は軽甲冑を身につけ、杖を構えていた。また部下の平民兵士たちも、軽甲冑やマスケット銃、剣をいつでも使えるように構えていた。

「ここがその怪しい連中が潜伏しているという家か・・・ようし、全員いつでも踏み込めるようにしておけ。」

隊長らしい男はそう言うと、一歩前に出て扉を乱暴にノックした。

「開ける！王室衛士隊だ！開ける！」

少しばかり離れた場所にいる市民たちは恐ろしさ半分、面白さ半分でその光景を見ていた。この日衛士隊は市民からの通報を受けて怪しい人間が潜伏しているというその家に立ち入り検査をしようとしていた。

単なるゴロツキやチンピラなら例え衛士が突入することはあっても、こんな重武装で身を固めることなど無い。実はこの家に潜伏している人間は、どうもトリステインかどこかの異邦人らしいという

のが市民からの情報にあった。

トリステインは現在敵国である。しかも、さらに怪しさに拍車を掛けたのは先日トリステインが空から大量に落としていた黒い箱のようなものを、その連中が使っている姿を見た者がいたことだ。

そのため、この通報を受けた衛士たちは早速抜き打ちの立ち入り検査をしようとしていた。トリステインの人間ではないとしても、トリステインが撒いたビラやラジオを隠し持っているのは大罪である。また何も出ない時は出勤が無駄になるが、別に損は無い。損するのは立ち入られた哀れな平民だけだ。

扉が乱暴に叩かれる中、その家の2階では2人の人間が脱出の準備を進めていた。

「やっぱりバレてたか・・・」

40代半ばと思われる男が苦虫を潰したような表情をして言った。そんな彼に、20代前半と思われる男が、手を動かしながら苦言を呈す。

「大尉殿が迂闊に窓辺でラジオを使うからですよ。」

「やかましい。それよりもトラップの準備は済んだのか?」

「はい。たつぷりと。」

若い方の男は、そう言うと言っていた瓶を床に放った。

「しっかり作動するようにしておけよ。証拠を残したら少将閣下に



怒られちまうぜ。」

そう言った時、鍵をかけておいた扉が破られ、どたどたと複数の人間が侵入してくる音がした。

「来たぞ！出来たか？」

「はい。」

「ようし、逃げるぞ。」

そう言うと、大尉と呼ばれた男は片手にカバンを抱え、裏側の狭い路地に面した窓を開けた。

「連中バカだな。裏に1人も貼り付けていないぞ。じゃあ、飛ぶぞ。俺にしがみつけ。」

「はい！」

若い方の男が大尉と呼ばれた男の腕にしがみ付くのと同時に、男は杖を出して呪文を詠唱した。一般的な呪文である『フライ』だ。

「よつと！」

2人は魔法を使って危なげなく地面に着地する。

「行くぞ！」

2人はそのまま狭い路地裏を走り始めた。それは衛士達が部屋になだれ込んだのとほぼ同時だった。

「しまった！逃げられたか。」

隊長は一步遅かったことを瞬時に悟り、開け放たれた窓から目標が逃げたことも直に理解した。

「追え！裏だ！！」

部下の内数人が直ちに追う。それを見届けると、隊長は部屋の中に何か残されていないか探す。

「それにしても、何だこの臭い？」

隊長は部屋の中を見回しながら、鼻を突く臭いに顔をしかめた。彼は知る由もなかったが、それは床に撒かれたガソリンによる臭いだった。そして彼が扉を開けて部屋に入った瞬間、仕掛けられていた糸を引いてしまい、隠されていた数個の手榴弾のピンが抜けていたことを。

隊長が部屋の隅を調べようとした時、彼の視界は眩い閃光で一杯になった。そして彼の意識は永遠に失われた。

「！？」

ドグワン！！

仕掛けられていた数個の手榴弾は狭い部屋を吹き飛ばすには充分すぎる威力を持っていた。当然、部屋の中にいた隊長を含む数名の衛士を木っ端微塵に吹き飛ばすだけのエネルギーも持っていた。

さらにそれだけではなかった。実は部屋の中には瓶数本分のガソリンが撒かれていた。そのため爆発と共に、部屋は瞬時に炎に包まれてしまった。しかもその炎は部屋の外や階段で待っていた衛士にも襲い掛かった。

「うわああー!!」

「ギャアアー!!」

外で突然の爆発に驚き、目を丸くしていた衛士や市民の前に、全身を炎に包まれた衛士が数名飛び出してきた。

「キャアアー!!」

全身火達磨になった人間を見た婦人が叫び声を上げた。

「た、助けなきゃ!」

「消せ消せ!!火を消すんだ!!」

直ぐに数人の人間が上着を脱いで炎に向かってに叩きつけ、火達磨になった衛士たちを助けようとする。

さらに炎上し始めた家に対する消火活動もすぐに始まった。しかしながら、ガソリンによって付けられた炎は、例え『水』メイジの魔法でも容易に消えてはくれない。

生き残った衛士や住民たちは、必死になって消火活動に忙殺されることとなり、最早逃げた連中どころではなくなっていた。

しかし隊長が死ぬ前に追跡を命じておいたことは無駄にはならなかった。追跡した4人の内2人は、爆発に気づいて引き返したが、残り2人は追跡を続行していた。

「まだ追いかけてきますよ！」

「しつこい連中だ！」

表通りに出て人ごみに紛れ込むの手だが、そんな余裕はなくなっていた。

「待て!!！」

「トリステインの犬め!!！」

衛士たちが叫びながら追いかけてくる。

「待てと言われて待つバカがあるか!!！」

「けどマズイですよ！早くしないと仲間を呼ばれて包囲されちゃいますよ!!！」

「トラップが起動したから遅かれ早かれそうなるだろうな。しかし、連中を西のデポに連れて行くわけにはいかないし。」

大尉は思案する。しかし中々良案は思いつかない。ちなみに彼が言うデポとは先ほど破壊したのと同じスパイの拠点のことだ。このリュティスには万が一1箇所が潰されても行動が継続できるよう、数箇所設けられている。

しかしながら、敵に追われている状況でそこへ入るのは危険な行為だった。

「とにかく、連中を何とか撒かないと。」

とは言うものの、相手もリュティスの地理に慣れているのか中々撒くことが出来ない。そうこうしている内に応援が来たのか、複数に追われるようになった。

「マズイぞ。このままじゃ最後の武器を使わなきゃいけないかもしれない。」

大尉は懷にしまつてあるコルト拳銃に手をやった。

「縁起でもないこと言わないで下さいよ。そうなったら終わりです。」

若い方の男が抗議した。

「だったらそうならんように努力しろ！」

と、その時。

「いたぞー!!」

「ヤバイー!!」

2人は再び逃げ始めた。そしてとある路地を曲がった所で、突然呼び止められた。

「こちらへ!!」

2人を見ると、銀色の長髪の男が家の扉を開けてこちらを見ていた。

「さあ早く!」

異かとも思えた。しかし大尉は、その男から全く怪しい雰囲気を感じられなかった。それに既に後がない状況だったので、彼にかけた。

男が開けていた扉から中へと入った。そしてすぐに男は扉を閉めた。その数秒後、追いかけていた衛士が走り去る音がした。

「もう大丈夫です。行きましたよ。」

男の言葉に、大尉と若い方の男は安堵の息をついた。

「ああ、ありがとう。お陰で助かったよ。」

「あなた方は本当にトリステインの人間なのですか?先ほどから衛士たちがトリステインの密偵が逃げていると騒いでいましたか。」

「その通りだ。何だ?俺たちを衛士に突き出すか?」

「まさか、そんなことをする気は毛頭ありませんよ。御安心下さい。私はトーマスと申します。トマとお呼び下さい。」

男が名乗ったので、大尉も名乗ることにした。

「トリステイン王室軍のエルベ大尉だ。こっちはシュミット兵長だ。もつとも、今は『東方義勇軍』に籍を置いているがな。」

「義勇軍？先日あのビラと黒い箱を空から撒いていった？」

トマが水の入ったコップを2人に差し出すと、問うてきた。

「そうだ。その義勇軍だ。」

すると、男の目の色が変わった。

「ああ、なんたる幸運だ。義勇軍の人とこうして会えるなんて。」

「どうかしたんですか？」

突然様子が変わったトマに、シュミットが訝しげな表情を向けた。

「失礼。実はお願いがあるのです。私たちをトリステインに亡命させて欲しいのです。」

トマのいきなりの発言に、エルベもシュミットも開いた口が塞がらなかった。

『トウ機関』と人材 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回の話は「タバサの冒険2」を読んでいた思いました。



## 『トウ機関』と人材 2

「トリステインへの亡命だった？」

いきなりの言葉に、2人とも驚いてしまった。

「はい。私はトリステインへ行きたいのです。そしてシャルロット様たちの下で再び働きたいのです。」

彼の言葉に、エルベ大尉とシュミット兵長は顔を見合わせた。

「一体あんた何者だい？ただの民間人がトリステインへの亡命なんて言葉口にするとは思えん。」

エルベの質問に、トマは自分の素性を話し始めた。

「私はかつてオルレアン公の屋敷で働く使用人の息子でした。シャルロット殿下やオルレアン夫人とも面識があります。しかしながらお家の御取り潰しで、使用人はちりぢりとなり、私の父も仕事を失い失意のまま死にました。私はその後違法カジノで働いたりしましたが、訳あって現在は日雇いの仕事を転々としています。しかし、先日シャルロット殿下の声を聞いて私は思いました。私は再び殿下に遣えるべきだと。」

どうやらラジオ放送でのシャルロットの声を聞いて、彼女の下へ馳せ参じる気持ちになったらしい。しかしながら、エルベはそれだけでは納得しなかった。

「なるほど。殊勝な心がけだな。まあ、そっちが苦勞することを厭

わなければ亡命させるのは吝かではない。けど、それだけなのかい？あんださつき私たちって言ったよな？ということは他にも誰かいのか？」

すると、トマは苦笑した。

「ばれていましたか・・・こちらへ来て下さい。」

彼は2人を奥の部屋へと案内した。

「あ、トマさん。そちらの方は？」

案内された小さな部屋で2人は若い女性に出迎えられた。ブルネツトが美しい、親しみ易そうな人だ。

「彼女は？」

シュミットが聞く。

「彼女はローザ。この街で知り合った女性です。宿を探していた私に部屋を貸してくれました。他にも随分と世話になりました。ところが、2ヶ月前から体調が思わしくなくて。医者に診せるにも、薬を買うにもお金がなくて。こうして寝ていることしか出来ません・・・ローザ、こちらはエルベさんとシュミットさん。トリステインの、『東方義勇軍』の人だ。」

「初めまして。ローザと申します。」

「こちらこそよろしく。」

「よろしくお願いします。」

2人も彼女に挨拶した。

「それで、彼女も亡命させたいわけか？」

トマは頷いた。

「はい。このままりユティスに留まっても彼女の治療を出来る宛がありません。トリステインへ行けば、なんとかなるかもしれないも思つて。彼女もそれを望んでいます。」

するとローザも言う。

「トリステインへ行けるのですか？　だったら、私も行きたいです。」

「しかし、今は戦争中だぞ。国境沿いの街道は軒並み封鎖されている。もし我々が助けるにしても、トリステインへ行くにはそれなりの覚悟がいるぞ。ローザさんの場合は病気であるから尚更だ。」

エルベは渋い表情をする。

「それでも私たちはトリステインへ行きたいのです。」

「私もトリステインへ行けるなら是非お願いします。」

「あんたたち随分とトリステインに希望を持っているようだな。」

「はい。実は……」

エルベの言葉に、サラはベッドの陰から何か黒い物を出した。

「それは、我が軍が投下したラジオじゃないか。おいおい、どうしてそれをまだ持っているんだ？御触れで差し出すよう言われてるだろ？もしバレれば問答無用で火炙りの刑だぞ。」

「ローザはそれを捨てることなど出来ませんよ。彼女にとってそれは心の糧なんですから？」

「どういうことだい？」

トマの言葉に、エルベは首を傾げた。

「今日私はここにいますが、普段は日雇いの仕事で外に出ている時間の方が多いんです。当然彼女は一人ぼっちになります。彼女はベツドの上でじっと待っているしかないんです。けど、このラジオという機械は動けない彼女に外のことを教えてくれます。歌などで彼女を励ましてくれます。」

オルレアン夫人やシャルロット姫、そしてイザベラ姫の肉声が流れてから既に5日ほど経つが、その後もトリスティンのミライにある放送局では電波の出力を強くして、ガリア向けに朝・昼・夜の2時間ずつ放送を流し続けている。もちろんニュースだけではなく、歌やお笑いと言ったバラエティー番組も放送している。

後の調査で判明することとなるのだが、政府や役人の目が緩い田舎では意外とそうした放送目当てにラジオを隠し持っていた人間がいた。残念ながら電池の関係で、短いと1週間程度、長くても10日程度しか聞くことは出来なかったらしいが、それでも一部とは言えガリアの人に、これまでになかった娯楽とそれに付随する喜びを

提供出来ていた。ちなみに、ラジオを楽しみにしていた人間の中にはジョゼフ王もいたらしい。

そしてローザもトリステイン発のラジオを楽しみにするようになった1人だった。しかも、彼女の場合は病気ということもあり、ラジオ放送の楽しみは人一倍だろう。

「彼女にとってトリステインは希望を与えてくれる国なんです。私はシャルロット殿下の声が流れた直後、トリステインへ行きたいことを彼女に伝えました。そして彼女も付いて来たいと言ってくれました。ですが、今の私たちの力だけではあなたの言うとおり無理でしょう。けれど、あの義勇軍ならなんとか出来るかもしれない。だからお願いしたんです。」

トマは真剣にそう訴えた。

「大尉、なんとかならないでしょうか？」

彼の言葉が心に響いたのか、シュミットがエルベにそう言った。

「なるほど。事情は良くわかった。しかし、もう一度言っておくが今トリステインへ向かおうとするならそれ相応の覚悟が必要だ。特にローザさんの場合はね。それに我々だって連れて行けると確約出来るわけじゃない。一応上にはお伺いを立ててみるが、もしだめと言われたら我々も軍人だから、従わなきゃならない。それでも良いか？」

「はい。」

「わかった。シュミット、無線で上にお伺いを立ててみるぞ。」

そう言うと、彼は破壊したアジトから持ち出した無線機をカバンから出した。

「それは何ですか？」

見慣れない物体に、当然ながらトマが不思議そうな顔をした。

「これは遠くの味方と連絡を取るための道具だ。ラジオと同じく魔法は使っていない、ジョゼフ王が危険視した「カガク」を使った機械だ。」

そう言いつつ、彼はアンテナを出してモールス信号による交信を開始した。もちろん、小型無線機の出力でミライの本部と直接連絡するなど不可能である。だからまず、一番手近なりユティス内に隠れている味方や、さらにガリア国内に潜んでいる他の工作員に転電しているもらう方法がとられる。

エルベはシュミットにアジトが発見されたため証拠隠滅の上で放棄したこと、脱出後亡命希望者によって匿われていること、さらにその亡命希望者の素性についての情報を簡略化して打電させた。

「打電完了しました。」

「ようし。じゃあ、返電が来るのを待とう。もつとも、上の連中もすぐには決断を出すことはないだろう。しばらく待つしかないな。トマ、悪いが少し待たせてもらいたいかな？」

「ええ。構いませんよ。」

返電を待つまでの間、エルベとシュミットの2人はトマとローザの2人とともにお喋りやラジオを聴きながら時間を潰した。ラジオはちょうど朝の放送の最中であつた。まず朝一番のニュースが流れ、それが終わると娯楽番組となる。

「それでは今日の1曲目『溜息 橋』です。」

ラジオから流れてきたのは、地球でならばケルト系の音楽を思わせる異国の歌だつた。日本語で歌われているのだが、意味はちゃんとハルケギニア人にも伝わってくる。新月を通して運び込んだDVDやCDはどの言語にも関わらず、魔法の影響がハルケギニアの人々に理解できるようになる。

「聞いたことのない歌や音楽が流れてくるので本当に好きなんです。昨日はオーケストラの吹奏が流れてきてビックリしました。私たちのような平民には死ぬまで縁のないものですから。」

「けれど、本当にトリスティンはすごいですね。こんなことを魔法を使わずに出来るんですから。」

「いやいや、トリスティンへ行けばもっと驚くぞ。特に臨時王都になつているミライではいま映画がとても人気なんだ。」

「エイガですか？」

聞きなれない単語に、ローザが首を傾げた。

「映画って言うのは、俺も1度しか見たことないが、簡単に言えば絵が動くんだ。しかも音が出て迫力がある。魔法じゃあんなことは出来ないだろうな。」

「へえ、すごいですね。是非見て見たいです。」

まだ見ぬトリステインに、ローザは相当な憧れを抱いていた。体の調子は良くないが、笑顔が絶えることはない。

そんなことを話している間に、ラジオからは次の曲が流れ始めた。

「続きまして2曲目『さよなら おまじない』です。」

そんな感じで、時間を潰して時刻は正午を回った。すると、無線機が電波を受信した。

「大尉殿、返電のようです。」

「ようし、しっかりと聞け。聞き漏らすなよ。」

「わかっています。」

受信した電波の内容を、シュミットはサラサラと紙に書き写していった。ちなみに義勇軍の電信では今の所暗号文は使われていない。一時期枢軸空軍が現れた頃に強度の弱い暗号を使用したか、その後電波を拾うような敵性勢力を確認できないので、平文通信に戻されている。

「これで終わりと・・・どうぞ。」



書き写したメモを、シュミットがエルベに渡す。

「御苦労。どれどれ・・・」

文面を読んでいくうちに、エルベの顔が険しい物になり始めた。

「どうかしましたか？もしかしてだめでしたか？」

トマが尋ねると、エルベはそれを否定した。

「違う。その逆だ。君たちを早急にトリスティンに連れてきて欲しいらしい。今日の夜、馬車でリュティスを出発し、3日後までにここから東に150km程行ったりールという街まで行けとのことだ。」

「今日の夜ですか？それはまたいきなりですね。」

「出発出来るかい？」

エルベは2人に尋ねた。

「私はいつでも大丈夫です。ローザ、君はどうだい？」

「なんとか。今日は体の調子もそこまで悪くは無いので。」

「ようし。だったらすぐに出発の準備を始めてくれ。持って行って良いのは必要最低限の荷物だけだぞ。」

すると、トマが苦笑した。

「御心配なく。そんなに持ち物なんてありませんから。」

「そうか。」

夕方、夜の帳が降りた頃に4人は出発した。トマの言ったとおり、彼とローザの荷物は小さなバッグに入る程の物しかなかった。体調が万全ではないローザに関しては不安が付き纏うが、それでも置いてくわけにもいかない。

4人は途中で衛士に出会うことを危惧したが、幸い街中で声をかけられたりすることはなく、そのまま街の外へと出ることが出来た。そこで4人は、別の工作員と合流する予定になっていた。

前途多難と思われたが、彼らの頭上には星たちが輝いて、その旅路を照らし出しているかのようだった。

## 『トウ機関』と人材 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。細かい提案はメッセージでお願いします。

### 『トウ機関』と人材 3

トリスティンへの亡命を希望するトマとローザをリュティスから連れ出すように命令を受けた『トウ機関』のエルベ大尉とシュミット兵長であつたが、この任務はかなりキツイ。

まずガリア側の官憲の目を欺くため夜間に出発すること。ハルケギニアの夜はかなり危険である。地球でもあつたように、夜の人気のない街道は盗賊やら夜盗にとつて格好の狩場となる。これだけでもかなり危険である。

それに加えて、ハルケギニアの場合は多いとは言わないまでもトロール鬼やオーク鬼、さらには吸血鬼などという厄介な生き物まで住んでいる。これらと出会つたら、もはや一環の終わりである。だから、夜間に移動するのはかなり覚悟のいることである。

また今回の脱出行には民間人が2人付いて来て、しかもその内の1人は病人と来ている。彼らを守りつつ、2人は指示された場所まで向かわねばならない。

さて、トマとローザを連れて外へと出たエルベたちは、一端街の西側へと向かつた。

そこで別のデポの作業員と合流する予定だつた。

エルベとシュミットは顔がばれている可能性があるのですが、大通りを避けて路地を伝いながらデポへと向かつた。幸いなことに、この行程においては特にトラブルは発生せず、20分程で4人は予定地点へと到着した。

「よう、エルベ。」

そこには、西のデポの責任者であるアスラン大尉が待っていた。エルベとは顔なじみの、30代前半の男だった。彼の傍には、一台の幌つき馬車が置かれていた。

「世話になるぞアスラン。と言っても、直ぐに出るがな。」

「わかってる。武器と食料は用意してある。馬車も手配しておいた。」

アスランが馬車を指差す。

「恩にきるぜ。」

彼は同僚の厚意に感謝した。

「ところで、病人がいるんだったな？」

「ああ、このローザという女の子だ。こっちはトマだ。」

エルベは連れてきた2人を紹介した。

「一体どんな病気だ？症状がわかれば、薬を出すが。」

「俺が見た限りじゃ多分風邪だと思うぞ。ただ、薬も飲めないし食事もう良い物を摂っていたわけじゃなさそうだから、こじらせたんだと思う。」

この時代、医者に掛かれない人はかなり多い。特に平民はそうだ。

そうになると、治療は自分たちでなんとかせねばならないが、それさえも満足に出来ない人もたくさんいる。だから軽い病気、風邪とか虫歯などが死に直結する可能性もあるのだ。

「だったら、風邪薬を出すよ。」

気軽にそう言ったアスランに、トマが目を剥いた。

「良いんですか!？」

薬は高くて貧しい平民には手が出ないものと思っていたトマにとって、それは予想外と言えた。

「まあ、高い物じゃないって聞くし。別に俺が風邪を引いているわけじゃないから。」

そう言って、彼はカバンの中から薬を出した。それは義勇軍内で支給されている、魔法を使っていない薬だった。そして日本人が見たらすぐにその正体がわかるだろう。何故ならそのパッケージにはパロンとカタカナで書かれていたから。ちなみに他にラッパのマークの胃腸薬とか、茶色の容器が目立つ塗るタイプの傷薬が義勇軍内では割とポピュラーに使われていた。

もちろん、薬にはハルケギニア語に訳された使用説明書が添付されている。

「あ、けどこれ食後に飲む薬だね。お嬢さん食事は摂った？」

「ええと、いいえ。まだです。」

ローザが首を振る。

「そう言えば晩飯はまだだったな。」

エルベが思い出したように言った。

「だったら、用意した食料の中に缶詰あるから食ってけよ。パンの缶詰もあるし、おかずの缶詰もあるから。」

「そうするよ。」

エルベは馬車に積まれていた食料の中から一部を取り、遅い晩飯を摂ることにした。パンと野菜と鶏肉の煮物の缶詰を取り出すと、彼はそれをトマとローザに渡した。

しかしながら、2人に見れば缶詰などという物は知らないから、渡されてもそれがどのような物であるのかわからない。

「これは一体？」

手渡された物を見て、ローザが首を捻る。隣のトマも、不思議そうな表情をしている。

「こいつは缶詰って言ってな、この中にパンとか煮物とかが入ってるんだ。ちよつと手間が掛かるが、長持ちするからまた便利なんだよ。この道具を使って開けるんだ。こんな感じに。」

エルベは2人の前で缶切りを使った開け方を実演してみた。2人も缶切りを渡されると、それを真似して缶詰を開けた。そして渡されたフォークとスプーンを使って食べ始めた。

「あ、おいしい。」

一口口に入れたローザが感想を漏らした。一方、トマは別の点に感心していた。

「これは随分と便利な物ですね。」

「そうだろ。俺も最初渡された時はビックリしたよ。これも東方からの技術なんだ。火を使えばもつと美味しく出来るが、ちよつと今は時間がないから冷たいままで我慢してくれ。」

「いいえ、これだけで充分ですよ。それにしても、義勇軍の人は随分と贅沢な物を食べているんですね。それに東方にはこんな技術があるんですか。」

エルベは東方の技術と言ったが、もちろんこれは異世界日本の技術だ。当初は缶詰だけを輸入していたが、さすがにそれだけでは間に合わないしこちらでの技術育成の点でも宜しくないで、今では缶詰の製造機自体を持ち込んで、大々的に製造していた。バリエーシオンもパンや鶏肉以外に牛肉や魚の物もあるし、少数だが日本人向けに漬物を入れた物もある。

「こんな物で驚いちゃいけませんよ。トリステインには他にもたくさんありますよ。」

トマの言葉にシュミットが言い返す。

「シュミットの言うとおりだな。最近是他にも色々新しい技術が入って来ているからな。」



エルベとシュミットの2人はトマとローザに簡単ではあるが、最近トリステインに持ち込まれている新しい品々について説明してやった。鉄道や映画、電灯と言ったものから料理まで話すネタは色々あった。

トマとローザの2人はその話を興味深そうに聞いていた。

「本当にそんな物があるんですか？」

「ああ、ミライカラ・ロシエールへ行けば見ることが出来るよ。」

「お2人とも見たら驚きますよ。」

「私たちの知らない間に、そんな物がハルケギニアに入ってきていたんですね。」

そんな感じで4人はお喋りを楽しんでいた

「楽しんでる所悪いがエルベ、俺はそろそろ戻るぞ。」

アスランがエルベに声を掛けた。

「おう、そうか。今回は色々ありがとな。」

「そっちこそ、これからが大変だぞ。病人を連れてトリステインへ向かうんだからな。一応馬車にはT3や手榴弾も積んでおいたが、気をつけていけよ。ガリアの官憲もそうだが、野盗とか幻獣にも警戒しろ。」

「言われなくてもわかってるよ。そっちも、俺たちの分まで頼むな。」

「ああ。それじゃあ、幸運を。」

2人は互いを見合って敬礼した。そしてアスランは闇の中へと消えていった。

それから15分ほどして、食事を終えて缶詰をエルベが『鍊金』魔法で土にして処分（本来は回収してリサイクルだが、敵地にいるためそんなことしている余裕はない）し、ローザが薬を飲んだことを確認すると、エルベたちはアスランが用意してくれた馬車に乗り込んだ。

「それじゃあトマ、それにローザさん。出発するが、良いね？」

エルベは念のため最後に意思確認をしておく。それに対して2人はしっかりと頷いた。

「じゃあ出発。」

エルベは手綱を握って、馬車を出発させた。月明かりと星の明かりによる明るさしかない夜の街道を、馬車はゆっくりと進み始めた。

出発した頃は、遠目にリュティスの灯が見えていたが、30分もするとそれも見えなくなり、辺りは闇に包まれる。その中を、エル

べは警戒しながら馬車を進めた。

もちろん、冒頭に書いたように危険な状況に置かれているのでそのための準備も、彼はちゃんとしていた。彼が座っている腰掛にはT3短機関銃と弾倉が隠され、万が一の時には素早くそれを取り出して撃つことになっている。

また体には拳銃と手榴弾、音響閃光弾を身につけており、咄嗟の近接戦闘に使う。荷台にいるシュミットも、ほぼ同様の武器を持っている。さらに、馬車の屋根部分にはやはり擬装されたT1小銃が2挺据え付けられている。加えて彼の場合『メイジ』だから、杖も持っている。

機関銃こそ持っていないが、これは義勇軍の通常歩兵と同じ程度の武装だ。ちなみに隠されたり擬装されたりしているのは、もちろんガリア側の調査を受けても乗り切れるようにしたためだ。

また武器以外に食料や水、それに無線機も勿論持っている。150kmの行程を3日で走破する予定だが、実際にその通りに行けるかはわからない。食料も水も多少余裕を持たせて積まれていた。そして無線機は、そうした不測の事態が起きた場合に必要不可欠なものだった。

その不測の事態は、出発してから3時間後に発生した。

「止まれ!!」

いきなり数人の集団が馬車を包囲した。明らかに野盗かその類だった。

「おいおい、初っ端からこれかよ。」

エルベはうんざりしたように言った。そんな彼に構わず、リーダーと思しき男が言った。その男は杖を握っていたからメイジのようだ。男たちは松明を持っていたから、他の連中の様子も一目で判る。他の男たちは剣を持っているから、どうやらメイジは目の前の男だけのようだ。

「荷物を置いていけ！！そうすれば命くらいは助けてやるぞ。」

男はそう言うが、もちろんそんな物信用できるはずがない。

「野盗か・・・やれやれ。勿体ないが止むを得ないか・・・シュミット！夜戦だ！」

荷台に向けて叫ぶと、彼はまず拳銃を取り出して発砲した。

パンパンパン！！

当てる気などない、威嚇発砲だ。しかし、相手は予想外の攻撃にたじろいだ。平民と思っていた相手が、いきなり見たこともない銃で、しかも連続発砲したのだから当たり前だろう。その間に、荷台から降りたシュミットがT3短機関銃を発砲した。

ババババ！！

「うわああ！！」

「わああ！！」

いきなり連続発砲されたことに驚き、男たちは一瞬怯んだ。中には弾が当たった者もいるらしく、そのまま倒れる人間もいた。

野盗たちは、ここでもうやく自分たちが相手にしているのが只者ではないことを正確に把握した。このまま行けば、蜂の巣にされると考えただろう。

しかしながら、エルベは彼らに付き合うつもりなど毛頭なかった。

「今だ！シュミット乗れ！！」

エルベは手綱を操り、馬を全速力ではしらせた。危険なことだが、この場合しょうがない。

走り出した馬車にシュミットは飛び乗ると、さらにT3を1連射して相手を牽制した。そして野盗が追いかけてこないのを確認すると、荷台の奥で身を小さくしていた2人に声を掛けた。

「もう大丈夫ですよ。驚かせてすいません。」

「助かったんですか？」

トマが尋ねる。

「ええ、連中は追っ払いました。」

「そうですか。良かった。」

「はい。けど、今後もこのような襲撃があるかもしれません。お2人はその場合、今回と同じようにしてください。」

一行は1回目の危機をなんとか回避した。しかしながら、旅は始まったばかりだった。

『トウ機関』と人材 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

『トウ機関』と人材 4（前書き）

久しぶりにあの人とアニメのキャラが登場します。



## 『トウ機関』と人材 4

出発早々野盗の襲撃を受けたエルベ大尉たちであったが、その後は特に野盗や幻獣による襲撃を受けることもなく時折休憩を取り、トマも含めた3人で手綱を持つのを交替しながら指定された場所へ向けて前進を続けた。

風邪薬を飲み、栄養のある食事を摂ったおかげかローザの隊長も幾分回復し、エルベが心配していた長旅による悪影響は起きなかった。

ちなみに、道中の食事はさすがに缶詰や保存食ばかりだとマズイので、立ち寄った村などで野菜や果物、肉や卵を買い加えている。

また万が一に備えて、シュミットとエルベがトマに拳銃の使い方をお教えた。もし2人が戦闘状態に入り、彼らを守れなくなった時は自分たちで自分の身を守ってもらう以外にない。

そして予定通りに出発してから3日目、一行はリュティスから150km程離れた寒村の外れに到着した。そしてそこで待っていたのは、やはり『トウ機関』の指揮下で情報収集を行っていた人間たちだった。

「エルベ大尉です。」

エルベは自分たちを待っていたグループの長である女性に敬礼した。それに対して女性のほうは、敬礼はせずに軽く会釈した。

「長旅お疲れ様でした。ウエザリーです。」

なんとエルベたちを出迎えたのは、かつて禁忌の魔法を使って逮捕されたウエザリーだった。彼女は捕まった後、ハルケギニア中を周っていたため地理や文化に熟知し、さらに情報収集や裏社会との繋がりが評価されて、義勇軍にスカウトされた。もちろん、かつてのマチルダ同様高額を提示されてのことだ。

既に復讐の意義を失い、ただ監獄の中で日々を送るしかなかった彼女にとって、これは条件付きながらも魅力的な提案であった。また以前の劇団課業を続けながら情報収集をしても良く、その費用は義勇軍が負担する。さらに杖も返されるというのも彼女を喜ばせた。もちろん、禁忌魔法の使用は厳禁だが。

もちろん、今度裏切るようなマネをしたら問答無用で殺されるが、現在の所『トウ機関』ではそのような事態は起きていない。そして彼女も、他の釈放された劇団員とともに淡々と情報収集と工作活動を行っていた。

ただし、彼女らの場合正規の軍人となることだけは認めなかった。そのため、現在の身分は軍属という扱いになっている。そう言う面で束縛されるのは嫌であったようだ。

その彼女らは劇団という姿を活用して、各地の工作員への補給任務を行っていた。数台の馬車を仕立てて動く彼女らなら、多少運ぶ物資に余裕があるからだ。

「上からの命令どおり食料と水をお渡しします。それから武器については大丈夫ですか？」

「一回野盗と遭遇して、短機関銃を使用しました。だから、出来れ

ば弾倉を1、2個追加したいのですが。」

「わかりました。すぐに用意させます。」

彼女は部下に命じてそれらをエルベに渡した。

「それから新しい命令書を預かっています。」

移動中だったことと電池の残量もあり、無線機を使っている時間はほとんどなかった。そのため新しい命令は彼女からの受け取りとなった。

「あ、ありがとうございます。」

おそらく伝書フクロウが何かで送られた封書をエルベは受け取った。そしてシュミットやトマらの所へ行って開き、中身を確認した。

「今度は何て書いてあるんですか？」

シュミットが尋ねた。エルベは命令書を一通り読むと、その内容を3人に向かって言う。

「・・・ここからさらに東へ80km行けだ。そこで空からお迎えが来るようだ。」

「空？ヘリでしょうか？それとも竜騎士でしょうかね？」

『トウ機関』の作戦によく用いられるのは、垂直離着陸の機能を持つヘリか、同様の機能を持ち、なおかつエンジン音を出さないのがメリットである臨時編入中の竜騎士隊だ。

特に竜騎士隊は航空機の配備によって、攻撃並びに迎撃手段としての勝ちを大きく失っており、緒戦の被害を加味してそうした任務に用いられる可能性は今後少ない。代わりに、こうした任務に重宝されるようになっていた。

「へりは航続距離の関係から考えられん。恐らく竜騎士隊だな。ルネ大尉あたりが迎えに来てくれるんだろ。会合予定時刻は明後日の夜だ。」

「2日間ですか・・・また馬車を急がせる必要がありますね。」

「ああ。トマ、それにローザさん。そう言うわけだ。お2人には悪いが、休憩を終えたら直ぐに出発するぞ。」

「ええ。」

「わかりました。」

そしてエルベは直ぐにウエザリーの元へと行き、自分たちの行き先を話した。

「そうですか。それではさらに東へ。」

「ええ。今回はお世話になりました。そちらもお気をつけて。最近ハガリア側も色々動いているようなので。」

「ありがとう。では。」

エルベたちへの補給任務を終わらせた彼女とその仲間たちは、そ

の場を離れて行った。そしてエルベたちも、再び東へと進み始めた。

「それじゃあ俺たちも行くぞ。」

「はい！」「」

さらに時間は進んで2日後の深夜、エルベたちはさらに東へ80 km行った予定地点に到達した。しかしながら、最後の最後に行を苦難が待ち受けていた。

「ここまで来てこんなものかよ。」

T3短機関銃の引き金を引きながら、エルベは悪態をついた。

予定時刻より前に到着したまでは良かったのだが、そこでオーク鬼の群れと鉢合わせしてしまったのが、そもその始まりだった。そっちは銃と手榴弾を使って撃退したのだが、その後音に引かれたのか、今度は野盗の集団が襲い掛かってきた。しかも、5日前に出会ったような小規模な集団ではなく、かなりの規模のグループだった。

「大尉殿マズイです！」

シュミットに言われてエルベが周りを見回すと、数十人の男が自分たちを取り囲んでいた。しかも、良く見ると数人が杖らしいものを構えているのがわかる。

「完全に包囲されたな。残弾も少なくなっている時に。」

オーク鬼を撃退するのに銃弾を大分ばら撒いたので、既に弾は半分程度しか残っていなかった。

「何で連中俺たちを！？」

「そんなの荷物が目的に決まっているだろ。貨物なら奪って売る、人でも奴隷商人に売る。しかもさっき俺たちはオークの群を全滅させただろ。つまり、それだけして守るだけの物を乗せていると思われるわけだ。貨物なら余程重要な品だ。人にしても、それだけ大事な人間を乗せていることになる。攫えば身代金がたんまり入るってわけだ。」

「なるほど。」

「感心しないで撃て！！いや、お前は後ろに行つて2人を脱出させる準備をしろ。それから発炎筒を準備しておけ！」

「了解！」

馬車の前で銃を撃っていたシュミットが荷台に乗っている2人の元へと向かった。

「お2人さん、ここにいちやマズイです。逃げる準備をしてください。」

「そんなにマズイのかい？」

「最悪です。四方を完全に取り囲まれちゃってしまして。」

「そ、それで大丈夫なんですか？」

ローザが脅えながら言う。当然である。

「弾の残りも少ないので、多分馬車を捨てて強行突破することになると思います。トマさん、万が一我々が倒されても、省みることなく逃げて下さい。そうすれば、味方の竜騎士がやって来ますので・・」

そこまで言った時、突如爆発音とともに馬車が揺れた。

「キャ！」

「攻撃か！？さ、2人ともとにかく降りてください。降りたら出るだけ身を低くして、馬車に隠れるようにしてください。」

3人が馬車から降りると、そこにはエルベが身をかがめて待っていた。

「あ、大尉。」

「不味いぞ。連中どんどん距離を縮めてる。さっきも『ファイヤーボール』を撃つてきやがった。幸いまだ射程内じゃなかったみたいだが、もうそれも時間の問題だ。馬の手綱を放して走らせたが、それも時間稼ぎにしかない。いいか、これから逃げるぞ。そっちのお2人さんも良く聞け。」

「「はい。」」

「これから俺とシュミットで音響閃光弾・・・目くらましみたいな物を連中に投げつける。その瞬間は目と耳を閉じる。爆発したら、すぐに走れ。」

「わかりました。」

トマが答える。

「よし。じゃあシュミット。」

「はい。」

2人はそれぞれ1個ずつ、音響閃光弾を持った。そしてピンを抜いた。

「やれ！」

2人はそれを目の前の敵に向けて投げつけた。投げつけると、即座に目と耳を閉じて爆発に備える。

そして数秒後、爆発音と強烈な閃光を辺りが包んだ。もちろん、なんの備えもしていなかった野盗たちは目と耳を奪われた状態に陥った。

「よし。走れ走れ！」

4人は走り始めた。

「喰らえ！」



エルベが目の前の野盗の足に、1発拳銃を打ち込んだ。

「グー!!」

その野盗が痛みを堪えられず倒れこんだ。つまり包囲網の一角に穴が開いたわけだ。もちろん、その穴を見逃さずに4人は突破を図る。

「奴らが逃げたぞ!」

「追え追え!」

ようやく視覚と聴覚を取り戻した野盗連中が4人を追い始めた。

「奴ら追ってきますよ!」

「諦めの悪い連中だ。」

「もう弾がありません!」

すると、トマが渡されていた拳銃を渡した。

「これをどうぞ。」

だがエルベはそれを突っぱねた。

「だめだ。それはあんたがその娘を守るために使うもんだ。俺たちが使ったら意味がない。」

「けど。」

「こうなったら、手榴弾と音響閃光弾の残りを奴らにぶつけて時間稼ぎを……」

悲壮な覚悟を決めようとしていた彼の目に何かが入った。

「伏せろ！」

「「え！？」「」」

他の3人はあまりに急だったため、その言葉通りにはすぐに出てなかった。

「だから伏せろ！」

「ウワ！」

「キャ！」

「ゲー！」

3人はエルベによって地面に叩きつけられる格好となった。その瞬間、上空を何かが通り過ぎ、さらに次の瞬間には後方から野盗らの悲鳴と、何かが燃え上がる音がした。

「どうやら間に合ったみたいだな。」

エルベが顔を上げると、そこには野盗を追いつ散らす竜騎士の姿があった。さすがに竜相手では話にならないと理解した野盗は、一斉に逃げ始めた。

「間一髪だったな。」

そう呟きつつ、エルベは発炎筒を炊いて自分たちの居所を上空の竜騎士隊に知らせた。間もなく、1頭の竜が彼らの近くに降り立った。

「『トウ機関』のエルベ大尉ですね？」

その竜から降りて来たのは、若い大尉だった。ただし、トリステインではなくアルビオン軍の制服を着ていた。どうやらアルビオンからの派遣兵らしい。

「ああ、任務御苦労。そしてありがとう。君たちが来なかったら危なかった。」

「いえ、こちらこそ遅れて申し訳ありません。ヘンリー・スタッフオード大尉です。命令により部下と共に迎えに上がりました。」

「エルベだ。感謝する。」

2人は互いの顔を見て敬礼した。

『トウ機関』と人材 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 『トウ機関』と人材 5

間一髪の所でヘンリー中尉率いる竜騎士隊に助けられたエルベ大尉らは、その後彼らの竜に乗せてもらうと一気に空路を東へと向かい、無事トリステインのミライへと辿りついた。

「なんとか無事に着けたな。これで俺たちの任務は一応終了だ。あんたたちともここでお別れだな。」

竜から降り、司令部の方へと歩きながらエルベがそんな事を言う。

「本当にありがとうございました。エルベ大尉、シュミット兵長。」

トマが2人に頭を下げた。

「何、俺たちは命令に従って任務をこなしたただけだ。」

「それに、トマさんとローザさんはここが終点じゃないでしょ?」

シュミットの言うとおり、トマの場合はかつての主であるシャルロットの元へと向かう予定である。彼女は現在海を越えた北のアイスランドにいる筈なので、そこまで移動しなければならない。またローザの場合も、病気を完治させて生活の基盤を築かなければならない。

「そうでしたね。」

トマもその事を思い出す。

「2人とも色々と苦しいこともあると思うが、がんばれよ。」

「はい！」

エルベの言葉に、2人は笑顔で答えた。

「また、いつか会いましょう。」

「ああ。」

トマとエルベはそう約束した。そこへ、兵士が1人やって来てトマとローザに向かって言う。

「亡命希望の方ですね。ようこそトリステインへ。お疲れの所恐縮ですが、色々とお聞きすることがあるので、こちらへどうぞ。」

その兵士はトマたちが行こうとしているのは別の方向へ2人を案内しようとした。

「これで本当にお別れだな。」

「そう見たいですね・・・わかりました。それじゃあ、お2人ともお元気で。」

「本当にありがとうございました。さようなら。」

別れる直前、2人は最後の礼をエルベとシュミットに向け言った。そして今度こそ本当に4人はそこで別れた。

司令部で簡単な調査を行われた二人の亡命は、特に不審な点もないと言ったこと、またトマの場合は既に彼のことを聞きつけたシャルロット直々に身元保証をしていたので、そのまま受理された。ただしローザはまだ体調が完治したわけではなかったので、そのままミライの病院へと入院となった。

既にお互い恋心を持っていた2人であったが、トマの場合はなるべく早くアイスランドへ向かいたかったので、彼女を病院に預けて先行することとなった。

彼はガリアの姫殿下に身元を保証されていたため、義勇軍側から外洋諸島を経由してアイスランドへと飛ぶ輸送機に乗せてもらった。そのため、2日後にはアイスランドの州都レイキヤビクへと到着している。

この時丁度、シャルロットは提供された亡命政府庁舎にいた。そこに辿りついたトマはそのまま彼女とオルレアン夫人の前へと通されている。

「お久しぶりですシャルロット殿下。オルレアン夫人。」

「久しぶりトマ。また会えて嬉しい。」

「良くここまで来てくれました。そして長旅お疲れ様でした。トマ。」

ガリアから遙々亡命してきた彼を、2人は労いと歓迎の言葉を掛

けて出迎えた。

「お2人の呼びかけに応じ、ここまで馳せ参じました。一度は殿下と敵対した私ですが、やはり私がお仕えするべきはお2人です。そう心に誓い、やって参りました。無粋なお願いでありますがお2人のために今一度働きたいと切に願う次第です。」

以前彼は北花壇騎士団時代のシャルロットと戦ったことがある。だから自分のことを卑下している。しかしながら、シャルロットの方はそんなこと気にしていなかった。

「過去のことは気にしない。それよりも私はあなたがここまで来てくれたことに感謝してる。」

シャルロットの言葉に、オルレアン夫人も言う。

「その通りですトマ。その時の話はシャルロットから聞きました。ですが、シャルロットの話では、それは仕方がなかったことです。今はお互いその時の柵から解放されました。だからもう気にしないで良いですよ。」

もちろん2人の言葉に、トマはいたく感動した。

「お2人の寛大なる言葉に深く感謝いたします。」

そして話は今後のトマの処遇へと移った。

「あなたには是非、新設される親衛騎士団の指揮を執って欲しい。」

「親衛騎士団？それは一体？」



「亡命したり、降伏して私たちに帰順したりしたガリア人を中心に編成された部隊。簡単に言えば王家を守るための近衛部隊のこと。」

シャルロットの説明に、もちろんトマは驚いた。いくらシャルロットと面識があるとはいえ、平民で着の身着のままでやって来た人間を、現在のガリアで言えば花壇騎士団なみの精鋭部隊の指揮官に任命するというのは。

「あなたが拔群の戦闘力を持っているのを私は身を持って知っている。だからあなたにお願いしたい。」

そんな子と言われても、トマ自身戸惑ってしまふ。

「いえ、しかし。それだったらもっと自分より適任の方もいるのでは？」

「確かにメイジや貴族出身の人間もいる。けど私はあなたが一番適任だと考えている。どうかあなたにやってもらいたい。」

「いえ、しかし。」

「私はあなたにお願いしたい。」

シャルロットの強いお願いに、トマとしても困った。シャルロットは彼を信頼していた。そんな彼にオルレアン夫人が言う。

「トマ。姫殿下にここまで言わせてまだ断るつもりですか？」

「・・・わかりました。その命を謹んでお受けいたします。」

「良かった。ありがとうトマ。」

笑みを浮かべながら、シャルロットは礼を述べた。

親衛騎士隊隊長の中尉に任命されたトマであつたが、その後が大変であつた。彼の指揮する60名編成の部隊は、ガリア亡命政府をバックアップする『東方義勇軍』の後援の下で訓練を施された。もちろん使う兵器はT1ライフルを始め、ハルケギニアの標準レベルを超越した武器ばかりであつた。

それらを短期間でマスターすることがトマたちに課せられた仕事であつた。義勇軍から派遣された軍事顧問の説明を受け、さらにわかりやすい説明書を元に彼らは1日でも早くその使い方に習熟することを目指した。

ただ幸いなことに、親衛騎士隊の人間の多くは軍人や少なくとも平民でも数少ない知識階級出身者で占められたため、意外と早くこれらに慣れることが出来た。そしてなんとか形に成つた所で、義勇軍中心の連合軍によるガリア逆侵攻が開始され、親衛騎士団も創設早々東ガリア政府樹立式典警備に当たっている。

その間に病気が完治したローザもアイスランドに到着している。既に彼女のことはトマからシャルロットへと伝えられていたので、彼女はそのままシャルロットらの世話係の仕事を得ている。

あとは戦争がそのままシャルロットらの勝利で終われば本当の順風満帆であったのだが、それも束の間のこと、間もなく今度はロマリアで教皇が暗殺されると言うクーデターが発生し、戦争は混迷の度合いを深めることとなる。

そしてこの事件の直後に行われたのが、ガリアの秘密のお姫様というべきジョゼット救出作戦であった。

その時点でローザどころからトマも知らなかったが、実はロマリアにはシャルロットの双子の妹であるジョゼットがいたのである。

過去の王権争いの苦い記憶から、双子を忌み嫌っていたガリア王家に双子の一人として生まれた彼女は、マジックアイテムによって顔を変えられて、ガリアの端にある修道院に修道女として預けられたのであった。

彼女が無事である事は、潜入していた『トウ機関』の工作員によって義勇軍上層部、ならびにシャルロットとジョゼットの母親であるオルレアン夫人も知る所であった。

しかしながらマズイことに、そのジョゼットの身柄をガリア軍が確保する可能性が浮上してきた。そんなことをされたら、東ガリア政府の正当性が大きく揺らいでしまう。

さらに、その修道院に教皇ヴィットーリオの側近であり『使い魔』であったジュリオがその修道院に逃げ込んでいる事が『トウ機関』の調査によってわかった。しかも彼は以前にも修道院を度々訪れていた。

ロマリアのクーデター派経由でその情報が漏れ修道院へガリアの

手の人間が調査に入る可能性があった。彼の身柄がジョゼットともガリア側へ渡るのも連合軍側には不味かった。

そのため連合軍では、本来予定されていたサン・マロン攻略作戦を一時棚上げにして、ジョゼット救出作戦（と言うより奪取作戦）を行うこととなり、敵の聖域であるガリア近海へと艦隊を派遣した。

このガリア王家にとっても一大事と言える作戦に、トマ率いる親衛騎士団も一部が志願して参加したのである。しかしながらさらにすごいのが、シャルロット・イザベラ両姫殿下が駆逐艦「ゆきかぜ」に座乗して直々に敵地へと赴いたことだ。ちなみにこの際、世話係としてローザも同行するというオマケがついている。

夜間、目標の修道院に接近した「ゆきかぜ」は、既に予め潜入していた『トウ機関』員からの誘導を受けつつ、後方の空母からヘリコプターで飛んできた義勇軍歩兵部隊と「ゆきかぜ」に同情してきた義勇軍歩兵部隊と共に修道院へと突入した。この際、義勇軍同様先に動いていたガリアの潜入部隊（厳密にはシェフィールド）との激烈な戦闘が行われた。

戦闘中トマはいつの間にか一緒になった義勇軍の人間と一緒に戦っている。ただし、無我夢中で戦い修道院の人間を保護した為その相手が誰であるかに気づかなかった。なんとかガリア軍の攻撃を撃退し、「ゆきかぜ」へと戻る内火艇上で、トマは初めてその隊員が誰であったかを知ることとなった。

「あ、あなたは！？」

「よう。久しぶりだな。こんな所で会うとは思わなかったぜ。」

トマがその顔を確認して驚いた相手とは、何とミライの飛行場で  
わかれたエルベ大尉であった。

『トウ機関』と人材 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

外伝は次回から東部戦線の話にする予定です

## 東部戦線 1

ゲルマニアでの反皇帝派によるクーデターが発生する少し前、トリスティンと国境を接するツェルプストー領に築かれた野戦飛行場に、『東方義勇軍』ゲルマニア方面軍が進出した。

ゲルマニア方面軍は司令官のミツヘルヒ中将以下、人員の6割がガリアより寝返った枢軸空軍部隊より編成された部隊で、地上部隊は基地警備隊のみであるが、空中戦力においてはパイロットの9割が実戦経験を持つ有力な部隊であった。

同部隊が編成され派遣された目的は、無論ゲルマニアで起こされる予定のクーデター支援である。義勇軍（トリスティン＋アルビオン）にしてみれば、ガリアとの戦いに集中するためゲルマニアとの戦争はとっとと終わらせたいところであった。

だからこそ、ゲルマニアでの政変がスムーズに終わらせるために戦力の一部を分派した。機数としては60機あまりの各種航空機であったが、航空機がハルケギニアの飛行船や竜騎士に対してほぼ無敵ということを勘案すれば、この数は凄まじい戦力である。

ちなみに人員は枢軸空軍部隊からの移籍兵が含まれているが、使用する航空機自体は一部を除いて義勇軍採用の機体に取り替えられていた。そうしないと補給などの面で不都合が起きるからだ。そのため戦闘機は「超零戦」1型と「バッファロー」、爆撃機は「ドントレス」に統一され、輸送機や連絡機に引継ぎ機が混じる程度だった。

「超零戦」1型は、桜花飛行機が自信を持って作った重戦闘機であ

る。「バッファロー」がそこその性能で大量生産を主眼に置いた戦闘機であつたのに対して、「超零戦」は隔絶した性能で量産性の悪さを補う筈であつた。

しかしながら、性能の良さに対して慣れない液冷エンジンの採用や様々な新機軸の採用が徒となり、稼働率が思うように維持できなかった。そのためやむなく性能の低下を覚悟してエンジンの交換と一部の装備を取り除いた2型が製作された。

2型も1型と同じく「バッファロー」に比べれば手間が掛かる飛行機ではあつたが、稼働率は大きく向上した。また性能の低下も桜花飛行機設計陣の努力でそこまで大きな物ではなかつた。そのため「超零戦」は旧日本陸軍の「飛燕」と「五式戦」に例えられた。

そして2型の充足により、1型はほぼお役御免となつた。しかしながら20機近い機数があり、さらに機齢自体もたいして行っていない状況で予備機に持つていくのは勿体ないので、液冷エンジンの経験充分なゲルマニア方面軍に稼動する18機全てが配備された。

元から配備されていた機体は予備機としてミライ基地で保管されるか、実験評価名目で桜花飛行機へ預けられた。中には地球で航空機マニアに売却された機体もあつた。

さて、そんなゲルマニア方面軍に配備されたパイロットの中には、才人らの世界における史実であれば「アフリカの星」と呼ばれたマルセイユ中佐も配備されていた。

才人の世界の歴史では、乗り換えたばかりの乗機の故障による事故で死亡と言う非業の最期を遂げた彼であつたが、この世界に来たマルセイユは転移する前の世界でそのようなことは起きず、戦い続



けていたと言う。ただし彼の世界ではヴィシー・フランス政府とイタリア軍がかなりやる気を持っていたので、彼の撃墜スコアは史実より少なかった。

それでも、義勇軍に転籍した直後にミライの飛行場上空で行った模擬空戦では、菅野や才人と言った名だたるパイロットたちと互角の腕を披露している。どうやらパイロットとしての腕は史実と同じようであつた。

ついでに彼の人間的な性格、独断専行気味で女好きな傾向というのも同じらしく、ミライに來た直後から、顔を合わせる若い女性に声を掛けまくっている。おかげで義勇軍の女性兵士や、街の若い女性たちから早速危険視されている。

ただし本人から言わせれば、伝記や映画で見せられた才人らの世界の自分よりはマシだと言う。

そんな彼もゲルマニア方面軍に配属されて、愛機をMe109のG型から「超零戦」1型へと代えてゲルマニアに進出している。

「またすごい所だなここは。」

進出直後、飛行場の周りを身ながらマルセイユはそう言った。彼らの進出した飛行場は、人目を避けるために、わざわざ集落から離れた場所に作られていた。また王軍を警戒して、駐機場や兵舎など

も嚴重な擬装が施されていた。

そのため、世俗と交われそうな雰囲気は欠片さえなかった。

「これじゃあ、とてもじゃないが女の子とは会えなさそうだな。」

「あなたは本当に女好きですね。マルセイユ中佐。」

そんな彼に後ろから声をかけるのは、同じ小隊を組んでいる瑞浪康夫大尉だ。彼は名前から判るとおり、義勇軍に以前からいた人間だ。元はアクロバットの仕事をしていたのだが、より大きな刺激を求めていた彼は、偶然スカウト会社の目に止まり、その勧によってこの世界へとやってきた人間である。

最近では地球における人材集めも色々な手段を通じて行われていた。それでもって世間から全く感づかれていないのだから、平賀才吉という男の凄さがわかると言える。

さて、瑞浪大尉という比較的高位の人間がマルセイユと小隊を組んでいるのは、先述した彼の性格に問題があった。

マルセイユと言う男は、史実でも単独で戦うことの多い一匹狼のような男であったが、この世界に来たマルセイユもその空戦手法は基本的に同じで、単独による戦いを好む見越し射撃の名人だった。

見越し射撃と言うのは相手の未来位置を読んで銃弾を撃ちこみ撃墜する方法である。簡単そうに思えるが、実際何百キロで飛んでいる飛行機ではそうそう出来る業ではない。通常撃墜王たちが多用するのは、敵の背後から近付いて至近距離から攻撃する方法である。これなら照準機による照準で攻撃可能である。

また一匹狼という点でも変わっている。他の撃墜王たちにおいても、最低限小隊単位で意思疎通を行い戦う。しかしマルセイユはそうではない。彼と同じような方法で戦った人間としては、ノモンハーンで活躍した日本陸軍の篠原准尉がいる。彼は1日で11機、総撃墜数58機を記録したがソ連戦闘機との戦闘で戦死している。

そのようなマルセイユと組ませるとしたら、最低でも自分1人になってもある程度の状況判断が出来、十分な経験のあるパイロットが望ましかった。そのため、戦闘経験こそまだ数回しかないがパイロットとしては優秀である彼が選ばれた。

ちなみに、彼の性格はどつちかと言うと実直であるため、女好きで一匹狼なマルセイユとは対照的な面がある。ただし、不思議なことにこれでそれなりに上手くやっていた。

「瑞浪大尉、別に俺はただ単に女に声を掛けている訳じゃないぜ。この人だ！て言う運命の人を見つけるためにやっているのさ。」

「本当ですか？」

「本当だよ。君たちの世界の俺とは違うぜ。」

「まあ、そうだとしても、しばらくは女性に出会えそうにはありませんから、仕事に専念して下さいね。」

「瑞浪大尉は堅いね。けど、仕事と言っても別にライミー（英国人の蔑称）やヤンキー（アメリカ人の蔑称）の戦闘機が出てくる訳じゃないんだろ？ミライで模擬空戦したけど、竜騎士なんて単なる的だよ。あんな物と戦っても面白くないね。それに地上攻撃もな・・・」

やっぱり戦闘機パイロットは敵戦闘機と戦って何ぼだよ。」

彼の言うとおり、現状ではゲルマニアの空に目ばしい敵は残されていないかった。竜騎士やグリフォンと言った動物では戦闘機とは天と地程の性能差がある。大物である空中艦隊にしても、航空機からしてみれば的に過ぎないし、第一ゲルマニアの空中艦隊はほぼ全滅しており、数少ない残存艦もキールの軍港に引きこもっていた。

「文句があるなら別に辞めても良かったじゃないですか？あなたの仲間にも結構な人数が除隊したんでしょ？」

枢軸空軍部隊が義勇軍に統合された際、希望者は除隊を許可され、2割ほどの人間が辞めている。

「あれは彼らが手に職を持っていたからさ。けど僕には空を飛ぶ以外に仕事がないからね。」

実際、マルセイユの言うとおり除隊した人間の多くは軍人以外でもやっていける連中だった。ある者は技術者として、ある者は職人として現在はミライなどで存分に腕を振るっていた。また才吉たちが地球から持ち込んだ資料で勉強し直している人間もいた。

「だったら文句言っていないで働いて下さいよ。」

「わかってる。こっちだって生活が掛かっているからね。それに折角新しい飛行機も貰ったからね。」

そう言ってマルセイユは、自分の新しい愛機となった「超零戦」を見上げた。当初彼はMe109からの機種変更を嫌がったが、「超零戦」に試乗した途端この機体を大いに気に入っていた。速度・

旋回性能・航続力などあらゆる面で「超零戦」はMe109を超越していたからだ。

彼の新しい愛機はドイツ空軍で採用されていた灰色を基調とする塗装に塗りなおされ、コックピットの下には黄色の14のマークが描きこまれていた。国籍マークはまだクーデターが起きていないため無国籍だが、クーデターが開始されたらトリステインの白百合を描き込む予定だった。

ところで、義勇軍の隊旗である旭日旗に対して日本人以外の地球出身者からは異議が上がっているので、最近では新しい隊旗の検討が為されている。異世界に放り出されたとはいえ、やっぱり人間故郷への意識は消えないものだ。

またヨーロッパ人と日本人では太陽に関する認識も違うと言われている。ヨーロッパ人は太陽を黄色や白として視るが、日本人は赤として視ると言われている。

「確かにこれは良い戦闘機ですね。しかし以前の義勇軍で持て余していた機体を、ドイツ人やイタリア人整備士は良く整備していますね。」

「我タルフト・バッフェ（ドイツ空軍）もイタリア人も使っていたエンジンの多くは液冷だからね。多少精緻だが、これくらいなら朝飯前だよ。」

「それは頼もしいですね。」

「何にしろ、このヌル（ゼロのドイツ語）さえあれば怖いものなしだ。しかしそれに見合う敵はいそうにないしね・・・それに可愛い

女の子もいないなんて、本当にこのゲルマニアはこの世界におけるドイツなのか？」

マルセイユが再び女性のことを話題に出したので、瑞浪は呆れた。

「そんな文句私に言わないで下さい。まあ、女の子だったら街に出ればいますよ。」

「その街にもしばらく出れそうにないじゃないか。ああ、女の子が来てくれないから。」

「いくら何でもそんなこと無理ですよ。」

瑞浪はそう言って笑った。しかしながら、彼の予測は裏切られることとなる。この2日後、このツェルプストー領の領主の娘であり、反皇帝派をまとめる工作を行っているキュルケ嬢が基地を訪問したのである。

## 東部戦線 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 東部戦線 2

「捧げ銃！！」

指揮官の号令と共に、銃を持った基地警備隊の兵士が小銃を垂直に構える。それは基地に客人を迎える挨拶であるが、基地自体が極秘であるためか格好は通常の課業服で行った。

そんな彼らの前を、一台の平凡な馬車が進んできた。その馬車は義勇軍の兵士に誘導されて、民家に擬装された指揮所の前へと停車した。

馬車の扉が開くと、そこから真つ赤な炎のような髪をした女性が降りてきた。動きやすいワンピース姿であるが、豊満な肉体がかなり目立つ。

そんな彼女に対して基地司令であり『東方義勇軍』ゲルマニア方面軍司令官のミツチエルヒ中将が敬礼をした。

「ようこそミス・ツエルプストー。基地司令のミツチエルヒです。わざわざこのような場所にまで来ていただきありがとうございます。」

「こちらこそ、我が国のためにお越しいただいているのです。このようなことは当然です。ミツチエルヒ將軍。それから私のことはキユルケと及び下さい。そちらの方がしっくり来るので。」

そう営業スマイルを顔に浮かべて言うのは、この基地がある領地の領主フォン・ツエルプストー候の娘であるキユルケだ。この日彼



女は、クーデターの際には援軍として戦う予定となっている義勇軍の秘密基地を、秘かに訪問したのである。

「それでは早速ですがご案内していただけますかしら？」

「もちろんです。こちらへどうぞ。」

ミツチエルヒが彼女を促して歩き始めた。キュルケは彼の後ろを、警備兵に守られながら歩き始めた。予定では、これから基地と進出した航空隊を彼女が見ることになっていた。

各機体の前にはパイロットと整備兵が並び、敬礼して彼女を出迎えた。

（なんか随分と歳のいった人ばかりね・・・）

閲兵であるため表情こそ笑顔であるが、彼女は内心そんなことを考えていた。魔法学院時代から変わらず、彼女は男性に対して積極的であった。ただし、迫る対象は必要な時以外は自分と歳の近い若い男性である。

彼女の男好きは、元来の物と言える部分もあるが、それ以上に親から押し付けられる見合い話への反発という部分が大きい。

幾ら比較的自由なゲルマニアと云えど、貴族は貴族である。彼女の場合も、結婚相手は通例通り、親通しが決めた相手になる筈であった。しかし、その相手と言うのがただ政略的な理由で選ばれた年上の人間ばかりであるのだから、彼女じゃなくても嫌になるだろう。

彼女がゲルマニアから見て古臭く、衰退しつつある小国であったト

リステインの魔法学院にわざわざ入学したのも、そうした結婚の問題から逃げたいからであつた。

そしてそこで彼女は自らの美貌を武器にして、男を誘いまくつたのはルイズや才人が良く知っているとおりのことである。

もっとも、彼女とてただ単に自分の誘いに乗って来るような男は短期間でカップルを解消している。男癖が悪いと言われればそれまでだが、彼女なりに本当に愛し合える人間を探しているわけだ。

その後、彼女と顔を合わせた若い隊員の中には早速鼻を伸ばす人間もいたわけだが、そうした人間は彼女から見れば、あまり気を引く相手とはなりえない。

そんな感じで閲兵を進めていき、彼女はマルセイユが率いる「超零戦」小隊の前にやってきた。

「彼女がこの領地を治めるフォン・ツエルプストー候の娘か。へえ、中々の美人じゃないですか。」

マルセイユの部下である瑞浪大尉が、遠目から見た彼女の感想を言う。一方、マルセイユは表面に笑顔を作りつつも、彼に向かってこう言った。

「確かに外見は中々だけどね……なんでも彼女、相当な男好きだつて言うぜ。」

「本当ですか？」

初耳の情報だけに、瑞浪が目丸くして聞いた。

「本当だよ。トリステインを出発する前に平賀才人大佐がそう言っていたからね。彼女なら、俺が声をかける前に声を掛けて来るだろうって。あの時は冗談半分にしか聞いていなかったけど、実際に見るとそんな感じがしないでもないね。」

「けど、美人なら良いんじゃないですか？」

すると、マルセイユは苦笑いして言った。

「女ならなんでも良いって訳じゃないよ。そうコロコロ相手を変えようじゃ、さすがに引いちゃうね。やっぱり一途に自分を好きになってくれる方が嬉しいね。」

「自分のことを棚に上げて良く言いますね。」

「俺はそこまで深く付き合っていたわけじゃないし、これだっと思える人じゃなかったから良いんだ。」

2人はひそひそとそんな話を話していたが、そうしている内にキウルケが自分たちの前まで来たので、会話を一端打ち切って彼女に向かい敬礼した。

「こちらは？」

キウルケがミツチエルヒに尋ねた。

「彼は第二戦闘機小隊を率いるマルセイユ中佐です。若いながら、腕はピカイチです。」

「ハンス・ヨアヒム・マルセイユ中佐であります。」

彼は2人に向かって型どおりの敬礼をした。もちろん、他の隊員たちもそれに倣う。マルセイユと瑞浪の小隊の残る部下2人は、いずれもマルセイユより歳の若い兵士で、彼らはキュルケを見て表情が緩み放しである。キュルケについて知らない彼らは、見事彼女の美貌に陥落したわけだ。

一方トリステインで彼女の話聞いてきたマルセイユと、既に妻子がいる瑞浪の2人はお堅い表情のままであった。

既に20代後半である瑞浪は良いとして、若いマルセイユが自分に対して仏頂面を向けているのは、キュルケとしては驚きであった。

彼女はマジマジとマルセイユを見つめた。

（若いし、顔も合格点ね。それに首に提げている勲章を見ると、武功も上げているようね。けど、私を見てこの人は何とも思わないのかしら？）

内心でそんなことを思うキュルケ。それは彼女にとって少しばかりショック、と言うか屈辱であった。一方で、目の前の男に対して興味をそそられた。

そこで彼女は、マルセイユに声をかける。

「マルセイユ中佐と仰いましたね？この度はわざわざゲルマニアまでお越し戴き、感謝しますわ。」

と、少しばかり色っぽく言ってみた。しかし。

「いえ、これも任務ですから。」

マルセイユは直立不動のまま、素っ気無く返事をしただけであった。そんな彼を、キュルケはジーッと見る。

（む、これは強敵だわ。）

キュルケの中で、自分を無視するかのような態度を採る男に対する、一種の対抗心が湧き上がりつつあった。

「キュルケ嬢。如何いたしましたか？」

どこか渋い表情をしたまま固まったキュルケを、ミツチエルヒが怪訝な表情で見る。

「えー！？いえ、なんでもありませんわ。」

「なら良いのですが。次に急降下爆撃隊の所へ行きますので、こちらへ。」

「ええ、よろしく願いますわ。」

彼女はそのまま、その場を離れて行った。

「マルセイユ中佐、良かったんですか？彼女をあそこまで無視して明らかに最後の方怒っていましたよ。」

「うーん。さすがに不味かったかな？」

彼女に対してあまりに邪険にした態度を採ったことに、マルセイユは少しばかり不安になった。もっとも、端から見ればただ単にマルセイユがキュルケに軍人としての態度を採ったに過ぎないようにしか見えない。

しかし、彼を良く知っている人間ならばそれが如何に不自然な態度であるかわかる。何せマルセイユはどちらかというと規則とか、規律と言う物に対して無頓着な人間であるからだ。現に、制帽を真っ直ぐにつけることなど滅多になく、普段から傾けて被っていた。

そんな彼が、キュルケに対しては何故かピシッと制帽を真っ直ぐに被り、軍人として威厳ある態度を採った。基地司令のミツチエルヒは、相手が絶大な権力をもつ貴族のお嬢様ということで、マルセイユがそうしたのだろうと思ったが、短い期間とは言え同じ小隊を組んでいる瑞浪には、それが相手に対する一種皮肉な態度であるとすぐにわかった。

またキュルケを正面から見る事が出来た彼は、彼女がマルセイユの素っ気無い態度に、内心怒っているようだとすぐに感づいた。

ただし、彼自身もキュルケがマルセイユに対して怒りより、むしろ興味を持ったということまでは考えなかった。

一方ミツチエルヒについて歩いていったキュルケは、自分に対して素っ気無い態度をとり続けた青年士官に、大いに興味を持った。それと同時に、彼の興味を何が何でも引きたいという対抗心にも似た感情を覚えていた。

（これまでどんな男でも一回は私に引かれたと言うのに、あの男は明らかに故意に無視していたわ。私のどこが気に入らないのかしら

？ハンス・マルセイユか・・・）

と、こんな事を考えていた。

そのためか、その後紹介された部署では、一応彼女は笑顔で隊員たちに挨拶したものの、内心ではマルセイユの顔が頭から離れなかった。

（彼と是非とももう一度会いたいわね。けど直に会うのも不自然だから・・・）

それから1時間ほどして、マルセイユは思いがけない命令をミツチエルヒから下された。

「展示飛行ですか？」

「ああ、ミス・ツエルプストーから直々の御使命だ。本来は予定にないことだが、相手は賓客だからな。それにだ。我々の戦力をアピールするのも悪くない。よろしく頼むぞ。」

一応あいては貴族様の娘である。さすがに無理なお願いは断固お断りせねばならないが、1機だけのデモ飛行なら不可能と言うことはないので、ミツチエルヒは受け入れたようだ。また命令されたマルセイユとしても、断る理由は何もなかった。

「了解しました。」

マルセイユはサツと敬礼したが、内心では命令を受け入れつつも、直々の御使命と言われて少しばかり驚いていた。

（これは俺への嫌がらせか？）

と、そんなことを考えていた。まさか、彼女が再び自分と会う機会を作るためにそんなことを頼んだとは思えなかった。

2分後、彼は自分の機体の所へ行き、整備兵に命令して外へ出してもらった。

「キュルケ嬢直々の御使命ですって？どうやら本当に怒りを買ったんじゃないですか？」

「かもしれない。だから、彼女に俺のアクロバットでも見てもらって、少しはそれを抑えてもらわないとね。」

出勤準備を整えつつ、マルセイユと瑞浪が会話をする。

「マルセイユ中佐、機体チェック完了しました！エンジン・機体共に異常ありません。いつでも行けます！」

「わかった。それじゃあ瑞浪大尉、行ってくる。」

「ええ、お氣をつけて。」

瑞浪と整備兵たちの見送りを受けて、マルセイユはステップを伝って操縦席へと上り、中へと入り込んだ。





## 東部戦線 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。細かい提案はメッセージでお願いします。

東部戦線 3 (前書き)

ようやく投稿できました。

### 東部戦線 3

アクロバットを一通り行ったマルセイユ中佐は何事もなく、飛行場へと帰ってきた。しかし、整備兵に誘導され駐機場所へと戻った時、彼の表情は浮かない物となった。

「あの女だ。」

まるで待ち構えていたかのように、司令官であるミツチエルヒ中将の横に立つキュルケの姿が見えた。そして彼女の視線が自分を口ツクしているのもわかった。

「俺に名指しでアクロバットをやらせるし、一体何を考えているんだ？ やっぱりさっきのことが気に入らなかったのかな？」

マルセイユの考えていたことは半分正解で半分外れであった。まさか彼女が、自分に興味を持ったことなど予想出来なかった。

何はともあれ、マルセイユは「超零戦」をタキシングさせて所定の位置に止め、そのまま機体から降りた。

「御苦労、マルセイユ中佐。」

ミツチエルヒが敬礼で出迎えたので、マルセイユも答礼する。そこへ、キュルケが会話に入ってきた。

「マルセイユ中佐、とても素晴らしい腕でしたわ。私とても感動しました。」

キュルケは暗に男の気を引く動作をしたのであるが、マルセイユはそれが畏と既に判っているので惹かれることなく、彼女にも敬礼をして返事した。

「はあ、喜んでいただけたのなら光栄です。」

マルセイユが素っ気無く返事したものだから、キュルケの心の中では炎が上がっていた。

（本当に私に惹かれないうって言うの！？）

こうなると、キュルケは益々マルセイユに自分の魅力を感じさせたくなる。そこで彼女は、またも頭を働かせた。

「ところで、中佐がお乗りになったこの飛行機は、具体的にはどのような飛行機のですか？先ほどの説明だけでは判らない所があったので、是非中佐自身に色々と教えていただきたいのですが？」

（何でそこで俺の名前を出す？聞くなら他のパイロットや整備兵に聞けば良いじゃないか？）

マルセイユはそう思ったが、ここで断るのも大人気ないし、何度も書いているがキュルケは大事な賓客なのである。素っ気無い態度を採るのは、軍人としての姿勢を律儀に守ったと言い訳できるが、無理に断るのはさすがに非礼となってしまう。相手が相手であるため、そんなこと出来よう筈がない。

そのためマルセイユは、彼女のお願いを受け入れざるを得なかった。

「わかりました。自分のような者の説明でよろしければ、説明させていただきます。」

この答えに、キュルケが「チャンス到来ね！」と思ったのは言うまでもない。そしてマルセイユによるご案内が始まったわけであるが、キュルケは話を適当な範囲でしか聞かず、何かにつけてマルセイユを誘惑するようなことをした。具体的には体を密着させようとしたり、無意味に可愛げな声を出したりなどだ。

ここまで露骨だったため、マルセイユは内心げんなりしてしまった。

（いい加減にして欲しいな・・・）

だが相手は貴族様である。マルセイユもこちらの世界に来て既に数か月立っているから、貴族やメイジの立場がどのようなものであるかしっかりと理解している。しかしながら、それでも我慢出来なくなる時もある。

マルセイユは遠まわしにキュルケにそのことを言うことにした。さすがにかつての才人のように、正面から文句を言わないだけの分別はあった。

「あの、キュルケさん。そんなにくっつく動き難いので、少しばかり離れていただけませんか？」

しかし離れると言われて、素直に離れるようなキュルケではない。

「あら？お邪魔だったかしら？」

自分の厚意を無下にするのか、と暗にその言葉は語っていた。

「別にそのようなつもりで言ったわけではありません。女性に自分から近づいていただけなんて光栄です。……ただ、こうも近いと動きにくいのではと申し上げているのですよ。」

言葉だけみると、丁寧に言っているように見えるが、マルセイユの言葉には次第に煩わしさが表れるようになっていた。もちろん、当人は出来る限りそのような感情が表に出るのを防いでいるので、ほんのわずかである。

しかしキュルケには、そのほんのわずかな言葉の中に含まれている感情がわかった。

（ふーん……本当にわずらわしいようね。ここまで意固地にされると、余計気になるじゃない。）

お互い本音を口に出すことなく、駆け引きはなおも続く。

「そうでしたか、それなら。」

キュルケは素直に、それまでやたら密着させていた自分の体をマルセイユから離れた。

（おや？意外と素直に引き下がったな。案外根はそういう性格なのか？）

マルセイユは少しばかり、彼女に好感を持った。

「それでは、案内の続きを。」

マルセイユは、本来の仕事を続行した。一方キュルケは、再び彼を振り向かせるにはどうすれば良いのか考え始めた。

（色仕掛けでダメとなると・・・会話から持っていくしかないわね。）

作戦を変更して、キュルケは何気ない会話から彼を引きつけることにした。

「ところで、マルセイユ中佐は才人たちのように地球から来たのですよね？」

「ええ。もつとも、彼がいた世界とは別の地球からですが。」

「そこはどんな所でしたか？私はあなたがたのことを、そこまで詳しくは知らないのです。よろしければ、教えて欲しいのですが。」

「良いですよ。私がいたのはドイツという国です・・・」

それからしばらくの間、キュルケはマルセイユから地球に関する話を聞いていた。彼の祖国であるドイツのことや、自分のこと、特に空軍に入ってから西部戦線、北アフリカ戦線へと転戦したことを話した。

ちなみに、彼の戦歴は元いた世界がヴィシー・フランスが正式に連合国へ宣戦しているなど、才人のいた世界の彼の物とは違っている。しかしながら、アフリカ戦線を含めて多数の敵機を撃墜してエースになっているところは同じである。



一方で、プライベートな面では女性関係の遍歴が目立つが、それについては史実とあまり変わらない。ただし、彼自身どうしてそんなことをしているかについては違っている。どちらかというと、この世界の彼はア　ソンシリーズのカー・　ネディクトに近い。

「・・・休暇を終えてベルリンから北アフリカの基地へと戻った所で、この世界へと飛ばされてきたわけです。」

マルセイユの短いながら、濃い軍人人生にキュルケは圧倒される思いだった。そのため、彼女も少しかり彼を見直した。

「そうだったのですか。いきなりこの世界へ来て、大変だったのでは？」

「ええ。いきなり月は二つになるし、大昔の恰好をした人間が現れるし。我々は尋常ならざる事態に置かれたと認識しました。それで最終的には食料などの供給と引き換えに、ガリア側についていたわけです。そして、ガリアからの要請を受けてトリスタニア空襲を敢行したのです。もつとも、自分は参加しませんでした。あの作戦で随分と仲間が減りましたよ。」

マルセイユは空では単独で戦闘を行うが、別に仲間の命を軽く考えているわけではない。トリスタニア空襲では、知り合いを何人か亡くしている。だから、自然と表情は哀しみを帯びたものとなった。

そんな彼の表情を見て、キュルケは思わずこんな問いをした。

「それなのに、まだ戦うのですか？」

「もちろんです。私はパイロットです。それ以外に自分ができる仕

事はありませんから。今自分で空を飛べる仕事ならなんでもやりましょう。むしろ、こんな異世界で再び戦える機会に恵まれたことを神に感謝します。先ほども説明しましたが、今自分が与えられている機体はハルケギニアの性能を誇っていますので。負ける気はしません。」

マルセイユの瞳は自信に満ちていた。実際、彼の言うとおり最高速度700kmを超え、優秀な旋回性能を持つ「超零戦」1型はハルケギニアで最強と言える。例え竜騎士が100騎束になって掛つてきても、恐れるに足りないだろう。また彼自身の腕も、その自信を後押ししていた。

決して過信などではない、心の奥底から勝利を確信して止まないようだ。

そのマルセイユの強い自信と真剣な表情に、キュルケは大いに惹かれる想いだった。だから彼女も、本心から次の言葉を彼に言った。

「我が国のため、よろしく願いますね。」

お世辞でも、自分を引き立てる言葉ではない。心の底から出た正直な言葉。その言葉を口にした彼女の表情は、先ほどまでの無理に彼を引きつけようとする笑顔より、何倍も魅力的だとマルセイユには感じられた。

「はい。」

それから2人の会話は弾んだ。先ほどまでは、お互いに相手のことを（理由はともかくとして）意識しすぎていたために、どこかぎこちない会話の連続であった。しかしそれを気にする必要もなく話

し始めれば、それなりに歳も近い人間であるから会話もスムーズに進む。

そんな会話をしている途中で、お互いに知っている人物として平賀才人の名前が挙がった。キュルケの場合、才人に対する印象は魔法学院時代の物が強い。無論、タルブ戦以降の軍人としての彼とも会っているが、やはりよく顔を合わせた時の方が印象に残る。

一方マルセイユにとっての才人は、優秀な飛行機乗りとしての印象が強い。実際マルセイユは才人と模擬空戦をして、『ガンダールヴ』のルーンの力と、これまでの実戦経験から得た彼の力量を評価した人間だ。また菅野准将らとも一緒に、ミライで飲んだこともある。

そんなわけで、2人の才人に関する会話はお互いに共通の認識となっている部分もあれば、まったく知らないこともあり、やはり弾んだ。

「へえ、才人とは最近あまり会っていなかったけど、そういう面もあるのね。」

「実を言うと、あなたのことも彼から聞いていたんですよ。」

「あら？才人は私のことをなんと言ってたのかしら？」

マルセイユは、才人から聞かされた彼女に関する話をついついキュルケに言ってしまった。まかり間違えば国際問題ものだが、幸いキュルケもそこまで考えようとはしなかった。ただし、才人がマルセイユに余計なことを吹き込んだとは、強く思った。

「才人たら、そんな風に人のことを言わなくても良いのに。．．．もしかして、あなたが私のことを避けていたのってそれが原因？」

「ないと言ったら嘘になるね。」

「まったく。今度会ったら文句を言わなくちゃ。」

キウルケの言葉に、マルセイユは笑った。

そんなこんなの中に、彼女の視察の時間は終わり、帰ることになった。マルセイユはそのまま彼女を基地の門に待っていた馬車のところまで送った。

「マルセイユ中佐、今日は楽しかったわ。ありがとう。」

「こちらこそ。」

「武運をお祈りしています。」

「ありがとうございます。」

「ではミス、出しますので。」

馬車の従者が彼女に声をかけた。

「わかったわ。」

まもなく、馬に鞭が打たれて馬車が動き始めた。

「敬礼!!」

ミツチエルヒ司令やマルセイユたちの敬礼を受けて、キュルケを乗せた馬車は去って行った。その車中で、キュルケはマルセイユと過ごした時間を思い返していた。

一方見送ったマルセイユも、この後心の中で彼女のことを思い出すこととなる。

### 東部戦線 3（後書き）

御意見・御感想をお待ちしています。

このマルセイユ編は次回あたりで終わりにして、次は義勇軍内でひらかれる演芸会でも書こうと思います。才人やルイズ、その他のキャラにはっちゃけてもらおうと考えています。演芸会ですから、戦いとは無縁でキャラ達がいろいろ出し物をする話になります。どのキャラにどんなことをさせようか、色々思案しています。

意見がある方は、どんどんお送りください。

## 東部戦線 4

ハルケギニア戦役開戦からしばらくして、ついにツエルプストー家を中心とする反皇帝派による蜂起が起きた。ゲルマニア内戦である。

キュルケの努力によって、すでに国内の3分の2が反皇帝派についており、皇帝側の劣勢は咎められない状況にあった。さらに、元々皇帝の権威が低いゲルマニア特有の事情が大きな足かせとなった。兵や貴族の士気が反皇帝派に比べて大幅に劣っていたのだ。

それでも、皇帝直轄軍や皇帝と関係が深かった貴族の軍隊は、後がないだけにその反撃は死に物狂いものとなった。

そんな中で『東方義勇軍』ゲルマニア方面軍は、地上軍こそ保有していなかったものの、その空中戦力をもって皇帝軍を攻撃した。

空軍力の保有は、反皇帝派を勢いづかせる上で決定的な要素となった。義勇軍の「超零戦」や「ドントレス」と言った機体は竜騎士や空中艦船に対して、大きなアドバンテージを持っており、これらを終始圧倒した。もちろん、地上攻撃でもロケット弾や爆弾と言った強力な武器を持って皇帝軍を脅かした。

空からの援護を受けた反皇帝派は、各地で連戦連勝した。皇帝軍の空を守る空中艦隊はトリステインとの戦争で軒並み消耗しており、残存艦も半分以上が反皇帝派についてしまい、皇帝軍に残された戦力は雑用の小型艦を合わせても30隻にも満たなかった。また竜騎士も似たり寄つたりの状況であった。

そのため、これらの戦力は後方に下げられて温存されてしまい、前線の皇帝軍の空中戦力はほんのわずかな物でしかなかった。

これでは義勇軍航空隊を味方につけた反皇帝派を止められるはずがなかった。蜂起開始1週間後には、ゲルマニア空軍艦隊最大の拠点であるキール軍港が陥落し、皇帝軍の劣勢は誰の目にも明らかになった。

そして、開戦蜂起開始2週間目に最大の会戦が行われた。首都ヴィボンナドを巡る戦いである。皇帝派軍は数の劣勢を補うため、各地で急ごしらえの要塞を造って反皇帝派軍の足止めを図った。しかし、先述したとおり制空権をほぼ喪失していたために、反皇帝派軍の前進を阻むことはできなかった。

反皇帝派の前進とともに、航空隊も前進した。ゲルマニア貴族の協力を得て各地に前進飛行場を設けて、地上軍の前進を支援した。ちなみに、この間キュルケは何度か基地を視察や作戦調整、士気高揚目的で視察している。

ところが、この首都を巡る戦いにおいて皇帝アルブレヒト3世は一世一代の賭けに出た。それは残存する戦力のほとんどを投入しての、乾坤一擲の反撃であった。

皇帝軍は温存していた地上軍1万、空中艦船40隻余り（半分は商船を徴発したもの）、竜騎士やその他の飛行幻獣併せて100騎あまりを揃えていた。そして何より、蜂起開始後から敵の侵攻に備えて造った要塞に籠つての籠城戦を行うという、防御する側としての利点を最大限に生かそうとした。

しかしながら、それも最終的に徒勞に終わった。反皇帝派軍は空



中艦船や飛行幻獣の数でこそ拮抗していたが、陸上部隊は倍の2万名、その内一部は義勇軍から武器の供与と戦術指導を受けた近代化部隊であった。何より、空中戦力に大きな差があった。

この時の戦闘には、もちろん義勇軍航空隊も参加した。しかも先陣を切つてである。まずマルセイユ中佐率いる戦闘機隊12機が、100騎あまりの飛行幻獣と空中戦を行った。結果は言うまでもなく、義勇軍側の一方的勝利であった。

運悪く新米パイロットの「超零戦」1機が至近距離からブレスを受けて炎上し、パイロット自身脱出は出来たものの大怪我を負ってしまった。しかしながら、ゲルマニア側の損害は数騎を残してのほぼ全滅であった。

この戦いにおいてもマルセイユは獅子奮迅の戦いぶりを見せた。むしろ、それまで主に地上攻撃やウォーミングアップにもならない小規模な空戦しか行っていなかった鬱憤を晴らすかのようであった。

「行けええ!!」

彼は愛機となった「超零戦」の性能と自らの腕をフルに使って戦った。戦いが終わってから戦果が集計されたが、この時の彼のスコアはなんと60騎であった。しかも、そのほとんどが味方からも確認されていたため、ほぼ間違いのない確実な戦果であった。

もちろん彼独特の戦い方、すなわち単機で敵に突っ込み攻撃するという危なっかしい戦法での戦果である。地上から見ていた兵士たちからしてみれば、たった1機で100倍の敵のど真ん中に突っ込み、それでもつて60騎を撃墜したのであるから、士気が上がらない筈がなかった。

兵士たちは高い士気、そして義勇軍の航空支援の元一氣に皇帝軍へ襲いかかった。その軍勢の中には自らの士気鼓舞のため前線へ出てきたキュルケもいた。反皇帝派を束ねる彼女は、自らの権威を高める意味も込めて戦いに参加していた。

「中々やるじゃない。私たちも負けていられないわね。行くわよ！」

杖を力強く握りしめ、彼女は馬を走らせた。

キュルケたち反皇帝派軍は一氣に皇帝軍に襲いかかった。また空中戦をマルセイユたちに任せ、他の戦闘機や爆撃機、攻撃機が一斉に皇帝軍の陣地へと襲いかかり、空からピンポイント爆撃を加えた。砲や歩兵も空から襲われては、一たまりもなく、皇帝軍の陣地はあっという間に防御線に穴をあけられてしまった。

そこを突かれれば、もはや終りであった。首都へと向かう敵軍を足止めするはずの要塞はわずか半日で抜かれてしまった。この報を聞いたアルブレヒト3世は、一方的な遷都を宣言すると、さっさと首都から脱出してしまい、翌日にはヴィボンナドは反皇帝派の占領するところとなった。

この戦闘は、皇帝軍の敗北を決定的なものとした。この時点で首都を含めたゲルマニア全体の5分の4が反皇帝派の支配地域となり、決戦で戦力をすりつぶした皇帝軍には、もはや反攻どころか自分たちを守るのに必要な戦力さえ満足に残されていなかったからだ。

もちろん、この戦いで反皇帝派を支えたのは義勇軍航空隊であった。だからこの2日後ヴィボンナド近郊の特設飛行場に前進したゲ

ルマニア方面軍航空隊の面々は、先にヴィボンナド入りしていたツエルプストー伯爵をはじめとする反皇帝派の貴族たちや一兵卒に至るまでの軍人、さらには市民からも熱狂的な歓迎を受けることとなった。

特に単機にて敵へ突入、60騎の撃墜記録を打ち立てたマルセイユへの注目は高かった。気の早い者の中には、彼にどの爵位を与えるかと言う者までいた。

ただし、彼自身は特に爵位とかそう言う者にこだわる人間ではないし、規則とか堅苦しい物も嫌いであった。現に彼の場合帽子を常に傾けて被っていた。もつとも、その独特のスタイルが彼の人気を押し上げることとなったが。

この頃には、何度も顔を合わせたキュルケとマルセイユの仲は急激に接近していた。ただし、本格的な恋愛という所ではなく、どちらかと言うと親しい友人に近い関係だった。

2人の仲を決定的にしたのは、終戦間際のアルブレヒト3世捕縛の時である。

蜂起開始20日後、ゲルマニアのほぼ東端にある街であるロストフで皇帝軍と反皇帝派の最後の戦いが行われた。もちろん、この戦いにキュルケもマルセイユも参加した。勝利を決定する戦いであることもさることながら、既に皇帝軍の残存戦力はほとんど無きに等しかったが、それでも最後の最後まで念を入れてのことだった。

この前後から正面からの戦闘が不可能になった皇帝軍は戦い方を、残存する少戦力を散発的なゲリラ攻撃に使う戦法に切り替えていた。そのため、キュルケにも何度かゲリラの襲撃が行われたが、彼女自

身優秀なメイジであるし、護衛の兵士も多かった。さらに義勇軍から供与された兵器や装備を上手く使ったため、難なくこれらの攻撃を交わしている。

そして、戦いの終盤においてついにキュルケたちはアルブレヒト3世が仮皇宮と定めていた城に突入した。これでキュルケ自らアルブレヒト3世を捕縛していれば、何事もなくめでたしめでたしであったが、生憎とそうはいかなかった。

彼女たちが突入する前に、既にアルブレヒト3世は秘密通路を使って脱出してしまっていたのだ。彼はキュルケたちに一杯食わせたわけだ。

ここで古い世代のゲルマニア軍であったならば、追跡部隊を出すだけでも大変である。何せ無線機がないのだから。しかし、キュルケ率いる新しいゲルマニア軍は違っていた。何せ彼女は科学技術が発達している地球へ行った経験を持ち、さらにはその地球出身とも仲が良いのだ。そのためすぐに無線機を使って各方面にアルブレヒト3世の追跡を呼び掛けている。

利に目敏いゲルマニア人だけあって、彼女は義勇軍から供与されただけの無線機を実に上手く活用したわけだ。

そしてこの連絡を受けた中に、上空から支援中だったマルセイユの「超零戦」隊がいた。

「ようし、俺たちも手伝おう。」

彼はすぐに自分の小隊に、地上搜索の命令を出した。本来の戦闘機乗りの仕事とはかなりかけ離れた物であると言えるが、ゲルマニ

ア内戦中空戦よりも地上攻撃の回数の方が圧倒的に多かった彼らにしてみれば、別にこうしたことは珍しくなくなっていた。

マルセイユたちの小隊は、超低空で出来るだけ速度を落として地上を搜索した。その結果、街道上を走る馬車を発見した。別に不審な所はない。この時期住民たちが多用していた幌付き馬車だった。乗っている人間も平民に見えた。

しかし、どうもおかしい。まるで反皇帝派軍から一目散に逃げようとしているようだった。そこでマルセイユはこの馬車を臨検するように地上部隊に通報した。

そしてこれが大当たりであつた、乗っていたのはアルブレヒト3世とその家族、僅かな数の付き人だった。もちろん、彼らは大人しく捕まるうとはせず、逃げ出した。

「逃がすか!」

「逃がさないわよ!」

空と陸からによる大捕り物が繰り広げられた。そしてこれは、マルセイユがピンポイント銃撃で馬を撃ち抜き、そしてキュルケたちが追いついて全員を捕縛して一軒落着となった。

これによって、ゲルマニア内戦は事実上終わり、キュルケとマルセイユは文字通り皇帝を捕縛した英雄となったわけである。そして2人の仲も、この時共に戦ったことでより強固な物となったのであった。

ゲルマニア内戦終結と共に、反皇帝派をまとめ上げ、その覚えも

良かったキュルケが新皇帝に就任した。そして彼女と共にアルブレヒト3世を捕縛したマルセイユには新政権から、建国への多大な貢献をしたという理由で伯爵位が送られている。

2人の物語はさらに続くこととなるが、これがゲルマニア内戦の顛末である。

## 東部戦線 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

最後かけ足になりましたが、とりあえず東部戦線の話はこれで終わりです。キュルケとマルセイユのドラマをもっと濃く書く予定でしたが、作者のその余裕がなくなったため、こんな形になりました。すいません。

次話ではいよいよ演芸会の話となります。キャラクター全員集合同じな形で笑える愉快な話にしたいと思っています。

## 演芸会 1

軍隊において、隊員の士気や規律を維持するのは非常に重要である。士気の上がない軍隊が戦ったところで、まともな戦争にならない事例は過去の戦争では多々ある。また規律がなくなってしまう、もはや軍隊とは呼べない集団と成り下がる。

後者の場合、軍人が民間人に危害を加える事態に発展するから厄介である。日中戦争時の日本の中国における国際法違反行為、第二次大戦時独ソ両軍が互に行った非人道行為、そして沖縄戦でアメリカ軍が民間人へ行った行為。規模や内容に差異はあれど、それによつて多くの戦争に関係ない民間人が傷つき、あるいは死に至る事態となった。

本来軍隊では、民間人へ危害を加えることは原則禁止されている。ハルケギニアではこうした考えが未成熟であったが、ハルケギニア戦役前に行われた各国合同の会議で一応禁止された。しかしながら、死と隣り合わせの職場である以上、兵士に常に冷静さを求めるのは無理であり、全く皆無で終わらせるのは中々難しい。それでも防ごうとしなければ犠牲者が増えるだけである。

さて、ハルケギニア初の近代的軍隊と言える『東方義勇軍』は、創設者たちが地球出身者であるがゆえに、地球における過去の戦争の悲劇をハルケギニア世界では極力防がなくてはいけないという考えを共通意識として持っていた。その中には、規模を問わず、民間人を殺傷する行為も含まれている。

そのため、戦時中といえど兵士たちが軍機違反のそうした行為に走らぬよう様々な方策が行われた。当時としては高水準の賃金や待



遇、さらには兵士への教育がそうである。また直接戦闘や勤務上関係ないが、福祉面でも気が遣われた。

高水準の賃金や待遇（平時における日々の生活や戦場における十分な補給など）は、兵士一人一人に物的・精神的余裕を持たせることになる。特に戦時に十分な補給を受けさせることは重要だ。大概民間人を襲う軍人というのは、物的・精神的に余裕がないことが多い。

また隊内における教育も重要である。民間人を傷つけることが違反行為ということを知っていなければ何も意味はない。「知らなかった」では手遅れになる。だから義勇軍では初期教育で民間人や捕虜を傷つける一切の行為（ただし吸血鬼など相手にもよる）を禁じ、違反者には思い厳罰が下ることをみっちり教える。

違反行為を行う責任を誰に求めるかは難しい所だが、やはり組織である以上管理・運営に責任をもつ者に帰せられる部分が大きいと考えるのが妥当であろう。

さて、こうした事柄はいずれも直接戦闘や軍隊生活に繋がっている行為であるが、前述したとおりそれとは直接には繋がっていない事柄にも義勇軍は随分と気を遣っている。それが隊員が非番時に行う各種レクレーションや、虚無の曜日に行う基地の一般公開である。

軍隊という組織は、戦うのが本分であり、平時は訓練に明け暮れ突発的に起こる災害に対処するのが主な仕事である。それは言わずと知られていることである。

しかし、やはり人間が構成する組織である以上隊員たちの結束を維持し、また息抜きさせることも重要である。常に張りつめた空気を

の中では、人間生きてはいけない。

レクリエーションはスポーツや各種文化活動にわけられるが、スポーツを見れば野球やサッカー、バレーボール、テニスが人気であった。

当初は日本人の比率が高かったせいも、野球とバレーが人気であった。どちらとも、当初はハルケギニアで手に入れられる物をボールやバットに見立てて行われた。その後、隊員間の交流を促進する行為として、申請して認められれば軍の備品としてグローブなどの道具が軍の予算から購入されることとなった。

また枢軸軍航空隊が合流して以降は、サッカーが爆発的に広がることとなった。特にハルケギニア出身者には野球やバレー以上に好評であった。この辺りは土地柄と言えようか。もちろん、こちらもボールなどが軍予算から購入されている。

また、競技人口が増えると隊内でいくつもチームが出来るようになる。だから時には基地内、もしくは基地・部隊対抗で小さな大会が開かれるようになった。これが後に民間人にも広がり、ハルケギニア内における様々なスポーツ・リーグの礎となる。

義勇軍に入隊したメイジや、また部隊訓練のためやってきたメイジ中心の部隊は、義勇軍内で広くこうしたスポーツが行われている行為に驚愕した。彼らからしてみれば、魔法も使わず汗だくになって動き回るのは本来好まれる行為ではなかったからだ。

しかしながら、義勇軍と交流していく内にスポーツをしだすメイジは随分と多く、彼らが持っていた古い慣習を、また一つ打破していくこととなる。

一方文科系においては、やはり日本人が当初多かったせいか将棋や囲碁と言った屋内ゲーム、また菅野中佐が中心となってやった俳句会などが筆頭に挙げられる。後に枢軸軍兵士が加わると、演劇や本格的なバンド活動なども行われるようになった。また水上部隊から伝播する形で、基地内新聞の発行などが行われた。さらに、後に誰が持ち込んだか不明だが、隊員が描いた漫画や小説を集めた同人誌（しかも明らかに現代日本のそれ）の発行なども行われた。

こうした行為は、大学などのサークルや部活に近い活動であり、基地の一般公開でその活動を披露することが当初から行われた。

そうした中で、個人や少人数で芸をやる者もいた。落語とか漫才、歌、手品、ダンスなどが挙げられる。

個人芸については、それぞれが自由に行うもので、スポーツや前記した文化活動のようにグループを作って披露したりする機会は当初なかった。しかし、中にはかなり高度な技を持っている人間もいたので、隊員の交流の一環として任意参加での演芸会が開かれるようになった。

この演芸会は、それぞれが用意されたステージ（と言っても空いた格納庫とか、外にテントを張った簡単なもの）の上で、決められた持ち時間の内にパフォーマンスを行い、審査委員を務める士官や観客の投票によって優勝を決めるという方式であった。

当初は小規模であったがやる度に規模が大きくなり、隊員やさらに民間人から人気のイベントとなった。やる側からしてみれば、日ごろのストレスを発散して、自分をアピール出来る良い場となる。また見る側も、大いに楽しめる。

そのためこちらの予算も増やされ、優勝賞品も豪華な物へととなった。司令官をはじめとする高級幹部が、積極的に参加したのがその要因とされている。

そしてこのイベント、ハルケギニア戦役が始まった後も、規模が縮小されたり開催感覚こそ間延びしたが行われた。隊員の人気が非常に高かったためだ。加えて戦時下のため、隊員の移動が活発となり、サークル活動の多くが休止に追い込まれたのも大きな原因だった。

演芸会の参加人数はどんどん増えたが、それに拍車を掛けたのが多部隊からの参加者が急激に増えたためだ。銃士隊や水霊騎士隊、ロマノフ軍の将兵からも参加者が現れた。ちなみに民間人は、参加できなかった。

そんな演芸会の中で、後に伝説と呼ばれる大会がある。それはハルケギニア戦役開戦後5ヶ月目に開かれた第22回大会である。

ガリア・ゲルマニア両軍のトリステイン侵攻に始まったハルケギニア戦役は、その後ゲルマニアの皇帝交代と連合国への参加、ロマリアでのクーデターとその後の枢軸参加などの大きな動きがあった後、開戦から5か月程経ったこの頃は中盤戦へ移行しようとしている時期であった。

新たに参戦したロマリアは、南ゲルマニアとボストニア方面へ侵攻する構えを見せており、またシャルロット女王率いる東ガリアへ、ようやく戦力再建に目処が立ったと思われるジョゼフ王率いるガリ

アが攻め込む兆候もあった。

そのため『東方義勇軍』を中心とする連合軍は、これらへの反撃とガリア軍の動きを大きく制限するためのサン・マロン攻略作戦を計画中であつた。

これらの作戦が始まると、再び兵士たちはしばらく苦しい戦場にその身を置かなければならない。そこで、東ガリア国境やポストニア国境方面へいつでも部隊を派遣できる態勢を採りつつ、義勇軍上層部では兵士たちの息抜きを兼ねて、作戦実施予定の1週間前にミライ基地で演芸会を行うことを、各部隊に通達した。

2カ月ぶりの実施であつたため、兵士たちは大いに喜んだ。またこの大会、「戦う前に、せつかくだから。」と、幹部陣が賞金の額を弾んだ。さらに副賞としてミライの魅惑の妖精亭のお食事券付きという、これまでに無いほど豪華であつた。

作戦実施前であるため、ミライには一時的に各部隊が集結中であつた。銃士隊主力や水霊騎士隊、ロマノフ軍の一部などが休養や、新装備受領や訓練のため集結していた。

そのため、彼らもこぞつてこの演芸会に参加を表明した。特に水霊騎士隊の面々は優勝賞金を見て、「一晩飲んで食いまくれる！」と意気込んでいた。貴族の子息たちのクセして、お金に困っている人間が多いようであつた。

また銃士隊隊長のアニエスは、「そんなにはしゃぐな、みつともない。」と演芸会の出し物を決めるためにはしゃいでいる部下たちを注意しながら、ちゃっかり自分も参加申請してたりした。

他にも、色々な芸に自身のある隊員たちが、次々と参加にエントリーした。そんな中で、忘れてはいけない主人公である才人と言うと……

彼もこの時ミライ基地にいた。ジョゼット救出作戦や、東ガリア方面での任務に従事していた彼だが、小隊の休養のためミライへ下がっていた。

「この額なら小隊の皆に奢ってやれるな。」

と張り出されたポスターに描かれた商品の内容に興味を示したものの。

「けど、特に出来る芸なんてないしな。今回も皆の芸に笑って、驚いて、呆れて終わりだな。」

と最初からあきらめ気味だった。

ところが、彼は自室へ戻ってある物を見ることで、演芸会への参加を考えるようになる。

そしてこの大会、才人が原因で思いもよらない方向へと向かうこととなるのだが、それが分かるのはもう少し後のことである。

時に演芸会実施予定の2週間前のことであつた。

## 演芸会 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

それぞれのキャラがやる芸の案などお待ちしております。

## 演芸会 2

「で、今度家の基地で演芸会があるんだけど、今回は賞金が多いから、皆どんどんエントリーしているわけだよ。」

演芸会の開催が発表された日の夜、ミライにある仮王宮兼政府庁舎の寝室で、才人は奥さんであり、現トリステイン王国女王であるルイズと、お茶を飲みながらおしゃべりを楽しんでいた。ちなみに、才人も現在は大公であり、立派なトリステイン王室の一員である。

ただし、戦時下であるためまだ堅苦しい立ち振る舞いや儀礼に関する教育などは行われていない。そのため、2人とも王族になっても相変わらずである。

この時期ルイズは妊娠7カ月にさしかかっており、お腹が大分膨らんでいる。そのため、公務やプライベートな時間でも体調管理などに気を使う必要があるので、周りの人間は色々と心配りをしていた。

政治面ではマザリーニ枢機卿が、自分の体をすり減らす覚悟で（と言うか確実にすり減らして）ルイズの公務時間を減らしている。もちろん、他の閣僚たちも女王に無理な負担を掛けまいと動いている。おかげで、地球産の栄養ドリンクやそれを模したポーシヨンの需要が王宮内では右肩上がりだ。

また夫である才人も、心理的に負担を掛けなかったために会話の内容に極力戦争・政治関係の物が出ないようにしていた。逆に、友人関係などの話を積極的に出していた。



そんな中で。彼は今日基地で開催が発表され、自分もエントリーした今度の演芸会の話をしていた。

演芸会のことは、これまでも何度かルイズに話してきたので、理解してもらうのは容易だった。そして彼女は聞いているうちに、羨望の眼差しをし始めた。

「へえ、楽しそうね。私も一度見に行きたいな。」

ここの所娯楽に飢えているルイズとしては、そうしたイベントは魅力的に感じられた。そもそも彼女自身、いきなり学生から王族になったのであるから、友人や知り合いとワイワイガヤガヤ楽しめるイベントが恋しくて当たり前と言える。

ちなみにミライの街で大人気であった映画は、トリスタニア空襲後の一時期避難民が流入したため停止となったが、その後上映回数を間引きしたものの営業を再開し、現在はほとんど戦前と同じ回数の上映を行っている。

また映画以外の以前から行われている演劇なども、現在は再び公演が再開されている。

しかしながら、多忙を極めるルイズはそうした娯楽とさえも無縁であった。戦前は才人とともにお忍びで見に行ったりもしたが、戦争が始まると忙しくてとてもそのような余裕はなかった。

上記したような理由で、最近になってようやく時間的な余裕が彼女には出来ていた。もちろん、妊娠しているのであるから、体を激しく動かしたり、負担の掛かるようなことをするのは御法度である。もちろん、魔法を使うのも控えなければならぬ。

しかしながら、映画を見たり何かを鑑賞する程度であれば大丈夫だろう。もちろん、精神的ショックを受けるような作品は避けねばならないだろうが。

それはさておき、ルイズの言葉に才人は苦笑した。

「今のセリフは女王様が言うようなことじゃないだろ？」

才人の言う通り、規模はどうあれ、演芸会は所詮軍隊内のイベントに過ぎない。王族が見るようなものではない。

しかしながら先ほども書いたとおり、今のルイズにしてみればそういう俗っぽいイベントこそ見てみたいものだった。

「あら、私は正直に思ったことを言っただけよ。私だって本来ならまだ学生生活を楽しんでいるはずだったんだから。別におかしくもなんともないでしょ？」

「まあな。王族になったって言っても、ルイズはルイズ。それに、すぐに女王様らしくなれって言うのも無理な話だよな。」

「それじゃあまるで私が女王に見えないような言い草じゃない？」

「少なくとも、プライベートじゃそうだろ。」

才人の言う通り、公務や人前に出る時はさすが名門貴族出身とあって、彼女の姿は貫録ある女王様そのものである。しかしながら、プライベートな彼女は精神的に成長してはいるものの、基本的に昔と変わらない。

「言い返したいところだけど、自分自身そう思うわ。それに才人だってどんなに偉くなっても、才人でしょ？」

「だな。」

2人はお互いを見て笑う。

「でも、そういう所が好きよ。」

「俺もだぜ。ルイズ。」

バカップル度全開の2人であった。もちろん、その場の雰囲気でも2人がキスしたのは言うまでもない。

「で、話は戻るけど。なんとかその演芸会見に行けないかしらね？」

「えらく御執心だな。」

「だってあの真面目一辺倒なアニエス隊長やクリスたちもエントリしたんでしょ？ 気になるじゃない。」

アニエスが真面目一辺倒かは、最近狙撃部隊隊長との関係で怪しいが、実際彼女がこのようなイベントに申し込んだのは、才人としても意外には感じていた。またクリスも、現在戦闘機パイロットであるが、小国とはいえれっきとした王女様である。なるほど、ルイズならずとも気になって当然と言えよう。

「うーん、言われてみればな。けど、どう考えても政府の誰かが反対すると思うぞ。」

いくら才人が良いと言っても、政府の重臣たちがそのようなイベントにルイズを行かせるはずがない。いくら義勇軍の活躍で貴族や王族に関する考え方が変わりつつあるとはいえ、さすがにそれは無理であると思われた。

枢機卿や、オスマン魔法大臣（アカデミー長官）、コルベール外務大臣科学大臣あたりは良いと言うかもしれないが、その他の人間はそこまで甘くはない。

「そんなことくらい私だってわかっているわよ。何か良い方法ないかしら？」

「言っておくけど、お忍びで抜け出すのは止めるよ。今のお前には危険すぎる。」

才人の言う危険というのは、もちろんルイズ自身とお腹の子供のことだ。お忍びで抜け出して、事故でもあつたら目も当てられない。

「それに、その姿じゃどう考えても家の基地には入れないぞ。」

才人の言う通り、現在のルイズの姿では基地内に入れるはずがなかった。

「うーん・・・どうにかして行けないかしら？」

「無理無理。あきらめろって。ちゃんと後で俺が教えてやるから。そうだ。どうせなら、ビデオカメラにでも撮ってきてやるよ。そうすれば動画で見えるから。な、それで良いだろ？」

「じゃあ、お願いするわ。」

この時才人は、これでルイズも諦めたものと考えていた。そしてその後ルイズと夜を共にし、翌朝朝食と一緒に食べた後、勤務のために基地へと戻っている。

ミライの飛行場に戻った才人は、小隊の機体が全て整備中であつたので他の隊員たちと共に新兵の教育手伝いや、先日の新月時に運ばれてきた新型爆撃機の試験飛行、新たに配備された「スプーキー」のテストなどを行っていた。

そして夕方、勤務も終わろうかと言う頃に、父親である才助からの呼び出しを受けた。

「何でしょうか平賀大将？」

勤務中であるので、才人は官姓名で父親を読んだ。すると、その父親は不機嫌そうな顔で才人を見た。

「な、何ですか？」

「敬語はいい。個人的な意味合いもあることだ。」

「え！？わかったよ。で、一体何なんだよ？」

「実はトリステイン政府から連絡があつてな。ルイズさんが家の基地を訪問したいそうさ。」

「はあ！？何それ？」

才人にも根耳に水だった。

「その様子だと知らなかったようだな。なんでもこれまでの戦いで大戦果をあげ、なおかつ間もなくガリア・ロマリアへの再反攻を行う義勇軍をはじめとする連合軍兵士を激励したいとのことだ。彼女の強い意向であるし、また戦闘を控えてのこの時期、確かに彼女の訪問は兵士の戦意高揚に役立つ。しかし、知つての通りルイズさんは妊娠中。すぐに生まれるような時期ではないが、それでも体調管理には気をつける時だ。そんな時に自分から公務を増やすような行為は変だ。何か思い当たる節はないか？」

才助の質問に、才人は昨日の会話を思い出す。

（まさか？）

「その、ルイズが訪問を希望しているのっていつ？」

「2週間後、ちょうど演芸会がある日だ。」

才人は確信した。

（それだ。絶対に間違いない。）

「その様子だと、何か思い当たる節があるようだな？」

「うん。実は・・・」

才人は昨夜のルイズとの会話の内容を話した。

「なるほど。ルイズさんは演芸会を見たいと。それで家の基地に来

る口実を考えたわけだな。お前の入れ知恵か？」

「違う！それは違うつて！！」

「ふん。まあ、良い。そうすると、ルイズさんの訪問は慰問目的もあるだろうが、演芸会みたさもあるわけだ。さて、どうしたものか？」

「当然、断るんだよね？」

そんなふざけた理由で来られても、迷惑するだけである。だから才助は断ると才人は考えていた。ところが、彼の答えは予想外なものだった。

「いいや。彼女の気持ちもわからないでもない。確かに、たまにはそうしたイベントにも行きたくなりもあるだろう。」

「え！？じゃあ、受け入れるの？」

「無条件でそうするのもマズイ。それでは、演芸会を中止するようなことになり兼ねない。本末転倒だ。」

確かに、VIPが来るとなると警備その他諸々の問題上色々と厄介である。そんな時に呑気に演芸会など出来ようはずがない。

「ルイズは演芸会が見たいんだけど、中止になったら元も子もないよな。」

「かと言って、彼女が来ると基地内へ通達すれば、警備その他問題から演芸会は中止、基地総出で彼女を出迎えなきゃいけない。」

「なんとかならないかな？」

「そうだな・・・ようし、だったら彼女にはお忍びで訪問してもらおう。演芸会にサプライズゲスト、審査員あたりで出てもらう。」

「それで大丈夫？」

「演芸会には多くの隊員が出るんだ。彼女が審査員として出席すれば兵の士気高揚にもなる。トリステイン政府とルイズさんにはそこを強調して伝えよう・・・いや、ルイズさんにはお前の口から直に伝える。」

「わかった。」

「やれやれ。ルイズさんにも困ったものだ。」

才助がジロツと才人を見る。

「悪かったよ。」

「まあ、彼女一人くらいなら何とかなるだろう。人間知恵を絞ればなんとかなるもんだ。」

そう言って才助は笑った。しかし、彼女一人と言うセリフはまもなく覆されることとなる。



## 演芸会 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回はルイズをどう参加させるかの話でしたが、その他の王族の方も参加予定です。この内キュルケは決定済みです。あとのお姫さま方はどう参加する口実を作るか考え中です。

### 演芸会 3

才助ら義勇軍幹部が、ルイズの視察のために（実際は演芸会を見るためであつたが）四苦八苦し始めた。しかしながら、そんな彼らに追い打ちを掛ける事態が相次いで発生した。

「ちょっと待てや！」

その事実を知ったときの、才助の第一声である。彼にそんなセリフを吐かせたと出来事というのは、ルイズを演芸会に招く以上に厄介なことであつた。

「なんで連合側の王族が揃ってミライにやってくるんだ！？しかもお忍びで！！」

ルイズから基地視察を打診された翌日、アルビオン、ゲルマニア、東ガリアの各王室（政府）から、それぞれの代表者をミライに訪問させたいという要請が義勇軍上層部に届けられた。しかも、才助の言つた通り揃つてお忍びで、おまけに同じ日に。

「一体どういうことだ！？と言うか、あきらかに誰かが仕組んでるだろ！」

明らかに図つたか、もしくは焚きつけた人物がいると思われた。そしてその通りだった。

まずアルビオンのウェールズ国王については、震源はルイズ（つまり元を辿れば才人）であつた。この場合、ルイズがアンリエッタと取り交わしてい手紙によって、国王夫妻がミライへの訪問を思い

立つたらしい。

ちなみに、ハルケギニアにおける郵便制度は鉄道などと並んで整備がおこなわれており、ミライやロンディニウムと言った規模の大きな都市内、さらにシティ・オブ・サウスゴータと言った義勇軍基地に隣接する都市や村内、そしてそれら都市を繋ぐ都市間郵便が既に戦前から少しずつ稼働している。もちろん、設立されたばかりのためにトラブルが多く、未だ旧来の伝書『ガーゴイル』や伝書フクロウ、伝書鳩も多用されている。

しかしながら、そうした恩恵に預かれなかった平民層にとって郵便制度は画期的であつたし、また義勇軍がその運航や護衛任務を行っている航空機や鉄道輸送なら、到着時間は別として、ほぼ全ての旧来の方法よりも到着率が高い。加えて、トラブルも地球からスカウトした人材による賢明な職員育成が実って、大分減りつつあつた。

ちなみにミライの場合午前中に手紙を出せば、その日の午後ミライカラ・ロシエールの飛行場からアルビオンへ向かう飛行機に乗せることも可能で、最速で行けば翌日にはアルビオンのロンディニウムに着く。

この郵便網は、鉄道網と同じく戦時下でありながら整備が続行されており、まもなくヴァリエール公爵領やアイスランドとの間にも開設される予定だつた。

また、緊急とされる政府文書などは優先的に運ばれる。この政府文書や知人間や隊員間による非公式な輸送ルートは既に義勇軍が進出した先ならどこでも行われていた。

閑話休題。

アンリエッタ王妃は、開戦後も王室外交のために外遊することが多かったが、ウェールズ国王は首相を兼任しているため、アルビオンの外へ出る機会は限られていた。そのため、今回の訪問打診にはアルビオンの外へ出るという目的も兼ねていた。

続いてゲルマニアのキュルケ皇帝の場合は、震源地はマルセイユだった。

マルセイユはゲルマニア内戦の功績から、既にゲルマニアの貴族階級を得ているが、その後は部隊再編に伴い一時トリスタニアに後退していた。ゲルマニア方面軍はゲルマニア政府間とに結ばれた条約によって、その後も現地に駐留する予定であったが、現在のところは外敵による侵攻や内戦の再発の可能性も薄いため、最低限度の部隊しか駐屯していない。

そんなわけで、マルセイユはこの時トリステインへ戻っていたわけだが、彼は内戦時に親密になったキュルケと手紙による連絡を続けていた。キュルケにはここから情報が漏れたらしい。

ちょうど彼女も内戦後の後始末で、気晴らしがしたかったらしい。マルセイユは手紙の中で、自分が演芸会に出て芸を披露することを書いていたのだが、これが彼女にトリステインへ行く気にさせたようだ。

残るシャルロットの場合は、プサスイザベラ付き（厳密には言えばさらにシルフィードのオマケ付き）だった。

彼女の場合、どこから聞きつけたのか才助たちも皆目見当がつかなかった。彼女の恋人であるストークは、この時期東ガリアにおけ

る保健衛生の仕事についており、おまけに直接義勇軍の仕事に関わっているわけではない。義勇軍の情報が彼女に伝わるルートがわからなかった。

実は、彼女の場合は本当に単なる偶然だった。

この時期、義勇軍次期作戦に考えていたのはガリア空軍主力艦隊の本拠地であるサン・マロン軍港の攻略であった。既にこの作戦の概要については、連絡将校によってシャルロットにも伝わっていた。

この作戦が終了すれば、必然的に東ガリア政府が治める地域はさらに広くなる。そうになると、行政面や軍事面で新たな問題も当然ながら出る。その場合の対処法を義勇軍幹部やトリステイン政府上層部と直接対話するため、シャルロットはミライへの訪問を打診したのである。

だから彼女の場合、別に演芸会が見たいとか遊びに行きたいからミライ行きを考えたわけではない。ただし、翌日連絡に赴いた連絡士官が口を滑らせたため、彼女の耳にも聞き及ぶことにはなったが。

まあとにかく、結果的に見て連合国側の主要王家の人間がミライへの訪問を打診したのであった。もちろん、それぞれの政府の重役や義勇軍幹部が頭を痛めたのは言うまでもない。

しかしながら、才助はここで頭をつかうことにした。なるほど、王族が未来へやって来るというのは確かに大仕事である。しかしながらこの戦争が始まってから、一度もこれだけの主要な王族が顔を合わせる機会がなかったのも事実である。

「ちょうど良い、この機会に王族方を集めた首脳会議をやってもら

おう。それくらいしてもらわなくちゃ割りに合わん。」

戦争は未だ続いているとはいえ、現在はこれらの国々は連合国として共通の敵と戦っている。であるから、王族らが顔を合わせて大まかな戦略と、戦後の方針を立てておくことは悪いことではない。しかも、彼らはいずれも今回の訪問に義勇軍の協力を打診してきている。すなわち、義勇軍が大きく関与できる隙がある。

言っておくが、別に才助をはじめとする義勇軍幹部にはハルケギニアを征服しようなどという願望はない。しかしながら、現状で戦いの中心となっているのは彼らであるし、また今後のハルケギニアの発展の上でアドバイスはしたい。すなわち、言い方はあれだが発言権はそれなりに持っておきたい。

現状でも、過去の戦争での実績などから義勇軍はそれなりの発言権は持っている。しかしながら、今後もそれを維持していける保証はないのだ。

悪い言い方をすれば、現状では義勇軍と言う組織はハルケギニアという地にいる寄生虫みたいなものだ。宿り主が死んでもらうのも困るが、一方で見捨てられたり駆除されたりするのも困る。

だからこそ、ハルケギニアの政治的核である王室との距離はバランス良く保ち、自らの存在と権力を持つておかねばならない。そうした観点から見て、今回の王族たちからの打診は有意義に出来る。才助から相談された才吉もその点を理解し、才助の考えを認めた。

こうして、才助は各王室や政府にお忍びでのミライ訪問を認める一方で、各王室が一堂に揃うのだから、秘密戦略会議（もちろん義勇軍も含む）を行わないかと申し出た。

この申し出に、もちろん一部の関係者は渋い顔をした。特に遊び目的だったルイズとキュルケはそうであった。またルイズの場合は体調の問題もある。

しかしながらそれは別にしても、確かにこれだけの首脳陣が顔を突き合わせておくに越したことはないし、ミライで開くということは、ルイズにかかる負担も小さくて済むことを意味している。

またルイズもキュルケも、確かに遊びだけではマズイということぐらい心得ていた。それに、政治的に見ても、確かにここで王たちが顔を合わせておくのは悪いことではない。だから結局、各王室の王たちは義勇軍側の提案を丸々飲むこととなった。

才吉や才助の思惑は成功したわけである。もちろん、ルイズたちの義勇軍訪問（又は演芸会への参加）も認めている。

まあそうしたとす黒い思惑もあったが、ルイズたちが義勇軍視察と激励のための訪問という名の、気晴らしのための演芸会参加が決まったのであった。

ちなみに、演じる側としてエントリートしたのはルイズ以外の全員だ。一体何をやるのか、才助たちは首を捻ったが、各々「当時のお楽しみ」と言って口を割らなかった。

ルイズの場合は、もちろん妊娠7カ月の体であるから何かをやれるはずがなく、今回は審査委員役に回ってもらったこととなった。

それでも、彼女としてはひさしぶりにワイワイと騒げる場に行けるので、喜んではいた。

それから2週間後、いよいよミライでの首脳会議の日となった。予定では演芸会が行われる日までの2日間に渡って、トリステイン政府仮政府庁舎で首脳会議が行われることとなっていた。

出席する各王室の人間は、秘密会議であるのでそれぞれお忍びでトリステインへ入国した。アルビオン王室のアンリエッタとウェールズの2人は、時間の掛かる空中船ではなく、才吉が手配した義勇軍の輸送機でやって来た。

東ガリアの3人は、当初シルフィードに乗って来るつもりだったようだが、「目立つのでやめて欲しい」という才助らの懇願を受けて、こちらも差し回された義勇軍の輸送機に乗ってやって来た。

そしてゲルマニア皇帝のキュルケの場合は、義勇軍上層部が気を利かしてマルセイユにわざわざ迎えに行かせた。彼の愛機である「超零戦」1型は単座戦闘機であるので、今回使ったのは練習用の複座「零戦改」であった。

この高速機によるお迎えは、中々好評だったとか。

そうして集まった首脳陣は、そのまま極秘の内にミライの飛行場から移動して政府庁舎へと入り、それぞれ簡単な挨拶をした後、当初の予定通りに2日間の会議に臨んでいる。

この後に「第一回ミライ会議」と呼ばれる会議で、各首脳陣は今後のガリア・ロマリアへの攻撃計画や、戦後に備えてのビジョンづくりなどを行った。もちろん、義勇軍もこの会議に参加し、才助ら



の思惑通り一定の発言権を得て、様々な意見を行っている。

最終的に、義勇軍が計画していた反撃計画が正式に認められ、それと同時に戦後を見据えた様々な改革を各国合同で行っていくこと、そして戦後再び大規模な戦争が起きることを防ぐ意味で、各国を経済・政治・軍事的にまとめる共同体構想の創設が取り決められることとなった。

演芸会 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 演芸会 4

秘密裏に行われた会議も終わり、いよいよ演芸会当日となった。演芸会自体は夕方から始まる予定であったので、ルイズを初めとする王族方は昼過ぎに、基地へとやって来た。

「一体今日はどんな出し物があるのかしらね？楽しみだわ。」

「何時もどおりなら、お笑いとか、歌とかダンスだけど、今日はいつもより参加者が多いからな。これまでにないのも見られると思うぞ。」

「そう言う才人も出るんでしょ？一体何をやるのよ。」

司令部にある貴賓室で、才人とルイズがおしゃべりをしている。一応お忍びではあるが、ルイズは王様である。だからちゃんとした部屋が用意されていた。

「それを言っちゃ楽しみが減るだろ？夕方までのお楽しみだよ。」

「それは残念ね。まあ良いわ、楽しみにしているから。」

「それはそうと、お楽しみといえばウェールズ国王たちは何をするのかな？」

今回の演芸会において、さすがに妊娠7ヶ月を迎えてお腹が大きく膨らんでいるルイズは参加することなど危険すぎて無理であるから、サプライズゲストの審査員をする。しかし、その他の王族方は参加することになっていた。

王族方がこんな俗っぽいイベントに参加するなど、これまでの常識からすれば、天地がひっくり返ってもありえなかったことであるが、本人たちが参加したいと言ったので、結局義勇軍上層部も認めた。

ちなみに、ルイズはお忍び訪問ではあるものの、正式に王族としての身分で参加する。しかし、その他の王族方は、トリステインに來ている事自体が極秘なので、あくまで軍属身分で参加する。

そのため、全員基地に來る前に軍属用の制服に着替えてもらってから來てもらっている。そして今は、それぞれ宛がわれた部屋で、出し物の練習中であつた。

先ほど挨拶のために一堂に会した時、才人もルイズも彼らと喋つたが、何をするかまでは聞いていなかった。

「さあ？私も聞いていないから。ただ、姫様・・・アンはダンスが得意なはずよ。」

ルイズはアンリエッタの呼び方に多少戸惑いながら言った。現在は女王と王妃という立場なので、アンリエッタから気軽に呼んで欲しいとルイズは言われていた。

「へえ。」

「あ、ダンスって言っても地球でやるような、ええと、モダンダンスだっけ？ああ言つのではないわよ。お城のパーティーとかでやるやつよ。」

「宮廷舞踊ってやつか？」

「そうそう。」

「ふーん・・・じゃあ、ウェールズ国王は？」

「知らないわね。アンの相手でもするんじゃないかしら。」

「そうか・・・あとの4人は何をするのかな？」

「さあ？シャルロットなんか一番こういうことはしたがないと思  
ったから、参加するって聞いて驚いたわ。イザベラとシルフィード  
の2人が一緒だから、歌でも歌のかしらね？」

今回シャルロットも参加する側であった。彼女はイザベラとシル  
フィードの2人とチームを組んでいる。ただし、やはり何をするの  
かは今のところわからなかった。

「どうだろうな？けど3人とも可愛いから、それなりに人気でそう  
だよな。」

「才人！何かやらしいこと考えてるんじゃないでしょうね！」

「バカ、んなこと考えてねえよ。いちいちそんなこと気にするな。  
俺の本命はお前だけなんだからな。」

「え！・・・いきなりそんなこと言わないでよ、恥ずかしいじゃ  
ない。」

才人が柄にも無い言葉を言うものだから、ルイズは顔を赤くして

しまった。

「ごめんごめん。まあとにかく安心しろ。で、話を戻すけど、あとはキュルケだな。最近はおのマルセイユ中佐と仲が良いみたいだけど、何か芸もつてたっけ？」

「どうかしらね？まあ、なんだかんだ言っても、キュルケも貴族よ。踊りや歌は得意だと思うわ。」

ルイズは大体の予測をつけたが、結局のところ厳密にはわからなかった。

その時、才人の頭の中にあることが思い浮かんだ。

「そう言えば、こうやってキュルケたちと集まるのは開戦前以来だな。」

「そうね。あの時もこそそとミライの宿に集まって、お互いの未来を祈って乾杯したのよね。あれからもう半年以上も経つのね。早いわ。」

「色々とおったからな。」

「本当ね。私もキュルケもシャルロットも今や王様よ。そして私はこの通りだし。」

「俺も大公なんてものにされちゃったしな。あの時は想像すらしてなかったのに。」

「まったく。人生ってわからないわね。」

まだ若いにも関わらず、2人の人生はかなり濃いものになっていた。そんなことをしみじみと感じてしまう。

「そうだな。」

才人にしても、2年前だったら想像すら出来ない人生を送っていた。

「けど、戦争は続いているから、お互いこれから大変だな。」

「そうね。」

「て、何か辛気臭い話になっちまったな。」

「まあ、現実には大変だから。」

彼女の言うとおり、現実には中々大変だった。

「今日はルイズに楽しんでもらいたいからな。こんな話はやめだ。話題を変えよう。」

才人は話題を変えた。これ以上ルイズの気を重くしなくなかったのだ。

それからしばらく、お互い最近起きたことや周りのことをしゃべった。つまりは雑談である。別に深いことは何もないのだが、こうしたお喋りの方が当然ながら和む。

そんな中で、才人がこんなことを口にした。

「そう言えば、俺がソナム会戦の時に操縦したガンシップの「スプーキー」なんだけどさ、これにノーズアートが描いてあるんだけど。」

「ノーズアートで、飛行機に描いてある絵よね？たしか、才人の戦鬪機にもデルフが描いてあったわよね？」

「そう。それなんだけど・・・」

才人は、3機の「スプーキー」のノーズアート（詳しくはジョン・ドー先生の外伝をお読みください）について話した。ルイズは別に才人のようにミリオタではないが、才人や義勇軍の付き合いが長くなってきたおかげで、単語の意味くらいわかってる。だから、才人が注釈なくても話についていける。

まあ、それはさておくとして、ルイズは「スプーキー」のノーズアートについて聞かされた。最初は軽く聞いていた彼女であったが、話を聞いている内にだんだんと表情が険しくなってきた。

才人としては、今回ルイズ・キュルケ・シャルロットの3名が揃ったので、ふと思いついて会話のネタにしたのであるが、彼女が話の途中で険しい表情をし出したことに気づいた。

（もしかして怒ってる？）

これは予想外であった。

「あのルイズ、もしかして怒ってる？」



「別に・・・ねえ才人。マリコル又て今は水霊騎士隊だったわよね？」

「う、うん。確か大尉で小隊長だよ。」

「と言うことは、今ミライにいるのよね？」

「ああ、今日も朝会ったし。今日の演芸会にも出るみたいだったから。」

「そう・・・才人、良かったらマリコルをどこか人気のない場所に呼び出してくれない？そうね、今からきっかり1時間後に。」

ルイズは笑顔でそう言ったが、目は笑っていなかった。

「ちょっと待て！何をする気だ！？」

「うん・・・そうね、強いて言えば話し合いかしら。じゃあそう言うわけをお願いね。私はキュルケたちとちょっと話があるから。」

「お、おい！」

するとルイズは、絶対零度の視線で才人を射抜いた。

「何か文句があるのかしら？」

ルイズは相当に御立腹のようだ。なにせ、才人と会ったところに犬扱いしていたのと同じオーラを発しているからだ。こうなると、止めるのは無理そうだ。

いや、厳密には止められるだろうが、そんなことすれば才人とってもルイズにとっても厄介なことになるだろう。

才人はマリコルヌを生贄にすることにした。ただし、彼女の身体の具合というものもあるから、一応注意だけはしておいた。

「わかった。もう止めない。けど、身体には気をつけるよ。変なことして流産したらそれこそ洒落にならないからな。」

「大丈夫よ。それよりも、さっき言ったことちゃんとしておいてよ。」

そう言つと、ルイズは貴賓室から出て行ってしまった。

才人は彼女を見送ると、溜息を吐きつつマリコルヌを呼び出すことにした。そのために、まず部屋に備え付けてあった電話で交換室を呼び出し、水霊騎士隊の宿舎まで繋いでもらった。

それからさらに20分後、ルイズがキュルケとシャルロットを伴って帰ってきた。

「どう?」

「格納庫の裏の空き地に呼び出しておいた。女の子に呼ばれてるって言ったら、喜んで飛びついたよ。」

「ありがとう。才人、そこまで案内して頂戴。」

「わかった。けど、本当に何をする気だ?」

するとキュルケとシャルロットが答える。

「何って、ちょっとお話をするだけよ。」

「肖像権と個人情報保護の侵害について、注意するだけ。」

「「そうそう。」」

シャルロットの言葉に他の2人も答えるが、多分意味はわかっていないだろう。シャルロットの場合は、地球のことについて相当勉強（勉強と言えない面もあるが）しているから良いとして、ルイズやキュルケまで肖像権だの個人情報保護と言ったことを知っているとは考えられない。

ハルケギニアではそうした概念が、ようやく生まれたばかりなのだから。もっとも、才人にはそんなこと指摘する気などなかったが。

「わかったよ。」

と言うわけで、才人は3人を格納庫の裏へと案内したのであるが、その場からすぐに立ち去っている。もちろん、それは3人とマリコルヌの「話し合い」のとはっちりを受けないためだ。

才人は少し離れた所で待っていた。そして浮かれたマリコルヌが3人のいる方へと走っていく所を見た。

（許せよ。）

と心の中で呟いた数分後。

グワーン！ドーン！ビューン！！

と言う「風」、「火」、「虚無」の炸裂。そして。

「うわああああ！！！！」

マリコルヌの断末魔の声を聞いたのであった。

「どうした！？」

「格納庫の裏で何かあったぞ！！」

すぐに騒ぎを聞きつけた兵士たちが集まってきた。才人はそれくらいわかっていたので、3人にあらかじめ逃げ道を伝えてあった。

そして3人は、兵士たちに見つかることなく才人の所へとやってきた。

「ああ、すつきりした。」

ルイズが晴れ晴れとそんなことを言った。

「お前ら、まさか殺してないよな？」

「そんな物騒なこと言わないでよ。」

「安心して、死なない程度にしておいたから。」

「気絶しただけ。多分2〜3日すれば目を覚ます。」

（うわああ・・・）

キユルケの言葉に、才人はげんなりとする。

「けど、良いのか？あいつの口からお前らのこと漏れたらどうするんだ？」

「それも大丈夫よ。ちゃんとテファに頼んでおいたから。目が覚めた時には『忘却』で綺麗さっぱり忘れているはずよ。」

『虚無』魔法の無駄遣いに呆れつつ、才人はもう何も言わなかった。

「それじゃあ戻るぞ。」

4人は再び司令部長庁舎の部屋へと戻った。

ちなみにこの騒ぎ。ガリアの密偵による攻撃と一時騒然となったが、まもなく平賀才助大將から全軍にたんなる事故と布告が出され、それで公式的には沙汰やみとなった。もちろん、後に記憶喪失となったマリコルヌと合わせて、隊員たちの絶好の話題になったのは言うまでもない。

## 演芸会 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回は、キャラがかなり暴れました・・・3人とも魔法の实力は原作どおりなので・・・マリコヌルに合掌。

## 演芸会 5

マリコルヌが、元同級生の3姫様に吹き飛ばされ、その後テファの『忘却』によって記憶を奪われるというアクシデント（と言ってよいのか微妙だが）があったものの、演芸会自体はその日の夕方から予定通り始った。

会場となったのは、本来OB2型爆撃機を収容する大型格納庫だ。爆撃機隊の運用を可能とするために、新たに建設されたこの格納庫は、輸送機用のそれよりも一回り大きく設計されている。そのため、多くの観客となる隊員や軍属を収容できるわけだが、その観客用スペースはあつという間に一杯になった。

隊員たちの多くが、今回のイベントを如何に楽しみにしていたかわかるだろう。戦時下という状況にある分、こうした娯楽は貴重なのだ。

その観客らの前には、わざわざ特設のステージ（大学祭とかライブイベントで造られるものを想像すると良い）が作られていた。参加者はその上で、今日の大会のために準備してきた芸を披露することとなっている。

そしてそのステージ横には、参加者の芸を審査する審査員席が3人分用意されていた。

予定時刻を迎えてまず、開会の挨拶を基地司令である平賀才助大將が前に出て言う。もちろん、マイクとスピーカーを使ってだ。

「ここに、『東方義勇軍』第22回演芸大会の開会を宣言する。」

「『『『いえーい！！！！』』』」

「『『『おお！！』』』」

隊員たちのテンションは天を突くばかりに高かった。

才助はそんな彼らの様子に笑みを浮かべながら、話を続ける。

「諸君、今回の大会は普段のものより規模が大きい。参加者も多いし、賞金もいつもの大会より多いぞ。そして何よりも、今回の大会にはあるやんごとなきお方が、サプライズのゲスト審査員として参加して下さっている・・・御紹介する。現トリステイン女王のルイズ陛下だ。」

才助に呼ばれる形で、それまで幕の後ろで待機していたルイズが前に出た。妊娠7カ月目を迎えて、お腹も大きくなり、そのため専用のドレスを身に纏っている。しかしながら、高貴な貴族出身であるが故の立ち振る舞いと頭の上に被った王冠が、彼女の身分を示していた。

それまで熱狂していた隊員たちは、突如現れた王族の姿に度肝を抜かれていた。

「ルイズ陛下は多忙の中、開戦以来赫赫たる戦果を重ね、そして間もなく再び前線に赴くであろう諸君らの激励と、武運長久を祈られるために参られた。皆に無用な心配を掛けたくない故に、このような形での御登場となられた。」

才助はマイクをルイズに渡す。



「『東方義勇軍』の皆さん、我が国のために戦って下さっていることをこの場を借りて深く感謝いたします。」

そう言つて、ルイズは静かに頭を下げた。そして頭を上げると、話を続ける。

「今回、皆さまに無用な気遣いをかけたくなかったので、このような形での訪問となりました。驚かせてしまい申し訳ありません。僭越ながらこの演芸会の審査員をやらせてもらうこととなりました。どうかよろしく願います。皆さまのお役に立ち、少しでも常日頃のお礼となれば幸いです。」

「全員、ルイズ女王陛下に敬礼！」

才助の声が格納庫内に響き渡り、兵士たちは一斉に起立すると彼女に向つて敬礼をした。

ルイズはしゃべり終わるとマイクを才助へと戻し、自分は用意された審査員席に座った。

「と言うわけで、今回の大会は陛下自らが審査員をされる。審査についてはいつもと同じく、私と陛下、そして戦車隊司令の長田少将の3人で行い、それぞれ10点満点で審査し、最高得点で優勝者を決める。なお同点者が出た場合は、会場の諸君らの拍手で決める。今回はいつもより参加者も多く、賞金も多い。そして何より陛下の御前である。参加者は心して、自らの芸を披露して欲しい。私からは以上だ。参加者全員の健闘を祈る。」

彼がしゃべり終わると、観客から拍手が起きた。こうして演芸会

は始まった。

「今回は色々御迷惑をお掛けしてすいません。お義父様。」

審査員席に座った所で、ルイズが才助に向かって言った。もちろん、小声である。プライベートな会話であるから、義父と呼んでいる。

「そう思うなら、行動で示して欲しいですよ。まあ、兵の士気は高まったようですから、今回はよしとしましょう。それに、あなたもこここの所忙しかったようですから。」

（あと、こちらでも今回の事態を利用しましたし。お互い様ですか。）

才助は最後の言葉だけ、心の中でつぶやいた。彼の呟きについては前々話を参照のこと。

それから間もなく、演芸会は本格的にスタートした。

「それでは！大会を始めます！！」

才助からマイクを引き継いだ司会役の兵士が言うと、再び会場が沸いた。

「エントリナンバー1番は、軍属の方でしかもグループですね。タバサさん、レジーナさん、イルククウさんです。演目は歌です！」

なんとトップバッターはシャルロットらガリアの王族組であった。これにはルイズも驚いた。ちなみに、順番はエントリー順ではなく、くじ引きで決められている。

「お義父様、シャルロットたちが何を歌うか聞いていますか？」

「いいえ。ただ歌を歌うとしか。自分は参加者が何をするかについて、原則不介入ですから。まあ、もちろん下品なネタを使ったりしたら、容赦なく強制退場させますから御心配なく。」

才助のどことなく物騒な返答を聞き流し、ルイズはステージの上に目をやった。まもなく、参加者である3人が現れた。その姿に、観客の兵士からどよめきが起きた。一方、ルイズと才人の2人は口をあんぐりと開けて固まってしまった。

「な、何よあれ？」

「なんで、シャ・・・タバサとレジーナが某北高の制服を！？と云うか何時の間に用意したんだ！？」

シャルロットと言いそうになったのを慌てて抑えて言いなおす才人。

シャルロットとイザベラが着ているのは、なんと青を基調としたミニスカセーラー服だった。そしてそれは明らかに、某非現実系女子高生アニメのそれであった。ちなみにイルクウことシルフィードだけは、メイド服であった。また、シャルロットは眼鏡を外していた。留めは3人とも染めているのか、髪を被っているのか髪はアニメのキャラクターそのままだった。

「タバサが長 で、レジーナがハ ヒ、イルククウがみ るか・・・  
凸凹なのを除けば、そのまんまのキャスティングだな。」

才人が呆れ半分、感心半分の声で言った。 実際、3人のキャラクターを考えれば中々のを得たキャスティングと言えよう。 惜しいかな、3人とも背がバラバラで凸凹トリオになっている点だが、まあそれは許容範囲と言えよう。

マリコルヌが見たら涙を流すであろう光景である。 しかしながら、前述したとおり3人の姫君に吹き飛ばされた彼は、今回欠席であった。 そのため、後にこの話を聞いて血の涙を流したとか流さなかったか・・・

とにかく、3人がセーラー服でステージ上に登場しただけでも偉いことであつた。 何せ3人とも美少女であるから、男なら喜んで当然であろう。

そしてもちろん、彼女らがステージ上に並んだところでスピーカーから流れ始めたのは、ハレ レユカイであつた。 ちなみにこの曲、ラジオなどを通じて歌や踊りは広くトリステインに知れ渡っており、もはや珍しい存在ではなくなっている。

ただし、その元ネタである「涼宮 ルヒ」の憂鬱については認知度が十分ではなく、歌と踊りだけが流行っているのが現状である。 そのため、青いセーラー服とメイド服という原作に沿った格好であるのは、ハルケギニアの人から見たらかなり新鮮である。

3人ともノリノリでハレ晴 ユカイを熱唱し、踊っている。 イザベラとシルフィードは何となくそう言うことをしてもおかしくなさそうだが、シャルロットまでいつもどおりの無表情ながら踊って歌

う光景に、才人とルイズは啞然としてしまう。

「ラノベなんか読ませない方が良かったかな？」

ハルケギニアのお姫様が、どこか可笑しくなっていくことに、本気で頭を痛める才人であった。

一方審査員席のルイズはと言うと。

「まさかシャルロットがあそこまでノリノリだとは思わなかったわ。それに、随分上手いじゃない。」

彼女の目から見ても、3人の歌と踊りはアニメそのままに完全に同調していた。歌い終わった時には、文字通り会場を震わせるほどの拍手が起きたくらいだ。

そして3人の審査員の採点結果は以下の通りになった。

才助〃10点   ルイズ〃10点   長田〃7点   合計27点。

最期に長田が7点のプレートを挙げると、会場内から凄まじいブーイングが起きた。

「ふざけるな！」

「どこに問題があったって言うんだ！」

明らかに上官もへつたくれもない発言であったが、長田はただ苦笑いするだけであった。

「あの長田少将、どうして7点なんでしょうか？」

すかさず司会がマイクを持って歩み寄った。

「ええとだね・・・その、歌と踊りは確かにすばらしかったんだけど。・・・あんな短いスカートで踊られると、見ているこっちが恥ずかしいと言うか。」

戦前生まれの彼らしい発言であった。実際に彼と同じ時代の人間は「わかる。」と頷いていた。確かに彼の時代から見ても、ミニスカートの短い踊りをされるのは、目のやり場に困ると言えるだろう。

結局ブーイングはそれで収まり、シャルロットら3人組の成績は27点と言う、初っ端から高得点となった。

「こりやとんでもなくレベルの高い戦いになって来たな。」

「才人、僕たち勝てるかな？」

才人の隣に座っていた腐れ縁のギーシュが少々不安げな表情で言った。

「うーん・・・あそこまでレベル高いとな。正直勝てる気がしない。」

才人も自信がなくなってきた。もつとも、次にギーシュが口にしたセリフのせいで、そんな考え吹き飛んでしまったが。

「それにしても、才人。さっきの3人ってどうみても東ガリアのお

姫様たちだよな？どうしてこんな所にいるんだい？」

（しまった！）

薄々顔を合わせたことのある水霊騎士団の連中にバレる思っていたが、早々にバレた。まあ、バレない方がおかしい。

「ギーシュ、それ以上言うな。それとそのことは誰にも言うな。誰か喋っていたらすぐに黙らせる！」

「え！？・・・まさか、何かの軍事機密とか？」

「そんな所だ。もし話してみろ、多分友澤さんあたりに撃たれるぞ。」

その一言で、ギーシュの顔色が一気に青ざめた。

「わ、わかった。」

（大丈夫かな？）

口の軽いギーシュに加えて、他の水霊騎士隊の連中から変なうわさが広まらないかと不安になる才人であった。

演芸会 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



## 演芸会 6

演芸会は初っ端から高い盛り上がりを見せた。もちろんそれはシャルロットたちのレベルの高い「ハレ晴 ユカイ」が原因であつた。歌踊り共に、それはそれは素晴らしい物であつた。

「一体何時の間に練習したんだろう？」

あまりに上手いものだから、才人が首を傾げた位だ。

「全くだ。」

隣に座っているギーシュも同様に首を傾げていた。王族である彼女らが一体何時の間に練習したのか不思議でならないらしい。

ちなみに後に判明したところでは、この演芸会のことを聞きつけた翌日に決めて練習を始めたとのことである。もちろん、周りには秘密で。確かにこれではベルスランがカステルモール辺りが見たら卒倒するかもしれない。

さて、そんなに上手くやってしまい最初から高得点を取ってしまうと当然ながら割を食う人間も出てしまう。彼女らの後の出場者たちがそれである。

2・3番目の出場者はそれぞれ航空隊と歩兵部隊の兵士がペアで漫才と手品を披露したのであるが、シャルロットたちのそれに比べてインパクトもなく、盛り上がり欠けてしまった。別に下手ということはなかったのであるが、レベルもそこそこであつたため当然ながら観客の反応は良くなく、得点も10点台に留まつた。

もちろん、4人がうな垂れながら退場したのは言うまでも無い。

「いきなりレベルの高い人間がやるって言うのも考え物だな・・・」

その光景を見ていた才人はしみじみとそう思ったのであった。このままの状況が続けば逆に隊員の士気を落としてしまうかもしれない。

しかしながら、そうはならなかった。

「それでは続いてエントリーナンバー4番。あ、こちらは6人のグループですね。アルビオン方面軍の葛西中佐、ケイト兵曹、トレバ―兵曹、ヘリ部隊の山田大佐、そして軍属のティファニアさんとマチルダさんです。演目は歌ですね。」

司会者の言葉に、沈みつつあった会場の雰囲気再び盛り上がった。

「テファ相変わらず人気だな、あとマチルダさんとケイトもか。」

この3人は義勇軍内部で人気投票をしたら上位にランクすること間違いのないほど人気であった。妖精そのままのティファニア、大人の女性としての魅力に溢れ頼りになるマチルダ、そして翼人とのハーフであり神々しさを備えたケイトである。

まずこの面子からして人気を搔つ攫えるだろう。

「全くだよ。この部隊は人数は少ないけど、皆美女ばかりだから羨ましいよ。」

ギーシュがウンウンと頷きながら言う。

「お前モンモンに聞かれたら大変だぞ。」

念のため才人は警告を与えておいた。幸いにも、この時は彼女に聞きつけられるずに済んだ。

閑話休題。

部隊に上がった面子の内2人は葛西小隊の隊員であるから、豊かテファに影響を受けたのかもしれない。ヘリ部隊の山田少佐はマチルダから誘いを受けたのだろう。

そして間もなく6人が舞台上に出てきたのであるが、先ほどのシャルロットたちがただマイクを持って登場しただけなのに、なんと全員楽器を持っていた。テファはアルビオンにいた時から御馴染みのハーブ、豊はハーモニカ、その他の面々もリコーダーやタンバリン、バイオリンなどの楽器を持っていた。

なお楽器と地声だけではさすがに広い会場に対しては無理があるらしく、彼らの前にはちゃんとマイクが後から置かれている。

「へえ、豊たちも楽器使えるんだ。そう言えば、非番の日に集まって何かしてたな。こういうことか・・・けど何を歌うんだ？」

テファたちの場合、シャルロットたちのやったようなやたらテンポの速い歌はやらない。彼女がよく歌うのは始祖の歌や民謡、そして地球で子供が歌うような、易しい感じの歌だ。

そして間もなく、演奏が始まった。バイオリンを持ったマチルダが弾き始めた。その音を聞いて、才人はすぐに何の曲であるかわかった。

「ああ、カン リー・ロードか。」

確かにテファに良く似合いそうである。楽器の方も乱れることなく、皆ちゃんと弾いていた。

「ハレ晴 ユカイ」のように明るく盛り上がるような曲ではないが、その歌詞と共に聞く者の心を落ち着かせてくれる。テファの声もそれに良く合っていた。

「へえ、シャルロットたちの曲も良かったけど、こちも良いわね。心が落ち着くわ。」

ルイズが彼らの歌と演奏を聴きながらそう漏らした。

会場にいる誰もがテファの歌と、彼らの弾く曲に聴き入っていた。そして歌と演奏が終わると、観客の間から自然と拍手が巻き起こった。

もちろん、才人とギーシュも拍手した。

「すばらしい歌と演奏ありがとうございました。それでは審査をお願いします。」

司会の兵士に促されて、審査員役の才助・ルイズ・長田少将がしばし考え込んだ末点数の書かれた札を上げた。

才助〃 8点    ルイズ9〃点    長田〃 10点    合計27点

シャルロットたちと同点になった。

才助とルイズはインパクトの弱さからそれぞれ減点したのであるが、長田は先ほどとは逆に非の打ち所がないと考えたのでこうなった。

「こりゃあタバサたちとテファたちの一騎打ちになるかな？」

「おいおい才人、君も僕もこの後出るんだからそんなこと言うのは止めたまえ。」

やる前から弱気な発言をする才人に、ギーシュが渋い顔をした。

「だってさあ、じゃあ聞くけどギーシュはあの2組に勝つ自信があるのかよ？」

「うー！？それを言われると自信がない。」

先ほどの言葉もどこへやら、ギーシュも途端に弱気になった。

「だろ？」

2人にそう言わせるほど、2組の出し物は際立っていた。上手いだけではなく、観客の人気を掻っ攫っていた。

才人とギーシュがやる予定の出し物は、上手くやれる自信はある。しかしながら、観客の人気を取れるかはわからない。

「まあ、やれるだけやろうぞ。それはそうと、お前は7番目だろ？ そろそろ行った方が良くないんじゃないか？」

「おっと、そうだった。それじゃあ才人、お互いの健闘を祈ろう。」

自分の演技の準備をするためギーシュは席を立ち、控え室の方へと向かった。

「ああ、ギーシュもがんばれよ。」

才人がギーシュを見送っている間にも、演芸会は進行していく。5番目と6番目の参加者は銃士隊と水霊騎士隊の隊員たちによる歌と楽器演奏であった。2番目・3番目の参加者たちに比べればそれなりの評価を貰ったようだが、それぞれ得点は20点前半どまりで優勝争いに食い込むことは叶わなかった。

「それでは、続きまして水霊騎士隊隊長ギーシュ・ド・グラモン中佐によるパフォーマンスです！」

そして7番目のギーシュの番となった。

司会者に呼ばれ、彼は御自慢の薔薇に似せた杖を持ち、さらに大量の土が入った箱を用意してもらって壇上へと上がった。

彼の友人たちは、すぐにギーシュがお得意の『鍊金』魔法を使ったパフォーマンスをするものと読んだ。そして事実その通りであった。

スピーカーから音楽が流れ、それに合わせてギーシュは杖を振る。

「出でよ、我が獯猛たちよ。」

ギーシュは用意してもらった土から数体の狼型の『ゴーレム』を作り出した。これだけなら別に驚くべきことではない。

しかし、そこから先が彼の『土』魔法使いとしての真髄発揮であった。なんと彼は器用なことに、その『ゴーレム』を途中で変形させて別の動物にしたり、分裂させてより小さな動物や、逆に合体させて大きな動物を作ったりして見せた。

「『おお！』『』『』」

音楽に合わせて、ギーシュは巧みに『ゴーレム』を作って動かしながらかつ上記したように作り変えていった。

これこそ、彼が地球の映画「トラス・フォーマー」の変形にヒントを得て開発した変形『ゴーレム』であった。

彼自身が魔法を使うだけならば面白さ半分であるが、勇壮な音楽に合わせることで場の雰囲気盛り上げ、観客たちの注意を引いていた。地球で一流マジシャンがやるパフォーマン스에近い。

そして最後に、音楽が終わるのに合わせて『ゴーレム』が全部土に戻ったところで彼のパフォーマン스는終了した。もちろん、多くの拍手と共に。

器用に『ゴーレム』を作り出して変形させた点と、音楽に合わせてパフォーマン스는一定の評価を得たのであった。結果彼の得点はシャルロットやテファのそれには及ばなかったものの、25点と高い点を貰えた。

優勝こそ出来なかったが、それなりに高い評価を貰えたので、ギーシュは満足げであった。

その次に登場したのは、アンリエッタとウェールズであった。

「続きまして、軍属のリエッタさんとチャールズさんによるダンスです！」

まあ何とも判り易い偽名で登場した2人が行なったのはルイズが予想したとおり、宮廷などで行なわれるダンスであった。舞台上に上がると、スピーカーから流れる曲に合わせて、どこから持ち込んだのか美しいドレスとタキシードに身を包んだ2人は優雅に舞った。

「へえ・・・」

宮廷ダンスは堅苦しいものと思っていた才人であるが、2人はさすがに王族だけあって気品に溢れた雰囲気を感じ取りに振りまきながら踊った。そのため、2人の姿にしばし見とれてしまった。

それは他の隊員たちも同じであり、ギーシュやテファの時と同じで、2人が踊りを終えた時には拍手が鳴り響いた。

2人のダンスは内容的にも中々のものであり、3人の合計点は26点となった。踊りは上手かったのであるが、やはり宮廷ダンスはこの場でやるようなものではない、すなわち場と内容のギャップが目立つたらしく、それが理由で減点となった。

ただし、アンリエッタとウェールズの2人は優勝できなかったことについては特に気にしておらず、むしろ自分たちのダンスが初め



て見てもらった人間に評価されたこと、そして周りの目を気にせず心置きなく2人で踊れたことの方が良かったようだ。

その後は歩兵や砲兵、さらに他部隊の兵士のグループによる歌や漫才などが続いたが、高評価は得られず、優勝争いは俄然としてシヤルロットVSテファであった。

そして才人の出番が近づきつつあった。彼の順番は15番目である。その1つ前がアニエスであった。

「アニエスさんはやっぱり剣を？」

控え室で一緒になった才人はアニエスに尋ねた。

「もちろんだ。私の取り柄といえばこれだからな。お前はどんなんだ？」

「俺も似たようなものです。」

そう言っただけ彼は後ろに担いでいるデルフを指差した。デルフは何故か布でグルグル巻きにされていたが、アニエスはそれについては何も聞かずにただ一言。

「そうか。お互いががんばろう。」

とだけ言ったのであった。

## 演芸会 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

才人とアニメスのネタが被りそうです・・・

演芸会が終わったらキャラ名鑑と兵器名鑑を書きたいと思います。

## 演芸会 7

さて、当初からハイテンションで始まった演芸会の14番目の参加者は銃士隊隊長のアニエス中佐だった。一応この大会は軍属や同盟軍部隊も参加できるので、彼女やミシェル少佐と言った面々も参加している。

そのアニエスであるが、この時着ている服は義勇軍と色違いの軍服ではなく、なんと1世代前の騎士服であった。

それを見た多くの野郎がどよめいた。と言うより喜んだ。何故ならこの1世代前の服はそれなりに露出している部分と女性の体系を協調している部分があり、現在の課業服や迷彩服に比べると女の色気を良く表していた。

だからこの格好を知っている兵士たちには、それなりに懐かしむ声があった。ただしそのことを本人たちの目の前で言ったら、血を見る覚悟が必要であろうが。

まあそれはともかくとして、アニエスは古い騎士服で登場したのであった。しかも、その手には銃士隊のシンボルである剣が握られていた。中々様になる光景である。

銃や迫撃砲・無反動砲と言った高威力火気が幅をきかせている現在、剣と使う機会は減っている。それでも銃士隊では剣の鍛錬を訓練プログラムに入れており、取り回しの良さや軽量化などの改良を行なっているものの、未だに正式装備に残している。

彼女が出てきた時点で、観客の多くは彼女が剣舞をするものと確

信した。と言うか彼女の性格からしてそれ以外考えられない。何せ彼女は真面目一辺倒で、私生活を見ている限りでは乙女らしさの微塵もない。多分百人に彼女の第一印象を聞くアンケートを取れば、十中八九剣か軍人という答えが返ってくるだろう。

ちなみに「友澤」とか「彼との掛け合い」と答えることは、死刑執行サインを自分でするようなもので、冗談でもしてはいけない。もちろん、友澤少佐の前でもだ。

再び話が脱線した。

それから程なくして、部隊袖から出てきた1人の義勇軍隊員が彼女の前に立った。

「あ、友澤少佐だ。」

不機嫌その物の表情をして現れたのは、狙撃部隊隊長で義勇軍内では恐れられている友澤少佐だった。その手には半分ほど空になった瓶があった。

「何をする気だアニエス隊長は？・・・まさか日ごろの恨みを込めて彼を切る気か？」

審査員席に座る才助が冗談めかして言ったが、実際にそうなるのではと思った人間は何人もいた。なにせ、アニエスと友澤の確執は周知のことだからである。

すると、彼女がクルリと観客たちの方へ体を向けて話し始めた。

「お集まりの皆さん。これより僭越ながら、私めが剣舞を披露した

いと思います。その内容は、このバカ・・・あ、失礼。友澤少佐が頭の上に乗せた瓶を、中身をこぼすことなく真つ二つにすることです。」

「「「ええ！！？？」」」

観客席の全員と、審査員席の面々も驚いた。

「そんなこと出来るのか？」

「アニエス隊長の腕は相当な物と聞いていますが・・・さすがに危険だと思います。」

才助とルイズが顔を見合わせた。そりやそうである。一歩間違えれば先ほど才助が言った言葉が現実のものとなる。

一方、長田は怪訝な表情をした。

「友澤の奴、よくこんなことに付き合う気になったな。」

当たり前のことだが、絶対に常人ならこんなことやる気が起こる筈がない。ましてや、アニエスと犬猿の仲とされている友澤なら。

ちなみに、部隊袖で順番待ちの才人と出演を終えて彼と話をしていたギーシュはその真相を知っていた。

「あーあ。まさか本当にやることになっちゃうなんてね。」

「あの時あんなことしなければ良かったのにね。まったく、ギャンブルなんてやるもんじゃないね。」

「浪費癖のお前が言っても説得力がないが、今回に限ってはその通りだな。」

実際に何があつたかと言えば、数週間前にアニエスと友澤が恒例となつてゐる喧嘩の後に、軽い賭けをしたのが事の発端である。いつもならその賭けの対象は、食事代とか軽い物を掛ける程度なのだが、その時はなんと「お互い1回だけ何でも言うことを聞く。」であつた。やめておけば良いのに、提案したのは友澤だつた。そしてそれにアニエスも乗つた。

そしてこの賭けはトランプで決められた。これなら公平であるし、周りに迷惑を掛けることもない。ちなみに、他にチェスとか将棋の場合もある。

この時友澤が器用な手先を生かしてイカサマをしようとしたのを、アニエスが見破つて彼女が3のワンペアで2のワンペアの友澤を打ち破つた。

結果、現在舞台上で行なわれている光景となつた。

「それでは。」

アニエスが鞘から剣を引き抜いた。効果音もバックミュージックもないが、彼女から発せられる殺気に、一同は釘付けになる。

一方、もしかしたら頭が吹き飛ぶかもしれない友澤の方は、両手で瓶を頭の上に乗せてゐる。しかし、その表情はどこか達観したものとなつてゐた。もう完全に諦めてゐるようだ。

「はあ！」

気合を込めた声と共に、アニエスが剣を振るった。

「「「！！！？」「」」

一同が沈黙する中、見事瓶が真つ二つに割れて片側が床に音を立てて落ちた。もちろん、友澤が持っている方の瓶からは一滴たりとも中身が零れていない。

「「「おお！！」「」」

その瞬間、一斉に拍手と賞賛の声が上がった。

ちなみに観客席からは見えなかったが、瓶の切り口は中身の上面ぎりぎりであった。まさに神業だ。

「すごい！」

「さすがアニエス隊長。」

「けど、ちょっと心臓に悪いですね。」

ルイズら3人の審査員は、全員揃って9点の札を上げた。合計27点でシャルロットやテファに並んだこととなる。

アニエスに再び惜しめない拍手が贈られる。ところが、そんな時にハプニングが発生した。気を抜いた友澤が瓶を降ろそうとして、中身を全部零した。しかも自分の頭の上から。

瓶の中身は悪いことにワインだった。彼が酒を飲めないことは周知の事実だ。だから結果は。

ボタン！

「こらあ！こんな所で寝るな！！」

アニエスがブンブンと友澤の頭を振るが、もちろんそれは無駄に終わるわけで。最終的に彼女が彼を支えて退場すると言う、締まらない結末となってしまった。もっとも、観客らからは大いに受けていたが。

そんな彼らを見送って、いよいよ才人の番となった。

「続きまして、航空隊大佐にして先日大公殿下におなりになった平賀才人大佐です。」

司会者が余計な肩書きを付けて言った。才人としてはあまり触れられたくない部分なのだ。

「がんばれよ才人。」

ギーシュに見送られ、才人は壇上へと立った。彼の背中にはデルフの姿があった。

「どうやら、あいつも剣舞をするみたいですね。」

「ええ、けどさっきのアニエスたちの芸を見せられましたから・・・」



ルイズは夫がどんな剣舞を行なうのか不安で仕方がなかった。そして間もなくその不安は、疑問へと変わった。

部隊袖から台座に乘せられた高さ50cm程の木の柱が才人の前に置かれたからだ。

「あんな物どうする気かしら？」

ルイズや参加者の多くが、アニエスたちの時と同じく首を傾げた。そんな中で、才助だけは納得した表情をしていた。

「そうか、あいつチェインソー・アートをデルフを使ってやる気だな。」

「何ですか？そのチェインソー・アートて？」

ハルケギニアにも、木の伐採等で使うためにチェインソーは持ち込まれているが、まだポピュラーな存在ではない。ましてやそれを使ったアートなど、ルイズが知るはずがなかった。

「見ていればわかりますよ。」

才助は笑みを浮かべながら言った。

「観客の皆さん。俺は今から剣を使ってこの木の柱をある人の胸像にします。」

そう言つと、彼は背中のデルフを引き抜いた。そして観客や審査員はわからなかったが、そのデルフは叫んでいた。

「やめろ！やめてくれ！」

しかし剣である彼にはどうにもならない。

まもなく勇壮な音楽が鳴り出し、才人はそれに合わせてデルフを構えた。

「行きます！」

そして才人は、デルフを使って木の柱を加工し始めた。才助の予想通り、それはチエーンソー・アートと同じであった。

実際のチエーンソー・アートはその名前の通りチエーンソーを使って木の柱を削り、何らかの彫刻を作ることである。もちろん、それなり熟練技が必要となり難しい。

それを才人は、『ガンダールヴ』のルーンと伝説の剣を使って見事に再現したのである。おおいなるルーンの力の無駄遣いと言えるう。

まあ無駄か無駄でないかの議論はさて置き、彼が音楽に乗って木の柱を削っていくと、徐々にそれが形になりはじめた。才人の言ったとおり、人の胸から上の部分が形作られていく。

最初は大分大雑把であったが、時間が経過していくうちに細かい部分が作りこまれていく。本来剣では無理と思えるような部分まで、才人は切っ先を上手く使いこなして表現していく。

髪や目元が表現されると、もうその像が誰であるか明白となった。

「やっぱり。モデルはあなたですね。」

「わ、私の像？」

才人が作っていたのは、ルイズの像であつた。慈愛の表情を浮かべて微笑んでいる、最高の状態の彼女を表現していた。

もちろん、それを見てルイズは顔を赤くした。そして音楽の終わりと共に、才人は像を完成させた。さすが伝説の力を使っただけであつて、信じられないスピードである。出来もパーフェクトであつた。

「うう……俺剣なのに。」

デルフが泣きそうな声でそう漏らした。

「落ち込むな。お前のお陰で上手くできたんだぜ。」

「そう言う問題じゃねえ！！」

才人はデルフの文句をスルーした。

そして間もなく点数が出された。ルイズと長田少将が10点の札を上げた。ただ才助だけが7点の札を上げた。理由は「ルイズさんへの気遣いとアイディアは評価できるが、実力のルーンの力に拠る所が大きいから。」であつた。

まあ才人としても覚悟していたことであつた。本来なら反則に近い行為であつたのだから、むしろ優勝ラインに並んだことを幸運と思わなければならかつた。

その後才人は部隊袖を通って、先に退場したギーシュの隣へ戻る  
のであるが、彼を始めとする水霊騎士隊の隊員たちから大いに冷や  
かされることとなる。

また彼の作った木製ルイズ像は、その後『固定化』の魔法が掛け  
られて、王宮に献上されることとなる。

## 演芸会 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

実を言つと、今回の話には元ネタがあります。ただし、あまりにもマニアック過ぎますが（笑）

## 演芸会 8

演芸会はその後も熱い雰囲気を保ったまま進んだ。

才人の後の参加者には、ボストニア王国王女であるクリスや航空隊のシエスタ、ロマノフ軍のセルゲイや竜騎士隊のルネやマルセイユ大尉もいた。

クリスは単独での参加であつたが、金髪の彼女が八代 紀の演歌を歌い始めた時は、才人を始めとする地球出身者が驚きのあまり、椅子から転げ落ちてズッコケルと言つ一幕があつた。

ちなみに彼女の歌であるが、上手いことは上手いのだがどうも演歌と言う物に対する理解が現地採用兵になつたことが仇となつて観客からの評判が今一步で終わり、点数も才助と長田はともかくとして、ルイズの点数があまり良くなく、優勝ラインには届かなかつた。

それからシエスタの場合はタルプ方面で歌われている民謡を歌つたが、インパクトに欠けたためやはり優勝ラインに並ぶには至らなかつた。

ちなみに、彼女が言うには、

「本当はもつと目立つことをやりたかつたんですけど、直さんに止められちゃいました。」

だつたそうだ。なんでも『魅惑の妖精亭』のビスチェを着て、派手に歌つて踊るつもりだつたらしい。菅野が止めて当然である。店

の中ならともかく、大勢の前で妻の恥ずかしい姿を見せたくないに決まっている。

魔法学院にいた時からどこか大胆な所のある娘であったが、その部分はあまり変わっていなかったようだ。

続いてセルゲイであるが、彼は仲間数人と共にロマノフの音楽に乗せて伝統的な踊りを披露している。ロマノフの文化は基本的に地球のロシアのそれに近いから、曲も踊りもロシア風のそれであった。しかも、現地の伝統衣装を着てやると言う念の入れようであった。

こちらは上手いことに加えて、物珍しさがあつたため優勝ラインの27点を取ることが出来た。

意外と言えたのがルネ大尉らの竜騎士隊隊員の芸であった。彼らは御自慢の竜に乗ることは出来なかったが、そのバランス感覚を生かして中国のサーカス団のような体を張ったパフォーマンスを行なっている。

『メイジ』が汗水流してスポーツをすることはこれまで嫌われてきたことであつたが、一方で体力がなくて良いというわけではない。特に竜騎士は環境の厳しい空中に上がり、時には激しい空戦を行なわなければならない。

それによって身に付けた体力とバランス感覚を生かした見事なパフォーマンスであった。

彼らもやはり高得点を得ているが、才助の評価がそこまで高くない（地球出身の彼には物珍しさという点でインパクトが小さかったため）、残念ながら優勝ラインには届かなかった。

マルセイユも見事なダンスを披露したが、やはり優勝ラインには届かなかった。もっとも、見ていたキュルケ（ここまで出番がなかったが、彼女も御忍びでいた）の気を大いに引けたから、彼にとつては悪い結果とはならなかった。

最終的にこの日の演芸会の最高得点はシャルロット・テファ・オ人・アニエスらが出した27点であった。

同列優勝にすれば良いのであろうが、優勝は1人だけと言うのが建前であったため、この中から1人（もしくは1チーム）を選ぶ必要があり、才助・長田・ルイズら3人の審査員は誰にしようか数分間話し合った。

しかしながら、結局結論が出なかったため観客の拍手で決めることとした。つまり優勝と思う人に拍手をしてもらい、その拍手の量で決めるという単純明快な方式だ。

これによつて最終的に優勝となったのは、テファたちのグループであった。やはり癒しの能　ボイスが利いたようだ。

優勝を逃した才人たちとしては、残念と言う気持ちが無かったことではないが、テファたちの歌が上手であったのは認めるところであり、あくまでこのイベントは楽しむためのものであるから、テファたちに拍手と賛辞を送っている。

それはまた他の参加者や観客、審査員の3人も同じであった。

こうして幕を閉じたこの演芸会は、その演目の派手さもさることながら、王族（しかもハルケギニアを代表する3王家）が参加した



ことから、伝説の演芸会ともくされることとなる。また、義勇軍が連合政府軍に改組された後も伝統行事として長く行なわれることになる。

そして演芸会が終わると、皆会場となった格納庫を出て行った。このまま宿舎へ帰る者もいれば、打ち上げと称してミライの酒場へ繰り出す者もいるであろう。

実に平和で人間味溢れる光景であった。しかしながら、明日からは彼らは再び戦いの中に身を置くのである。

楽しい時間は決して永遠ではないのだ。

「ああ楽しかった。久しぶりだわ、こんなに楽しかったのは。」

演芸会が終わり、審査員の役目を終えたルイズは才人に向かって言った。

演芸会が終わった後、ルイズは才人に送られる形でミライのトリステイン王政府仮政府庁舎に戻ってきた。

「最初は何を言い出すんだと思ったけど、ルイズに喜んでもらえて嬉しいよ。他の皆も楽しめたかな？」

才人らがいるのは政府庁舎の貴賓室。今ここには今回の演芸会にやってきた各王室の人間たちだ。ただし、ゲルマニア皇帝となったキュルケはマルセイユとどこかへ行ってしまうておりいない。また

ポストニア王女であるクリスも、基地の宿舎で寝起きしているのでここにはいない。

「楽しかった。」

「人前で芸を披露するのも、中々楽しいじゃないか。」

「けど優勝できなかったのは残念なのね。」

これは東ガリア王室の御三方の感想である。シャルロットとイザベラは踊って歌って、盛大な拍手をもらえたことに御満悦のようだが、シルフィードだけは不満顔であった。どうやら優勝賞金で肉でも買うつもりだったようだ。

「王室で踊るのは一味違ってましたね。皆さんに喜んでもらえて嬉しいです。」

「あんな風に2人だけで踊るのも悪くないね。」

これはアルビオンの御二方の意見である。2人だけで、あんな風到大勢の前で踊ったのは初めてであるはずだ。この2人も盛大な拍手をもらえたから、御満悦であった。

ただし、いずれにしても王族方がこんな世俗的な行事に出て良かったのかはわからないが。取りあえず、御本人たちは御満悦であるから良しとしなければならぬだろう。

「それは良かった。けど、シャルロットたちのハレ レユカイ、本当に驚いたぜ。何時のまにあれ練習したんだ？」

すると彼女は相変わらずの仏頂面でただ一言言った。

「この大会に出るって決めてから。」

「ちょっと待て！？それじゃあ2週間も経ってないじゃないか。その間にあそこまで仕上げたって言うのか！？歌詞も踊りも完璧、息もピッタリだったじゃないか！？」

「舐めないで。」

「あれ位なら1週間あれば十分だよ。まあ、人目を盗んで練習するのは苦労したけど。」

ガリアの女王様とお姫様が胸を張って言うが、果たして自慢できる類のことなのか、才人としては判断に困るところである。

「確かに、あんな激しいダンスは初めて見ました。」

アンリエッタが言う。色々と地球に関して勉強している彼女と言えど、あんな激しくテンポの速い踊りと歌は初めてであろう。

これまでのハルケギニアの常識からしたら有り得ない。半ばオタク化しているタバサと、その影響を受けているイザベラたちならではと言えるだろう。

「義勇軍は本当に面白いところですね。」

「隊員たちは皆生き生きしていたね。とてもこれから戦場へ向かうようには見えなかった。」

ウェールズの言葉に、場が静まり返る。

「これから戦場へ向かうからですよ。ウェールズさん。今度の戦いで死ぬかもしれない。たださえ軍隊は訓練で殉職する率が高いんです。だから皆楽しんでるんです。」

「才人君もまた出征するんだよね？」

「ええ。ガリア方面の戦い、サン・マロン攻略作戦に出撃するはずです。」

才人の言葉に、またも全員黙ってしまう。特に、ルイズはそれを気にしたくなかっただけに、うつむいている。

それを見たアンリエッタが、心の底からの言葉を言った。

「戦争、早く終わると良いですね。」

「王宮なんか籠っていると、戦争なんか単なるゲームみたいに感じちゃうけど、アンリエッタ王妃の言うとおり、戦うのは人間なんだよね。今日のことで実感したよ。」

アンリエッタの言葉を聞いたイザベラが言う。

「だからこそ、がんばらなくちゃいけない。」

シャルロットの言葉に、全員の視線がそちらに行く。

「戦争を止めるのは最終的に私たち。私たちがどうするかで、兵士や国民の運命は決まる。だから、私たちは負けられない。」

シャルロットはの中で一番若い。しかしながら、頭脳に関して言えば非常に明晰である。そしてそれだけではなく、彼女は国（厳密には王室）に運命を狂わされている。王というものがどうであるか、もしかしたら一番深く考えているかもしれない。

「エレーヌの言う通りね。さつさと勝つて、この戦争を終わらせなくちゃね。そうすれば、皆今日みたいに笑顔でいられるでしょ。」

「イザベラさんの言うとおりです。」

「才人君、僕たちは君のように前線で戦うようなことは出来ないけど・・・精一杯がんばるよ。」

「ありがとうございます。」

「ルイズを泣かさないでください。こんなことを言うのは僭越ですが、絶対に生きて帰って来てください。」

アンリエッタからのお願いに、才人は真剣な表情で返す。

「わかってますよアンリエッタ姫。俺は絶対にルイズを泣かすようなマネはしませんよ。それが約束だから。」

「さ、才人。」

才人に見つめられ、ルイズの顔が赤く染まる。その光景に、アンリエッタとウエルズは微笑む。またシルフィードも熱い光景を興味深げに見ている。

一方、シャルロットとイザベラの視線は冷ややかである。生憎と彼女らにはこのような熱い光景を作れる相手はいない。だからその視線には嫉妬も当然ながら混じっていた。

いや、厳密にはシャルロットの場合嫉妬ではなく羨望だった。

「いいなあ・・・」

シャルロットには一応ストークという恋人がいるが、未だ甘い関係には程遠い。

「今度甘えてみようかな・・・」

そんな事を呟いたシャルロットだった。

このような微笑ましい光景がある一方で、ハルケギニア戦役は未だ終わりが見えなかった。

演芸会 8（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

### 『東方義勇軍』装備名鑑 3

#### T 4 軽機関銃

全長 1 2 2 0 m m	重量 1 1 , 5 k g	口径 7 , 7 m m
発射速度 8 5 0 発 / 分	ベルト給弾式	

義勇軍初期の主力機関銃であつた 1 2 , 7 m m 重機関銃 M 2 は大威力・高初速と高性能であつたが、対人兵器としては威力が高すぎる面があり、さらに重量も重く歩兵火器としては扱い難い面があつた。こうしたクレームが義勇軍のみならず、武器供与先の銃士隊などからも出たため、威力は下がるが歩兵の扱い易い軽機関銃の新規導入が図られた。

モデルとなつたのは「呂 5 0 1」潜水艦などに搭載されていたドイツ製の M G 3 4 軽機関銃であり、ほぼフルコピーされた。ただし、原型機は口径が 7 , 9 2 m m であつたが、義勇軍では 7 , 7 m m 弾と 1 1 , 3 m m 弾が標準であるため、7 , 7 m m に改修されている。

配備当初から歩兵部隊と各同盟部隊からの評価は高く、早期の充足が求められた。そのため、急ピッチでの量産が行なわれ開戦から 3 カ月後には、てあまた前線部隊においてはほぼ充足している。ただし、その後も引く手数多の状態が続いている。

#### T 5 短機関銃

全長 7 4 3 m m	重量 4 k g	口径 1 1 , 3 m m
装弾数 3 0 発		

T 3 短機関銃の後継機として開発された新型短機関銃。モデルとなつたのはアメリカ製の M 3 「グリースガン」。T 3 と弾薬は同じ



であるが、一回り小型化して量産性も高くなっている。武器供与先の増加とそれに伴う需要の増大から生産された。

ハルケギニア戦役開戦時点では試作量産段階であり、友澤少佐の銃火器評価班（狙撃部隊）と葛西中佐の歩兵小隊に実験配備されていたのみ。本格的に前線部隊に出回るのは戦争中盤から。近距離での白兵戦や、市街地における治安維持任務における働きが期待されている。

OS3型戦闘機（44式1型戦闘機）「超零戦」1型

全長11m 全幅12.8m 自重3800kg

速力720km 航続力3600km（最大）

武装20mm機銃2基

12.7mm機銃4基

爆装1.5t又はロケット弾8発（爆装はあくまで最大値）

発動機「ユモ213改」液令2500馬力

軽戦闘機である「バッファロー」に対して重戦闘機として開発された機体。「バッファロー」では困難な任務が発生した際の火消し役としての働きを考慮され設計された。元となったのはドイツのTa152ならびに日本の「紫電改」。大馬力・重武装に加えて2重反転プロペラ、小型リーダーや脱出装置などの新機軸が満載されエンジンモーターボ・プロップ式への換装を考慮されている。実際これらによって驚異の高性能が引き出され、ガリア側に一時組した枢軸軍航空機を圧倒している。

しかしながら、新機軸を大量に投入したことによるトラブル（プロペラのギヤボックスからの油漏れ等）さらに義勇軍では馴染みのない液冷エンジンを採用したことが仇となり、平均稼働率は50～60%代と低調で整備兵泣かせの機体となった。そのため、短期間

の内に性能の低下覚悟で空冷エンジン搭載の2型に生産が移行されている。結果1型はわずか24機で生産打ち止めと成り、その後全機がゲルマニア方面軍へ転用された。

OR2型攻撃機（44式練習攻撃機） 「アイダー」

全長8.2m 全幅11.9m 自重1550kg

速力400km 航続力1200km

武装12.7mm機関銃2基

爆装250kg（ロケット弾も搭載可能）

発動機「桜花1型」空冷650馬力（新規開発エンジン）

義勇軍が地球の桜花飛行機に発注した攻撃機兼練習機。モデルは旧日本陸軍の98式直協機。それまでの練習機であり、代用攻撃機として用いられていた複葉のOR1型「赤とんぼ」では性能面で不足している部分が出てきたので新たに製造された。

原型機に比べて若干大型化され、これまでの機体同様エンジン出力も大幅に上げられている。竜騎士との戦闘に備えて速力、武装に加えて爆装も強化された。固定脚機であるため、簡易飛行場などでも運用可能な設計となっており、場合によっては面積の狭い不整地でも使用可能。攻撃・練習・連絡等の多用途に使用できる。また原型機同様非常に扱い易い機体であり、今後の働きが期待されている。なお愛称は太平洋戦争中に米軍が98式直協機に対してつけたコードネーム。

OB2型爆撃機（44式爆撃機） 「スパルビエロ」

全長16.3m 全幅21m 自重10000kg

速力450km 航続力2500km

武装12.7mm機関銃5基

爆装 1 / 5 t

発動機 R 1 8 3 0 改空冷 1 5 0 0 馬力 2 基

義勇軍が桜花飛行機に発注した新型爆撃機。「ドントレス」の爆弾搭載量が限定的であつたため、長距離かつより多量の爆弾を搭載出来る機体として開発。義勇軍では輸送機以外としては初めての大型機で、モデルとなつたのはトリスタニア空襲で拿捕したイタリア製の S M 7 9 型爆撃機。これによって開発期間を短縮した。

エンジンの出力強化により双発化し、同時に爆装と航続力が強化された。これまでの主力爆撃機であつた「ドントレス」3機分の爆弾が搭載可能であると共に、大型爆弾も搭載可能となつてゐた。そのため新たな戦力として期待されている。また「ダグラス」輸送機同様装備する機器を交換することで、夜間偵察機としても用いることが可能など、凡用性が考慮されている。ハルケギニア戦役開戦から5ヶ月目で1個小隊6機が揃つており、その後の生産機も順次配備される見通し。

4 4 式軽戦車「チャーファイ」

全長 5 / 6 m      全幅 3 m      自重 1 8 / 4 t

速力 5 8 k m      航続力 2 0 0 k m

武装 7 5 m m 砲 1 門

1 2 / 7 m m 重機関銃 1 基 ( M 2 )

7 / 7 m m 軽機関銃 1 基 ( T 4 )

発動機 液令ディーゼル 3 5 0 馬力

アルビオン開放戦争後に発見されたアメリカ製の M 2 4 軽戦車「チャーファイ」をほぼそのままコピーした戦車。生産はロマノフ公国の製造会社に委託されており、同軍での採用も考慮されている。1世代前の 4 3 式装甲車が少数の乗員で動かせる半面、小型で非力

な面があるため後継車両として開発された。特に「ソナム会戦」での43式装甲車の苦戦と『ヨルムンガント』出現後は製造と配備、完熟が急ピッチで行なわれている。乗員は5名で43式の2倍以上の人数だが、砲塔上と合わせて機銃が2基あり、対空・対歩兵戦闘力も上がっている。基本的な運用概念は歩兵支援戦車。

#### 試製44式自走砲

全長5.6m      全幅2.5m      自重16.5t

速力43km      航続力180km

武装75mm野砲1門

12.7mm機関銃1基(M2)

7.7mm機関銃1基(T4)

発動機液令ディーゼル200馬力

「にぎつ丸」に搭載されていた97式・1式中戦車の車体を流用して作られた自走砲。オープントップではなく、全周覆いが付けられている。ただし装甲厚は破片避けが出来る10mm程度なので、対戦車戦闘などは一切考慮されていない。また母体となった車両のエンジン並びに操縦系統の性能が悪いため、その部分は徹底的に改良されているそれでも車両ごとに性能のバラつきがある。単独運用も可能であるが、基本的には観測班や指揮車両と行動を共にして攻撃を行なう。

たった4両1個小隊の少数であるが、ボストニアにおける防衛戦においては野砲部隊と共に敵軍を夜間砲撃したのみならず、さらに自走砲としての機動性能の高さを遺憾なく発揮し、現在後継車両の開発も検討されている。

駆逐艦「双月」(トリスティン海軍から義勇軍に運用委託)

全長95m 排水量1200t 速力24ノット  
武装5インチ単装砲3門（砲塔ではなくむき出しの防楯付き砲）  
40mm連装機関砲2基  
20mm単装機銃8基  
爆雷・ヘッジホッグ  
同型艦「新月」「照月」「冬月」・・・（以下建造中）

海軍兵力増強のために、ロマノフ公国に委託生産された小型駆逐艦。モデルとなったのは第二次大戦時の護衛駆逐艦。ブロック工法と電気溶接技術の供与によって短期間での完成となり、同型艦の建造も進められている。一部はロマノフ海軍向けにも建造されている。オリジナルに比べて火力の強化がなされているが、電子機器面などハルケギニアの技術力のレベルから後退している面もある。また遠距離・外洋航海任務は想定しないので、航続距離や復元性能が弱い。乗員は既存艦船からの抽出者、地球からのスカウト組、さらにハルケギニアで採用された新兵が混在している。

開戦前は訓練を行いつつ外洋諸島やロマノフとの航路警備、幻獣警戒などにあたり、その最中に「双月」が潜水艦「シエルクーフ」を「ゆきかぜ」ならびに航空隊と協同で拿捕している。開戦後は上記に加えて機動艦隊の護衛任務や対地砲撃支援任務に投入されている。

航空母艦「ブリシंगाメーン」（トリステイン海軍より義勇軍に運用委託）

全長190m 排水量15000t 速力23ノット  
武装5インチ単装砲6門  
40mm連装機関砲4基  
20mm単装機関砲16基  
カタパルト1基

## 搭載機 21機

海軍力増強のためロマノフにて建造中だったタンカーを買い取り改装。「にぎつ丸」とは違い、空母任務のみに使用される。前記した「双月」型は命名も義勇軍に任せられたが、こちらは神話の名が付けられた。カタパルトは、地球から一部の部品を持ち込んで製作された油圧式。なお、燃料や整備兵を乗せればヘリコプターの運用も不可能ではないが、その場合は艦載機の運用が困難になる。また艦載機は艦固有ではなく、基地から作戦の際に適宜進出することになっている。

開戦後はゲルマニア艦隊迎撃、ノルマンディー上陸作戦支援、ジヨゼット姫殿下救出作戦などに出勤している。また、航空機搭載任務の無い時はロマノフへの代用輸送船にされる。

『東方義勇軍』 装備名鑑 3 (後書き)

御意見。御感想お待ちしております。

次回人物名鑑を1回やったら3部へ移ります。

## キャラクター名鑑 4

原作キャラ（一部アニメ・ゲームキャラ）

イザベラ（6部時点）

公式名

ガリア王国王女 東ガリア王室王族

現ガリア王国国王ジョゼフ1世の娘。シャルロットから見て従姉妹。王宮にいた頃は北花壇騎士団の団長としてシャルロットに嫌がらせを繰り返した。アルビオン旅行中に捕まり、身柄を引き取った義勇軍の手引きでシャルロットとオルレアン夫人に再会し、和解。王位継承権を破棄し、現在はシャルロットと政府運営中。ラノベ魔法を極めている。ジョゼフ譲りでその政治能力は決して侮れない。

ジョゼット 17歳（6部時点）

シャルロットの双子の妹で、禁忌の存在としてガリア辺境の修道院に預けられていた。ジョゼフと傀儡ロマリアにその身柄利用されることを恐れた連合軍の手で助け出され、東ガリアへ身を移した。その後最愛のジュリオが破傷風治療で地球へ向かったため同道。

シエフィールド（6部時点）

神の頭脳『ミヨズニトニルン』

東方の神官の娘でジョゼフの『使い魔』。レコン・キスタの反乱等で暗躍するも、義勇軍との戦いでは完敗続き。完全にドジキャラとなっている。ただしそれ以外の謀略はしっかりとこなし、ロマリアの教皇挿げ替えに成功する。一時期地球製兵器を探していたが、現在是不明。原作同様ジョゼフ大好き。

トマ（トーマス）（6部時点）



東ガリア親衛騎士団団長 大尉

かつてオルレアン家に仕えていた使用人の息子。シャルロットのラジオ放送を聴き東ガリアへの亡命を決意。偶然出会った『トウ機関』員の手引きで自分を助けてくれた女性であるローザと共に東ガリアへ亡命。その後シャルロットに忠誠を誓って、東ガリア王政府親衛騎士団団長に就任。

ヴィットーリオ・セレヴァレ

ロマリア教皇

若きロマリアの教皇で、原作同様聖地奪還を目指していた。しかしながら義勇軍の『トウ機関』のおかげで密偵団に大損害を受け、思うように謀略を行なうことが出来なかった。義勇軍の戦力はそれなりに評価しており、異教徒の国であるロマノフと共に容認する発言を行なった。ハルケギニア戦役開戦3ヶ月目に、ガリアによって起こされたクーデターによって死亡。

ジユリオ（6部時点）

公式名ジユリオ・チェザーレ

神の右手『ヴィンタールヴ』

ヴィットーリオ教皇の『使い魔』にして、あらゆる動物を操る『ヴィンタールヴ』。ヴィットーリオとともに聖戦を望んでいたが、平中将率いる『トウ機関』によって密偵団が大打撃を受け、拳句ヴィットーリオは暗殺され彼自身も負傷。その際ルーンも消失している。ジヨゼットと共に救助されるも破傷風の悪化のため地球へ。

高風春名 18歳（外伝2部時点）

地球から紛れ込んだ才人の同級生。才人に片思いしていたが、ルイズと結婚していると知らされて気絶した。ウエザリーの魔法によって別人格を植え付けられ操られていたが、彼女が逮捕されたため解くことが出来た。その後地球へ帰還している。

ウエザリー

人間と獣人のハーフ。王室を憎み、テロを起こそうと目論むが義勇軍に察知され失敗、逮捕される。その後義勇軍への協力と禁忌の魔法を使用しないことを条件に釈放される。ハルケギニア戦役時は旅芸人一座としてガリア国内に潜入、『トウ機関』員への武器や食料の補給、情報伝達を行なっている。

クリス 19歳（第6部時点）

公式名クリステイナ・ヴァーサ・リクセル・オクセンシエルナ

ボストニア王国第一王女

アンリエッタの古い友人で。ロマリアの北に位置する小国の王女。転移してきた日本人師匠に剣を習い、さらにその師匠が旧日本陸軍のパイロットだったことからパイロットの道を目指す。シエスタ同様短期間で操縦をマスターし、祖国のためにガリア軍に対する迎撃作戦に参加する。

ホーキンス

アルビオン王立陸軍中将 ライオン師団師団長

アルビオンの軍人。解放戦争後に『レコン・キスタ』軍より王立軍に復帰。退役を覚悟していたが、ウェールズ国王直々に『東方義勇軍』より武器供与と戦術指導を受けた精鋭部隊ライオン師団の師団長を命ぜられる。アルビオン解放戦争を通じて、義勇軍の実力を高く評価している一人。

ヘンリー・スタッフォード

アルビオン王国竜騎士隊中尉

アルビオン王国からトリステイン王国へ増援として派遣された竜騎士隊の一員。竜騎士の戦術変化により、ルネ・フォンクラとともに特殊作戦支援任務に回される。その他に、敵地潜入中の『トウ機関』

協力任務にも出動。

他作品・実在キャラ（クロス・オーバーキャラ）

平・成太郎

義勇軍中将 諜報機関『トウ機関』機関長

異世界の現代日本より転移してきた元大日本帝国陸軍憲兵隊士官。当初義勇軍には歩兵として志願したが、諜報機関に所属していた前歴により『トウ機関』へ編入。機関長として指揮を執り、多くの重要情報を得る。特に城などで働く下級労働者をスパイに仕立てる方法は効果的であった。奥さんは元同僚。小だまたけし原作「平成イリュージョン」のキャラクター。

平翔子（旧姓戸原）

義勇軍大尉 『トウ機関』機関員

平中将と同じく異世界の現代日本より、広島でのテロの衝撃で転移。元は広島憲兵隊の下級士官。平中将の副官としての仕事もこなしている。ハルケギニアへの転移後も夫の謎な行動に振り回されている。「平成イリュージョン」のキャラクター。

ハンス・マルセイユ

義勇軍航空隊中佐

異世界の北アフリカ戦線から転移してきたドイツ空軍の撃墜王。通称「アフリカの星」。義勇軍に編入後は昇進の上、新型機である「超零戦」のパイロットとしてゲルマニア内戦に参加。主に竜騎士や飛行幻獣、対地攻撃に活躍した。この内戦中にキウルケと恋仲になっている。実在の人物。

ポミヤ・レイラグ

義勇軍航空隊少佐

元枢軸空軍部隊のフランス人パイロット。史実ではドイツの撃墜王メルダースを撃墜直後に戦死しているが、彼の元いた世界では健在であった。義勇軍編入後は「バッファロー」に搭乗している。名前だけの登場。

オリキヤラ

ウォルフ 16歳（6部地点）

義勇軍兵長 3等兵曹

才人の戦闘機小隊に所属する現地採用の少年兵パイロット。ノルマンディー攻略作戦から実戦参加。

サラ 16歳（6部地点）

義勇軍1等兵 兵長

ウォルフと同じく才人の小隊に所属していた女子少年兵パイロット。後にクリスと所属する「サムライ」小隊に移籍。

大内賢治

義勇軍大佐 水上部隊駆逐艦「ゆきかぜ」艦長

異世界の日本より転移してきた海上自衛隊護衛艦「ゆきかぜ」艦長。義勇軍編入後もその職に留まっている。旧日本海軍以来のベテラン車引き。二つ名と同じ名前であることから、作戦に無理やり参加したシャルロットとイザベラが乗艦することに大反対していたが、その後は諦めて笑って迎え入れている。ジョゼット救出作戦への礼として、後に東ガリア政府から男爵位を贈られる。

梅林一穂 70歳（第4部）

義勇軍中佐 水上部隊駆逐艦「双月」艦長

元海上自衛官の3佐。海上自衛隊創設期のPF艦から乗り込み護衛艦「ゆうばり」艦長を最後に引退したベテラン。人手不足の水上部

隊艦長として、才吉面識があつたためスカウトされた。昼行灯と言ふべき性格で、口癖は「まあ良かろう」。モデルになったのは「ジパング」の梅津1佐。

榊圭吾 34歳(第4部)

義勇軍大尉 水上部隊駆逐艦「双月」航海長

元異世界から転移してきた護衛艦「おおよど」の航海士。その後「双月」へ移動となった。艦長である梅林とは親と子ほどの歳の差があるが、上手くやっている。操艦の腕は悪くない模様。

フレッド

義勇軍兵長 水上部隊駆逐艦「双月」操舵兵  
現地採用の兵士。「シエルクーフ」追撃戦では緊張のあまり舵輪を握る手が震えていた。

リュサンジュ

フランス共和国海軍中尉 フランス海軍潜水艦「シエルクーフ」副長  
乗り込んでいたガリアの貴族によって艦長が死んだため、その後の指揮を継承し「ゆきかぜ」に降伏した。艦は損傷のためロマノフのドッグに入った。

大神一 (第4部)

義勇軍大佐 レーダー部隊司令

元航空自衛隊のレーダー員。スカウトされハルケギニアにやって来た。レーダー部隊の養成とレーダー網開設に尽力するが、ハルケギニア戦役開戦時は中途半端な状態であり、トリスタニアへの空襲を阻止できなかった。

ワルター・ケンプ 33歳 (6部時点)

ヴァリエール公爵領ケンプ大隊司令 少佐

ヴァリエール公爵領の私設軍隊であるケンプ大隊の司令官。元は王室軍に所属。没落貴族の傭兵出身。外見は軍人よりも学者を思わせるような人物で本人もそれを望んでいた、趣味も読書。しかし指揮能力は高く、戦功も上げている。ルイズの姉であるカトレアとの縁談が進んでいる。なお、外見上のイメージは『アリソン』シリーズのアイカシア大佐。

エルベ 46歳（外伝2部）

『トウ機関』大尉

ガリアの首都リュティスに潜入していた『トウ機関』の作業員。元はトリステイン王政府の作業員。トマとローザの亡命を手助けする。その後ジョゼット救出作戦にも、修道院との連絡役として出動。

シュミット 22歳

『トウ機関』兵長

エルベの部下。エルベと共にリュティスに潜入していた。若いながら作業員の仕事に慣れている模様。

オーウェン

義勇軍中尉

「回天」作戦時に菅野准将の小隊に所属していた戦闘機パイロット。枢軸空軍出身のドイツ人。名前だけの登場。

オスカー

義勇軍兵長

「回天」作戦時に菅野の小隊に所属していた戦闘機パイロット。現地採用兵。名前だけの登場。

セルゲイ・ヒロセ

ロマノフ公国海軍大尉 少佐

ロマノフに転移していた広瀬武夫少佐の子孫。大使館付き武官としてトリステインへ派遣されるが、そのまま海軍航空隊創設のため義勇軍航空隊に留学。トリスタニア空襲では初めての撃墜を記録した。ハルケギニア戦役開戦4ヶ月目には戦闘機4機、爆撃機4機の計2個小隊を率いる。

コーネフ

ロマノフ公国海軍大佐　ハルケギニア派遣部隊司令官兼巡洋艦「エニセイ」艦長

ハルケギニアに派遣されたロマノフ海軍の戦隊を率いる。戦い初っ端から慣れない対空戦闘を行なっている。また要塞攻撃は大きな効果を上げた。

シダーノフ

ロマノフ公国海軍中佐　巡洋艦「エニセイ」航海長  
ハルケギニアに派遣された海軍士官の1人。名前だけの搭乗。

パセラ（第5部）

東方火器の銃器工場でT3短機関銃の銃身製造を行っていた緑色のブロンドが特徴の少女。声を掛けた才人と友澤の質問に答えた。またシェフィールドの襲撃時に逃げ遅れたが、それがプラスに働くこととなった。モデルの人物は「くじびき勇者さま」シリーズの同名人物。

ゲルベ

義勇軍をはじめとする連合軍が上陸したノルマンディーに残っていた老人。シャルロットたちに情報を提供した。

## キャラクター名鑑 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次話からは外伝3部に移ります。現在考えているのは、シャルロットとイザベラが東ガリアの占領下に入ったエギンハイム村を訪れるという話です。

話のアイディアなどありましたらメッセージなどでよろしくお願ひします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7683f/>

---

ゼロ戦才人 外伝 第2部

2011年4月2日03時33分発行